眠狂四郎独歩行

（下）

柴田錬三郎



新潮文庫

カバー　中尾　進

眠狂四郎独歩行

（下）

柴田錬三郎



新潮文庫

眠狂四郎独歩行（下）
柴田錬三郎
し 5 13
新潮文庫
520

9784101150130

1910193005203

定価520円（本体505円）

幕府転覆をはかる風魔一族がねらう闕所物の戎器を爆破し、さらに二代将軍秀忠の正体を明らかにする秘帖を焼き捨てた狂四郎に、風魔一族の捨て身の攻撃が続く……。無双の円月殺法に己れを託し、虚無と孤独の影をひいて生きる狂四郎に、最後の決戦を挑む軍師風魔右門。風魔一族と黒指党の死闘を背景に痛快無類の事件を展開し、奇抜さとエロチシズムで好評を博すシリーズ第二作。

ISBN4-10-115013-3

C0193　P520E

新潮文庫
柴田錬三郎の本

- 剣は知っていた（上・下）
- 江戸群盗伝（正・続）
- 美男城
- 眠狂四郎無頼控（一〜六）
- 眠狂四郎独歩行（上・下）
- 眠狂四郎殺法帖（上・下）
- 孤剣は折れず
- 赤い影法師
- 運命峠（前・後）
- 眠狂四郎孤剣五十三次
- 眠狂四郎虚無日誌
- 眠狂四郎無情控
- 眠狂四郎異端状
- 徳川浪人伝（上・下）
- 御家人斬九郎
- 邪法剣
- 人間勝負（上・下）
- 一の太刀
- 孤独な剣客
- 浪人列伝
- 最後の勝利者（上・下）
- 無念半平太
- 眠狂四郎京洛勝負帖
- 決闘者 宮本武蔵（上・中・下）
- 隠密利兵衛
- 剣魔稲妻刀
- 弱虫兵蔵
- 南国群狼伝 続赤い影法師
- 剣鬼
- 心形刀

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

眠狂四郎独歩行

下巻

柴田錬三郎著

新潮社

新潮文庫

眠狂四郎独歩行

下巻

柴田錬三郎著

新潮社版

1823

目次

眠狂四郎独歩行

下巻

佳人の品

一

「何処へ参られます？」

街道をふさいでいた数名の男たちが、眠狂四郎の近づくのを待って、胡散くさげな目つきで、行手をさえぎった。

八州取締出役が、村々を巡邏するにあたって、道案内をつとめる寄場の男たちであった。目明しに相当する役目を与えられた村役人である。

八州取締出役の命令によって、街道をふさいでいるので、ものものしい態度をかまえている。

八州取締出役は、文化二年に、勘定奉行公事方の石川左近将監から、関東の代官たちに命令があって設けられた役で、村々に無宿の悪党がいて良民の難儀となっているのを調べて、取押えるのを目的としていた。抵抗すれば、討ちすててもよい権限を与えられているので、その存在は、非常におそれられていた。

「足の向くままに――」

ふところ手のままに、こたえた言葉も不遜にひびいたし、姓名を問われて、

「眠狂四郎」
と名のってみせれば、これを仮名と受取らない方が、どうかしている。
「御足労乍ら、陣屋まで御同道ねがいます」
逃げれば取押えるぞ、という気勢にかこまれて、狂四郎は、
「路銀の節約になるようだな」
と、笑った。
今市の宿の入口に構えられた代官所は、十万石以上の地面を支配するところだけあって、宏壮であった。
狂四郎が、入った時には、すでに二十数名の疑わしい男女が、白洲に坐らされていた。
狂四郎は、その中に、例の風魔一族の女——里女が交っているのを見出して、
——縁がありすぎるようだ。
と、思った。
里女は、そ知らぬふりをしていたが、こちらが入って来るや、すぐに気づくだけの神経の持主であるだけに、その態度が、狂四郎の目には、不自然なものに映った。
小柄だが、目つきの鋭い八州取締出役が、広縁上に、せかせかと出て来て、吟味の理由を、大声で、告げた。
大沢宿に、大沢御殿という屋敷がある。いま、ここには、去年逝去した白河楽翁の愛妾作江という女性が、住んでいる。
昨晩、その屋敷に、盗賊が忍び入り、楽翁の遺品を盗み去った。それは、銀製の、鶴の巣ごも

りの文鎮であるが、楽翁が将軍家輔佐となった時、幼かった将軍家より拝領した品であった。将軍家拝領品であるとともに、楽翁遺品である文鎮を、この近在の無宿者や破落戸がいかに無頼であっても、盗みとるわけがない。

盗みとる理由があって、他国——おそらく、江戸からやって来た者の仕業と推測される。

ここに集めた者たちは、孰れも、江戸から来たとおぼしい。

よって、捜索の網にかけた次第である。吟味がおわるまでは、神妙にしてもらいたい。

そう申渡しておいて、出役は、手代がききとって列記した人名帳を受けとった。

目を通すうちに、眉宇をひそめた。

そして、あわてて、白洲に並んだ顔を見まわして、狂四郎へ、視線をとめた。

「眠狂四郎なる御仁は、お手前か？」

「左様——」

「まことならば、失礼いたした。お手前のことは、すでに、ききおよんで居り申す」

出役は、狂四郎を除いて、全部の者のからだを検査するように、配下たちに命じた。

男たちは、褌ひとつにさせられた。

女は、里女をふくめて三人いたが、これは、きものの上から撫でまわされたのち、三尺幅の蓆を跨がせられた。もし、銀の文鎮を、女の秘処にかくして居れば当然、股をひらけば、重いものだから、すべり落ちる、という、女の身体を検査する上での常套手段であったが、よもや、そんなものを、そこにかくしている筈もないと知り乍らの、いわば手代たちが目の愉しみにする役得を、行使したにすぎなかった。

だが、これを眺(なが)めていた狂四郎の脳裡(のうり)に、ひとつの直感が、ふっと掠(かす)めた。
蓆を跨ぎこして、もとの場所へもどろうとする里女に、何気ないふりで、歩み寄った狂四郎は、
「わたしは、これから、盗まれた品を見つけて来る。……但し、これは、貴女(あなた)が、ここから解き放されても、わたしを、どこかで待っていてくれると、約束してくれるならば、だ」
と、言った。
里女は、にっと、白い歯をみせた。
「行っておいでなさいませ。わたくし、お待ち申上げて居ります」
狂四郎は、ゆっくりと、広縁へ近づいた。
「八州殿に申上げる」
「なにか――?」
「鶴の巣ごもりの文鎮とやら、この眠狂四郎が、おさがしいたそう」
「お手前が……?」
「ここに集められた人たちとは、なんの関係もない盗難事件と存ずる。これは、明言できる。すみやかに、釈放して頂けまいか」
「お手前が、責任をもって、さがし当てると言われるのか?」
「金打(きんちょう)いたしてもよい」
狂四郎は、きっぱりと、言ってのけた。
「ふむ!」
出役は、じっと、狂四郎を凝視していたが、

「もし、とりもどすことが、叶わなかったならば、如何される？」
「このけがれ首でよければ、さし上げる」
「よろしい！」
決断力のある人物のようであった。大きく頷いて、
「明日暮六つまでにとりもどして頂こうか」
と、言った。
すると、狂四郎は、
「いや、一刻を与えられるだけで、充分と存ずる」
と、こたえた。
唖然とする出役や配下をしりめにかけて、狂四郎は、踵をまわすと、門へ歩き出していた。

二

白河楽翁――松平定信の偉さは、執政となって、能く寛政の改革を断行したことにあるのは言うまでもないが、政治家として、その退き際の鮮やかさにあった、と狂四郎は観ていた。
天明七年六月、将軍家輔佐となって七年間、その深い学問的な素養に基く信念をもって、絶対的な権力を経済政策にふるった定信が、寛政五年春、海岸巡察の行旅の草鞋をぬぐとともに、突如として、公の老中及び輔佐職を退いたのは、世人を唖然とさせるに足りた。
もとより、定信の徹底した質素倹約の施政は、虚飾を悦ぶ大奥女流や奢侈になれた札差商人たちの不平を呼んではいたが、いまだこれが世論となって、定信になげつけられる気配もなかった

し、また、大奥の老女たちが、将軍家斉（いえなり）に讒（ざん）した事実もなかった。

前代の権勢者田沼意次（おきつぐ）が、囂々（ごうごう）たる非難の渦の中で、罷免（ひめん）され、閉門を命ぜられ、所領悉（ことごと）くを公収されたのとは、まったく天地の相違があった。

定信は、その権勢の頂上に在（あ）った時、自ら決意して、身をしりぞけたのである。

隠居して白河楽翁となった定信が、西丸（にしのまる）老中となって、次の時代の権勢者たるべく志した水野越前守忠邦（ただくに）にむかって、左のような意味の手紙をおくって来たのを、狂四郎は、武部仙十郎から読まされたことがある。

　新政とか、改革とかいえば、はじめのうちこそ、前の時代の政策の種々の欠陥に不平をならした天下の人々は、有難味を感ずる。

　これまで公然と行われていた賄賂（わいろ）が止（や）められ、その弊害が除かれた、といって、渇した者が飲をなし易（やす）く、飢えた者は食をなし易くなった、と評判する。

　余のごとき、才も短く徳の薄い者でさえも、世間の噂（うわさ）では、聖人か賢人ででもあるかのように、囃（はや）された。しかし、かかる評判は暫時にすぎない。

　あまりに一方的に、白とほめすぎる人は、急に、掌（てのひら）をひるがえすように、こんどは、黒と誹（そし）る習性をもっている。飢渇の時代が過ぎれば、個々の自由を、次々と欲するのが、人情の常である。

　人間である余が、十年以上も権勢の地位に就（つ）いていれば、必ず、非難の声をあびせられるのは必然である。譬（たと）えれば、ある人が、正宗とか貞宗の名刀を蔵していると仮定する。その真贋（しんがん）はともかくとして、之（これ）を蔵して置いて、天下に知らせておけば、いざ何か事があるとい

えば、その人は、その名刀を佩びて出るであろう、という信用を繋ぐ。

これが面白いところである。もしそうでなく、正宗や貞宗の名刀を、その人が、すこしも大切にせず、木や竹を切ったりして、刃を欠いたならば、威光も損じ、信用も落ちる、という次第である。

余が、改革事業をなしとげ、内閣の人物も揃ったところで、その職から退いたのは、正宗、貞宗の名刀のごとく、声価の落ちぬうちに、函に納められたかったからに、ほかならぬ。

嘗て、江戸城溜間詰となった頃、田沼意次を刺さんとして、ひそかに、懐中に短剣をひそめていた定信にして、はじめて、この決断がなし得たのである。

公職を去ったあとの定信は、悠々たる風流人であった。前半生の政治活動で示された鋼鉄の意志はその影を全くひそめ、一人の文学者として、才藻流露の日々を送った。白河町に築いた南湖園は、当代の名園となり、楽翁は、領民を集めて、湖上に舟をうかべて、ともに山水名月をたのしんだ。

心あてに見し夕顔の花散りて
　尋ねぞ迷ふたそがれの夜

と詠じた忘住所恋の一首によって、世人は、「たそがれの少将」とよんだが、いかにも、その名にふさわしい晩年の楽翁であった。

いつの頃か――そろそろ、古稀の峠にさしかかった頃、楽翁のそばに、影の形に添うように、一人の佳人が侍すようになっていた。

七十二歳で、文人として目蓋をとじるまでの幾年間かを、世話したその佳人が、いま、大沢御

殿に住んでいる作江という女性であった。まだ、三十になるかならぬかであった。

狂四郎が、陣屋の馬を借りて、一気に駆けて、到着したのは、その大沢御殿であった。

意図するところがあって、表門からは入らず、音もなく、庭園へ忍び入った。

召使う者は尠ないのであろう、屋敷内は、ひっそりして、人の気配も感じられなかった。

刈込籬をこえて草庵露地に入った狂四郎は、あけはなたれた茶亭で、ひとり、点前をしている清楚なすがたをみとめた。

はっと息をのむほど、美しい面差しであった。気品も匂う。未亡人のよそおいが、かえって妖冶にさえ感じられる。

つつましい気質のひとであろうが、さらに孤愁を含んで、これは、男心をそそらずにはいない容子である。

狂四郎は、わざと、声をかけず、亭前の葛石をつたって、母屋へむかって、歩いた。

あいては、こちらの影をみとめない筈はなかったが、声をかけては来なかった。

御殿と称されるほどの構造をもった家であった。貴賓を通す座敷が、設けてあった。

そこへ、上った狂四郎は、ゆっくりと、視線をまわした。無駄な調度はなく、それぞれの品が、吟味されて、その据り場所を得ていた。

狂四郎は、脇床に据えられた竹筒の花生けに、目をとめた。泰山木の一枝が、住む人の人柄と姿を象徴するように、大きな白い花を咲かせて、芳香をただよわせていた。

この花のいのちは、みじかい。今朝、剪って活けておくと、昼にひらくが、しかし、明日は散

っている。
狂四郎は、しずかに歩み寄ると、その一枝を、抜いた。
それから、筒の中へ、片手をさし入れると、ずしりと重い品を、把り出した。
銀製の、鶴の巣ごもりの文鎮であった。
狂四郎は、庭さきへ、頭をまわした。
そこに、いつの間にか、茶亭を出た作江が佇んでいた。大きくひらいた眸子に、怖れの色を滲ませていたが、すらりと立ったすがたは、いかにも、もの静かであった。
「一服、所望いたそうか」
狂四郎は、まず、そう言った。

三

炉のわきの点前畳に就いて、作法正しく、茶をたてる作江を、狂四郎は、客の座から、じっと眺めていた。
その輪郭の美しい横顔には、覚悟の色が刷かれているように、みえた。
しかし、楽茶碗を、膝の前へさし出す手には、目に見えぬくらいの微かな顫えがあった。
狂四郎は、無造作に、片手で把りあげて、一息に飲みほしてから、
「貴女は、八州取締出役に、盗賊に何を盗み去られたか、と問われて、将軍家拝領の文鎮とこたえた後、それを、あの竹筒の中にかくした。そうですな？」
「………」

「盗賊は、昨夜、侵入して参ると、すぐに、貴女を当て落して縛った。そして、寝室を捜した。……盗賊は、きわめて容易に、目的の品を発見すると、貴女のいましめを解いて、立ち去った。……犯女であった。男ならば、貴女のような美しい女性を、そのままにして、立ち去るわけがない。されていれば、貴女も、このようにおちついた様子でいられる筈もない。……それにしても、今朝、貴女は、泰山木の一枝を剪って、活ける気持の余裕があったとは思われぬ。にも拘わらず、活けた。盗まれたと称する品を、そこにかくすためであった。いやしくも、将軍家より楽翁公が拝領した品だ。かくすにしても、寝室や台所をえらぶわけにはいかぬ。貴賓座敷がえらばれる。気品のある、芳香をはなつ花でかくせば、ゆるされる、と思いついたのは、女心というものであろう」

「…………」

「ところで、本当に盗まれた品は、何か？　八州取締出役を、わざわざ、呼びつけ乍ら、咄嗟に、それを正直に告げ得なかったのは、何故か？　……おこたえになれぬか？」

「…………」

作江は、俯向いて、口をつぐんだままであった。

「では、うかがうまい。そのかわりに、ほかに、ひとつ、うかがいたいことがある」

「…………」

「貴女は、風魔一族という存在を、楽翁公から、きかされたことはなかったか？」

「…………」

返辞はなかったが、あきらかに知っている表情がうごいた。

「申上げておこう。盗賊は、風魔一族の女であった。風魔一族が、どうして、その品を欲したか、そこまでは、貴女もご存じではなかろう」
「存じませぬ」
「しかし、その品は、いずれ、公儀の誰かに渡さねばならぬ、と楽翁公から遺言はあったと思うが……」
作江は、しばし、返辞をためらっていたが、もはや、かくしてもしかたがないと観念したらしく、
「闕所物奉行朝比奈修理亮殿が参られて、五個の半辺蚶を示されたならば、渡すようにとの、ご遺言がございました。……けれど、朝比奈殿は、先般、非業のご最期をとげられた、という報らせがありましたゆえ、代って、受けとりに参られる御仁は、もうないかと、存じて居りました」
朝比奈修理亮が、遺言の代りに託した錦の小袋の中に、五個の小さな半辺蚶があったことを、狂四郎は、思い出した。
沈黙があってから、狂四郎が、ふいに、ずばりと言った。
「貴女は、いまだ、未通女ではないのか？」
作江は、打たれたような顔を擡げたが、すぐに、俯向いた。みるみる、羞恥の色が、頬に散った。
——そうか。白河楽翁は、この女に、伽をさせたが、妾とはしなかったのだ。
狂四郎は、やおら、立ち上がると、障子を閉めた。
それから、もとの座に就くと、

「礼儀をわきまえて、参上した男ではない。貴女のような女性を見せられると、無頼の欲情がそそられる。……貴女を、犯す!」
冷然として、そう言いはなった。

四

半刻のち、狂四郎は、街道を、まっしぐらに、馬を駆っていた。
しかし、心は、なお、茶亭の中にのこっていた。
佳人は、まだ、障子をたてきったあそこに、ひっそりと、仰臥しているかも知れない。
なんの抵抗もなかった。死んだもののごとく、抱きとられるままに、身をあずけ、ついに、目蓋をひらかなかった。
ほっそり見えた肢体も、手にしてみれば、ゆたかであった。前をわけて、片手をさぐり入れた瞬間、処女の本能が、これを、腿と腿で、きつくはさんで、締めた。そのあたたかな、柔軟な感触が、たづなをつかんでいる手にのこっていた。
——おれとしたことが!
狂四郎は、半刻の間の記憶をはらいすてて、馬脚をあおった。
今市に、半里ばかりに近づいた地点で、狂四郎は、たづなを引いた。
路傍の立場茶屋から、里女があらわれたからである。
狂四郎が、馬から降り立つのを待って、里女は、微笑し乍ら、
「拝領の品は、見つかりましたか?」

と、問うた。
「貴女のおかげでな」
狂四郎も、薄ら笑った。
「どうして、おわかりになったのでしょう？」
「貴女が、盗賊とさとったからだ」
「なにが証拠に――？」
「白洲の取調べで、莚を跨ぐ時、風魔一族の手練者らしからぬぎごちない動作を示した。また、女の本能であろうか、はじらったではないか。他の女はいざ知らず、貴女という不敵者が、だ。これは、わたしのような男を、疑わせる充分の暗示となる。……盗んだ品は、貴女の股間に、かくされてある、と視た。それが、銀の文鎮のごとき、重いものであろう筈がない。……楽翁の愛妾が、役人を呼び乍ら、正直に、告げられず、拝領の文鎮と、思わず、ごまかさざるを得なかったのは、それが、きわめて、はずかしい品であったことを意味する。女の股間において使用する品以外の何ものでもなかった。だから、貴女は、ちゃんと、そこにかくした」
「ご明察ですね」
里女は、平然として、微笑をつづけた。
「いまもなお、貴女の股間にあるのなら、拝見しようか？」
「さあ――？」
里女は、すっと、一歩さがった。
次の刹那――。

杖とみせかけた仕込みから、目にもとまらぬ迅さで、抜きつけの白い一閃を噴かせるや、狂四郎に送りつけておいて、ぱっと、地を蹴った。

はなやかに、ふわっと大きく翻った裳裾と真紅の縮緬のかげから、滑石のように白い下肢が、躍ったとみるや、鮮やかに、狂四郎が駆って来た馬に、ひらりと跨っていた。

だが――。

里女の上気した面からは、微笑は消えていた。瞠かれた眼眸は、狂四郎の左手に、そそがれていた。

摑まれているのは、孤栖幽貞を保つ婦女子がひそかに翫ぶ、鼈甲製の具にまぎれもなかった。

里女が、地を蹴って、宙に躍った刹那、狂四郎は、これを、石火の迅業で、その股間から抜きとったのである。

よもや、狂四郎と雖も、それは、為し得まいと思っていた里女は、こころみに飛翔の術をつかってみて、みごとに奪われたのである。

狂四郎が、奪いそこねたならば、嘲笑をのこして、馬で駆け去るつもりであった。

狂四郎は、それを、かざしてみた。

瞬間――里女の全身を、はじめて、羞恥の戦慄が、走った。

濡れた具には、怒張が浮かせる血筋が無数に刻まれていた。しかし、これは、熟く視れば、あきらかに、一種の地図であった。

――成程、この地図こそ、闕所物残器の、まことの隠匿場所なのか。

風流の隠士にふさわしい白河楽翁の、巧妙なしわざといえた。

——これが、愛妾には一度も用いられず、敵方の女にはじめて使われたのも、皮肉だ。

狂四郎は、それを袂に入れると、

「ことわって置くが、これを、大沢御殿に返すのではない」

「男子の貴方には、不要の品です！」

里女は、眦をつりあげて、険しい声音で言った。

「左様、だから、いずれ、そこいらの泥溝へでも、すてよう」

「それくらいならば、孤閨の女に、返しておやりなさるがよい」

「その必要は、ないようだ」

「何故に——？」

「あの女性は、未通女であった。そこで、この眠狂四郎が、最初で最後の男になってやった。……あの女性は、わたしの俤を抱いて、生きて行く。なまじ、このような代物を与えては、わたしの俤を消してしまうだろう。ただ一度の思い出を抱かせて、そっと、有髪の尼のくらしを送らせる——これが、男の最も残忍な快味というやつだ」

そう言いすてて、狂四郎は、歩き出していた。凄まじい嫉妬の視線を、その背中にあび乍ら。

……

野ざらし

一

左様でございます、どの宿でも、旅の薬売りが泊る旅籠は、きまって居るものでございます。長い逗留になる場合が多いものでございますから、しぜんに、そういう扱いに馴れている旅籠をえらぶことになり、類は友をよぶというわけで、はじめての町に入っても、そこをきけば、すぐわかるのでございます。

てまえが、今市の旅籠に草鞋をぬいでほどなく、ご浪人さんからの使いがみえたのも、てまえの方から、ここに泊りますと、あらかじめ、お報らせしておいた次第ではございません。

てまえの方で、どこにいらっしゃるか、明日あたり、おさがしして、ひとつ、お伴をさせて頂こうと考えていたところでございます。

まことに妙なもので、お伴をしていると、ご浪人さんの前には、次から次に、危険が起るような気がして、潮どきをうかがって、お別れしよう、と思うのでございますが、さて、お別れしてみると、あの冷たく冴えた眼眸や、抑揚のないひくい声音や、どんな時にも決して感情をおもてにあらわさず、そのことに対して鋭い正確な思考をめぐらしておいでになるご様子などが、泛

んでまいって、たまらなくお会いしたくなるのでございます。
ですから、ご浪人さんの方から使いを下さいましたことは、胸がおどるほどのうれしさでございました。
すぐに、てまえが、かけつけましたのは、宿はずれの、飯盛をかかえたいかがわしい家でございました。
ひと目で、顔をそむけたくなるような不潔な女に酌をさせて、ご浪人さんは、平気で飲んでいらっしゃいましたが、てまえが入りますと、女を下がらせて、無造作に、袂からとり出されたのは、なんと、鼈甲づくりの張形だったのでございます。
そこいらの後家や、比丘尼が手に入れられる品ではなく、

　東路や誰が娘とかちぎるらむ
　　逢坂山を越ゆる張形

とうたわれたのは、このような見事なしろものであろうか、と感服させられる出来でございました。
「こりゃア、やんごとない上臈でもお用いになったように見えまするが……」
てまえが、そう申しますと、ご浪人さんは、ただお笑いになって、
「それに浮彫されているのは、地図と看たが、どうだ？」
と、仰言いました。
あらためて、観察しますと、まさしく、川筋やら街道やら間道やらが、山野の地形の中に走って居ります。

「まちがいございません」

「鬼怒川（きぬがわ）を中心にして描いた地図と思うが、どうだ？」

「そう仰言られると……、左様でございますね」

「亀頭（きとう）の先端が、渓谷を意味するようだ」

「はあ……？」

「そこが、どうやら、わたしが、さがしている場所らしい」

見知らぬ土地を歩き馴れたてまえに、カンを働かせて欲しい、という御所望でございました。

翌朝、はやく、てまえは、ご浪人さんのお伴をして、奥州街道へ抜ける間道を急ぎました。

大桑、小佐越、藤原と過ぎて、高原へ到着したのは、ちょうど午（ひる）でございました。

そこから、鬼怒川の最上流に沿うて行くことになりましたが、その山麓（さんろく）に、

『公儀御用役以外は、立ち入るべからず』

という高札が立ててございました。これは、もう古びて居りまして、ずっとむかしから、人跡は絶えていると判りました。

おかげで、道なき道を辿（たど）ることになり、これはひと苦労でございましたが、ひと苦労しても、目的の場所を見つければよろしかったのでございます。

険しい峠をこえ、ふたたび渓流に降りて、これに沿うて登りついたところで、こりゃア大変だ、とがっかりいたしました。

別の山嶺が、前方にそびえ、その頂へむかって、毛面尾（けづらを）を長くひいた尾根が、走って居ります。

眼前に重なった黒い土坡（どは）は、あきらかに、鬼怒川からは、遠くはなれた地域であることを、示し

て居りました。

「旦那様、とんでもない方角に、道をふみまちがえてしまいました」

てまえが、お詫びして、ふりかえった時、無言で、小石をおひろいになると、いきなり、右方の夏草の茂みへ、びゅーっ、と投げつけられました。

すると、そこが、ざわっと、烈しくゆれなびいたかと思うや、丈なす茂みの台地を、澪引きの綱が走るように、ざざざっと葉波を起してひと筋の尾をひき乍ら、何者かが、遁げ去って行きました。

「猪でございましょうか？」

てまえの問に、ご浪人さんは、かぶりをふって、

「いや、人間だ。手負い乍ら、あれだけ奔れるのは、けものと同じくらしをしているおかげだろう」

と、仰言ってから、

「ともかく、昏れぬうちに、部落に降りようではないか」

二

あのあたりに人家の聚落があるに相違ない、と見当をつけたのは、ご浪人さんの方でございました。見知らぬ土地を歩き馴れた筈のてまえが、あとから跟いて行かねばならなかったのは、なんとも、だらしないことでございました。

ようやく、ふかい杉木立の彼方に、人家や畠のちらばった里を見出した頃、急に、いままでき

こえていた小鳥の啼声がとだえて、山中が、しんとしずまりかえったので、てまえは、なんとなく、薄気味わるくなり、不吉な予感のようなものをおぼえました。

——このおひとと一緒に歩いていると、必ず、なにか、危険が起るのだ。

あらためて、そう思わずにはいられませんでした。

遽かに、のどの渇きをおぼえたのは、そのせいでありましたろう。

崖の下に、細い流れがあって、のぞいてみると、すこし上の、重なりあった岩のあいだに、まるい水溜りができて居ります。鏡のように、清らかでございました。

「あれを、水筒に汲んで参りましょう」

てまえが、降りようといたしますと、ご浪人さんも、顔でも洗おう、と仰言って、あとにつづいていらっしゃいました。

てまえが、まず、水筒を、浸けました。すると、岩の上にお立ちになったご浪人さんは、

「この水は飲めないようだ」

と、仰言いました。

「え——？」

顔を擡げたてまえは、清水のしたたっている岩の上に、樒が生い茂っているのを見出して、

「あ——これは」

と、合点いたしました。

樒の実は、猛毒でございます。そのために、鳥も獣も近づきませぬ。樒を墓地に植えたり、供えたりするのは、葬った屍体を、獣にあらされないために、大むかしの先祖たちが考えた知恵で、

それがならわしとなったのでございます。樒の茂みの下の水は、たしかに、飲まぬ方が、安全でございます。
「旦那様は、樒が毒であることをよくご存じでございましたな」
「いや、そんなことは、いま、はじめてきいた。ひとつ、利巧になったな」
「では、どうして、この水が飲めぬ、と仰言いました？」
「顔を、すこし、わたしの方へ寄せてから、水底をのぞいてみるがいい」
そう仰言られるので、立ち上がって、右へ一歩移って、あらためて、視線を、水面へ落してみて、ぎょっといたしました。
水底から、髑髏がひとつ、虚ろな目で、にらみあげているではありませぬか。
岩の上の樒の茂みの蔭に置かれてあるのが、水鏡に写っていることは、すぐに判りましたが、そこを窺ってみて、さらにおどろかされたのは、髑髏が、立派な朱塗りの台に据えられていたことでございます。
戦国の頃、大将が討死すると、家臣はその首を、朱塗りの台に据えてまつり、お家再興を誓ったときいたおぼえがございます。
ただの野ざらしではなかったのでございます。
そう思って眺めると、異様な骨骼をしているようでございました。おそろしく大頭の、大変なおでこのように見受けられました。
誰かが生首を、ここに据えて、鳥や獣を近づかせないために、樒をまわりに植えて、かくしたというわけでございます。

「むかしなら、大将首でございましょうが、いまどき、朱塗りの台へのせられるのは、何者でございましょうな？」

「さしずめ、あの里の支配者というところか」

これは、何気なく仰言ったのでございますが、あとで、ぴったり当っていたことが判りました。

「ただ、こんなところに供えてあるのは、解せぬ。なにか、理由があろう」

その秘密を調べようとすると、きっと危険なことが起る、と予感いたしましたのは、あながちてまえの臆病心だけではございませぬ。

里に降りると、そこに立札が路傍に傾きかかっていて、

『これより奥へ立ち入る者は、悉く射殺すもの也』

と、記してありました。つまり、てまえどもは、その危険な山中を、反対の方角から、歩いて来た次第でございました。

ご浪人さんは、立札に、ちらと一瞥をくれておいて、何も仰言らずに、歩み過ぎられましたが、村の中央とおぼしい辻に出た時、

「薬屋、なんとなく陰気くさい村ではないか」

と、仰言ったことでございます。

てまえも、同感でございました。

と申して、どこがどう、変っているたたずまいではございませんし、すれちがう村人も、さむらいに対する鄭重な物腰をみせてくれたのでございます。

にも拘わらず、なにやら、暗いものが、里ぜんたいに澱んでいるように感じられたのでござい

ます。

ところで、旅籠などのない里に入れば、武士は、村長の家に泊めてもらうのを、ならわしといたして居ります。あるいは、村長が指定してくれる家、ということに相成ります。

てまえが、村人を呼びとめて、たずねますと、村長は、今春亡くなって、村のことは、五名の長老の寄合い相談になっているという返辞でございました。

——ひょっとすると、あの髑髏は、村長の首ではなかろうか。

てまえは、そう直感して、ご浪人さんのお顔色を、そっとうかがいましたが、まったくの無表情でございました。

とりあえず、長老の一人をたずねて行くことになり、その村人を案内にたてて、ものの四、五町も辿りましたろうか、とある屋敷の土塀の前にさしかかると、不意に、塀うちから、鋭い弦の音がひびいて参りました。

「かなりの弓勢だな」

と、ご浪人さんが仰言いましたので、てまえは、首をのばして、のぞいてみました。

まだ若い男が、片肌ぬいで、矢籠をせおい、重籐の弓をひきしぼって、七、八間かなたの巻藁にむかって、矢を射かけて居ります。すでに、巻藁には、三本あまりが、いずれも、中点にかたまって、突きささって居りました。

べつに、てまえは、弓術のことなど存じませぬが、弓構から、矢を発するまでは、七道の法すべて整い、五重十文字の姿勢ことごとく調わねばならぬとききおよんで居りますが、その若い男の動作は、いかにも、みじんの狂いもなく、作法をおこなっているように、見えました。

また、弦音を発して、弓をはなれた矢が、吸い込まれるように、巻藁の中点へ突き立つさまは、小気味のいい鮮やかさでございました。

片田舎の農夫が、こんな修業をしていようとは、意外なことでございましたが、案内の村人の話をきいてみると、成程と、納得が参りました。

この里は、鎌倉時代から、巻狩りの勢子引（勢子頭）の御用をつとめる伝統を受継ぎ、今日でも、将軍家放鷹にあたっては、はるばる召されて、若者たちは出かけて行く由でございました。各戸に姓をもち、いわば、郷士格でございました。礼儀正しいのも道理でございました。

いま、弓をひいている男は、市馬といい、少年の頃、江戸へ出て、日置流道場に住み込んで修業し、五年前に催された目黒駒場野の流鏑馬では、将軍家面前において、ただ一人、遠矢を射て、三つ的をみごとに当て、褒賞をたまわったと申します。

「しかし、村人すべてが、弓の名手というわけでもあるまい」

黙って、話をきき了えたご浪人さんが、おもらしになったのは、皮肉にひびくその一言でございました。

三

格式をもった村であったにせよ、一人の武士を泊めるにあたって、五名の長老が寄り合って相談することになり、これがまた、半刻以上も費やされたのには、まことにあきれはてました。

そのあいだ、ご浪人さんとてまえは、氏神の社殿で、待たされたのでございます。

さて、とどのつまり、亡くなった村長の屋敷に泊めてもらうことになりましたが、久しく無人

のままになっているので、大掃除をすると告げられて、その親切は有難かったものの、さらに待たされるのには、まったく閉口いたしました。

ようやく食膳に就いた時は、もう亥刻（十時）近くになって居りましたろうか。

晴着をつけた娘が、つぎつぎと入れかわり立ちかわって、給仕にあらわれたのも、妙な気がいたして居りましたが、食事がおわるや、長老の一人が、そっと、てまえに、

「夜伽は、どの娘がよろしゅうございましょうか？」

と、耳うちしたので、合点が参りました。

どうやら、ご浪人さんを、ただ者ではない、ご公儀隠密らしい、と思いちがえているようでございました。

てまえが、その旨を、伝えますと、ご浪人さんは、いまはその気はないが、気が変れば、真夜中でもたのむかも知れぬ、と仰言っておいて、何気ない口調で、

「亡くなった村長は、特大の頭を持った、ひどく、額の出た人物ではなかったか？」

と、長老たちにお訊きになりました。

その通りだという返答があるや、急に、ご浪人さんは、革まった態度と語気を示されました。

隠密になりすまして、対手方を恐れ入らせるおつもりになったのでございましたろう。

「村長が、非業の死をとげた――その仔細を訊こう」

厳然として、そう仰言ったことでございます。

古風な燭台の、赤くまたたく灯の中でも、長老たちの面相が、さっとかたくこわばるのが、見てとれました。

「かくしだては許さぬ！」

その鋭く冴えた眼光に射られては、かなり度胸のある者でも、顫え上がらずにはいられませぬ。

亡くなった村長源十郎は、極端に横暴な独裁者だったのでございます。公儀おかかえの勢子引の長であり、日光御用林保護の役も与えられていた源十郎は、いつとなく、村人たちの生殺与奪の権をも握り、これをほしいままに乱用していたのでございます。

御用林の入口に立ててあった高札は、源十郎が記したもので、その禁を犯した村人を、十年あまりのうちに、五名も射殺して居りました。その中には、茸をとりに行った十三歳の子供も含まれていたのでございます。

なにぶんにも、近郷の聚落とは山をへだてて十里もはなれている辺鄙の地でございますので、しぜん、村人たちの気質も畏縮して居りましたし、なまじ、格式を尊び上下の序列を絶対のものと思いなす気風があるだけに、源十郎の前には、否応なく屈服せざるを得なかったのでございます。

許しがたいのは、源十郎が、大変な色好みをも、その権力によって、無理矢理発揮したことでございました。

三十年もの長い期間にわたって、源十郎は、村内の婚礼にあたって、その——なんと申しますか、初穂つみと申しますか、三々九度の盃を交わした直後、花婿よりもさきに、花嫁を、初夜の褥で抱いたのでございます。嫁偸みの風習は各地にあって、田畑で働いている娘を、若者が自宅につれて行って、同棲し、三月経って正式に婚礼するやりかたは、てまえも、屢々見聞きいたし

ました。ところが、この村では、そのような風習はなく、また夜這いの慣しもなかったので、源十郎は、文字通り処女の井手の下紐を解く愉しみをあじわうことができたわけでございます。

この行事を三十年もつづけて参ったのですから、村中の女房の殆どすべては、源十郎が最初の男であったわけでございます。いかに、権勢をもって、文句を言わせなんだとはいえ、亭主たちが、内心ひそかに恨まない筈はございませぬ。

ところで、源十郎が、ついに、その初穂つみができなかった女房が、一人居りました。

それは、ご浪人さんをして「かなりの弓勢だ」とほめさせた市馬の女房でございました。

市馬は、江戸から帰郷した時、新妻をともなっていたのでございます。すでに、江戸で婚姻をすませて来た女房を、要求するわけには参りませぬ。源十郎は、勝手に他国女をもったことに、憤懣をみせましたが、将軍家より褒賞をたまわり、御家人の株まで頂戴した市馬を、正面から、罵ることはできませんでした。

やがて、専横の独裁者も、命運の尽きる時が参りました。それが、皮肉にも、市馬の家の寝所においてだったのでございます。

源十郎は、背中に、一本の矢を射立てられて、牀の上にこと切れて居り、そばに、寝衣すがたの市馬の女房が、茫然と虚脱して居りました。下婢が、発見して、長老たちを呼び集めて来た時、女房は、首を縊ろうとしていたそうでございます。

長老たちは、相談して、源十郎を頓死したことにして、下手人を出さぬ解決をいたしました。誰のあたまでも、下手人は、市馬に相違ない、と判断されたからでございます。

その市馬は、夜が明けてから帰宅し、出来事を知りましたが、烈しい驚愕を示しただけで、何

も言わず、また、何処へ出かけていたかも、口を緘んでいた由でございます。

源十郎の墓があばかれて、その腐れ首が斬り盗られたのは、それから十日ばかり後のことでございました。その首が、どこへ持ち去られたのか、誰にもわかりませんでした。

村人たちは、内心では、市馬のしわざであろう、と想像したことでございます。

話をきき終るや、ご浪人さんは、べつに、源十郎の首の在処を告げようとはなさらず、意外な所望をなさいました。

「市馬の妻を、今夜の伽に、よこしてもらおうか」

四

「薬屋――」

しのびやかな声に、はっと目をさましたてまえは、あわてて起き上がって、まだ夜が明けたばかりなのに気がつきました。

「したくしろ。退散する」

ご浪人さんは、そう仰言って、さっさとおもてへ出てお行きになりました。

大急ぎで、あとを追いましたてまえは、庭さきに、俯伏している屍骸を見出して、ぎくりとなりました。その背中には、一本の矢が射立って居りました。

右手に矢を、左手に弓を摑んで居りましたが、市馬ではございませんでした。木樵とも猟師ともつかぬ風ていの男でございました。

「昨日、山中で、わたしの小石で片目をつぶした男だ」
そう言いすてて、ご浪人さんは、歩き出されました。
「どういうのでございます？」
村の中央の辻に出た時、てまえが、お訊ねしますと、
「あの夜、市馬は、源十郎に呼びつけられて、ご用林の中に巣くって、密猟をしている田兵衛という山男を、射とめてくれ、とたのまれて、出かけた。その留守に、源十郎は、市馬の家の寝所に押し入って、女房をくどいた。お前の亭主は、もはや生きては戻らぬ、お前が、その気になれば、村長の妻にしてやろう、と——。その時、窓から、矢がとんで来て、源十郎の背中をつらぬいた」
「では、やっぱり、下手人は、市馬でございましたか」
「いや、市馬は、一夜中、田兵衛という山男をもとめて、山中をうろついていた」
「すると——？」
「うむ。源十郎を殺したのは、田兵衛であった。……源十郎は、市馬に田兵衛を殺せ、と命ずるとともに、田兵衛にも、市馬を射殺せ、と命じたに相違ない。……田兵衛は、市馬の腕前が、おのれの上だということを知っていた。そこで、ひそかに、村へ忍び出て、市馬の屋敷に侵入し、寝所の高窓から、射込んだ。源十郎を市馬と思いちがえてな」
「なるほど！」
「田兵衛は、おそらく、禁林中に棲むことをゆるしてくれた源十郎に、恩義を感じていたのであろう。あやまって殺したことに自責して、その墓をあばいて、首をかき斬って、盗み去り、あの細流れの上に、古風なしきたりに則って、まつった、というわけだろう」

まことに、明快なお言葉でございました。

村境に来てから、てまえが、ふと、なぜこんなに早くお出かけになったのか、という不審を申し上げますと、ご浪人さんは、お笑いになって、

「市馬に射かけられては、かなわぬからな」

と、おこたえになりました。

「どうして、市馬に狙われます？」

「源十郎に代って、おれが、市馬の女房を抱いた、亭主しか知らぬ女房が、この村にいては、依怙贔屓になるであろうと思ってな。……薬屋、おれたちは、山を降りる時、田兵衛に尾けられていたのだ。おれが、市馬の女房から、事情を聴き取ろうとすれば、必ず、田兵衛が狙うであろうと思っていたが、はたして、狙って来た。その背中へ、矢をはなったのは、市馬であった。……おれの方は、悠々と、女房を抱いていた。源十郎は、あの世で、さぞ、くやしがったであろうよ」

右の腕

一

生霊（いきりょう）というものが、この世に存在するならば、まさしく、この人物のことを指すのであろう。

濁ったまなこは、瞠（みひら）かれたまま、またたくことを忘れていた。底翳（そこひ）をわずらっているように、瞳（ひとみ）は宙にさまよっていた。皮膚は、乾いて黒ずみ、唇は無数に罅（ひび）割れていた。

尋常の面立（おもだち）に生れ、しかもまだ二十代半ばと見受けられ乍（なが）ら、これほどの陰惨な形相（ぎょうそう）と化しているのは、よほどの業苦を背負うているに相違ない。

衣服はさほど汚れても居らず、手足に垢（あか）もなかったが、容子ぜんたいに漂うのは、屍臭（ししゅう）に似た不快なにおいであった。

眠狂四郎が、この立場茶屋に入った時、すでに床几（しょうぎ）に腰を下ろしていて、身じろぎもせずに、初夏の眩（まぶ）しい陽光に、その貌（かお）をさらしていたのである。

狂四郎に、お茶をはこんで来た小女も、ひどく怯（おび）えた様子であったし、年配の商人夫婦が入りかけて、その存在に気づくと、目を引合って、あわてて、立ち去ってしまった。

——死に時を逸したのか、それとも、死に場所を捜しているのか。

狂四郎は、お茶を飲み乍ら、そう思った。
このおり、往還をへだてた、はす向いの生薬屋（きぐすりや）の店内で、突然、ものすごい物音が起り、呶号（どごう）と悲鳴が、それにつづいた。
「また、おっぱじめやがった。仕様がねえな」
莨盆（たばこぼん）をとりかえに出て来た茶屋の親爺（おやじ）は、舌打ちした。
髪をおどろにふり乱した女房が、ころがるように、往還へ逃げ出して来て、おそろしい早口で、毒吐（どくづ）きはじめるや、すぐに、亭主が、とび出して来て、
「このあまっ！」
と、つかみかかった。
「ころせっ！　畜生っ！」
女房は、金切声をあげ乍ら、むしゃぶりついて、噛（か）みつこうとした。
「おうっ！　ころしてやる！」
亭主は、髪をひっ摑（つか）んで、ひきずりまわし、滅多打ちに、擲（なぐ）りつけてから、地べたへねじ伏せようとした。
そうされまいと、抵抗する女房の力も、なかなかのものだった。
この犬も食わない夫婦喧嘩（げんか）は、見馴（みな）れた光景らしく、宿場の連中で、一人として仲裁に入ろうとする者はなかった。
駕籠屋（かごや）は、息杖（いきづえ）に頤（あご）をのせて、笑い乍ら眺（なが）めていたし、隣の小間物屋の店の内儀（かみ）さんは、見向きもせずに、算盤（そろばん）をはじいていた。

二、三の旅人が、びっくりして、見まもっているばかりであった。

狂四郎は、隣の生霊が、急に、視力をとりもどしたように、そのあさましい争いへ、じっと、双眸を据えたのに、興味を持った。

……つと、生霊は、ふらりと立って、往還へ出て行った。

狂四郎は、微かに、眉宇をひそめた。

生霊が、その傍へ歩み寄った時、亭主は、女房に、馬乗りになって、げんこつをふりあげていた。

瞬間――その右腕が、華やかな紅の飛沫とともに、高く、空中へ、刎ね飛んだ。

亭主は、ぎゃあっ、とけだものじみた悲鳴をあげて、地べたへ、ぶっ倒れると、ごろごろと、二回転ばかりしてから無慚な痙攣を示した。

明るい真昼の宿場に、一瞬、無気味な静寂が来た。凝視するどの顔も、凍ったように、動かなかった。

生霊は、衂れた刀身を、ダラリと垂らして、うつろな眼眸を、血まみれの亭主へ落していたが、蹌踉たる足どりで、歩き出した。

三間ばかりさきに落ちた右腕を、ゆっくりと跨いで、遠ざかって行く……。

「畜生っ！」

静寂を破ったのは、われにかえった女房の叫びであった。

「畜生っ！　お化けっ！　……う、うちの亭主の腕を、元通りしろっ！　畜生っ！　畜生っ！　人殺しいっ！」

あらんかぎりに、のどをふりしぼって、絶叫したが、生霊は、耳もないかのように、ふりかえりもしなかった。

誰も追いかける者はなかった。

二

それから半刻あまり後、その陰惨な若い浪人者の姿は、とある切通しのゆるやかな坂を、ひろっていた。

ここまで来るあいだ、幾人かの旅人にすれちがったが、のこらず、怯えて、道を避けた。

夫の方は、ずうっと目を伏せて、おのれに怯える者へは、一瞥もくれなかった。

その暗い顔を擡げさせたのは、坂の上で発した少年の叫び声であった。

旅の巡礼父子であった。

七、八歳の少年は、歩き疲れたか、腹が空いたのか、癇を起して、だだをこねていた。

「いやだ。いやだ、いやだっ！　……いやだったら、いやだっ！」

首がちぎれるほど、振って、じだんだをふむ伜を、父は、当惑して、見下ろしていたが、

「それでは、いったいどうすれば、ええのじゃ？」

と、訊ねた。

「お母のところへ、もどるんじゃ！　もどるっ！」

「ばかっ！」

父親は、かっとなって、いきなり、伜の頬を、力まかせに、ひっぱたいた。

少年は、哭き出したが、不意に、父親へ、とびかかった。

「こいつ！　親に歯向うのか！」

父親は、もうひと打ち、くれようと、右腕を、ふりかざした。

不運であった、というよりほかはない。

音もなく、その背後を通り過ぎようとした生霊が、その刹那、抜く手を見せぬ迅さで、一刀を、父親の右腕へ、送っていたのである。

右腕は、生薬屋の亭主のそれと、全く同じように、宙に飛んで、生霊の行手の路上へ落ちた。

夫は、前と同様、それを跨ぎ越して、一度もふりかえらなかった。

ただ、

「お父ッ！」

と、倒れた父親にすがりついて、少年が呼びかける悲痛な哭き声を、きいた瞬間、その陰惨な相貌を疼痛の色が走った。

……切通しを降りると、幅三間あまりの川が流れていた。それに架けられた土橋の袂から、横へそれて、夫は、川堤を辿りはじめた。どこへ行こうとするあてもない、夢遊病者にひとしい歩みであった。

ものの一町も辿ったろうか――。

突如、さっと、身をひるがえした。

向き直った時には、鞘走らせた白刃を、青眼にとっていた。

眠狂四郎が、あとを追うて、二間の距離まで、迫っていたからである。

浪人者の表情は、うってかわって、鋭くひきしまっていた。身構えも隙なく、総身にみなぎらせた闘志はまちがいなく、青年のものであった。

「抜けっ！　勝負するぞ！」

その声音も、冴えて、気合が、こもっていた。

一変したその姿に、狂四郎の気持も変った。

巡礼を斬ったのを許せぬと思い、死に場所を求めているならば、無想正宗の贄にしてやろうと、追って来た狂四郎であったが、意外にも、いきいきとした剣気をあふれさせて、構えられたのである。

青年のみがそなえている純粋な生気を見せられて、狂四郎は、これが、この浪人者本来の姿と、さとらざるを得なかった。

なにか、大きな不幸に遭って、心身ともにすさんでしまったに相違ないのだが、しかし、その無頼の所業は、本来の純粋な生気まで、喪わしめてはいなかったのだ。

強敵と察知して、身構えたこの一瞬に、ゆくりなくも、それが、表面にあふれ出たのである。

「刀を引いてもらおう」

狂四郎は、ふところ手のままで、言った。

「…………」

浪人者は無言で、逆に、じりっと間合いを詰めた。もはや、生霊ではなかった。修業した剣を、闘魂こめて、正しく使おうとする、気持のいいくらいさわやかな姿勢であった。

「わたしは、お主より強い。だから、刀を引けと申している」

この言葉は、誘いであった。

はたして、対手は、侮辱に対する殺気を噴かせて、猛然と、斬り込んで来た。

狂四郎は、左半身に躱して、刃風を胸前に流し、ふみこたえようとする対手へ、一歩ふみ込むや、その右手くびを、丁と搏った。

刀は、ぽろっと、くさむらへ落ちた。

崩れるように、草の上へ坐った浪人者は、目蓋をとじると、

「首を刎ねられい」

と、言った。

なんの動揺もない、静かな声音であった。

狂四郎は、訊ねた。

「闇の中に、何が見える？」

浪人者は、ちょっと、暗黒の世界に、何かをみとめようとする沈黙を持ったが、

「何も見えぬ」

と、こたえた。

「何も見えなければ、お主の煩悩も、晴れたのであろう」

そう言われて、浪人者は、首をまわして、怪訝の視線を、狂四郎に、挙げた。

「それがしの煩悩を、なぜご存じだ？」

「いや、何も知らぬ。ただ、お主ほど、正直に、おのが不幸を、からだに滲ませている者はいないではないか」

浪人者は、視線を、濁った川の流れへ移すと、
「私には、お手前のような達人に、切られるめぐみも与えられないのか」
と、吐き出した。
……それから、長い沈黙が来た。
話をきこう、と狂四郎に促されてから、浪人者は、独語するように、語り出した。

三

……私が、湯島聖堂で、四書五経の素読の試験に及第して、よろこび勇んで、わが家に、帰って来た——その日であった。
私は、まだ十三歳であった。十三歳で、試験を受ける者は尠（すく）なかったし、まして合格する者など稀（まれ）であった。元服前に父親が逝（い）ったために、急いで公年をいつわらねばならぬので、十五歳未満で受験する場合があっても、その殆（ほとん）どは、及第しなかった。
私の父は、若く、まだ、壮健であったので、私は、公年をいつわって元服する必要はなかった。にも拘（かか）わらず、私が、受験したのは、家の中の氷のように冷たい空気に堪えられなかったからだ。
私は、四書五経の素読に、没頭し、試験に及第することばかりを考えようと努めたのだ。
その甲斐あって、私は、見事に及第した。この報らせを持って帰れば、父も笑顔を見せて、母とのあいだの空気も、なごむのではなかろうか、と期待したのだ。
私を待っていたものは、子として正視に堪えぬ地獄の光景であった。
父は、母の上に馬乗りになり、左手で髪をひん摑（つか）み、右手で作った拳（こぶし）で、顔を乱打していた。

私は、母の前が捲れて、白い二布の蔭から、黝い一叢がのぞいているのを、瞥とみとめるや、かっと逆上した。
暴力をふるう父ばかりか、斯様なあさましい姿になっている母をも悪んだ。
「父上、お止めなされいっ！」
私は、生れてはじめて、父を叱咤した。
「あ、あさましゅうござる！」
「なにっ！」
振向いた父の形相は、悪鬼に似ていた。
「小わっぱが、小ざかしい高言を――」
睨み殺さんばかりの眼光を、私は、みじんもひるまずに、受けとめた。
その態度が、父の憎悪を倍加させた。
「宗太郎、教えてつかわす。よくきけ！　おのれはな……」
「旦那様っ！」
父の股の下で、死んだように無抵抗であった母が、はじめて、必死の声をふりしぼって、
「宗太郎には、言うて下さいますな！」
「うるさいっ！　……宗太郎、貴様、本日試験に及第致したであろう。その面に書いてある。されば、元服したものとみなして、真実を教えてつかわすのだ……宗太郎、貴様は、わしの子ではないっ！　……貴様の母はな、大奥の、将軍家の尻拭き女であったのだぞ！　わかるか！　上様が、厠に入られた時、うしろに紙を捧げて、待ちもうけ、その尻を拭く役だ。大奥で、最下等の

御半下だったのだ。それがどういう風の吹きまわしか、上様は、厠の中で、色情を催されて、この御半下を犯された。やがて、御半下は、孕んだ。……臭い便所で孕んだ御半下を、中﨟にするわけには参るまい。しかし、腹の子は、将軍家の種であることに、まちがいはない。……孕み女を押しつけるにふさわしい若い旗本が物色された挙句、この松方宗右衛門に白羽の矢が立てられた。……ははは、なんという有難い栄誉であったか！　わしは、この栄誉をかたじけなくするためには、相思の許嫁とも別れねばならなんだ。三河譜代の御番衆だ。どうして、辞退できるものか！　わしに出来ることは、孕み女を、憎むことだけだったのだ！」

父は、世にも凄愴な形相になると、

「宗太郎！　貴様は、便所の中でつくられた子なのだぞ！」

と、喚いた。

すると、母が、その細いからだのどこにそんな力があったか、とおどろくばかりのもがきをみせて、身の自由をとりもどすと、

「嘘です！　宗太郎、信じてはなりませぬ！　嘘なのです！」

と、叫んだ。

「嘘だと！　おのれ、しらじらしく、伜をたばかる所存か！」

父は、再び母に、躍りかかって、摑み据えると、拳をふりあげた。

その瞬間、私のからだの中を、おそろしい衝動がかけめぐった。

「恥知らず！」

私は、そう絶叫したようであった。私は、なかば気が狂っていた。

脇差を抜きざま、渾身の力を揮って、ふりかざした父の右腕を薙いだ——その手ごたえが、名状し難い一種の快い戦慄を、私の心身に生んだ。

生れてただの一度も、優しい言葉ひとつかけてくれなかった父に対する復讐の快感であったろう。

その日のうちに、私の身柄は、父の伯父の屋敷に預けられた。

十日後、父が破傷風を起して逝き、その翌日、母が自害して果てたことは、私には、知らされなかった。

それから、十年間、私は狂者でもないのに、伯父の屋敷内に設けられた座敷牢の中で、すごした。

その十年間、私にできたことは、ひとり、木太刀をふるって、床柱を撃つ修練だけであった。

私が、座敷牢を破ったのは、庭さきで、粗相をした女中を、父の伯父が、打擲しているのを目撃して、突如として、十年前の、あの凄まじい衝動を、甦らせたからであった。

頑固な老いた旗本は、私が、座敷牢を破って出るや、火のように激怒して、手槍を向けて来た。

私は、木太刀で、その右腕を、枯木のように、かんたんに撃ち砕くと、そのまま、出奔した。

……左様。

あれから、三年の月日が経つ。その流浪の途上で、私は、女や子供を打擲する男の右腕を、幾本斬ってすてたろう。

その私にも、たった一度、希望の湧く時があった。

昨秋、私は、水戸城下で町道場をひらいている直心影流伊原軍兵衛の食客となった。軍兵衛は、

私の天禀を高く買うたが、私の陰惨な物腰は好まぬようであった。

私は、誰ともあまり口をきかず、常に孤独でいる場所をえらぶようにしていた。

軍兵衛の一人娘田鶴が、そんな私に、どうして好意を抱いてくれたのか、いまも、わからぬ。

あれは――門弟十人ばかりが、一日山遊びに行って、茸を狩って来た宵であった。料理した下婢に、その知識がなく、茸を喰べた者悉くが、激しい悪寒に襲われ、あぶら汗を流して、のたうった。

私もその一人であった。しかし、私は、その激痛と眩暈に堪えているうちに、故知れぬ闘志をおぼえると、よろめき立って、道場に出て、木太刀を構えた。

もとより、ただ一回も素振りをくれる力はのこって居らず、ただ、倒れずに、立ちつくすのが辛うじてであった。

田鶴は、私のその姿を、もの蔭から、眺めた。幽鬼そのものに感じた、という。

ふしぎな女心が、その時、私に対して、動いた。

二十日あまり過ぎて、私は、田鶴の心を知り、私自身の心も動いた。

満月の夜、裏庭に立っていた私の背後に、田鶴の近づく気配があった。

私は、黙って、歩き出して、屋敷を出た。田鶴もまた、黙って私のあとに跟いて来た。

三歩の間隔をとって、私と田鶴は、那珂川のほとりまで、歩いた。話さねばならぬことは、多くあり乍ら、私の口は重く、田鶴も、じぶんから、きり出そうとはしなかった。

磧で、並んで腰を下ろし、月光の砕ける流れを、四半刻も、黙って、眺めた。

ふしぎにも、私のうちには、田鶴を抱きたい衝動は起らなかった。こうして、じっとしている

平和を、私は、好んだ。奇妙なことに、私は、かたわらに、そっと坐っている田鶴とは、幼い頃からの馴染みで、夫婦になることは、その頃から、きまっていたような気がしていた。田鶴もまた、それに似た気持でいたに相違ない。

月が雲にかくれ、夜風の冷たさを感じたので、私は、病弱の田鶴をいたわらねばならぬと思い、腰を上げた。

その時、田鶴が、勇気を出したらしく、ひくい声音だが、はっきりと、言った。

「貴方様には、わたくしが、必要なのだ、と……いつか、思いこむようになりました」

その言葉をきいた瞬間、私の胸は、烈しく動悸をうちはじめた。

私は、何か、こたえなければならぬ、と思った。にも拘わらず、私の口から、一語も出なかった。私は焦燥った。しかし、あせればあせるほど、私の口は、かたく膠付けされたように、ひらかなかった。

私は、なぜ、あの時、田鶴を抱かなかったのか！　田鶴は、それを待っていた筈なのだ。

私は、こたえず、抱かず、また、黙って、歩き出しただけであった。

屋敷の庭にもどると、私たちの前に、立ちふさがったのは、田鶴の父親であった。

軍兵衛は、全身から、憎悪を迸らせたが、呶号のかわりに、田鶴に、部屋へ戻れ、と命じた。

それから、私に、覚悟を促し、おのれからさきに、差料を抜いた。

私は、田鶴を妻にいただきたい、と願ったが、嘲笑をむくいられただけであった。

軍兵衛は、私が抜き合せようとせぬと見てとるや、大上段にふりかぶった。

やむなく、私は、居合討ちの姿勢をとった。

——来るっ！
潮合きわまったのをさとり、私が鞘走らせた——その刹那、田鶴が、とび込んで来て、父親のふりかざした腕を、おさえた。
……私の剣は、田鶴の、その右腕を、両断していた！
私には、鞘走らせた剣を、咄嗟に、止める修練ができていなかったのだ。
私の生涯にただ一度おとずれた希望は、一瞬にして、消えてしまった。

四

語り了えてから、松方宗太郎は、ふかくうなだれた。
狂四郎は、嗚咽する不幸な若者を、じっと見下ろしていたが、
「お主には、生きる途が、ひとつ、のこされているようだ」
と、言った。
宗太郎は、泪に濡れた顔を擡げて、狂四郎を視た。
狂四郎は、くさむらに落ちている白刃をひろうと、宗太郎の右手に、返した。
「これを、天にむかって、かざしたまえ」
宗太郎は、命じられた通りに、右腕をさしのべ、切先で、夕空を刺した。
「左手で、脇差を抜け。そして、その右腕を、両断するのだ、できるか？　その勇気があるか？」
「…………」
「割腹するよりは、やさしいだろう。やるがいい！」

「…………」

宗太郎は、目も頬も唇も、微かに痙攣させた。それから、無言で、左手で脇差を抜いた。

狂四郎は、そこまで見とどけてから、堤の上を歩き出していた。

「えいっ！」

宗太郎の満身から凄まじい気合が発するのを、きいたのは、ものの半町も遠ざかってからであった。

狂四郎は、しかし、振りかえろうとはしなかった。

ふんで行く草の中に、咲きかけた犬蓼（あかのまんま）を見出して、

——あの若者にも、このおれにも、子供の頃の愉（たの）しい思い出は、ひとつもないのだ。

湿ったその感慨をわかせていた。

野猿記

一

薬屋。お前は、この眠狂四郎が、歩いて行くさきざきでは、必ず、危険な出来事が起り、そのたびに、おれが、鮮（あざ）やかに片づける、と思っているようだ。

人間であるからには、いつも、そうは参らぬ。臆病者にもなれば、よかれと考えてやったことも、結果は、無慚（むざん）な敗北となることもある。

いや、おれは、実は、お前などよりも、はるかに、臆病者なのかも知れぬ。

お前には、薬を売るという目的がある。おれには、なんの目的もない。なんの目的もなく、見知らぬ土地をわたり歩いていると、たたかわねばならぬ敵は、おのれ自身の孤独なのだ。

深い山の奥に、ひとり、踏み入った時など、こうしてさまよい歩いていることのむなしさが、胸を嚙（か）んで、堪え難くなる。獰猛（どうもう）な野獣が出現するか、凄（すさ）まじい嵐でも来れば、これとたたかう能力を試そうとして、忘れることもできるが、空が美しく澄み、樹々のみどりがいきいきと息づき、谷間のせせらぎもきれいで、自然が平和で永遠であれば、おのれの孤独の寂寥（せきりょう）は、どこへ払おうすべもない。

左様、天も地も――すべてのたたずまいが、自然のままであることは、おれのような不自然な、陰惨な生きかたをしている人間をこの上もなく息苦しくしてしまう。

深い山の奥の、自然のいとなみは、あまりにも美しすぎるのだ。おどろくほど大株のつつじが、かっと赤い花を燃えあがらせている美しさとか、いまだ曽て人間を寄せつけたことのない湖が、ひっそりとしずまりかえって、底知れぬ深さを思わせる色を湛えているとか……。

おれは、そうした山中を歩む時、ふと、身心がひきしまる恐怖をおぼえるのがしばしばだ。これは、同じ人間が、狙って来る殺気をあびるのとは、くらべもならぬくらい、おれを怯えさせる。

あの日も、そうであった。

おれは、ふと、空を仰いだ。とたんに、梢から、小鳥たちが、一斉に、飛び立った。

おれは、はっとわれにかえって、周囲を見まわした。おれは、自分が、濃霧につつまれたように、殺気にとりまかれているのを感じた。

小鳥は、怯えてにげたし、小さな動物たちは、木の根や岩蔭に、じっとひそんでいる。

おれは、しばらく、そこに、彳んでいた。殺気は、ふっと、引去った。おれには、わからなかった。おれは、あまたの人を斬った業を滲ませたおれの暗い姿に、山霊が、憤ったとしか思われなかった。

やがて、峰の近くに、おれは、崩れかかった山神の祠に、行き会うた。永いあいだ、人におがまれることなく、すてられて、そのたたずまいは、自然の中に風化し去ろうとするかのように、見えた。

何気なく、祠の中を覗いた——次の瞬間、おれは、一間を跳び退っていた。

暗い中に、一個の天狗の面がつるしてあったのだが、覗いたおれに、凄まじい殺気をあびせたのだ。

総身を汗にしたおれは、いつの間にか、無想正宗を抜きはなっていることに気がついて、自嘲した。

「臆病者め！」

おれを知る人々には見せられぬ怯懦の姿であった。

おれは、祠の前に歩み寄ると、格子戸をへだてて、無想正宗を、一閃させた。

天狗の面は、床に落ちた。

しかし、おれの息苦しさは、なおらなかった。いや、かえって、業念をみなぎらせたおのれの姿が、この静寂の世界の中で、いかにも、あわれなものに思われて、大きく、肩で呼吸しなければならなかった。

ただ、おれに、わかったのは、人跡未踏の山奥に在っては、人間もまた、鳥やけものを真似て、自己を解放する一手段として、能力の限りの跳躍をこころみなければならぬということだった。

目下のおれの強敵である風魔一族に、驚異の飛翔の術があるのは、日光の山奥の原始林の中でくらすことによって生れた自然の理だったのだ。

二

おれは、険しい山坂を、狂気のように駆け下りたい衝動を押え乍ら、小さな盆地へ近づいて行

った。

途中、ふりかえって、山神の祠のあたりを仰ぐと、密林から、ひとすじの白い烟が、たちのぼっているのが、眺められた。

炭を焼く煙ではなく、あきらかに炊烟であった。

——あそこにも、人が住んでいるのか。

よもや、その住人が、おれに殺気を送って来たわけでもなかったろう。

と思いつつも、なぜか、それは木樵ではなく、異常な人物のような予感がした。

おれの予感は、当っていた。

里の入口に降りてみると、そこに、厳重な竹矢来がむすばれ、見張りらしく、数人の農夫が、それぞれ得物を手にしていた。

疑惑と恐怖の目で迎えられたおれは、わざとあかるく、

「わたしは、山神の化身ではない。それが証拠に、腹を空かせている」

と、言った。

おれを、ただの浪人者と合点した農夫たちは、よく無事で、この峰を越えられたものだ、と口口に言い合った。

村長の家に案内されて、その理由が、判明した。

諸国を歩いたお前のことだ。よく知って居ろう。いたるところに、無知の妄執として受継がれている犬神の迷信が、その村にも、あったのだ。

犬神の迷信が、いつの時代から起ったか、おれは、知らぬ。

我欲の権化がつくり出したものらしい。

吝嗇の地頭が、ある時、一匹の犬を、おのが家の大黒柱に繋いで、その前に、食物を盛った皿を置いた。犬は、首をのばして、これをくらおうとしたが、綱が短くて、とどかぬ。三昼夜を経て、犬は、食物を目前にし乍ら、餓死せんとした。地頭は、その犬の首を刎ねて、秘蔵した。屋敷内には、犬の執念がこもった。他人が、この屋敷の物を、奪おうと企てても、犬の執念によって、果せぬ。この反対に、地頭が、他人の物を欲する時には、犬の執念によって、やすやすと手に入れることができた。

この犬の執念は、その家に、子々孫々血統を追うて伝わった。分限者とはなったが、他人より擯斥せられて、一切の交際を断たれて、孤立せざるを得なかった。

滑稽な迷信だが、お前も見て来たごとく、諸国の、どこの里にも、犬神の家が在って、その孤立ぶりは、あまりにもいたましい。

この村に、数年前、他国から渡って来た母娘がいた。氏素姓ありげな、上品な容子と物腰をそなえていたので、村長は、村はずれの水田と畠を、少々頒けてやった。

ところが、母娘は、土佐の犬神の家の出で、あまりの擯斥の甚だしさに堪えきれずに、逃散して、流浪の挙句、この村を、安住の地にしたもの、と判った。

事実そうであったかどうか、確証があったわけではなかろうが、ひそかに言い寄って来た男たちを、ことごとく、手きびしくはねつけていたので、反感を買っていたし、女たちからは、良人や父の欲情をそそる邪魔者として悪まれていたので、たちまち、犬神に相違ないと断定されてしまった。

母娘は、風習を知らぬかなしさで、その行動ことごとくを、犬神の証拠にこじつけられてしまったのだ。

さらに、里人たちを慴怖（しょうふ）させたのは、母親が、薪木（たき）を採りに行って、傷ついた一匹の大猿を救って、連れてもどったことであった。

猿を入り婿にした、という悪口が、たたかれた挙句、母親が猿と契っているのを、覗いた、と言いふらす男も出て来た。

母娘は、ついに、いたたまれなくなって、山の奥へのがれて、そこで、村とは全く縁を断ったくらしをはじめた。

その頃には、母娘が犬神であることを、疑う者はなくなっていた。ただ、一人だけ、たとえ犬神であろうとも、娘をわがものにしたいと想（おも）いつづける若者が、いた。

和平というその若者が、もしいなかったならば、あるいは、母娘は、飢えて、死んでしまったかも知れぬ。和平は、満月の夜をえらんで、糧食をつめた重い袋をかついで、登って行き、小屋の前に、そっと置いて来てやったのだ。満月の夜は、犬神も祟（たた）らぬという迷信があったからだ。

その行為が、露見したのは、一年ばかり過ぎてからであった。

村長は、和平を、きびしく叱責して、こん後、その行為をつづけるなら、村に置かぬ、と宣告した。そのあとで、和平は、村の若者たちから、足腰立たぬほど、殴打された。

猿の大群が、一夜、村を襲って来たのは、偶然にも、その直後であった。

鶏は殺され、畠（はたけ）はあらされ、追いはらおうとした男たちの幾人かは、片目をつぶされたり、指を食いちぎられたりした。

当然、これは、母娘が、使嗾したものに相違ない、ということになった。

しかし、母娘の小屋に、攻撃をくわえることは、怯懦のために、なされなかった。

猿の群は、その後、いくたびか、襲ってきた。被害は、そのたびに、甚だしかった。

それだけに、仕掛けた罠に、頭領らしい大猿が、かかった時の村人の歓喜は、大変なものであった。

折から、六月の晦日祓いを催そうとしていたので、これの生贄にすることになった。

村の中央の辻に、神壇を設け、五十串という五十本の串を、まわりに立て、赤・黄・白の幣帛三本で、供物台を飾り、小麦餅、神酒、洗米、瓜茄子を献じ、木と銅で作った祓具人形を据え、詣でた人々は、それぞれ、病のある箇処を——たとえば、目をわずらっているならば、人形の目に、三度、息を吹きかけて、平癒を祈願する、という祓いである。

大猿は、この祓具人形に供されて、神壇の前で、焼き殺されることになった。

宛然、囚徒の磔のように、十字に組んだ柱に、くくりつけられた大猿は、おのが悲運をさとって、白い歯をひき剝いて、吠えつづけた。

柱の根かたに積まれた薪木に、火がつけられた時であった。

突然、山姥のように、半白の髪をふりみだした母親の方が、狂気のように、畦道を走って来て、燃えあがろうとした薪木を、蹴ちらした。

激怒した若者の一人が、振り下ろした柱は、母親の脳天に当った。

のけぞった母親の、双つの眼球がとび出した恐ろしい形相は、人々のきもをつぶさせた。女子供のうちには、熱を出して、数日寝込んだ者もあった、という。

娘と猿の群の、凄(すさ)まじい報復があるものと覚悟した村では、山麓(さんろく)の要所々々に、竹矢来を組んで、昼夜、見張りをつづけて、今日に、及んでいたのだ。

三

「和平という若者を、つれて来てもらえまいか」

と、おれは、村長に、たのんだ。

「どうなさいます？」

「ききたいことがある」

「和平めは、犬神になって居ります。この屋敷につれて参っては、けがれます」

村長は、頑固(がんこ)な態度を示した。

「わたしには、犬神を抑える力がある」

「お見せ頂きましょう」

おれは、膳の上から、箸(はし)を一本把(と)ると、音たてて、部屋中を、飛びまわっているいっぴきの蠅(はえ)を、目で追っていたが、天井にとまるやいなや、投げた。

蠅は、畳に落ちた。

「こ、これは！」

村長は、声をあげて、おれの顔を、奇怪なものでも眺めるように、眺めた。

やがて、つれて来られた和平という若者は、なんの取柄もなさそうな、農夫らしくもなく、色の生白い、痩(や)せた、小男であった。

おれは、しばらく、おどおどと肩を縮めてかしこまった和平を、じっと見据えていたが、
「お前は、まだ、娘に惚(ほ)れているのか？」
と、訊(たず)ねた。
和平は、俯向(うつむ)いて、返辞をためらった。
「正直に、こたえてもらおう。お前の身のためになることだ」
と、促すと、口のうちで、惚れている、とこたえた。
「娘と夫婦(めおと)になりたいか？」
「はい――」
こんどは、度胸をきめたらしく、はっきりと、頷(うなず)いてみせた。
見かけは、小心者らしいが、胸の芯(しん)には、思いつめたら、あとへ引かぬしぶとさをそなえているようであった。
「よし、添わせてやろう」
おれが言うと、和平は、顔を擡(もた)げて、信じられぬもののように、見かえした。
「明朝、わたしに跟(つ)いて来い」
夜明けのひんやりとした山気の中を、おれは、和平をつれて、登って行った。
山神の祠(ほこら)の前に至ると、おれは、和平ときわめて幼稚な問答を交わした。
「お前は、狐よりも強いものを知っているか？」
「狼(おおかみ)でございましょうか」
「狼より強いものは？」

「熊でございましょうか？」
「熊よりも強いものは？」
「さあ——熊より強いのは、虎か獅子か……」
「虎も獅子も、この山には居るまい」
「………」
「一頭の熊よりも、百ぴきの猿の群の方が強いとは思わぬか」
「そ、それは、そうでございます」
「では、百ぴきの猿よりも強いものは？」
「そんなものが、居りましょうか？」
おれは、黙って、祠の中に入ると、床に落ちている天狗の面をひろいとって来た。
「これだ」
「し、しかし、旦那様、天狗など、ここには居りませぬ」
「お前が、なるのだ」
「え——？」
「この面をかぶった時から、自分は天狗だ、と思い込め！ よいか！ 自分は、空を翔ける術をはじめとして、あらゆる神通力を持っていると信じろ！ 何者も怖くはないのだ！ 猿の群のごとき、虫けらも同然だ！ わかったか！」
和平は、おれを、じっと瞶めかえす双眸に、しだいに、憑かれたような一念をこめる光を宿すと、

「はい！」

と、合点した。

「わかったならば、小屋へおもむいて、娘をさらって来い！」

おれは、天狗の面をかぶった和平を行かせると、そこでは待たずに、さっさと里へ降りて来た。

村長の屋敷には、多くの人々が集まって、不安の面持で、待ちかまえていた。

おれは、一同を見まわして、

「おまえらのうちには、ただの一人も、山へのぼって、娘を捕えて来る度胸をそなえた者はいなかった。……もし、和平が、娘をつれて戻って来たならば、お主らは、まず、その勇気の前に、頭を下げてもらいたい。犬神などという、埒（らち）もない迷信をすてて、和平と娘を、夫婦にしてやり、平穏なくらしができるように、はからって欲しい、と思う」

そう言って、村長を視た。

村長は、ためらい乍ら、承知した。

「し、したれど……もし、和平が、もどって参らなかったならば、どうなさるおつもりでございます？」

一人が、問うた。

「その時は、わたしが小屋へ行って娘をつれもどる」

「つれもどって、どうなさいます？」

「わたしの女房にして、つれ去ることにするか」

おれは、笑った。

四

おれの期待は、裏切られなかった。

天狗の面をかぶった和平は、死んだようにぐったりとなっている娘を、背負うて、村長の屋敷に、戻り着いた。

その面をはずした和平の顔は、別人のように、ひきしまっていた。

「よく、やった」

おれは固唾(かたず)をのんでいる人々を見わたして、

「当屋敷において、今宵、この二人の祝言をとり行う。異議をさしはさむことはゆるさぬ」

わざと、厳しい語気で、申渡した。

和平が、一同の不服ありげな様子に、あわてて、辞退しようとしたが、おれは、ゆるさなかった。

薬屋。お前がくれた薬は、よく利いた。娘は、夕方になると、気力をとりもどし、問答もできるようになった。

おれは、和平との祝言を告げた。娘は、べつだん、なんの感情も現わさなかったが、何か言いたげに、口をひらきかけて、すぐつぐむと、俯向いてしまった。

おれは、その時、娘が言おうとしたことを、聞くべきであった。これは、後日の悔いとなった。

ささやかな祝言は、滞りなく、おわった。

和平と娘を、寝所へ送り込んだおれは、柄にもない善行をやってのけた一人合点のいい気分で、濁醪をしたたかくらって、その場へごろ寝をした。

突然、異様な絶鳴が、深夜のしじまをつらぬいて、おれをはね起きさせた。

咄嗟に、刀を把って、おれは、庭へ奔り出た。

母屋の藁屋根の上に、ひょいと出現した黒い影を、星明りにみとめたおれは、

——しまった！

と、ほぞを噛んだ。

そいつは、大猿であった。

屋根から、庭の松の梢へ飛び、そこから畠へむかって、跳び降りて、一目散に駆け去ろうとするのを、おれは、二町余追って、首を刎ねた。

戻って、寝所に入ってみると、無慚にも、和平は、のど笛を食いちぎられて、こと切れてしまっていた。

そこまで、語ってから、眠狂四郎は、薬売りの松次郎に、自嘲的な薄ら笑いをみせた。

「お前は、猿の群に、襲われた経験は、まだないだろうな」

「ございませぬが……」

「あれは、物凄いものだ。けものというやつは、いったん、攻撃をはじめたら、退却することを知らぬ。これは、しまつにおえぬ」

「貴方様でも、おこまりになりましたか？」

「うむ――」

次の朝、狂四郎は、村人に約束したことを破るわけにいかず、娘をつれて、村を出たのであった。

人々の、ひそやかなさげすみとあざけりの視線に送られたのは、やりきれないことであった。

小屋のあった山と、恰度反対側の丘陵をのぼって、峠に立った時、喘ぎつつ跟いて来た娘が、

「ここで、すてておいて下さいませ」

と、ねがった。

「そういうわけにも参るまい」

江戸へ、駕籠で送って、武部仙十郎にでも、身柄を預けてやろう、と考えていた眠狂四郎であった。

「わたくしは、犬神でございます」

娘は、かぼそい声音で、言った。

「そなた自身までが、迷信にくらむ必要はあるまい」

狂四郎が、言いきかせた折、突如、樹々をさわがして、無数とも思える猿の大群が襲来したのであった。

やむなく、狂四郎は、無想正宗を抜いて、幾匹かの首を刎ねた。

四方の樹々の梢をうずめて、狙いさだめて飛びかかって来るのを、躱したり、斬りすてたりするのは、まことに面倒であったし、はてしがないように思われた。

ふいに――娘が身をひるがえして、断崖から跳ぶのを、止めるいとまがなかったのも、余裕の

ある防ぎではなかったからである。娘が、断崖から跳ぶや、猿の大群は、一斉に、枝葉を鳴らして、そこから、消え去って行った。

断崖の縁に立った狂四郎は、異様な葬列を、はるかな谷底に、目撃した。

襤褸（らんる）のように横たわっている娘のそばへ、駆け寄った猿の大群は、たちまち、その死骸をかつぎあげて、はこんで行ったのである。

その葬列は、いかにも粛々として、人間のそれと変りなく、しめやかで、ものさびしいものに、眺められたのであった。

死犬

一

「お先に、御免——」

角ばった声音で、ことわって、さっさと追い越して行く若い浪人者を、見送って、眠狂四郎は、なんとなく微笑した。

ここ数日、変りやすい天候で、つい半刻(とき)ばかり前までは、目にしみるほど白い夏雲を散らして、碧空(あおぞら)が澄んでいたのに、遽(にわ)かに、南の山波を烟(けぶ)らせて、拡がって来た雨雲が、みるみるうちに、白い雲を呑(の)み、碧空を塗りつぶして、世界を、日昏(ひぐ)れの暗さに、おしつつんでしまったのである。

若い浪人者は、雨をきらって、さきを急いで行くのであろう。

立場(たてば)から立場までの、ちょうど中ほどの街道上なので、さしあたり雨を避ける場所が見当らなかったのである。

左右の老杉(ろうさん)の木立は、近年殆(ほとん)どが立ち枯れて、裸枝が、天を刺していた。

狂四郎を追い越した若い浪人者は、たちまち、一町余もひきはなしたが、黒い雨の幕は、音もなく、その行手から、さあっと、降りて来て、あわてて、枯れのこった一本の巨樹の下へ、かけ

込むことになった。

——いまから、あのように気ぜわしく、一徹では、白髪になったら、周囲の者はやりきれまい。

狂四郎は、思いやった。

前の宿で、めずらしく、江戸風の銭湯があったので、ふらりと入って、湯あがりのひとときを、二階で、午睡にあてた時であった。博奕うちらしい若い男が、平気で、狂四郎の腰を跨ぎ越した。とたんに、「無礼者っ！」と、一喝したのが、すぐかたわらで憩うていたあの若い浪人者であった。

「貴様、破落戸のぶんざいで、武士の上を跨ぐとは何事か！」

きめつけられた博徒は、あいにく、このあたりで顔を利かせている男とみえて、まわりの目の手前、ぺこぺことあやまるわけにいかないらしく、ちょっと、ふてくされた態度を示した。

若い浪人者は、容赦なり難し、と叫んで、差料を把るや、鐺で、博徒を突きとばした。不意をくらって、梯子段をころげ落ちた博徒が、そのまま、ひきさがるわけがなかった。

仲間を七、八人呼んで来ると、若い浪人者が、おもてへ出て来るのを待ちかまえて、襲いかかった。

喧嘩馴れたやくざたちを対手にして、若い浪人者は、道場稽古で自信を持っているらしい一刀流の太刀筋を示したが、生れてはじめての真剣勝負に極端に昂奮した不覚の負傷を、二、三個所に負うた。

狂四郎が、むかいの八百屋の店さきから、枴をひろいとって、博徒たちを追いはらわなかったなら、あるいは、もっと、深傷を受けていたかも知れない。

若い浪人者は、近くの医者のところへ、手当をしてもらいに行き、狂四郎は、そのまま、街道をひろったのである。

意外に、はやく、あとから追いついて、先へ出て行ったのは、自分はこんな浅傷ぐらいはなんでもないのだ、と狂四郎に示したかったからに相違ない。

——浪人ていをしているが、浪人ぐらしの垢がすこしもついていないようだ。あるいは、仔細あって、わざと浪人ていになっているのかも知れぬ。

狂四郎が、ふと、そう思ったのは、博徒たちを対手にしている光景を眺めた時であった。扶持をはなれたさむらいに、こんなに正しい太刀筋をそなえる余裕はないからであった。すくなくとも、十年以上は、稽古を積んでいる、とみえたのである。

そうでなくても、衣食足りてこそ、武士道の吟味もなされようし、それを誇示することもできるというものである。見知らぬ他人に対して働いた博徒の無礼を咎めたのは、ただ気性が烈しいばかりではなく、それを許せぬ折目正しい環境に育ったためであろう。

——おれとしたことが……。

狂四郎は、強い雨足を落して来る黒い幕の中へ、すすみ乍ら、自嘲した。

——武士の世界に背を向けているくせに、心のどこかでは、うらやんでいる。……武士に生れたことを誇っている者に、劣等感をおぼえている。このおれが、だ。

そう呟きすてたとたん、四界が、ぱっと白色光に盈ち、凄まじい雷鳴が、轟いた。

狂四郎は、宙を裂いた火柱が、彼方の巨樹に立つのを視て、はっと、息をのんだ。

その下に、若い浪人者が、雨を避けて、彳んでいたからである。

急いで、近づいた狂四郎は、その根かたに倒れている姿を、見出して、暗然となった。かかえ起してみると、顔は焼けて居らず、睡っているように、目蓋をとじていた。

「不運だったな、お主――」

生きている者に言うように、声をかけてから、念のために、懐中をさぐってみた。素姓が判るような品は、何も所持してはいなかった。

遺髪を切りとった狂四郎は、ふと思いついて、その腰から葵の紋のついている印籠をはずして、これを納めた。浪人者が持つにふさわしくない、堆朱の立派な品であった。葵の紋がついているのは、先祖が旗本で、下賜された家宝であろうか。

二

皮肉にも、それから一里も歩くと、空は、からりと晴れて、西陽が、まぶしく照りつけて来た。次の宿が、川のむこうに見えた。

川の流れは綺麗で、裸ン坊たちが、さかんに水飛沫をはねあげていて、これを土橋の上から、若い女が、眺めている。そのかたわらに、白い大きな犬が、おとなしく坐っている。

のどかな夏景色が、つい先刻の無慚な光景と比べられ、狂四郎の胸中に、これがさほど時間も距離もへだたっていないことを、不当な不合理なものに感ずる苛立たしさが生れた。

土橋を行き過ぎようとすると、

「あ、もし――」

と、若い女に、呼びとめられた。

どこかの武家屋敷の召使のようであった。

振りかえった狂四郎の蒼白い異相に、ちょっと怯えた表情になったが、躾のある物腰で、

「お待ち申して居りました」

と、挨拶した。

「……？」

狂四郎は、女のかたわらで、犬が立って、じっと自分を瞶めるのへ、視線をかえした。

人間にちかい意志を持っているように感じられた。

「わたくし、秀麗庵の使いの者でございます。ここまで、お迎えに参っておりました」

人ちがいだ、と言おうとして、狂四郎は、ふっと、非業の最期をとげたあの若い浪人者を、待っていたのではないか、という気がした。

「どうして、わたしということがわかった？」

「その印籠を、お携げになっておりますので――。お年寄り様から、申しつけられておりましたので、すぐに、わかりました」

――やはり、そうであった。

あの若い浪人者が、ただの浪人者ではないと予感していた狂四郎である。なにかの目的をもって、秀麗庵なる屋敷をおとずれて来たのであれば、遺髪入りの印籠を携げた因縁のついでに、身代りになってやるのも、作善になろうやも知れぬ、そう考えられた。

「お屋敷では、どなたも、わたしの顔をご存じではなかったな」

そう言ってみて、

「はい」

と、頷かれると、狂四郎の肚は、きまった。

「案内をねがおうか」

歩き出すと、犬が、前へ出た。

妙に、気にかかる犬であった。

こちらが、その気持で、見ていると、犬も、首をまわした。

道は、遠かった。

街道からそれて、細い野道を、いくつかの森をくぐって、辿って行き、植樹らしい犬黄楊や木斛や木槿や満天星などが、まばらにならんでいる丘陵をのぼって行くと、崩れ石積みの竹穂時雨垣がめぐらされた屋敷があった。

囲垣は、内部を見せないために設けられているので、この丘陵ぜんたいが、屋敷になっているようであった。

正門はなく、竹垣に沿うてまわると、萱門があり、それをくぐると、敷砂の露地であった。

およそ、三百坪もあろうかと見える白一色の庭は、美しく水の波紋の掃目がつけられてあり、飛石のほかは、寒竹が四、五本、点々として、黄昏の陽影を長く、波紋の上に匍わせていた。

これに臨むにふさわしい宝形造りの草庵が一棟、ひっそりとしたたたずまいを、みせていた。

狂四郎は、娘から、ここで待つように、言われた。

上段と下段にわかれた座敷であった。

下座に就いた狂四郎は、床脇の飾棚も、欄間も、葵の紋の透彫であるのを、みとめた。

——将軍家が、日光参詣の途次、休息するために設けた屋敷なのか？
ついぞ、噂にきかなかったことである。
視線をめぐらしてみると、刈込籬のむこうに、本邸らしい巨きな屋根が、蒼々たる檜の林の中に、のぞいている。
丘陵の此処彼処に、趣きを凝らした建物と庭が、つくられている模様であった。
——妙なことになったな。
狂四郎は、自分に呟いた。
どうやら、何事もなく、この丘陵を立ち去ることはできぬ予感がした。
彼方の、入母屋造りの萱葺きの中門をくぐって、一人の老女が現われた。これは、一瞥しただけで、大奥で権威をもっているお年寄りらしいと判った。
供は、わざとしたがえず、しずかに、飛石を移って来て、すっと、上座に就いた。
畳に両手をつく狂四郎を、じっと、見戍って、
「薬師寺兵吾、と申しましたな。遠路、大儀でありました」
と、ねぎらった。
狂四郎は、無言をまもるよりほかはなかった。
「米津殿は、よい家臣を持たれた」
老女は、言った。
——米津！
狂四郎は、脳裡にある知識を辿った。

羽州村山郡長瀞（ながとろ）の藩主である。わずか一万石の小大名であるが、嫡々の三河武士の家である。べつだん、世に赫々（かっかく）たる名声は持っていないが、先祖は、それぞれの合戦にしたがい、五人の討死をかぞえている。おそらく、家康、秀忠の馬前に立って、骨を砕き身を粉にし、人に知られず、世にあらわれざる力を尽したに相違ない。徳川家を天下人（てんかびと）たらしめるために、父も子も孫も、おのれをすてて働き乍ら、名も挙げず、むくいられることの薄かった旗本の一人といえる。いわば、こういう純忠の家臣を多く擁していたからこそ、徳川家は、二百余年にわたる封建の世を築き得たのである。

「今年五月、葵祭（あおいまつり）に、公儀から、米津殿が献上の使者となられ、わたくしも、御台（みだい）様の使いとして、お列に加えられて、上洛（じょうらく）の途中、ふと、愚痴を申上げたところ、米津殿には、即座に、応諾なされた。――自分の一語によって、水火に入る家臣を、数人持っている、とな」

「…………」

「もとより、絶対に世に知られてはならぬ秘事ゆえ、えらばれた者は、おのが家にも打明けずに、脱藩して、当屋敷に参り、犬死にひとしい最期をとげなければなりませぬ。主家の大事のために切腹するとか、武士の信義によって、斬死するとか、というのであれば、面目も立って、死花も咲こうが……、これは、まことに、人にも告げられず、身をむざと贄（にえ）にするだけのむなしいお役目なれば、なんと礼の申し様もありませぬ」

「…………」

狂四郎は、頭を擡（もた）げて、老女を見やった。

俯向（うつむ）いた老女の顔には、悲痛な、暗い色が刷（は）かれていた。

——いったい、あの若い浪人者は、どんな任務を与えられていたのか？
その任務をはたす直前に、落雷によって、生命を落したとは、皮肉である。
「それがしは、主人より、ただ、一命をさしあげて参れ、と申しつけられました。仔細をおきかせ賜わらば、幸せに存じます。その理由によって、一命をさしあげるのをためらう次第ではありませぬ」
狂四郎は、言ってみた。
老女は、狂四郎の視線を受けとめて、こたえようとしたが、どうしても、口にし難い苦しい様子で、また、おもてを伏せた。
永い沈黙を置いてから、
「今宵、姫様には、そなたの純忠に感動あそばされ、妻として、添臥（そいふ）そうと、仰せられて居ります る」
と、言った。
——姫様？
この屋敷に住む姫君といえば、将軍家息女ということになるのであろう。
——どういうのだ、これは？

三

戌刻（いぬのこく）が、そろそろ過ぎようとした頃あい、狂四郎は、老女のみちびきで、本邸の奥の間に入っていた。

一瞥して、これは、大奥の寝所のしつらいと、判った。

二間の畳床には、花活はなく、三幅の掛物に、夏の花が描いてあった。柱々の下に、大奉書六つ折の上に小香炉が置かれ、若草（練香）の煙を、たちのぼらせていた。

隅の枠火鉢には、湿気払いの杉の葉と蒼朮が焼かれていた。

障子囲いの十六畳の上段の間に、もえぎ津綟子の蚊帳がいっぱいにはられ、紅梅縮緬七宝総ぬいとりの夜具が、ほのかに透けて見える。

蚊帳押えの青紙を貼った鉛函が、それぞれの縁に三個ずつ。

夜具には、真岡の枕切れをかけた長枕が二個並べてあった。

「御寝あそばして、お待ちのほどを――」

老女の指令を受けた中﨟が、そう告げておいて、障子を、しずかに閉めた。

――御寝か……。

狂四郎は、苦笑すると、几帳を除け、蚊帳をくぐって、着流しのままで、褥に仰臥した。

どのような姫君が、あらわれるのか。これは、興味のあることであった。

女中が二人、小さな衣桁と、広蓋と鼻紙台と煙草盆を持って入って来て、枕もとに置いて、影のように去ってから、しばらく経った。

やがて、上段の奥の襖が、開かれた。

老女に手をひかれてあらわれたのは、白羽二重の寝間着に緋縮緬の帯をしめた、ほっそりとした姿態の姫君であったが、何故か、顔には、能面をかぶっていた。

典雅な気品をたたえた美しい小面であった。

狂四郎が、儀礼上、起き上がろうとすると、
「そのままに——」
と、老女は、とどめておいて、姫君を、蚊帳の中に、みちびき入れ、
「この小面をはずすことは、まかりなりませぬ。よろしいかえ」
と、狂四郎に、命じた。
姫君は、狂四郎のかたわらに、毀れやすい人形のように、そっと、横たえられた。
蚊帳を出た老女は、網行燈のあかりを消しておいて、二の間へ、さがって行った。そして、障子の裏がわにある有明の灯も、細めた。
——大奥の寝所は、一夜中、あかあかと照らしておくならわしときいていたが……。
狂四郎は、ふと、老女の振舞いに、疑惑をわかせた。
姫君は、胸に両手を置いて、なんの意志もない者のように、微動だにせぬ。
狂四郎は、ためらわず、片手をのばして、白羽二重の襟もとから、肌着の下へ、滑らせて、胸の隆起へふれてみた。肌膚は薄く、乳首は玉筍の芽のように硬かった。
処女、とみた。
乳房が掌に包まれるや、全身の柔肉が、おののいたのである。
一方の手で、腰を抱き寄せると、嫩かな臀部は、まだ肉の盈ち足りぬ稚い軽さであった。
上半身を起した狂四郎は、その胸に置かれた手の、葱の穂のようにほっそりと白い指を視て、ふと、おのれの残忍さをおぼえた。
さらに、前をたぐり、白羽二重の腰巻を除けて、すんなりとならんだ下肢の、蠟のように滑ら

かな細い線を眺めた瞬間、これを拡げさせることがいたいたしかった。
しかし、これを拡げさせることが、任務であった。
……瞬間、狂四郎の視線は、右股の内側へ、吸い寄せられた。
花汁がしたたったように、雪膚に鮮やかに浮き立っているのは、葵の紋のいれずみだったのである。
——そうか！
狂四郎は、小面を、鋭く見下ろした。
小面をかぶっている理由を、直感し、それが、確信されたのである。
「いつの頃から、不幸になられた？」
狂四郎は、二の間の老女にきこえぬように、小声で、たずねた。
こたえは、なかったが、細い肩が、びくっと痙攣した。
もはや、狂四郎は、ためらわなかった。
小面の蔭から、疼痛に堪えられぬ微かな呻きがもらされると、狂四郎は、すっと身を起して、すばやく、拡げられた双脚を合させ、前を掩ってやっておいて、蚊帳を出た。
すると、すぐ、二の間の仕切襖が開かれて、老女が入って来て、
「明朝まで鴛鴦の夢をむすぶのが、作法でありましょうぞ」
と、きつい口調で、咎めた。
狂四郎は、静かな態度で、
「それがしも、生き身なれば、覚悟を殺ぐ長時間を与えられるのは、苦痛に存ずる」

と、こたえた。
「お、それもそうでありましたな」
老女は、二の間に、狂四郎を待たせておいてから、どこかへ行っていたが、間もなく、戻って来た。両手に、食籠をのせた三方をささげていた。
それを、狂四郎の前に据えると、俯向いて、ひくい声音で、言った。
「所望は、そなたの生肝でありまする」
狂四郎は、それをきいても、おどろかなかった。多分そうであろうと察していたのである。
「承知いたしました。敷砂の露地にある草庵で、腹をつかまつれば、明朝六つに、お出まし願います」
そう言いのこして、狂四郎は、食籠をのせた三方を把りあげると、廊下へ出た。
庭へ出て、池泉の畔をまわって、草庵へ戻って行き乍ら、胸のうちで、
――風魔一族は、あの将軍家息女に、葵のいれずみをほどこすとともに、癩をもうつしておいたのだ。
と、呟いていた。
将軍家斉の子女は五十余人ある。あの姫君は、その一人である。風魔一族に狙われたのが不運であった。
癩を発したので、ひそかに、この天領の一隅に、隔離されていたのである。
当時、癩を癒やす唯一の手段は、血統正しく、性情純潔な少壮の生肝を食すことだ、という迷妄が真剣に信じられていた。

老女は、それが欲しい、と長瀞藩米津氏に打明けたのであった。
米津氏は、即座に応諾して、一人の若い家臣に、生命をすてよ、と命じたのである。
——あの若者は、いずれにしても、犬死する宿運を背負うていた。
狂四郎は、気ぜわしく、一徹であった様子を思い泛べて、そぞろな憐憫をおぼえた。
それから、闇の中で、ふっと、薄ら笑った。
——犬死か。ひとつ、こちらも、文字通り、犬死してやろう。

四

夜がしらじらと明けた時刻、老女は、中門の扉をひらいて、そっと、敷砂の庭へ入って来た。
草庵は、薄靄の中に、ひっそりと、ものさびたたたずまいをみせている。
老女は、縁さきに立つと、手にした珠数をまさぐって、障子をたてきった内部にむかって、祈った。
座敷には、六曲屏風が、さかさにひきまわされてあった。
その内側には、切腹の座が設けられていたのである。
「南無！」
老女は、すり足で、そこを覗いた。
「あ！」
裏返した畳に敷いた白布には、夥しい血潮が撒かれていたが、切腹した者の姿は、消えはてていた。

しかし、三方にのせた食籠は、その前に据えてあった。
いそいで、蓋をとってみた老女は、血まみれの生肝が、中にあるのをみとめた。
大きく吐息した老女は、
――米津殿が、夜半に、別の家臣を、遣わされて、あの薬師寺兵吾の遺骸を運び去るように、取りはからわれたに相違ない。
と、思いやった。
その頃、ふところ手の黒の着流し姿は、日光街道上に在った。
その心にのこっているのは、小面をかぶっていた不幸な姫君のことではなかった。
斬り殺して、生肝を奪って、草庵の床下にすてて来た白い大きな犬のことであった。
夜明け前に、屋敷の一隅に、見つけ出して、追った時、犬は、すでに殺されるのを予感し、覚悟していたように、吠えもせず、首尾を垂れたのであった。

美女の墓

一

てまえが、また、ご浪人さんにお会いしたのは、奥州街道を、白川まで足をのばして、五日ばかりのち、宇都宮へひきかえして参ります途中で、ございました。
いえ、てまえの方で、さがしあてたと申した方が、よろしゅうございます。
喜連川という宿が、那珂川の支流にございます。
お別れする時、
「どちらへいらっしゃいます？」
と、おうかがいしたところ、
「喜連川の知人をたずねる」
と、仰言って居りましたので……。
旅籠をとると、すぐに街すじに出て、まあ、言うならば、犬がくんくん嗅ぐように、歩いて居りますと、大きなお屋敷から、ふらりと、出ておいでになりました。
そこは、噂にきいた喜連川公方と称される喜連川左馬頭様のお屋敷でございました。

関東管領足利基氏から五代、古河(こが)公方源義氏を祖とする大変な名家でございます。なんでも、豊臣秀吉公が、小田原征伐の際、足利氏の末裔(まつえい)が何処(どこ)にかくれているか、おさがしになったところ、下野国喜連川にいることが判明いたし、祭祀(さいし)を失わないように封地をお与えになったのだそうでございます。

徳川様の御代になっても、五千石の禄を賜わったばかりか、賓礼をもってして、代々左馬頭と称することをゆるされ、大大名の格式を具(そな)えられたのでございます。

お行列にしても――。

金紋の挟箱(はさみばこ)、鳥毛の二本道具、爪折傘など、これは、前田様や本多様や井伊様のお行列とかわらぬ格式なのでございました。

武鑑にも、領地高はかかげずに、特別の家として、遇せられて居ります。

「知人と仰言いましたのは、この喜連川公方様のことでございますか」

てまえが、びっくりし乍ら、おうかがいすると、お笑いになって、

「こちらが、勝手に、知人ときめたまでのことだ」

例によって、謎(なぞ)めいた冷やかな御返辞でございました。

ものの三町も歩きましたろうか。

「薬屋――」

とりとめないことを、ひとりで喋(しゃべ)って居りますてまえを、ふいに、冴(さ)えた声音で、おとどめになり、

「こんどは、おれとはなれていた方がよさそうだ」

と、仰言いました。

「どうしてでございます？」

「どうやら、おれの思惑が当った。……尾けて来て居る。ふり向くな！」

「…………」

遽かに、てまえの胸は、烈しく動悸うちはじめました。

ご浪人さんは、前方へ眼眸を置かれて、なんの変りもない歩調で、街すじをひろっておいでなのでした。

「お前に見せたな、地図を浮彫した張形を——」

「はい」

「あれから、もう一度、丹念に調べてみた。鬼怒川の上流ではなかった」

「左様でございましたか」

「川筋のわきに彫ってある崩し仮名を、きぬがわ、と読んだのは、まちがいであった。きづれがわで、あったのだ」

「成程——」

「川筋だから、うっかり、きぬがわ、と読んだのだ。きづれがわ、ならあの屋敷のことだ。亀頭の先端は渓谷を意味する、と思ったのはまちがいであった。亀頭は、すなわち、城郭のしるし(凸)であった。……あの屋敷へのり込んでみて、それが、わかった」

「…………」

「あの屋敷の北方が、丘陵となって居る。おれが、さがしている品は、どうやら、そこに匿され

ていらしい」

てまえには、もとより、何が匿されているのか、わかる筈もありませず、ただ、ご浪人さんが、漫然と、この地方を流浪されていたのではないことだけが、はっきりした次第でございます。

「おれは、しかし、まだ確信が持てなかったので、喜連川公方に会って、こちらが、もしかすれば、公儀隠密ではないかと疑わせるようにしむけてやって来た。はたして、人を尾けさせて来た。……ただではすまぬことになったわけだ。薬屋、そばにくっついていると、かねがねお前が不安がっていた通り、とばっちりを受けることになるぞ。怪我をしてはつまらぬ。はなれていてもらおうか」

そう仰言られると、てまえは、咄嗟に、

「いいえ！　面白い、と申しては失礼でございますが、見物させて頂きます」

と、こたえたものでございました。

人間という生きものは、まことに妙な心の動きをするものでございます。てまえのように、臆病で、用心ぶかい男が、急に、度胸を据えてしまったのでございます。

これまでは、ただもう、首をすくめて、ご浪人さんの水際立ったお働きを、あれよあれよと眺めていただけでございました。ところが、こんどばかりは、自分も、ひとつ、このお方のために、何かお役に立ちたい、という衝動にかられたのでございます。

「旦那様、てまえで出来ることなら、なんでもお申しつけ下さいまし」

「お前に、できることか」

ちょっと、考えておいでになりましたが、

「そうだな。おれを、一服盛り殺すことか」
途方もないことを、平然として、仰言ったものでございました。

二

突然、てまえどもの旅籠の部屋へ、六名ばかりの、覆面をしたおさむらいが、無断で、ふみ込んで来たのは、次の朝——と申しましても、しらじら明けの時刻でございました。
部屋には、炷きつづけられた線香の匂いがこもって居りました。
おさむらいの一人が、逆さ屏風を蹴倒して、西向北枕に仰臥させてあるご浪人さんの、顔にかけた白布を、ひき剝ぎました。
御一統は、一斉に、その顔を、のぞき込むと、互いに無言で、見交わしました。
まさしく、死人に相違ございませせなんだ。
一人が、念のために、手くびをとり、脈をはかるまでもなく、その氷のような冷たさに、疑いないものと納得して、
「たしかに、死んで居る」
と、仲間たちへ、頷いてみせました。
この旅籠へ尾けて来て、どこかの空部屋へ忍んだ者が、急に苦しみ出して、一刻ばかりであっけなく息をおひきとりになったご浪人さんの始終を見とどけておいて、報らせに帰り、おさむらいがたが、それをたしかめにやって来た、という次第でございました。
てまえは、ただもう、神妙に俯向いて、膝の上で、珠数をまさぐっているばかりでございまし

た。

「どういう知りあいだ？」

予期していた尋問がございました。

てまえは、宇都宮の旅籠で相宿をしただけの、行きずりの縁で、どういうわけか、喜連川宿のことをくわしくおききになるので、お礼もたんまり頂戴したので、案内したのだが、とんでもないかかわりあいになって、当惑している、とまことしやかに、こたえたものでございました。

どうやら、これは信じられたらしゅうございましたが、二人が居残って、納棺まで見とどけたのは、よほど生きかえるのが不安であったのでございましょう。

そこで、てまえも、ご浪人さんの懐中がゆたかであったのを理由に、せいぜい、遺憾のない納棺の式をやってのけてみせました。

旅籠の女中三人に、大急ぎで、尻止めのない糸で経帷子を縫いあげさせ、頸に頭陀袋をかけて、六道銭と仏符を納れ、額には三角帽子をかけ、白の手甲脚絆を忘れず、うしろ前に草鞋をはかせ、珠数竹杖を持たせて、冥途の旅装をととのえさせました。

棺に、往生縄がかけられてから、見張りのおさむらいたちは、ようやく、腰をあげたことでございました。

埋葬する寺は、ご浪人さんが、てまえの存ぜぬ何かを隠匿してあると看破された喜連川公方屋敷北方の丘陵の、ちょうどその屋敷と反対側の麓にある禅寺に、いたしました。

もとより会葬者があるわけではなく、すこしはなれた里から、非人を呼んでもらって棺をかつがせ、てまえ一人が、とぼとぼと、跟いて行ったのでございます。

「寺院へはこび入れるまで、油断するな」

と、ご浪人さんに申しわたされて居りましたので、神妙にあい勤めたわけでございました。禅寺の本堂に、いったん、棺を据えておいて、てまえは、のこのこと喜連川公方屋敷へ出かけて行きました。

「遺骸を、どこへ埋葬いたせばよろしゅうございましょうか、ご指示下さいまするよう――」

そのことを、うかがってみたのでございます。

これに対して、

「無縁仏ゆえ、人目にたたぬ場所をさがして、埋めるように――。墓と判る品を添えることは、一切まかりならぬ」

というご返答でございました。

予想していた通りであったので、てまえは、承って、屋敷を出ました。

棺は、その日は、本堂へ置かれたままでございました。わざと、そうしたのではなく、まま諸国に見かけるならわしでございますが、わが家で一夜、そして、菩提寺で一夜、通夜をして、埋葬するのが、この地方では、まもられていたのでございます。一夜だけの通夜では、ひょっとして死人が蘇生したかも知れないという気持があとにのこるからでございます。

その夜も、殊勝げに、棺の前に坐って、てまえは、膝で珠数をまさぐり乍ら、誦経をつづけました。そのうちに、いつか、こくりこくりと、白河夜船をこいで居りました。

「薬屋――」

不意に、呼ばれて、はっと、目をさまして、顔を擡げますと、いつの間にか、ご浪人さんが、

黒の着流し姿におなりになって、薄ら笑っておいでてでございました。
その小脇には、ぐったりと死んだようになっている白羽二重の寝召をまとうた若い女を、かかえていらっしゃいました。
「いつの間に、お出かけでございました？　ちっとも、気がつきませんでした」
「幽霊は、音をたてぬものだ」
どさりと、女を床へ抛り出されて、
「わたしの代りに、埋葬する人間を、ひろって来た」
と、仰言いました。
眉の剃りあとも青く美しい、うら若い武家女房でございました。
てまえが、のぞき込んで、
「こ、こりゃア、事切れて居りますね」
と申しますと、ひくく笑い声をたてられて、
「お前がわたしをねむらせた薬を、のんでいるのではないか」
「あ――そうでございましたか。いったい、どこから、ひろっておいでになりましたので？」
「喜連川公方の女房だ。寝所へ忍び込むと、良人とまちがえて、抱きついて来た」
てまえが知らないあいだに、ご浪人さんは、その屋敷へ押し入られていたのでございます。
「ひとつ、わたしがつけていた冥途の旅装束をつけさせて、納棺してもらおうか」
「それで、どうなさいます？」
「本当に、埋葬してやるのだ。……お前が、屋敷で指示された通り、人目にふれぬ草葉のかげに、

そっと葬ってやろう」

「し、しかし、旦那様、薬がきれますと……一昼夜がすぎますと、息をふきかえすではございませんか」

「そこが、こっちのつけめだ」

てまえは、やむなく、仮死の武家女房から、寝召を、肌襦袢を、二布を、剝ぎました。白蠟のように冷えた、滑らかな素裸を、灯の中にさらして、てまえが、美しさに生唾をのんだ時、

「死人を犯すあじわいも、一度は知っておいてもいいだろう、薬屋」

と、そそのかされて、

「ご、ご冗談を――」

と、かぶりをふりつつ、内心、その衝動は起っていたことでございます。

三

ご浪人さんが、てまえを促されて、禅寺を出たのは、次の日埋葬を了えて、ゆっくり食事も摂ってからのことでございました。

「どちらへ、いらっしゃいます」

「喜連川公方に会いに行く。……たぶん、お前を顫え上らせる修羅場にはならぬ筈だ。わたしに刀を抜かせるのは、談判が妥結したあとのことになろう」

悠々として、正門からお入りになるご浪人さんのお姿は、てまえにとっては、この上もないた

のもしいものでございましたが、敵側にとっては、これほどおそろしい無気味なものはなかった、と申せます。
番士は、ご浪人さんを一瞥するや、何も言わずに、血相変えて、玄関へ駆け出して行きました。
すでに、屋敷内には、奥方が、寝床から、煙のように消えたことで、ただならぬ騒ぎになっていた筈でございます。
そこへ、死んだ筈の浪人者が出現したのでございますから、家中の驚愕と恐怖は、想像にあまりあるわけでございました。
建物から奔り出て来た士たちのうちには、すでに、抜刀している者さえ居ったのでございます。
ご浪人さんは、叫んだり刀を振りあげたりする対手がたに、目もくれず、ふところ手のままで、ゆっくりりと玄関へすすむと、式台へならんで、刀の柄へ手をかけて身構えた士たちへ、
「おとり込み中、おそれ入るが、公方殿に御意を得たい」
冷たい声音で、申入れられました。
「用件を申せ！」
「公方殿に拝眉の上で、申上げる」
「殿はお会いにならぬっ！」
「お手前がたが、いたずらにさわいで、時間をつぶされると、それだけに、公方殿は、焦慮されなければならぬことになる。奥方は、それがしに代って、息を絶やされて、奥津城に横たわっていると、心得られたい」

一同は、あっとなりました。

顔面蒼白になった公方が、玄関に出て来られるまでに、十とかぞえる必要はございませんでした。

「隠密め！　計ったな！」

なんとも名状しようもない狂おしい形相で、呻くように申されました。夫人を大層愛しんでおいでなことが、瞭然といたしました。

「それがしは、隠密ではない。これは、そちら様で、勝手に、まちがえて受けとられたことだ。一介の素浪人、とお思い頂こう」

「その素浪人めが、な、なにゆえに企んだか？」

「お手前様は、家中の面前で、恥をかかれたいのか」

「な、なにっ！」

「申上げる。お手前様の父上は、故白河楽翁の依頼によって、夥しい闕所物の戎器及び火薬を預り、隠し砦である裏手の丘陵に、埋蔵された。もとより、公儀よりの命令があれば、即座に、掘り出して、返さなければならぬ。……ところが、闕所物奉行朝比奈修理亮が横死したときくや、お手前様は、その品々を、猫ばばして、ひそかに、風魔一族に、高く売りつけようと、私欲を起された。公儀中に、もはや、喜連川家が、闕所物を預っていることを知っている者は一人もない、と思い込んだからだ。……ところで、風魔一族側では、どうやらお手前様の首鼠両端の態度を怪しんで、一族の者を使って、その隠匿場所をつきとめようと、いろいろ腐心している様子がうかがわれる。お手前様は、風魔一族に、さがしあてられたならば、おのが生命がなくなることをご

存じであろうか。風魔一族が、闕所物を占めたならば、お手前様ごとき人物を、生かしておくわけがないのだ。……もはや、おわかりであろう。戎器及び火薬は、この世から消えてこそ、お手前様の生命も、安全となるというものだ」

「だ、だまれっ！……貴様、奥を、どこへ、つ、つれ去ったぞ？」

「おつたえした通り、奥方は、いま奥津城で、ねむっておいでになる」

「そ、それは何処だ？」

「どうして、その場所を、お手前様が、おききになるのか。昨日、この商人が、墓地はどのあたりがよろしかろう、とうかがいに参ると、無縁仏ゆえ、人目にたたぬ場所をさがして埋めて、墓と判らせてはならぬ、と指示されたではないか。お手前様の方で、わからぬようにされたのだ」

公方は、言葉にならぬ叫びとともに、全身を、ぶるぶると顫（ふる）わせて、つかみかからんばかりに、式台からとび降りようとなさいました。

「すでに、それがしをごらんになればおわかりになるように、仮死の状態は、一昼夜をもって、おわる。奥方は、明朝はやく、甦（よみがえ）られることになろう。その時、土の下に、棺の中に、とじこめられていると知れば……かよわい女性（にょしょう）の神経は、恐怖に堪えられまい。恐怖のあまり、気が狂うか、あるいは、こんどこそ、真死を迎えられるか」

この言葉をきかされるや、公方は、その場へ、へたへたと、坐り込んでおしまいになりました。

まだ、二十五、六歳の、さまで人間もできていない、小心な御仁（ごじん）には、この凄（すさ）まじい予告が、堪えられなかったのは、無理もございませぬ。

「かんたんな交換だ」

ご浪人さんは、微笑され乍ら、申されました。

「闕所物と奥方の身柄をひきかえる。そうすれば、お手前様ご自身の生命も安全となる。……風魔一族には、こうお伝え頂こう。眠狂四郎という素浪人めにはかられて、闕所物を奪われた、と。風魔一族は、それがしの名をきけば、納得してくれるに相違ない。これは、当人が申しているのだから、まちがいない」

四

その丘陵の一角で、突如、地軸をゆるがせて、凄まじい轟音(ごうおん)とともに、地獄の業火のような火柱が噴きあがり、たちまち、夕空を黒煙が掩(おお)うたのは、その日の黄昏(たそがれ)どきでございました。

闕所物の戎器と一緒に埋めてあった火薬に、火が投じられたのでございました。

火を投じたのは、てまえでございました。

その時、ご浪人さんは、そこからものの三町もはなれていない、麓(ふもと)の竹藪(たけやぶ)の中においでだったのです。

つまり、そこに、公方の奥方が、埋葬されていたわけでございます。

ご浪人さんは、要心ぶかく、戎器と火薬がまさしく隠匿されてあるのを、家中の人々に掘り出させて、その目でたしかめておいて、公方を、竹藪に案内したのでございました。

てまえが、大急ぎで、そこへ駆け降りて参りますと、棺は、数人の手で、穴から持ち出されようとしているところでございました。

蓋がひらかれ、公方は、血走った眼眸(まなざし)を寄せるや、

「死んでいるではないか！　甦らないのではないか！」
と、口走られたものでございました。
「お手前様の御家中が、たしかに死んだとみとめたわたしが、こうして生きかえっているのが、なによりの証拠――。安堵されるがいい」
ご浪人さんは、そう言いすてて、てまえをうながして、歩き出されて居りました。
およそ三十名ばかりの血気の士たちが、追跡して来たのは、ものの半里も遠ざからぬうちでございました。
ご浪人さんは、当然、予期していたこととて、まことに平然たるもので、とある川に架けられた土橋の上を、修羅場におえらびになると、
「薬屋。お前は、むこう岸の土手の上で、見物して居れ」
と、仰言ったことでございます。
水際立ったお腕前は、もはや、申上げるまでもございますまい。
土橋の上から一歩も退くことなく、雄叫びして躍りかかって来る面々を、一人一人、ただの一撃で、流れへ斬って落されました。
てまえが、十二人まで、かぞえました時、ご浪人さんは、もう誰も一歩も出て来ないのを見てとられ、
「このあたりで、もう、よかろうではないか。のこりのご連中は、朋輩を、水から、ひき上げるのが、役割のようだ。生命に別状のないように斬ってある。……ただし、手当がおくれれば、保証しかねる」

そう仰言ったものでございます。

しばらくして、てまえは、夜道を、ゆっくりおひろいになるご浪人さんに、

「うかがわせて下さいまし」

と、声をかけて居りました。

「なんだ？」

「あの……奥方のことで、ございますが、屋敷の寝所で、薬をおのませになった時、お抱きなさいましたか？」

そうお訊ねしますと、ひくく笑い声をたてられて、

「薬屋、教えてもらおうか。闇の中で、他人の女房を、良人に化けて、ねむり薬をのませるのに、口うつし以外に、どんな方法がある？」

刺青妻

一

江戸の街にも、凌(しの)ぎ難いほどの暑い日がつづいていた。

江戸っ子が宵っ張りの朝寝坊になるのは、この時期であった。表住まいの者は、悉(ことごと)く通りへ縁台を出し、裏店(うらだな)住まいの者は、河岸(かし)ぶちとか寺院神社の境内などへ出て行く。賑(にぎ)やかな場所には、夜見世がならび、どこの門前町も縁日となる。

尤(もっと)も、おかげで、江戸市中が、煙の渦をまいて、蒸した夜空を烟(けぶ)らせることになる。家々は蚊遣(かや)りを焼き、夜見世や縁日では、魚油を燃やすカンテラ、薩摩蠟燭(さつまろうそく)から、濛々(もうもう)と煙を立ち昇らせるからである。

蠟燭や燈油は、酒よりも高い時代であったが、酒を我慢しても、灯をあかるくするのが、心意気というものであった。

菜種、棉実(わたざね)など、燈油はいろいろあっても、燈心で燃やすのであるから、その明るさは、知れたものであった。当時は、ふつうの家では、燈心は一本だけしか使わなかった。二本を燃やせば、ぜいたくであった。上等の着物など縫う場合に、思いきって三本使う、というくらいであっ

た。三本の燈心の明るさは、細い蠟燭一本の光にみたなかった。

それほど、大切な灯を、夏の夜だけは景気よく、九つ（午前零時頃）まで、つけっぱなしにした。

縁台のならんだ通りは、白昼に倍増した人出になる。

新内の流しが来るが、これは、大店の旦那が、玄人の三味線弾きをやとって、芸自慢の流しであった。声色も、洒落に出た素人の方が、稼業人よりも多かった。

吉原被りで、提灯をつけた長い篠を襟へ挿して、読売が、心中節を、佳い声で唄って通って行く。辻占売、枝豆売、白玉汁粉売、そして、夜が更ければ、夜鷹蕎麦。

辻々には、竪行燈に、むぎゆと浮かせた麦湯店がならぶのも、当時の真夏の夜の景趣のひとつであった。

麦湯釜を据えたまわりに、涼台をならべ、朝顔模様の浴衣に紅染の手襷ほどよく、十七、八の娘が、愛嬌のある鉄火な口調で、給仕をするので、町内の若い衆は、のこらず、燈蛾のように集まって来る。

「おう、おう、おうっ！」

向う鉢巻に、尻っ端折りの男が、威勢のいい声をかけて、近づいて来ると、

「三年ぶりだあ、娑婆を拝むなあ、こん畜生――」

と、呶鳴った。

「鉄の野郎、小伝馬町の牢から出て来やがった」

「町内の娘たちは、もう夜歩きはできねえや」

ささやき合う声に、ふりかえって、

「なにをっ、べらぼうめ、おれが牢にぶち込まれたのは、おれがわるいんじゃねえや。浮世の罪は、みんな、女がつくるんでえ。女は地獄、大蛇を見るとも女を見るなって、お経の文句にもあらあ。ところが、見ねえじゃいられねえや」

「全くだの。明石からほのぼのと透く緋縮緬——と来れば、こてえられねえ」

「そうよ、当節、内股の奥まで白粉を塗りやがって、緋縮緬の蔭から、ちらちらさせやがるから——」

「むらむらっと来て、かあっとなって、それで、おめえ、三年くらい込んだってえわけだ」

「赤い湯文字のせいだあな」

「へん、おれが、殺した年増はな、見ごろ寝ごろの、堅ぶとりの、餅肌の、佳い女だったぞ。

　湯文字、もじもじ、はじろうて、

　えくぼは千両で、腰つき万両

　抱いて寝かせりゃ、からみつき

　吸いつき、噛みつき、

　身もだえて、

　わたしゃええもう、

　いく万両、とくらあ

その名も、おいく、と言ってな。思い出さあ。……ええ、おう、おれが、牢から出て、まっすぐ行ったのは、どこだと思う？」

「吉原か？」
「置きやがれ。おいくの墓だ」
「化けて出たろう」
「出るだろうと思って行ったんだ。乱れ髪して出た幽霊も、元のもつれが解けぬゆえ——ってな。出て来たら、こんどこそ、ぎゅっと抱きしめてやろう、と思ってよ」
「逢うたその夜は頓証菩提、またもあしたは迷う魂か」
「ところが、いくら待っても、出て来やがらねえから、ひとつ、実のあるところをみせてやらざあ、と出かけて行ったさきは、どこだと思う？」
「また、気を持たせやがる。川施餓鬼だろう。浮ぶ瀬もある川施餓鬼と洒落たか」
「どっこい、そんな月並みな供養なんぞするもんけえ。彫宇之のところへよ」
「彫宇之？　なんでまた——？」
「臍の下に、おいく命と、彫ってやろうと、ほぞをきめたのよ。どうだ、生きた敵娼と、ほりものを入れ交わすのとは、情の筋あいが、ちがうんだぞ。てめえが殺した女の名を、彫ってやるんだ。これ以上の供養があるけえ」
「宇之は、承知したか？」
　問われて、鉄は、急に、いまいましげに、かぶりをふった。
「死んだ女の名を彫ったら、この指が腐るとぬかしゃがったんだ。どうたのんでも、引受けやがらねえ。糞くらえ、ととび出して来たところだあ」
「宇之は駄目だぜ、鉄——。目下、通い小町に、夢中だあな」

「通い小町たあ、なんだ？」
「まあ、待っていな。いま、ここを通るから――」
それから、四半刻もすぎないうちであった。
「来たぜ！」
皆の視線が、一斉に、向けられた。
お高祖頭巾で、顔をかくした武家風の女が、俯向いて、さしかかって来た。
「どうだ。ふるいつきてえ佳い姿だぜ。あれが、夜な夜な、宇之のところへ、かよっているんだ。鉄のたのみなんざ、受けつけるものか」

二

彫宇之、といえば、江戸随一と称される名人であった。おたぶんにもれぬ名人かたぎで、滅多に引受けないが、ひとたび、仕事にかかれば、鬼になって、うち込む。
大奥の中臈が、そっと忍んで来たり、名のある札差が千金を積んだり、辰巳の流行っ妓が操とひきかえにくどいたりするが、気に食わなければ、宇之は、にべもない返辞で、追いかえした。気が向けば、浅草の雷門ぎわに坐っている乞食女がつれている垢まみれの少女をつれて来て、精根こめて、二月あまりもついやして、全身に万朶の桜花を彫りあげたりした。おかげで少女は、奥山の水茶店へひろわれて、一枚絵にまでなり、神田祭には、一番山車の上に、比理刀咩命となって、殆ど全身が透ける翠羽のような薄紗をまとうて、人目をうばった、という。
粋と言い、通と称し、野暮を卻け、無粋を譏り、繊巧とか精緻とか形容する風致を誇る気質が

一代に漲った時世である。刺青は、江戸の文化を代表するもののひとつであった。
入墨者が、さげすまれはじめたのは、ずっと後代に入ってからである。
入墨の濫觴は、武士によっている。
天正十五年二月十七日のことである。
大和大納言秀長卿が、上方勢六万余騎に中国勢三万余騎を加え、総勢九万の大勢をもって、三原弾正の籠っている日向の高城を攻めた。
その時、島津中務は、二万余騎をひきいて、上方勢を迎撃した。その獰猛な闘いぶりは後日の語り草になった。なかでも、討死した薩摩隼人のうちに、
「今月今日、於此処討死仕候、何某」
と、二の腕に入墨している者がいたのは、まことに天晴れであった。
武士の心意気を示す入墨も、後代にいたって、遊女にうけ継がれてからは、色の諸分けやら心中立てやらの「入れ痣」になった。
寛永の頃、大阪では、天神という二流どころの遊女で作弥という女がいたが、七郎右衛門と七兵衛という二人の深いなじみ客を持っていたので、肩先へ「七さま命」と彫って、二人とも悦ばせた、という。
この噂が、江戸へつたわって、客が所望し、遊女もまたすすんで、客の名を彫るようになり、それがしだいに市井にひろがって、競いの男達衆が、倶利伽羅不動、般若の面、眉間尺、獄門、轆轤首などを、からだ全面へ彫るようになった。
しぜんに、彫物師の腕の佳し悪しが取沙汰されるようになり、この時代に入ると、職人のみ

か、旗本の次男三男までが、からだをよごして、得意になるようになっていたのである。
公儀においては、刺青法度を幾度も下したが、かえって、逆の効果になった。
彫宇之は、名人として、刺青をのぞむ者にとっては、神様扱いの存在であった。
その逸話は、多い。
ある時、一人の盗賊が、おとずれて、
「どうせ、近いうちに捕まって、獄門になるのは判っているんだが、その時、役人どもをあっと言わせるようないれずみをやってもらえまいか？」
と、たのんだ。
宇之は、承知した。
それから程なく捕えられた盗賊は、いよいよ死罪になることになって、牢衣を脱いでみせた。
頸から肩先にかけて、大きな文字で、「東照大権現」と彫ってあった。神君と称されている徳川幕府創設者の神号へ、刃物を加えることは、許されなかった。
盗賊は、斬られることをまぬがれて、永牢という処置をとられた。
宇之は、咎めを受けて、三年間、佃島で使役を課せられたが、その意表を衝いた奇抜な振舞いによって、さらに名人の箔をつけた。
また、ある時は——。
江戸で随一の見事な刺青は、小石川伝通院前の茶漬屋辰巳屋惣兵衛、と称われていたが、これと競って、惣兵衛の顔色をなくしてやろうと志した者が、宇之をたずねて来た。和平という、その職人の物腰は、きわめていんぎんであったので、宇之は、しばらく、考えていたが、

「どんなに痛くても、我慢しなさるか？」

と、訊（なず）ねた。

和平は、息を引取るまでの痛さでも怺（こら）える、と約束した。

宇之は、承知して、和平に、十日間、かよって来るようにと命じた。

その十日間、一（ひと）間から、おそろしい呻（うめ）き声が迸（ほとばし）って、呻きをききなれている近隣の人々をも、眉（まゆ）をひそめさせた。

一月ばかり経って、和平は、辰巳屋惣兵衛に、競いを申込み、場所を、浮世小路の百川の広間にえらんだ。ききつけた好事家（こうずか）たちが、その日、続々とつめかけた。

まず、惣兵衛が、双肌（もろはだ）を脱いでみせたが、それは、地獄の光景を映した浄玻璃鏡を、仇（あだ）な女が持って、にんまりと覗（のぞ）き見ている図柄であった。筋彫というやつで、朱入、金入の、豆つぶ程の鬼や亡者の指さきまでこまかに描いた見事さは、一瞥（べつ）、あっと声をたてさせずにはおかなかった。

次いで、和平が、おもむろに、素裸になったが、どうしたのか、からだには、一点の針の痕（あと）もなかった。

「どこに彫ってあるんだい？」

人々が、あきれて、問うと、和平は、にやりとして、

「くまなく、さがして頂きましょう」

と、言った。

惣兵衛が、いざり寄って、

「うむ！」

と、唸った。

和平の男根の亀頭に、いっぴきの蚊が、宛然、生きているもののように、とまっていたのである。男の身体の中で、最も痛み場所であるそこに、いまだ、彫った者はいなかった。

「わたしの負けだ」

惣兵衛は、かぶとをぬぎ、彫宇之の名は、さらにあがることになったのである。

この名人は、最近では、殆ど、簓を持つこともなくなり、裏店長屋のあばら家で、いち日中、酒気を絶やしたこともないくらしをしていたのである。

ところが、ここ数日、宵のきまった時刻になると、お高祖頭巾をかぶった若い女がしのびやかにかよって来るようになっていたのである。

どうやら、宇之は、半年ぶりに、その名人芸を発揮している模様であった。

今宵も——。

仕事部屋で、およそ一刻あまりすごした宇之は、やがて、茶の間へ出て来ると、茶碗酒を、ひと息に飲みほした。

そっと、破れ襖をひらいて仕事部屋からあらわれた女は、しとやかな態度で、

「造作になりました」

と、礼をのべた。

宇之は、濁り目を女に当てて、

「どういうつもりで彫りなすったか知らねえが、むかし馴染みの因果小僧のせっかくのたのみだ

から、お引受けはしたんだが、あとで、旦那様に、お叱りを蒙るんじゃござんすまいね？」
女は、しかし、それにはこたえず、金包みをとり出して、
「些少ですけど、お納め下さいますよう――」
と、言った。
宇之は、手をふって、因果小僧からもう、たくさんもらっている、と断わった。女が、肯かずに、金を置いて、おもてへ出た。
女は、ちさであった。

三

ちさは、わが家への道を辿り乍ら、
――もう、大丈夫！　わたくしのからだに、風魔一族は、ふれることは叶わぬ。
と、心で呟いていた。
ちさに、この決意をさせたのは、十日あまり前のことであった。
深夜、ふと、目ざめると、枕元に亡霊が立っていた。いや、亡霊としか見えぬ人物が、音もなく忍び入っていたのである。
目孔もない白頭巾をかぶり、白衣に白袴をはき、指さきまで白い布を巻いていた。
「さきの闕所物奉行朝比奈修理亮殿のご息女だな？」
たしかめておいて、
「いまは、眠狂四郎の妻となって居られる？」

と、言いあてた。

害意のない対手と見て、ちさは心をしずめて、起き上がると、正坐した。

「わたしは、風魔一族の者だ。一同から、白頭巾と呼ばれている、軍師役とご承知願おう」

そう告げておいて、しずかに座に就き、

「貴女のご亭主は、われら一族の旗本中でも特に業を競うて、無双を誇り合うていた血気の七人組のうち、すでに、四人までを殪した」

と、言った。

そのことは、ちさも、きき知っていた。そのうちには、ちさを犯した風魔三郎太も含まれている。

「さらに、また——。われわれが占有せんとして探索をつづけていた闕所物を、喜連川公方を脅かして、烏有に帰せしめた、という急報も、届いた。……わたしとしては、これは、眠狂四郎の業と頭脳が、われら一族よりまさっていたと、いさぎよく認めなければなるまい、という意見だが、残った三名の血気者たちが、承服する筈もない。もとより、渠らが、眠狂四郎に、正々堂々と、闘いを挑むことはのぞましいし、勝利をおさめてくれることを、願う。然し乍ら、血気者たちが、卑劣の策を弄して、復讐を企てることは、当然考えられるし、これを阻止することも叶わぬ。たとえば、貴女を拉致して、三名が、順々に犯す……」

ちさは、これをきくや、戦慄した。

「わたしの口から、そのような所業を禁ずることは、できぬ。なぜならば、これまで、いか様に残忍酷薄の振舞いをいたしても、これを咎めたことは、なかったからだ。われらが一族には、お

のずから、掟が定められて居り、その掟を犯した場合は、断乎として処断されるが、掟にふれぬ外の所業は、それが、たとえ悪鬼羅刹にまさるものであっても、黙許される。……軍師役として、渠らが憤怒のあまりの振舞いを、敢えて制すわけには参らぬ」

頭巾の蔭で、ふっと自嘲の嗤いをもらしたようであった。

「されば……、貴女としては、三名から、身をけがされぬように、そのふせぎの手段をこうじて頂かねばならぬ。この忠告に、参上いした。ご自身で考えられたい。わたしにできることは、この忠告だけだ」

白頭巾が、その厚意を示したのは、眠狂四郎が、お洒落狂女と婚儀をなし、その胸の中で息を引取らせてやったことに対する、返礼であったろう。

いかなる手段で、血気の暴力者たちから、操をまもるか——ちさは、一夜、思慮をつくした挙句、因果小僧七之助に、刺青師を紹介して欲しい、とたのんだのであった。

七之助は、なんのための依頼か、怪しんだが、ちさから打明けられないままに、彫宇之のところへ、ともなったのである。

ちさは、のぞみ通り、白い肌を染めることができた。

ちさが、風魔の若者に、襲われたのは、それから、三日後の深夜であった。

ちさは、抵抗しなかった。

黒影が忍び入った時、すでに目ざめていたが、ねむったふりをした。

対手は、麻酔薬を浸した布で、猿ぐつわをかませると、嫋やかな肢体を小脇にかかえて、深夜

の往還を、風のごとく奔りぬけた。
その家の座敷には、朋輩二名が、待ちうけていた。
ちさを拉致して来たのは、一郎太であり、待っていたのは次郎太と四郎太であった。
死んだようなちさを、どさと、畳の上へ、拋り出した一郎太は、
「誰が、最初に犯すか、だ」
と、言った。
次郎太が、
「籤できめるか」
と、提案した。
「籤は面白うない、業だ」
「よし、では、この女を的にする業だ」
一郎太は、ちさをかかえ起すや、床の間の壁に凭りかけた。
「距離は三間。盲目となって、手裏剣を撃つ。わしは頭上、次郎太は右耳わき、四郎太、お主は、左耳わきだ。紙一重に壁を刺す。傷つけた者は、資格を喪う。一寸以上もはなれた者も、同じだ」
「面白い！」
「やろう！」
意識なきちさの首を、まっすぐに立てておくことは、むつかしかった。
苦心して、傾いたり、俯向いたりせぬようにして置き、三人の若者は、三間をへだてて、並ん

だ。

同時に、撃つのであった。

「よいか？」

「うむ！」

一瞬の遅速もなく、三つの右手から、手裏剣が、放たれた。

三条の光芒が、吸い込まれるように、ちさの首の上と左右へ、突き立った。

調べてみると、一郎太の手裏剣は、頭髪より五分ばかり上を刺して居り、次郎太の手裏剣は、耳朶よりわずか二分はなれていた。四郎太の手裏剣と耳朶は、文字通り紙一枚をはさむほどに、ぴったりとふれ合っていた。

「わしだ！」

四郎太は、誇らかに叫ぶやいなや、ちさを、さっと抱えあげて、座敷の中央に仰臥させた。

「検分せいよ」

言いはなって置いて、着物の前を——燃え立つような緋縮緬の対丈襦袢も、白綸子の下裳も、ひと攫みにして、荒々しく、剝き拡げた。

「うむ！　搗きたての餅のように、柔こうて、あたたかいぞ。……三郎太め、この娘を犯したために、生命を落したとしても、男子として悔いはなかったであろう」

四郎太は、ぎらぎらと眸子を光らせ乍ら、脛から膝がしらへ、そして太腿へと、撫であげて行ったが、一瞬、「お——」と、内股の一箇所を、覗き込んだ。

そこには、一刀を抱いて横臥している一人の浪人者の後ろ姿が、くっきりと彫られてあったの

である。

一郎太と次郎太が、寄って来て、視線を当てた。

——眠狂四郎！

斉しく、そう合点した。

次の間とを仕切る襖が開かれたのは、その時であった。

入って来たのは、白頭巾であった。

「お主ら、掟を犯してはなるまい」

冷やかな声で、そう言った。

風魔一族の掟の ひとつとして、右の内腿に葵(あおい)の紋の刺青がない女を抱くことは 禁じられていた。

「三郎太は、掟を犯したために、眠狂四郎に斬られた。……この女の、葵の紋が彫られるべき箇所には、すでに、その良人(おっと)の像が彫られて居る。お主らが、抱くことは、許されぬ」

厳然として、宣告しておいて、白頭巾は、ちさのからだを、抱きあげた。

「この女は、わたしが、あずかる」

このおり、ちさの寝顔が、ふっと、微笑(ほほえ)んだ。狂四郎に抱かれた夢を見ているのであったろうか。

恐怖石

一

眠狂四郎は、眩しく照りつける陽ざしをうけて、喬木の蔭の石に腰かけていた。

茅蜩が、鳴きしきっていた。

今日でもう五日、終日茅蜩をきき乍ら、なすこともなく、この古い寺院で、すごしていた。べつに、住職と知己であったわけではない。そのたたずまいのいかにも、ものさびた美しさにひかれて、立ち寄ってみて、住職から声をかけられ、そのまま、泊めてもらっていた。

この男が、ふと気まぐれにもとめる憩いの場所は、いつも古い寺院であった。終日、一語も口にせずに、坐禅を組む。べつに、それで、業念を払って、得道のあかりを欲する気持があったわけではない。物心ついて以来、不幸な母と二人きりで、広尾町祥雲寺山内の小さな離れで、育ったので、山門の景色やくらしに、なつかしさがあったのである。

俗悪な雰囲気をもった寺院は、避けて通ったし、ふと惹かれて入るたたずまいには、期待を裏切られることなく、こちらを快く迎えてくれる住職が、住んでいた。

今市から数里はなれた、名もないこの古寺にも、ものさびた美しいたたずまいにふさわしい、

仏の慈恩をそのまま、その容子に湛えた老僧が、いたのである。

狂四郎を、ただ者ではない、と見てとったに相違ないが、一言も素姓を糺そうとはせず、方丈の一堂を与えてくれたのであった。

この五日間、朝夕の挨拶を交わしただけで、まだ、一度も膝を交えてはいなかった。

樹蔭に腰を下ろしていると、寂たる山気は、涼しい。絶える間のない茅蜩の音も、かえって静寂をふかめる役目をつとめている。

葉もれの陽が、いくすじかの箭になって、境内の地面を、縞に染めているのだが、光の当っている部分は、目に痛いほど白く、そこをせっせと横切って行く蟻の列を、狂四郎は、ぼんやりと、眺めている――。

動くものといえば、それだけであった。

幼い頃、こうして、蟻の倦まず働くさまを、じっと、眺めていたものであった。いっぴきも殺さない少年であった。てのひらへのせてみて、うろたえる様子に、また、そっと地面へもどしてやったこともある。

その少年が、二十余年を経て、いまは、かぞえきれぬほど人を斬って、深夜屡々亡霊の怨嗟の姿や声にうなされて、総身に汗して、はね起きる無頼者となっている。

生きて、こうして、蟻の動きを眺めていることに、重い深い感慨があるのだ。

と――。

人影が、ふたつ、山門を、しのびやかにくぐって来て、狂四郎をわれにかえらせた。

武家の妻女と、その子息らしい十四、五歳の少年であった。

閼伽桶と樒を携えているところを見れば、墓参にまちがいなかったが、狂四郎の眉宇を微かにひそめさせたのは、母子孰れも、その似かよった貌に、異常に緊張した表情を刷いていたことである。殊に、母親の方のただならぬ気色は、不吉な予感をおぼえさせた。

二人は、緊張のゆえか、狂四郎に気がつかずに、境内を横切って行った。

ひくい手摺籬の簀戸をひらいて、雑草に埋もれた小径を歩むと、ささやかな墓地であった。

母子が立ったのは、ひと際目立って大きな墓碑の前であった。

「北条武蔵守累代之墓」

と、刻まれてあった。

ほかの墓は、雑草にかこまれ、苔むすままに、すててあったが、これだけは、石もみがかれていたし、周囲もきれいに掃除され、香華は、絶やされていないようであった。

「そなたから――」

母親は、促した。

少年は、母親の顔色を、ちらと窺ってから、ぬかずいて、合掌した。

うしろに佇んで、じっと、墓を見戍る母親の眸子は、何やら覚悟をきめた冷たい色を冴えさせていた。

少年が、祈りおわって、立ち上がると、母親は、代って、草履をぬぐと、地べたへ、端坐した。

その祈禱は、おそろしく、長かった。

少年は、当惑ぎみに、時おり、手の甲で、額に滲む汗をぬぐった。

やがて、母親は、頭を擡げて、

「参之助——」
と、呼んだ。
その声音の冷たさに、少年は、びくっとなって、
「はい」
と、こたえた。
「見とどけるがよい、母の最期を」
「………」
「介錯は、そなたの役目じゃ」
厳然として、そう言いわたしておいて、懐剣をとり出すと、前に置いた。
「は、母上！」
少年は、かわいた咽喉に、ごくっと生唾をのむと、
「わ、わかりました。わたくしが、臆病者だったのです。こ、これからは、か、かならず、勇気を、ふるい起します。……ですから、そ、そればかりは……おゆるしを！」
かたわらへ、べたっと坐ると、地べたへ両手をついた。
「思いなおして、下さいませぬか？」
必死に悃願するわが子へ、一瞥もくれず、母親は、おもむろに、帯を解いた。
「母上！」
「………」
墓碑へあてられた母親の眼眸は、すでに、現実の一切からぬけ出したように、一種の憑かれた

光を湛えていた。
帯は解かれた。扱も、するすると、すてられた。
着物が、肩からすべり落されると、白装束であった。
さらに——。
母親は、白綸子の扱を押しさげると、ゆるゆると、胸もとを寛げた。
白い豊かなふたつの隆起が、あらわになった。
「母上っ！　どうしても、わたくしを、おゆるし下さらぬのか！」
少年は、うらむように、叫んだ。
「そなたの卑怯な性根は、ただの戒めでは、直りませぬ。母の最期を、その目の底にやきつけておかねばなりませぬ。そうしておけば、そなたに、臆病心が生じ、卑怯の振舞いにおよぼうとする際、思い泛べましょう。……思い泛べるがよい。そして、男子の勇気を、ふるい起すがよい」
母親は、大きく前を拡げて、腹部まで剝いた。
「母上っ！」
少年は、哭き出した。
母親は、自若として、懐剣を把って、鞘をはらった。
それから、
「たわけ！」
と、わが子を一喝した。
「差料を払って、うしろに立つのじゃ。……介錯の作法は、教えてある。臆病者乍ら、そなたの

腕前は、衆を抜いて秀れているではないか。母の首が刎ねられぬ筈はあるまい」
剣の天稟があるだけに、生来の臆病が、くやしくてならぬ母親であったろう。
女だてらに、切腹して、果ててみせようとしているのであった。

二

狂四郎は、この光景を、数間はなれた、とある墓碑の蔭に彳んで、眺めていた。

女子が、切腹したという例は、武弁殺伐の戦国の時代には、甲斐安芸守信満の妻が、良人のあとを追って、本国藤渡の河辺で腹十文字にかき切って、水中に沈んだとか、朝倉義景の母広徳院が、義景が自決しているのを目撃して、おのれも守刀を抜いて、腹に突きたてたとか、史実がのこっている。

しかし、徳川の治世にいたっては、ただひとつの例しかない。

すなわち、享保の頃、松平安芸守吉長が、吉原の遊女、三浦屋抱えの太夫花紫と格子歌野を落籍させて、国許へ召し連れるべく、屋敷から行列をねり出したあとで、吉長の夫人は、居間に夜闌くるまで燈火をあかあかと照らし、遺言状をしたためて、腹一文字にかき切って、俯伏した、という。

夫人は、加賀宰相綱紀の息女で、生得武勇の心得あり、乗物打物に達し、殊に長刀鍛錬のきこえがあった。弟の中将吉治も器量すこやかに、頰骨高く色黒く、これも馬上の達者で、武勇第一の大名と称されていた。

まことに、夫人は、賢女で、安芸守が、奥に入って、その膝を枕にして休むことがあったが、

目覚めぬうちは、一刻が二刻になっても、身じろぎもしなかった、という。
切腹したのは、五十一歳であった。これを発見して、御局（おつぼね）の女中たちが、うろたえさわぐのを、声をしぼって、叱り、切腹するほどの者が、何とて生くべきように切るものぞ、かねて覚悟の上の仕儀なれば、腕におぼえのある者は刀を把（と）って、疾（と）く介錯をするがよい、と望んだ。
良人の安芸守は、この悲報を、藤沢宿できいたが、法規によって、夫人逝去（せいきょ）の為に引返すことは叶（かな）わなかった。
夫人の介錯をした中臈豊田もまた、三十五日がすぎて、その墓前で、みごとに切腹した、と伝えられている。
この武家の妻女は、その壮烈な例にならって、良人ならぬわが子を、いさめようとしているのではなかろうか。
武門にあって行われる婦道が、きわまれば、これが最高の美徳ともみなされる、ということになる。
婦女子の身を処するのは、おのれのためではなく、親のため、良人のため、子のため——すなわち、家門のためであった。親に対しても、良人に対しても、そして、わが子に対しても、情愛よりもまずさきに、義理を立て、これを専（もっぱ）らにするのが、女のつとめであった。
——この妻女の良人（おっと）は、おそらく、切腹したのではなかろうか？
狂四郎は、そう臆測した。
もし、この少年がいなければ、良人に殉じて、自害したに相違ない女性（にょしょう）である。
良人が喪（な）きあとは、わが子を、家門を維持し、その名を輝かせる立派な武士にしたてあげよう

と決意し、一途(いちず)にその教育にわれを忘れて来たのだ。

ところが、武士として最も慙(は)ずべき、臆病の気質があると知った母親は、日常の悪癖を矯(た)めるのとはことちがい、ほかに方法がないと考えるや、ついに、自らの生命を断つほぞをきめたものである。これは、あわせて、良人に殉ずることになる、と思いいたったに相違ない。

これが、世間に知れれば、婦道婦職を操守することのいかに高く潔かったか、と——武門の女性の模範として、崇仰されるであろう。

ただ——。

これを目撃する者が、そう観なかっただけである。

世にもばかげた振舞い、と眺めた。

「参之助、よいか。みごとに、介錯しや!」

切先五分ばかり出して、杉原紙を逆に巻いた懐剣を逆手(さかて)に握って、母親は、わが子へ、声をかけた。

少年は、差料を抜いて、うしろに立ったものの、もとより、介錯の勇気はなく、ただ、痴呆(ちほう)のように、うつろな表情であった。

母親は、再度、

「よいか! 参之助——」

と、声をかけておいて、白い腹の皮を、左手で、左へひき寄せておいて、懐剣をかまえた。

瞬間、——びゅっと、小石が飛んで来て、母親の右手くびを、撃った。

「あっ!」

懐剣をとり落した母親は、血相凄まじく、その方角を、睨んだ。
「邪魔だてするのは、何者じゃ？」
狂四郎は、墓碑蔭から、ゆっくりと出て、
「婦道をつらぬこうとするのを、妨げると思わないで頂こう。御子息に、臆病心があるのを嘆くあまりの振舞いが、婦道にかなっているかどうかは知らず、人間に臆病心があるのが、はたして、いけないのか――それを疑念といたしたまでのことです」
穏やかに、言った。
「武士と生れて、臆病心を抱くかぎり、何条もって、武士道の吟味がなされようぞ！」
母親は、狂四郎を睨みつけた。
「大小をたばさんでいると否とに拘わらず、臆病心を持たぬ人間はありますまい」
「おろかなことを申される！　この子の恩師は、天下無敵の日光流奥村光典殿じゃ。その剣名は、お手前様の耳にも、とどいて居ろう。日輪が西から昇ろうとも、奥村光典殿に、ゆめ臆病心が生じてよいものであろうか！」
母親は、ヒステリックな笑い声をたてた。
狂四郎は、奥村光典の名をきくや、ふっと、ひとつの直感が、脳裡を掠めた。
中禅寺湖の奥に棲む猿を、つぎつぎと生捕って来て武芸を仕込む、というような奇矯の所業の尠なからぬ奥村光典が、ただの兵法者ではないであろうことは、かねて想像していた狂四郎である。
「奥村光典と雖も、臆病心はありましょう」

「ほ！　これは、おもしろい！　ご浪士、光典殿に臆病心があるならば、光典殿を試して、それをひき出してみられるか？」

「おのぞみならば……」

「おう、のぞみますぞ。はたして、光典殿が臆病者であったら、わたくしは、参之助の前に、両手をついて、詫びましょうぞ！」

三

奥村光典が、屋敷の中に、「天狗校」なる塾を創設して、十数名の少年をえらんで住まわせ、凄まじい修業を課しはじめたのは、昨春からであった。

室木参之助も、母の命令によって、それに加わった。

まことに、その修業は、言語に絶するばかりの苛酷惨烈であった。起居は板の間でなされ、蒲団は用いられず、食事は、粟を炊いて水漬けにしてふやかしたものだけであり、未明に起きて、五里を駆け、戻って、木太刀の素振り千回、おわって、坐禅を組む。それから、兵学、儒学、武術を学ぶ時間が、深更まで、ぎっしりと詰められ、その間、居睡りでもしようものなら、骨が砕けるばかりに撃ち据えられる。就寝したとたんに、大喝をあびせられて、はね起き、寒中ならば、冷水をかぶり、暑中ならば、篝火をたいて面坐する、といったあんばいであった。

その修業に堪えられずに、脱走する者は、すでに、半ばをかぞえていた。参之助は、能く堪えた。

参之助が、堪えられずに、ついに、逃げたのは、次のような無慚な度胸試しを受けようとした

からであった。
鉄砲廻し、という。
これは、薩摩の兵児組がはじめた度胸試しであった。
弾丸ごめして、火縄をつけた鉄砲を、道場の天井に、吊りさげて、その下に、少年たちは、円座をつくる。
吊りさげた綱に撚りをかけ、撚りつめて、火をつけると同時に、手を放す。
銃は、音たてて転回しはじめる。あらかじめ吊った綱の寸法を測って、円座した各自の胸のところを、廻る銃口が、狙い射てるようにしてあるので、少年たちは、生命の危機にさらされて、極度の恐怖に堪えねばならぬ。
参之助は、円座に加わって、転回する銃を見あげているうちに、ついに、恐怖のあまり、叫び声をたてて、うしろへ、はね退き、そのまま、「天狗校」を、脱走したのであった。
母親佐代は、光典に呼びつけられて、わが子の卑怯を告げられるや、屈辱に泪して、自ら腹をかっさばいて、その臆病心をすてさせようとしたのである。
翌朝、狂四郎は、母子をともなって、「天狗校」をおとずれた。
門から入らず、裏手から、そっと、忍び入って、母子を、植込みの蔭へひそませておき、道場で、少年たちにむかって兵学を講じている光典にむかって、いきなり窓から、小柄を投じた。
間髪の差で、光典がこれを冊子で、叩き落したのは、流石であった。
「不埒者！　なんの意趣だ？」

仁王立った光典は、六尺ゆたかの巨軀の持主であった。

狂四郎は、微笑して、

「天下無双と称されるお手前の捷術を破りに参上した」

と、言った。

それに対する応えは、いきなり、脇差を抜いて、狂四郎の顔めがけて、飛ばすことであった。

それから、いくばくかの後——。

狂四郎と光典は、道場で、真剣を持って、対峙していた。

およそ、一流と称される兵法者の立合いが、固着の対峙を、無限に永くつづくかと思わせるほど、孰れからも撃ち込まずに、持続させることは、これまで、いくども述べて来た。精神的な破綻によって勝負が決することは、先ずない。均衡が破れるのは、肉体の力の消耗差が見えた刹那、ということになる。

そして、それは、天地を一間の間合に凝聚した真空状態から、突如として躍り出る一瞬一颯によって、決定する。

今の場合も、そうか、と思われた。

地摺り下段にとった狂四郎の無想正宗は、光典の上段剣が動かぬかぎり、微かなそよぎすらもしめそうとはしなかったからであり、それはまた、光典を不動に縛るかとも見えたのである。

だが、光典の極意は、捷術であった。

対峙を、半刻も一刻も、つづけては、肉体の消耗によって、捷術がにぶるのである。

まなこを炬にした光典は、一瞬、

「勝負っ！」
　と、凄まじい一声を迸らせた。
　常の狂四郎ならば、これを冷笑で受けるにとどめる。
　何を思ったか、狂四郎は、その叫びに応えて、無想正宗の切先を、鶺鴒の尾のように、ぴっと、はねてみせた。
　光典は、床板を蹴って、躍った。
　固唾をのんで見戍る少年たちは、高く跳ぶ光典の速影と、ひくく身を沈めた狂四郎の黒い姿との、およそ六尺をへだてた空間に、稲妻のような、白刃の煌めきをみとめたばかりであった。
　狂四郎がやおら身を起して立つのと、光典が、徐々に巨軀を傾けて、がくっと膝を折るのが、ふしぎな対照をしめした。
　狂四郎の右手にだらりと携げられた無想正宗は、いつの間にか、峰をかえされていた。
　狂四郎は、微笑して、少年たちを見わたして、
「これから、お前たちが、万能者として畏怖している師が、ただの臆病な俗人にすぎない証拠を、みせてやろう」
　と、告げた。

四

　まことに、残忍な光景が、道場の中央で、演じられた。
　両手両足をしばられて、道場の中央に仰臥させられた光典の、顔の上に、わずか一寸あまりの

空間をあけて、ひと抱えもある庭の青石が、梁から、綱で吊り下げられていた。のみならず、その綱は、光典の両手をしばって、梁にかけられていたのである。

すなわち、光典は、両手を、必死に、ひきしぼることによって、その巨石に、顔を潰されるのを、まぬがれていた。もし、力つきて、巨石の重みに堪えられずに、双の腕をのばせば、顔は、無慚に、ぐさっと、潰されてしまうことになるのであった。

……みるみる、光典の顔は、鬼面のように朱を散らして、脂汗を噴き出させた。

「いかがだ、光典殿。……たった一言をもらせば、この苦業から解放されるぞ。許せ、と一言——」

狂四郎は、促した。

光典は、歯をくいしばって、堪えつづける。

狂四郎は、少年の一人に、蠟燭を持参させると、火をともして、

「唐の頃、こういう拷問の方法があった」

と言い乍ら、くろぐろとした胸毛の上に、蠟燭を立てた。

ゆらめく焔は、容赦なく、骨が砕けんばかりに握りしめた拳を、焼く——。

焔から拳をはなそうとすれば、顔上の巨石が、下って来る。

ついに光典の恐怖の忍耐の限界が来た。

呻きの底から、

「ゆ、ゆるせ！」

その一言が、しぼり出された。

狂四郎は、光典の首を蹴とばしざま、巨石を吊った綱を、すぱっと両断した。
巨石は、建物を、烈しく震動させた。

翌朝――。
狂四郎が、方丈の茶室で、住職の点前（てまえ）を受けていると、小坊主が、少年参之助の訪問を告げた。
玄関へ出た狂四郎は、参之助の蒼白（そうはく）なこわばった表情を一瞥（べつ）して、はっとなった。
「母者が、どうかしたか？」
参之助は、こたえようとして、唇をわななかせたが、声が出ず、背中を向けて、歩き出した。
参之助が、狂四郎をともなったのは、墓地であった。
母親佐代は、その墓前に俯伏していた。
狂四郎が、かかえ起してみると、見事に咽喉を突いて、事切れていたのであった。

尼僧変化

一

眠狂四郎が、突如として、風魔一族とおぼしい黒装束の士五名に包囲されたのは、今市と日光との、恰度中程にあたる街道上であった。

杉木立がふかく、両側からさしかわした枝で、頭上は掩われ、眩しい陽は空に盈ちていたが、地面に影法師も匐わぬ昏さであった。

風の涼しさをおぼえ乍ら、しずかな足どりで、歩いて来た狂四郎が、まず、ふと、神経を冴えさせたのは、空を掩うた樹枝のしげみに対してであった。

——いるな！

そう直感したのである。

頭上にひそむからには、飛道具を摑んでいると判断してよい。

この地域で、この眠狂四郎を待ちかまえているとすれば、風魔一族よりほかにはない。もとより、それを予想し乍ら、歩いて来たのである。

狙われていると知って、踵をまわす男ではない。

そのまま、そ知らぬふりで、ゆっくりと、足をはこんで、真下に来た——とたんに、左右から、二名ずつ、面を包んだ、黒衣の士が、音もなく、すっと現われたのであった。

狂四郎は、立ちどまった。

対手がたも、声を発せず、こちらも、口を緘んだままであった。

世界が真夏の明るさにも拘わらず、街道上だけが昏く、その中に立つ互いの黒い姿が、微動もせずに、いくばくかの静寂を保っている光景が、狂四郎には、予め定めてあったことのように思われた。

——この場で、おれが殪れるか、それとも、この連中が仆れるか、孰れにしても、一瞬裡に決しなければならぬ。あとには、何事もなかったように、もとの静寂にかえる。

狂四郎は、冷たく澄んだ眼眸を、敵の一人一人へ、まわした。それから、一本の杉を見上げた。空の梢に身をかくした者がかまえているのは、鉄砲であった。

狂四郎が、ふたたび、視線をもどすのと、四方の敵が、一斉に、抜刀するのが、同時であった。

同じ構え——切先で天を刺す直立上段が、風魔一族であることを明白にした。

狂四郎は、なお抜かずに、人間一人をとまらせている杉の前に立つ者を、正面の敵とした。

左右の者は、動かず、背後の敵が、同じ歩調で、迫った。

そして、ゆっくりと、間合いを詰めた。

正面の敵は、狂四郎が居合の抜きつけをあびせて来ると見て、その一刹那の迅業に合せるおのが猛撃に遺憾なからしむべく、わざと気息を沈める身の引きかたをした。

その背中は、杉の幹に、ふれた。

狂四郎は、上段剣の落ちて来る刃圏の線上で、いったん立ちどまった。
しかし、その静止は、ほんの二秒あまりの短さであった。
すっと……狂四郎は、一歩ふみ進んだ。
瞬間――。
「ええいっ！」
凄まじい気合が、狂四郎の口からと敵の口からと、全く同時に発しられた。
敵が振下ろした剣に、技と力のみじんの狂いもなかった。しかし、刃は、狂四郎のからだを断つことは叶わなかった。狂四郎の左手が抜きつけた脇差が、これを、宙で受けとめたからであった。
のみならず、敵は、胸部をつらぬかれる激痛に、四肢を鋼鉄のようにつッぱった。胸部をつらぬいたのは、狂四郎の右手が抜きつけた無想正宗であった。
狂四郎は、居合の秘術を、双手で使ったのである。
さらに、また、この迅業は、次に起る現象も計算に入れていた。
すなわち――。
生き身の胸いたをつらぬいた無想正宗は、その切先で、敵が背中をふれさせていた杉の幹をも、突いたのである。
樹が、ざわとゆらぐのと、梢から、銃声が轟くのと、そして、狂四郎を背後から両断しようと、猛然と地を蹴った者が、一刀をふりかぶったまま、のけぞるのと――これが、連続した。
みごとに、狂四郎の計算は、成功した。

杉の樹をゆるがせて、梢から銃口を狙いつけた者の手もとを狂わせ、背後から襲う味方に弾丸を中らせたのである。

次いで――。

狂四郎が、無想正宗を緩慢な動作で抜きとったのは、左右の敵をして、この一瞬の光景から、はっとわれにかえらせて、殺気凄まじく肉薄させるためであった。

これを迎えて、狂四郎がしめした迅業もまた、水際立っていた。

腰を沈めて、右の敵の胴を薙いだ無想正宗を、一閃の白光と化して、鮮紅の尾を曳かせつつ、左の敵の咽喉から頤めがけて、すりあげに、刎ねあげた。

一太刀をもって、二名を斬ったのである。

狂四郎は、白刃をぬぐって、鞘に納めると、梢の伏敵を仰いだ。

「そこの御仁！　お主がなさねばならぬ役割は、眠狂四郎を撃ちとることではなくして、味方四名の屍骸をとり片づけることであったようだ」

二

せわしい馬蹄の音に、自分を追って来たのだと直感した狂四郎が、道を空けて、杉木立に身を寄せたのは、日光宿が彼方に見えたなだらかな坂の途中であった。

白馬を駆って来たのは、豪士風の中年の男であった。

狂四郎の面前で、たづなをひくと、ひらりと、降り立って、鄭重な物腰で、

「卒爾乍ら、先刻、貴殿が示された稀有の手練ぶりを、それがしの主人が拝見いたし、是非と

も、館にお招き申したい、と願って居ります。いかがでありましょうか。まげて、ご承諾頂けますまいか？」
と、申入れた。
いかにも誠実そうな人柄とみえたが、狂四郎は、
「気が向かぬと申上げるよりほかはない」
そっけなく、こたえた。
疑惑があった。あの修羅場を目撃していた人影は、どこにもなかった筈である。すくなくとも、狂四郎の目にはふれなかったのである。対峙してからわずか二分もかからなかった決闘であった。目撃者がいたとすれば、すぐ近くに立っていたことになる。いなかったのである。
狂四郎が、歩き出そうとすると、対手は走って、行手をふさぎ、ぴたっと土下座した。
「お願い申します！　それがしも、子供の使いではなき故、どうしても、ご承諾なき場合は、この場にて、切腹いたすよりほかはありませぬ」
——大袈裟な！
狂四郎は、苦笑した。
「お手前のご主人と申されるのは？」
べつに興味はないが、一応訊ねてみた。
「禁中よりおさし遣わしの常盤御所光照院の比丘尼であります」
「比丘尼？」
狂四郎は、意外なこたえに、おどろいた。

常磐御所光照院というのは、宮廷から皇女が尼門跡として入る比丘尼御所四箇寺のひとつであった。浄土宗である。
「このたび、法然上人の大遠忌にあたり、日光山御宮に、百カ日の祈禱を捧げるために参られたものにて、日光御奉行の役宅に御逗留中であります。なにをかくそう、比丘尼は、武田松姫が裔にて、東照神君に祈禱を捧げるには、最もふさわしい女性であります」
この言葉は、狂四郎にも、すぐ納得された。
武田松姫というのは、武田信玄の季女で、絶世の美女とうたわれ、家康が二度までも、甲州に入ったのは、この姫を獲たいためであった、と伝えられている。
松姫は、八歳の時、織田信長の長子信忠と縁約されたが、十二歳の冬（元亀三年）味方ヶ原の一戦に、信長が、敵の浜松勢を援助したため、両家手切れとなり、縁約は廃棄されたのであった。翌年、信玄が逝去し、松姫は、薙髪して、幽栖を営むことになった。
世人は、新館尼公、と呼んで、さらに、憂愁の風情をくわえたけだかい容子を、遠くからでも、ひと目見んものと、館外をうろついた、という。
天正十一年、甲州古府に入った家康は、鳥居彦右衛門元忠に、松姫を陣所へつれて来るように、命じた。
彦右衛門は、穴山梅雪の弟彦八郎信邦に会って、その旨を伝えた。穴山梅雪の妻は、松姫の姉の見性院であり、彦八郎は松姫と義理のきょうだいの間柄であった。
彦八郎は、家康が甲州入りをするや、かならず、松姫を所望すると思って、いちはやく、姫の身柄を、館から、他処へ移しておいたのである。

彦八郎は、帰宅するや、妻の都摩を一室に呼んで、剃髪するように、命じた。

都摩が、その理由を問うと、

「松姫君の身代りになるのだ」

と、告げた。

都摩は、松姫とどことなく、俤が似ている美女であった。よもや、家康の妾にされるとは考えずに、頭をまるめて、翌朝、陣所へおもむいた。そして、そのまま、還らなかった。後の下山殿であり、振姫、信吉の二子を生んでいる。

家康は、この時、ほかに、市川十郎左衛門という士の女と、三井左衛門という豪士の後家を狩って、妾としている。

都摩が伉儷の情に背いて、身代りに立ち、敵の衽褥に身を投げたことは、世間には洩れなかったが、やがて、彦八郎の家臣の口から、新館御寮人に告げられた。

愕然となった松姫は、このまま、彦八郎の厚志にあまんじる気持になれなかった。

家康が、都摩ほか二人の女をつれて、古府を去るや、松姫は、新館にもどって、彦八郎を呼び寄せ、じぶんのからだで、妻のつとめをさせて欲しい、とたのんだ。

はじめは、彦八郎は、拒絶したが、松姫の悃願に、ついに、自制心をうしなって、これを抱いた。

美しい尼僧が、ひそかに、一子を生み落したのは、それから一年後で、皮肉にも、下山殿となった都摩が、家康の子を生んだのと、同じ日であった。

彦八郎が、その子を、松姫の乳房からはなして、京へ送り、三条家へ預けたのは、三条内大臣

実望の女が、武田信玄の正室であった縁故によるものであった。
松姫は、元和二年四月十六日、五十六歳で、示寂した。八王子横山町に、武田山信松院という曹洞宗の梵刹があったが、そこが、庵居のところである。
松姫の子が、京の公家（清華）の家に育ち、その裔が、比丘尼御所の尼僧となったことは、当然考えられるところである。
その尼僧が、家康をまつる日光山御宮に、大遠忌の祈禱に、はるばる遣わされて来たのは、皮肉といえば皮肉であり、ふさわしいといえばふさわしい。
狂四郎は、土下座の士を、冷やかに見下ろして、
「尼殿の眉目は、松姫の裔にふさわしく、美しいでしょうな？」
と、問うた。
「お会い下されば、生涯消えやらぬ印象をお与えすると存じます」
対手は、こたえた。
「それならば、案内いただこう」
狂四郎は、現金に、承知した。

三

日光奉行松井掃部の屋敷の離れで、武田松姫の末裔である比丘尼青華院は、ひとり、しずかに、写経をしていた。
白羽二重で包んだおもては、細く高い鼻梁とかたちのいい唇に優しさと気品があり、さらさら

と、黄蘗(おうばく)紙に金字を走らせる姿は、茅蜩(ひぐらし)の鳴きしきる眩(まぶ)しい世界の一隅で、いかにも、すずしげにみえた。

庭の置石をつたって、人影が近づいた。

二重縁に上って、両手をつかえると、

「眠狂四郎なる者、ともなって参りました」

と、告げた。

数右衛門という、常磐御所つきの寺侍であった。

「ご苦労でした」

比丘尼は、筆の手をやすめずに、かるく頷(うなず)いた。

「青華院様――」

数右衛門は、なかば当惑の面持で、

「あの浪人者を、いかがあそばされようと、なされます？」

と、訊ねた。

「殺すのです」

比丘尼は、ことともなげに、こたえた。

「えっ？」

数右衛門は、わが耳をうたがった。

朝から他出していた青華院が、どこからかもどって来ると、街道をひろって行く一人の浪人者がいるゆえ、馬で追ってつれて来るように、と命じたのである。

したがって、数右衛門は、狂四郎が、どのような稀有の手練ぶりを示したか、(よもや、一瞬にして四士を斬ったなどとは、夢にも——)知らずに、もし去なせてしまったらそなたの落度と思いますぞ、ときびしい口調で命じられたままに、追いかけて行ったのである。

青華院が、そのなよやかな容子に似ず、烈しい気性の女性であることは知っていたが、世尊に帰依する、しかも婦人の身で、人を殺すとは、いったい、どう魔がさしたというのであろう。

「青華院様！」

数右衛門が、何か言おうとすると、

「止めだては、無用です」

ぴしっ、と先手をうった。

「し、しかし、あの浪人者は、おそろしい使い手、と申されたではございませぬか？」

「だから、生かしておけぬのじゃ」

「それは……そ、そのような——」

「数右衛門」

比丘尼は、はじめて、筆の手をやすめて、忠実な寺侍を、見かえった。

「まともに闘っては、とうてい勝てぬ対手です。いささか、卑怯な手段でありますが、やむを得ませぬ。寝所の屏風に、鉄砲を仕掛けておき、あの男が、わたくしの肉をむさぼる瞬間に、撃ち殺します」

数右衛門は、息をのんだ。

比丘尼は、遠くへ目を置いて、ふっと、微笑した。すがすがしく、匂うような美しさであっ

た、みじんの残忍さもなかった。

青華院が、風魔一族であることは、常磐御所の門跡以外には、誰も知らない。武田松姫の末裔である誇りが、青華院を、風魔一族としての行動に躊躇（ちゅうちょ）させない、といえる。

もとより、一族に加えられたのは、幼い頃であり、おのが意志ではなかった。一族の手で、十年の訓育をほどこされた青華院は、どんな冷酷な振舞いにも、いささかの感情をも動揺させない女になっていた。

徳川の天下をくつがえし、天皇の治政にかえし、武田家の再興を実現させる——この子供だましの理想が、青華院に与えた一族の餌（え）であった。

「数右衛門、よいかえ。そなたは、寝所のそとで待ちかまえていて、わたくしが、殺したならば、ただちに、屍体をしまつするのです」

比丘尼は、きっぱりと命じた。

それから四半刻（しはんとき）のち、比丘尼は、翠羽（すいう）のように薄い、白い紗の寝召（ねめし）をまとうて、寝所いっぱいに張られた青蚊帳の中に、しずかに仰臥（ぎょうが）していた。

そっと、片手をのばしてみる。

枕もとの小さな衣桁（いこう）にふれる。鍍金（めっき）金具に、紫の流蘇（ふさ）がつけられてある。これを、ひと曳きすれば、蚊帳の外にめぐらされてある六曲屏風に仕掛けられた鉄砲が、轟然（ごうぜん）と火を噴く。

描かれているのは、白楽天の長恨歌（ちょうごんか）から画題をとった玄宗皇帝と楊貴妃の、華清宮中蓮華（れんげ）湯池に、香水船を泛（うか）べた図であった。

湯池の中に、白玉雕刻の魚竜風雁が描かれてあるが、その竜の目が、鉄砲の筒口であった。弾丸は、比丘尼の上に乗った男の背中へむかって、飛ぶように狙いつけられてある。

……比丘尼は、ひそかに、にこりと、北叟笑んだ。

跫音が、廊下に近づいた。

「こちらにて、お待ちであります」

数右衛門の声がして、襖が開けられた。

比丘尼は、ふみ入って来た異相の浪人者を、仰いだ。

「蚊帳の中で、わたしに、なんの業を示せと、のぞまれるのだ――とお訊ねするのは、野暮か」

薄ら笑って、

「据膳を食わせようというこんたんをうかがおう」

と、狂四郎は、じっと、見据えた。

「わたくしの始祖松姫は、その妻を身代りにしてくれた穴山彦八郎に、お礼として、操を与えて、尼僧の身で、かくし子を生んで居ります」

「…………」

「わたくしも、それにならって、強い男子の子を生みたく存じます」

「操を頂戴するような恩を、貴女に与えては居らぬが……」

「わたくしが、風魔一族であることは、すでに、かくしようもありませぬ。一族の女が、強い男子の子を生もうとこころざしていることは、先刻ご承知の筈――」

そう言って、比丘尼は、すっと、片膝たてて、寝召の前を滑り落した。そして、薄水色の二布

も——。

白磁のように白い、ふっくらと肉の盈ちた脛から太腿にかけての線が、嫩らかな繊い弧を描いて、二布の合せめへ、消えていた。

しずかに、膝をひらく……。

その内股には、暁霞に裹んだ桃の花のように、朱のいれずみが、泛んでいた。

狂四郎は、そこから視線を移して、青あたまの寝顔を眺めた。

みだらな表情はさらに刷かれてはいなかった。細い高い鼻梁とかたちのいい唇に、嫋やかな女の優しさと血の清らかな気品が湛えられているばかりである。

狂四郎は、蚊帳をはぐると、いかにも、白い肌膚の芳香に酔うたように、

「据膳を頂戴いたそう」

と、言った。

「尼法師の身なれば、いまだ、男子の手にふれて居りませぬ。優しゅう扱って欲し——」

目蓋をとじたまま、青華院はたのんだ。

——処女が、このように、おちつきはらっていられるものか？

狂四郎は肚の中で、ひややかに呟いた。

……じっとりと蒸す夜気の中で、比丘尼の肌は、ひんやりと冷たく、掌にさらさらと触れた。

狂四郎は、五指ずつを、置くべき箇所へさしのべ乍ら、神経のなかばは、周囲にひそんでいるであろう敵の、突如の襲撃に対して備えた。

ふしぎに、こちらの本能となっている直感力に、ふれて来るなんの怪しさも、物蔭にはひそん

もないことを、狂四郎は、看破していたからである。
　なぜなら、この比丘尼こそ、街道並木の、杉の梢にかくれて、鉄砲を狙い撃った者に、まぎれでいないようであった。
　これは、かえって、面妖しいのだ。
　強い子を欲する、という口上は、そのままに、受けとるわけにいかぬのだ。
　——まわりに、伏敵がないとすると？
　狂四郎は、さらに、あらためて、冴えた眸子をずうっと配ってみてから、
　——よし！　と、ほぞをきめると、その寝召の扱を解いた。
　あらわにされた裸身は、汚染ひとつなく、丘を掩うた初雪のように、ゆたかな、厚い起伏を、胸から腰へ、そして、かぐろい狭間まで、なだらかにつたわせていた。
　狂四郎は、つと、口をその胸の隆起のひとつに、寄せた。
　含んだ乳首は、青い梅の実のように、固かった。
　……愛撫は、永くつづけられるかと思われた。
　しかし、それは、比丘尼が、「……ああ！」と官能の疼きに堪えない声音を洩らしつつ、そろそろと、片手をさしのべて、衣桁につけられた紫の流蘇に、ふれようとした瞬間に、熄った。
　なんとも、名状し難い悲鳴とともに、比丘尼は、全裸の筋肉という筋肉を、ぎゅっとひき縮めると、弓のように大きく反った。そして、ぐったりと、意識を喪った。
　胸の隆起から、やおら、顔を擡げた狂四郎は、その白い腹の上へ、べっと、血まみれのものを吐きすてた。

それは、嚙みちぎった乳首であった。

廊下へあゆみ出た狂四郎は、そこにうずくまった黒い影に、

「ご用人。せっかくのお招きであったが、御馳走は、のどを通らなんだ。粗相のまま、失礼する。あとで、御主人に、あやまっておいて頂こう」

と言いのこした。

因果店

一

「旦那――」

後頭で腕を組んで、仰臥している眠狂四郎に、相宿のやくざが、はじめて、呼びかけた。

思うところあって、今市の宿はずれの木賃宿に滞在して、もう五日あまりになっていた。若い無職者が、相宿になったのは、一昨夜からであったが、無口な男で、入って来た時、挨拶しただけで、ずっと、黙りこくっていたのである。

このあたりの賭場へ出かける様子もなく、狂四郎同様、部屋から一歩も出ないでいたのである。

――凶状持ちであろう。

そうみたが、むこうが黙っている以上、こちらから話しかける興味は起らず、狂四郎は、ずうっと、知らぬ顔をしていたのである。

自身が、人の暮しに役立つ仕事を、いまだ一度もしていない男であったが、狂四郎は、遊びにんとか博奕打ちとか地廻りとかのたぐいが最もきらいであった。

、やくざは、古くは「八九三」と書いている。すなわち、足すと計二十になる。二十の数が、花札では、役にたたない数であることから、生れている。

なんの役にもたたない、博奕をなりわいとしている無職者が蝟集しているのが、関八州のうちでも、特に上州であった。

前年、川越藩が、幕府の関東取締所の改革について質問した時、勘定奉行石川主水正は、次のように応えている。

「上野、武蔵は、至って人気のむつかしい処で、百姓どもは農業を怠り、ただただ遊び乍らの暮しを利口者のように考える気風があり、いきおい生活も難渋になるところから、博奕などをし、強い者は長脇差を帯び、男伊達のような真似をし、業は薄く、奢りに長じ、次第に困窮し、そのうちには頭取をする者もあらわれ、村々の富豪などへ、徒党して押入り、狼藉などするのも、毎度のことにして――云々」

ここにも、封建の制度二百余年の弊は、掩うべくもなくなっていた。

寛文の世には、百姓一家の産は十石高であった。それが、文政の当世には、三石高に落ちていた。三石高では、稗しか口に出来ぬ、文字通りの水呑百姓である。長男ならばまだしも、次男、三男にいたっては、全くの邪魔者であった。

江戸の店に、年期奉公をする殊勝な心掛けの若者は、そう多くはなかった。

刷毛さきを左巻きに散らし、長脇差をぶち込む風体に、階級上の鬱をはらし、博奕の一瞬の運に、十年汗しても蓄えられぬ金額を夢見る――所詮は、儚い猿真似と、小ずるい盗心を抱き合せたすがたであったが、これを、仁俠という合言葉で偽装してみれば、無知で血気の水呑百姓の小

倅などには、たしかに、魅力のある世界であったろう。
ひとたび、長脇差を腰にぶち込めば、無宿になる。無宿とは、戸籍簿からその名を抹殺されることである。博奕打ちになるのは、罪を犯すことであり、当時の法律として、親兄弟までが縁座といって、刑に処せられる。そのために、まず、親から勘当してもらって、無宿となるのである。
無宿者は、当然、町にも村にも住むことはゆるされない。生きるのは、街道筋よりほかはない。
親分に、盃をもらって乾分となるか。または、その日の足まかせに、渡って行く旅にん（股旅者）になるか。孰れかであった。
その旅にんにも、楽旅と急ぎの旅にわかれていた。楽旅は、博奕修業の旅、急ぎの旅は、凶状持ちの追われる旅であった。
この若いやくざは、どうやら、急ぎの旅をしているようであった。一箇処へ、三日もひそんでいるのも、かえって、そのことを暗示している。
「失礼なおたずねをいたしますが、旦那は、なにか、むかし、大きな不幸にお遭いになったおかたじゃございませんか？」
唐突なその質問に、狂四郎は、目蓋をひらいて、旅にんを、眺めやった。
「昨日までのことは、忘れた」
冷やかな返辞は、それだった。
すると、旅にんは、鋭く光る眸子を据えて、
「じゃ――、どうしたら、忘れられるか、そいつを、教えちゃ、下さいませんか？」
狂四郎は、しかし、すぐには、こたえずに、起き上がると、燗冷めの酒を、湯呑に注いで、ゆ

っくりと、飲みほした。
それから、
「くだらぬことを、訊くな」
と、言った。
「てめえで、勝手に思案しろ、と仰言るんですかい？」
この若い無宿者の眼光は、時おり、殺気にも似た険しいものを閃かせた。
「忘れようと努めて、忘れられるものなら、それは大したことではない証拠だろう。どう努めても、忘れられないのであれば、それは、お前の生涯にとって、一番大切な事柄ではないか。墓地まで忘れずに持って行け」
「へえ——？」
やくざは、納得しかねる面持で、狂四郎の無気味に冴えた横顔を瞶めていたが、
「じゃ、もうひとつ、おうかがいいたします」
と、言った。
「ことわって置く」
狂四郎は、押えた。
「わたしは、おのれが為して来たことを弁解する奴をこのまぬ。いいな？」
「旦那！」
やくざは、かぶりをふった。
「あっしは、てめえのやったことなんぞ、言いわけをしようなんて料簡は、毛頭みじんありませ

んや。ただ、どうにも、てめえひとつの肚の中で割りきれねえ口惜しさで、気が狂いそうになっているんでさ」

「………」

「あっしは、なんにもしちゃいねえ。なんにもしちゃいねえのに、女は、子供を生みやがったんです。金輪際、生れるわけがねえのに、生れやがったんですぜ。……あっしは、すっぱりと、女をあきらめるつもりで、無宿になって、この今市から、一年前に、長い草鞋をはいたんだが、どうしても、忘れかねて、そっと、遠くからでも、ひと目見てやろう、と思って、帰って来たんです。ところが、どうだ、女は、乳のみ児を抱いてやがるじゃねえか。あっしは、あたまの髪の毛が、一本のこらず、逆立つほど、かあっ、となって……」

とめどなく口走りそうな様子に、狂四郎は、眉宇をひそめて、

「止さぬか！」

と、きめつけた。

「見知らぬ他人のわたしに、きかせて何になる！　こちらも、お前のような下種の愚痴など、きいてやる親切心は、もたぬ」

二

突然、荒々しい跫音がして、この部屋の唐紙がひき開けられたのは、それから半刻ばかり過ぎてからであった。

凶状持ちの本能で、やくざは、寝そべっていた五体を、ばったのように、はね起すと、長脇差

を摑(つか)んだ。

ふみ込んで来たのは、同じ旅にん姿が三人であった。先頭の男が、食いつきそうな面相で、やくざへ、視線を刺すと、

「鉄太郎、見つかった以上、往生際(ぎわ)は、きれいにしろ！」

と、あびせた。

「へん——」

やくざは、鼻さきでわらうと、

「ご大層に、草の根でもわけたような口をききやがるねえ。この鉄太郎が、にげかくれする男か、男でねえか、そっちがご存じの筈(はず)だぜ」

「うるせえっ！　出ろ！」

「出てやるとも！　この裏手の森の中に、阿弥陀(あみだ)堂があらあ。ぶった斬られても、生命だけは、とりとめるように、冥加(みょうが)をたのんで、待っていろい」

「よおし！　首を洗ってやって来い！」

三人が出て行くと、鉄太郎は、喧嘩(けんか)仕度(じたく)をはじめた。

狂四郎は、黙って、眺めていた。

鉄太郎は、仕度がおわると、狂四郎を見やり、視線が合うと、何か言いたそうにしたが、すぐ顔をそむけて、出て行こうとした。

「待て——」

狂四郎は、とどめて、

「遺言のきき手としては、わたしは、ふさわしい男のようだ」

と、言った。

「あっしが、くたばるものときめておいでででござんすか」

鉄太郎の口もとが、微(かす)かに歪(ゆが)んだ。

「わたしは、指折りかぞえられぬくらい、人を斬って居る。死霊にとり憑(つ)かれた者の形相は、ほぼ判るつもりだ」

この酷薄な言葉に対して、鉄太郎の眉間(みけん)を、険しい気色が走った。

しかし、喚(わめ)きを咽喉(のど)奥(おく)でとどめさせたのは、狂四郎の態度が湛(たた)えている妖(あや)しいまでの静けさであった。

鉄太郎は、眦(まなじり)を、びくっと痙攣(けいれん)させてから、ひくく抑えた声音で、

「あっしが、くたばったら、本町一丁目の、下野(しもつけ)屋へ行って、お須美という若女房に、こう伝えて頂きましょう。鉄太郎は、おめえの亭主が、男の能力がねえことを知っていた、と。だから、どこの馬の骨との密事(みそかごと)で、子供を生みやがったか——そいつを、亡霊になって、調べあげてやる、と」

狂四郎は、頷(うなず)いてやった。

鉄太郎は、頭を下げて、いったん、廊下へ出たが、また、ひきかえして来て、

「旦那——。お須美の亭主を、男の資格がねえものにしたのは、実は、このあっしなんです。十三の時に、喧嘩をして、やる気もなしに、草刈り鎌で、奴の股ぐらを、殺(そ)いでしまったんでさ。……だから、あっしは、命までもと惚(ほ)れていたお須美を、指一本もふれずに、奴にゆずって、無

宿になり、ごらんの通りの、凶状持ちになったんでさ。……てめえのしたことに、言いわけはしねえ。しかし、お須美が、子供を生みやがったことは、なんとしても、我慢がならねえ。こりゃア、わかって頂ける筈ですぜ」

そう言いのこして、鉄太郎は出て行った。

狂四郎は、しばらく、その場に坐ったなり、沈んだ眼眸を宙に据えていた。

――やくざ同士の果しあいに、おれが出ることはない。

冷酷につきはなした狂四郎であった。

しかし、血みどろな、度胸だけの斬りあいの光景が、まざまざと、思い泛ぶうちにしだいに、じっとして置かせないものが、胸裡にうごいて来た。

――あの男は、孤独のようであったな。

おのれを立ち上がらせるために、狂四郎は、その言葉を、呟かねばならなかった。

……森の小径に入ろうとして、狂四郎は、すでに、血闘の罷んでいる静寂に、急に、烈しい悔いをおぼえた。

鉄太郎は、阿弥陀堂の縁側へ、凭りかかるようにして、事切れていた。

頸根から、ぽとっ、ぽとっ、としたたっている血潮へ、目をとめ乍ら、狂四郎は、

――ゆるせ！

と、心で詫びた。

――お前の遺言は、たしかに、引受けた。

人の背丈の二倍もあろう巨きな将棋の駒の看板が、人目を惹く店であった。

三

「酒屋土倉・下野屋」と彫ってある。

質屋と書かないところに、老舗の見識をみせている。質屋は、室町の頃は、酒屋土倉と称されたのである。質屋が、質物を預かるために庫を持ち、その倉に火災よけの土を塗ったところから、土倉といった。そして、質屋稼業は、たいがい、大きな酒屋が兼業していたのである。

将棋の駒の看板は、歩でも何でもここへ入ると金になる、という洒落であった。

下野随一を誇るこの店は、ただの質屋ではなかった。朱印地・寺社領を除く一般の土地を、ひろく質にとっていたのである。公儀は、田地の永代売買を厳禁していたので、土地質入れの便法が生れたのである。

これは、質屋側としては、巨額の資金を用意しなければならなかったが、それだけにまた、儲けも大きかったのである。質入れの土地は、年貢・諸役は、質屋の負担であったが、それを勘定に入れた高利を、置主にかけていたのである。

間口はせいぜい四間ぐらいしかない店構えであったが、店内のたたずまいは、どの調度ひとつを見ても、ねうちのあるもので、奥へ通じている廊下は、御殿のように長く、数寄屋造の粋をこらしていた。

のみならず、いま、主人が、入った部屋は、これは、がらりと変った豪華な書院造りで、あきらかに違法を承知で造ったものであった。

そこに待っていたのは、これはまた、この豪華な構えにおよそふさわしくない風体の男が三人——すなわち、たったいま、鉄太郎を斬り殺して来た博奕打ちたちであった。

「ご苦労でしたな」

本卦回りだが、血色のいい、脂ぎった童顔を、にこにこさせ乍ら、下野屋は、座に就くと、やくざたちをねぎらっておいて、手を叩いた。

すぐに、女中が、三方を持って入って来た。その上には、切餅（二十五両包み）三個が、のせてあった。

「さ、約束の金子、受けとって下され」

と、最年長の者の前へ、さし出した。

「へい。頂戴いたします」

うやうやしく、押しいただこうとした時、いちばんうしろにひかえていた、まだ二十歳あまりの、小肥りの、一重まぶたの細い切長な黒瞳の小さい目が、蛇を連想させるやくざが、

「政五郎兄哥、頂戴する前に、例のお願えをした方がいいんじゃねえか」

と、言った。

「う、うん——」

政五郎が、ちょっと卑屈な上目遣いで、下野屋をうかがい視る様子に、若者は、面倒くせえ、とじれったげに露骨な舌打ちをしてから、

「旦那——。勝手なお願えでござんすが、このほかに百両、はずんでやっちゃ下さいませんか」

と、きり出した。

「百両！　それは、どういうんだね？」

下野屋は、イヤな顔をした。

「鉄太郎の野郎は、賭場の上でのいざこざから、あっしらに追われた、と思い込んで、死んで行きやした。しかし、この喧嘩は、渡世人の目から見たら、あっしらがふっかけたもので、分はねえ。親分衆の耳にきこえりゃ、あっしどもが、なぜ、盆の上のもめ事は、おんびんに、お茶の手打ちですませなんだ、と叱られやす。お上(かみ)の詮議も一段ときびしくなった折柄、縄張(なわば)りの喧嘩でさえ、両手打ちで水に流しているじゃねえか、と言われちゃ、かえす言葉がありませんや。……そこで、まあ、叱られねえさきに、この下野の親分衆に、旅にんの仁義をきって、手拭代りに、いささかの包み金を挨拶にしてえと思いやす。それには、百両は、まんざら多くはねえ、と存じます」

すらすらと述べて、じっと、下野屋を睨(にら)むように、見据えた。

この若者は、上野国佐位郡(さいごおり)の国定村の忠次というやくざであった。かなりの富農の家に生れたが、少年の頃から、手のつけられぬ小悪党ぶりを発揮し、十六の頃には、すでに、三十後家を妾にし、もう七人の娘を犯したと豪語していた。狡猾(こうかつ)で、吝嗇(りんしょく)であったが、おそろしく度胸が据わっていて、ちょっと刺戟(しげき)すればたちまち棘毛(とげけ)を逆立てる豪猪(やまあらし)のような行動力が、博奕渡世にはかなっていて、もうかなり、名を売っていた。

まともに闘っては、斬りたてられるとさとって、阿弥陀堂の縁下にひそみ、隙(すき)をうかがって、鉄太郎の腹部を突きあげて、仕止めたのは、忠次であった。

下野屋は、忠次の蛇のような視線にあてられているうちに、肌寒(はだざむ)いものをおぼえて、しぶし

ぶ、承知した。

三人のやくざを、裏口から立ち去らせて、下野屋が、居間にもどると、息子の清太郎が、蒼ざめた表情で、そこに坐っていた。

「なにか、用か？」

下野屋は、不機嫌に、訊ねた。

清太郎は、極度の昂奮を必死に抑えつつ、

「な、なぜ、鉄太郎を、殺しなすった？」

と、顫える語気で、なじった。

「下野屋は、二百年もつづいた店だ。……わしらの秘密を知っているのは、鉄太郎だけだ。鉄太郎さえいなくなれば、下野屋の看板に、傷はつかん！」

「し、しかし、鉄太郎は、あれほど好きだったお須美をさえ、わしにゆずってくれて……」

「莫迦野郎！　鉄太郎は、お前を生れもつかぬ片端者にした奴だぞ！　どんな詫び事をしても、し足りるものか！」

「……こ、ころさなくても――」

「うるさいっ！　あっちへ行け！　……お前が、片端になったために、こういう面倒な手妻も使わねばならんのだ。……下野屋の後取りは、もうできたわい。お前の役目は、これですんだようなものだ。江戸へ出て、小店でもひらいて、ひとりぐらしをするがいいだろう」

そう言いすてる父親の後ろ姿へ、じっと置いた息子の眼眸は、憎悪をこめていた。

三人のやくざが、甘い汁を吸って、北叟笑みつつ、今市を退散することは、眠狂四郎がいるかぎり、ゆるされなかった。

四

無宿の破落戸が匍い伏すにふさわしい、街道が野の中の林をくぐっている人目に立たぬ場所が、えらばれていた。

路傍の石地蔵の供物石に腰かけていた狂四郎は、三人が近づいて来ると、やおら立ち上がって、ふところ手のままで行手をふさぎ、

「お前ら、下野屋から、いくら、せしめた？」

と、問うた。

「千両箱をかついで居らぬところをみると、案外ケチな取引をしたようだな。しかし、殺したのが、股旅者なら、供養代も、そうはかからぬだろう。せしめただけ、渡してもらおうか」

その言葉のおわらぬうちに、忠次が、野犬のように吠えて、斬りかかった。

三下奴を斬る気を狂四郎が起さなかったことが、忠次の生命を、あと二十年のばした。

忠次は、股間を蹴られて、ぶざまに、宙を泳いで、悶絶した。

あとの二人も、同様であった。

夜もかなり更けてから、狂四郎は、下野屋の奥の、甘い乳の匂いのする部屋へ、音もなく、忍び入っていた。

その匂いをかぐたびに、この男の虚無でおしつつんでいる孤愁が、微かに疼く。遠い幼い日の想い出が甦るのだ。
嬰児に添え乳したまま、うとうとと、まどろんでいる、ういういしい丸髷の若女房のすがたが、蚊帳の中に、夢のように浮びあがっていた。
行燈に、かけられた水色の薄紗が、光を、幻想的なものに染めているのであった。
狂四郎は、二双屏風の蔭から、しばし、その寝姿を、美しいものに、ながめた。
跫音がして、ぬっと姿を見せたのは、下野屋であった。
蚊帳をはぐって、入って来る気配に、お須美は、めざめて、あわてて起き上がった。
下野屋は、相好を崩して、嬰児の寝顔へ、目を寄せ、
「ほう……しだいに、利巧そうな顔つきになって来居る」
満足げに、いくども頷いておいて、視線を、お須美へまわし、
「そなたも、子を生んでから、いちだんと、美しゅうなったぞ」
と、言った。
お須美は、置かれた世界に、もうなんの反抗力も喪った、影うすい風情で、俯向いた。
下野屋が、猿臂をのばして、その細いからだを抱き寄せて、横にしようとした折、襖を、ひき開けた者があった。
息子の清太郎であった。
狂四郎は、瞬間、お須美が、下野屋の腕の中で、びくっと怯えるのを、みとめた。
清太郎は、幽鬼のように、蚊帳ごしに、じっと覗き込んで、

「お須美は、わ、わしの女房だ」
と、喘ぐように言った。
「誰が、お前の女房でない、と言った？」
下野屋は、ひややかに、言いかえした。
「おやじ様！　子供が生れるまでの約束でしたよ。子供は生れたんだ。お須美を、わしに、返して、下され！」
「返してもろうて、どうする？　お前に、亭主のつとめが、はたせるのか？　お須美をよろこばせることができるのか？　お須美は、女のよろこびを知ってしもうているのだぞ」
「わ、わしは、お須美の亭主だ！　……か、かえしてくれ！」
清太郎は、譫言のように、口走った。
「お前は、江戸へ行け。小店をひらいて、一人でくらせ」
「いやだ！　江戸へ行くなら、お須美をつれて行く——」
「お須美が、ごめんだ、と言うとるわい」
「なに！」
狂四郎は、清太郎のわななく片手が、懐中にそろそろと、入るのを、見やった。
狂四郎には、次の瞬間に演じられるであろう、あさましい惨劇を、止めてやる親切心はなかった。
鉄太郎と追手たちとの果し合いを、敢えて、見すてておいたように——。

秘帖祭

一

眠狂四郎が、今市の宿（しゅく）はずれの木賃宿で、いかにも無為な日々をすごしたのは、理由があった。

京より奉幣使が、日光に到着するのを待っていたのである。

奉幣使が、下向して、東照宮に奉幣の式をとりおこない、宣命（せんみょう）を読んだのは、正保四年が始めであった。それより例となって、毎年、奉幣使が下向するようになったのである。

これは、四月十五日に日光へ下着、翌十六日の朝に奉幣、というならわしとなっていた。

ただ、今年は、例幣使のほかに、法然上人の大遠忌（おんき）にあたっていたので、京において、これをおわって、特に、初秋の佳日をえらんで、臨時の特使が下向して来ることになったのである。

例幣使は、いわゆる例幣使街道を下って来る。すなわち、中仙道を通行する。碓氷（うすい）嶺を踰（こ）え、上野国新田郡より、下野国梁田（やなだ）へ出て、同国佐野、栃木を経て、日光山へ到着する。帰りだけは、江戸へ立ち寄って、東海道を上るのである。

しかし、このたびの特使は、例幣使街道を通らず、東海道を下って来て、江戸城で、将軍家に

拝謁してから、その行列を、宇都宮街道にすすめて来ていた。
これは、禁中から、将軍家へ、天下泰平のしるしとして、唐銅(からかね)の御燈籠百基が贈られるのを、報告するためであった。
例幣使が、下向する際は、江戸からは、上野東叡山(とうえいざん)から、御門主一品(いっぽん)親王が発駕(はつが)して、日光に赴(おもむ)き、御本坊で、例幣使と出会うしきたりであったが、このたびは、臨時の特使なので、そのことはなく、ただ、公儀からは、将軍家名代と祭礼奉行が一人宛(ずつ)、したがっている模様であった。
——大遠忌に、特使が、日光へやって来た例はない。最もかたくなに、因襲に囚われている禁廷が、なぜ、今年のみ、特使を遣わして来るのか？
——特使そのものを曲者(くせもの)とみなしてもよいのではないか？
狂四郎は、疑惑をたしかめるために、腰をおちつけていたのである。
狂四郎が、今市を出て、日光に入ったのは、いよいよ、特使が、明後日御到着という布令が出たからであった。
日光入口は、松原町といい、木戸門があって、これは、常でも厳重な警備がなされていたが、特使下向の報とともに、目付屋敷から、多くの役人が詰めていた。
同時に、日光の町筋もまた、警衛の士でかためられた。
松原町から、まっすぐに、細長く、石屋町、御幸町、下鉢石町、中鉢石町、上鉢石町と、ことごとく町並みの軒をつらねている町である。警衛は、きわめて容易であった。
狂四郎は、当然、怪しまれる浪人者なので、木戸門をくぐることは、叶(かな)わなかった。
わざと、目付屋敷の裏手にある稲荷(いなり)町に入った。ここは、むかしから、七滝という深山の幽谷

から落ちる川が通っていて、しばしば洪水が激流して、町家を流亡させるので、貧しい人々しか住んで居らず、見すてられている一地域であった。その大半は、駕籠舁き人足であった。
狂四郎は、その一軒に、泊めてもらったのである。
夜が更けてから、おもて戸をたたく者があった。
因果小僧の七之助であった。
「よく、判ったな」
狂四郎が、感心すると、七之助は、にやりとして、
「蛇の道は蛇でさ」
「なにか、また、奇妙な夢でも見たか？」
「それが、先生――、こんどは、なんともはや、皆目見当もつかねえ夢を見たんでさあ」
やはり、その夢も、吉原の廓で、小格子女郎と寝ている夜半に、あらわれた。
七之助の前方へ、不意に、おごそかな行列が進んで来た。
どこか、大きなお宮の祭礼と見えた。鳥兜をかぶり、袍をまとった鉾持ちやら、獅子やら、田楽法師やら、八乙女やら、御神馬やら、鉄砲、弓、鎗やら、鎧武者やら、作猿の小童やら、伶人やら、烏帽子狩衣の鷹匠やら、ぞろぞろと、あとからあとから、あらわれて来たが、あきれたのは、それらが一人のこらず、髑髏であったことである。のみならず、金梨子地の御神輿の御上屋の上には、鳳凰のかわりに、ひとかかえもある巨きな髑髏が、陰惨な暗い眼窠を、ぱっくりとひらいていたのである。
――いったい、どこのお祭礼だ？

と、目をこらしていると、行列は、石の大鳥居から二王御門をくぐって、しずしずと甃石をつたって行き、やがて、金竜やら白竜やら獅子やら牡丹唐草やら、風神やら雷神やら、極彩色の彫物で、いっぱいに飾りたてられた門に達した。

——ありゃ、日光東照宮の陽明門じゃねえか！

そう判って、七之助は、生唾をのみ込んだことだった。

行列は、音もなく、拝殿の内部へ消えさった。その渡御のあいだ、慶雲楽が、奏せられていたことも、はっきりと耳にしている。

「どういうことでござんしょうかね。こいつは、他愛のねえ夢だ、とすててしまえば、それまでのことでござんすが……」

これまでの経験で、夢の中の場所が、はっきりとしている場合は、必ず正夢であった。

七之助は、遽かに気になり出すと、居ても立ってもいられなくなって、江戸をとび出して来たのである。

もとより、狂四郎が、日光街道をひろって行ったことが、七之助の念頭にあったのである。

狂四郎は、しばらく考えていたが、そのことに関しては何も言わず、

「奉幣使の宿坊は、たしか、浄土院であったな」

と、呟いた。

それから、七之助を見やって、

「お前に、ひと仕事たのもうか」

「へい、なんでも！」

「明後日、京から特使が、やって来る」
「知っていまさ。あっしが、追い越して来ています」
「その宿坊の天井裏に忍んでもらおうか。……特使の様子を、ずうっと見下ろしていてもらいたい」
「お安い御用です」
「但し、そこに、どんな異変が起っても、お前は、ただ、黙って、見物しているだけのことだな」
「へえ——？」
「もし、何事も起らなければ、お前の窮屈な辛抱も、無駄骨となる。……が、たぶん、起る筈だ」

二

浄土院には、例幣使のために、宏壮な貴人館が設けてあった。
特使一条実光は、光源氏の再来のように、のっぺりとした美男子で、年齢もまだ二十代なかばであった。なんの取柄もなさそうな、眸子に光を持たぬ公卿であった。
貴人の間に入ると、あくびばかりしていた。
夕食がすむと、脇息に凭りかかって、こくりこくりとやりはじめた。
まことに、特使などという役目は、退屈なもので、天子代理の格式を所有するだけに、常に、一人だけ、ぽつんとすてておかれているのであった。たまに、用事があって入って来る者があっても、次の間、あるいは三の間から、遠く、言上するだけで、用事がすめば、さっさとしりぞいて行く。

ずっと伺候している近習もいないのであった。

武家伝奏らしい人物が、次の間に入って来て、声をかけた。

「ただいま、江戸表より、公儀さしつかわしの伶人七名をひきつれて、高家品川主水、到着つかまつりました。明日、御旅所における舞楽は、将軍家のおん希望によって、東遊をとりやめ、江戸雅楽なる新曲を奏するようにとのご沙汰にございます」

「ああ……」

特使は、興味もなさそうに、頷いた。

武家伝奏役は、特使のたよりない態度を、遠くから見まもって、微かに眉宇をひそめた。

御旅所において、「東遊」を奏するのは、いわば、元旦に東天にむかって柏手を打つようなもので、神事にはかならず、付きものとなっている。それを、江戸雅楽などという、わけのわからぬ舞曲に変更するのは、ふるいしきたりをまもる公家としては、我慢のならぬことである筈である。

それを、どうでもいい、といった特使の態度は、武家伝奏役にとって、甚だ気に食わなかった。

武家伝奏役は、武家の意見を朝廷へ、朝廷の意見を武家へ執次ぐ役である。おのれの意見を言うことは許されていない。

特使が、承知すれば、反対するわけにもいかなかった。

「……では、高家および伶人たちをご引見あそばしまするよう——」

勝手にしろ、という肚を抱き乍ら、武家伝奏役は、ひきさがって行った。

やがて、寺僧の案内で、その一行が、伺候して来た。

高家品川主水は、烏帽子狩衣をまとうた老人であった。
したがう伶人七名は、舞曲を奏する時のいでたちをしていた。舞人四名は紅の紗袍、陪従三名は紫の紗袍をまとうていた。
品川主水は、うやうやしく、挨拶してから、武家伝奏役が言上したことを、くりかえした。
「よい」
特使は、頷いた。
「さり乍ら、明日、御旅所において、歌舞しはじめたる際、下卑たるもの、とご不快をおん催しあそばされるうれいもあり、この場にて、一度、検分賜わりまするよう、願い上げまする」
「それには、およばぬが……」
特使は、かぶりをふった。
しかし、品川主水は、どうしても観てほしい、と願って肯かなかった。
「では、見よう」
特使は、しぶしぶ、承知した。
早速に、陪従たちが、篳篥と高麗笛を吹きならしはじめ、そして、一人が、唱いはじめた。べつだん、「東遊」の神楽歌と、そう変った歌曲ではなかった。
舞人四名は、ゆっくりと、舞いはじめた。
特使は、眺め乍ら、
――どこも、ちがったところはないではないか。
という表情になった。

そして、そのことに不審をおぼえるよりも、あまりにも見なれてしまった舞いに、うんざりした様子であった。

……そのうちに。

舞人たちは、いつの間にか、次の間から、貴人の間に、舞台を移し、そして徐々に、上座へ迫っていた。

特使は、その無礼を咎めることもしなかった。

突如、舞人の一人が、袍をひるがえして、特使に、躍りかかった。

その敏捷な襲撃は、特使に悲鳴をあげるいとまさえも与えなかった。

あっけなく、当て落されて、がっくりと崩れるや、舞人四名は、おそろしい素迅さで、その衣服をはぎとった。

同時に、高麗笛を吹いていた陪従の一人が、紫の紗袍を、猟虎の蛮衣を、下がさねを、刺貫を、ぱっぱっと脱ぎすてた。そして特使の衣服を、身につけた。

その陪従の面貌は、特使に似かようていたのである。

悶絶した特使は、代りに、陪従の装束をきせられてしまった。

その間、今日の時間にして、ものの三分もかからなかった。神楽歌は、唱われつづけていたのである。

特使に化けた曲者は、懐中からとり出した小函をひらいて、化粧し、みるみる、特使そっくりになった。公卿が、女性のように化粧するならわしが、巧みに利用されたのである。

陪従にされた特使は、背活を入れられて、意識を甦らせるや、

「われわれに従わぬと、殺すぞ！」
と、凄い形相と語気で脅迫されて、顫え上がった。
あとは、何事もなかったように、江戸雅楽を奏し了った一行は、贋特使に見送られて、しずしずと、退去して行ったのである。ほんものの特使は、ちょうど、まん中にはさまれて、血の色を喪った顔を俯向けて、つれ去られて行った。
——うめえものだ！　電光石火ってえやつだ！
声なく感嘆したのは、天井裏に忍んでいた盗賊であった。
——無料で見物させてもらうには、もったいねえ芸当だぜ。……それにしても、こんな大芝居が演じられると看破した旦那の眼力には、今更おそれ入谷の鬼子母神だ。……へん、高家品川主水が嗤わせる。うまく化けやがったぜ、夢買いの爺め！
七之助は、贋特使を見下ろして、にやっとした。
——さて、お前さんがた、こんどは、眠狂四郎の出番となるのだぜ。筋書が、どんでん返しになるんだ。覚悟はいいか！

三

駕籠舁き人足の家で、寝そべっていた狂四郎は、七之助から報告を受けると、ただ、
「そうか」
と、頷いただけであった。
しかし、次の日は、朝おそくまで寝ていたし、起き上っても、べつに出かける様子もなかった。

七之助は、気が気ではなかった。
「旦那、御神事の御行列は、浄土院から、とっくに出ましたぜ」
「うむ――」
「もしかすれば、陽明門をくぐっちまったかも知れませんぜ」
「唐門から、裾をひき乍ら、拝殿へのぼっている頃だろうな」
「ど、どうなさるんで？」
「どうもせぬ」
「贋もの野郎、何かしでかすんでござんしょう？」
「やるだろうな」
「じゃ、ぐずぐずしちゃいられませんぜ。旦那の出番じゃありませんか」
「おれの出番は、もうすこしあとだ」
「あとって？」
「特使は、午後になると、こんどは、たぶん、二代将軍家の御霊屋に、参廟する筈だ。おれの出番は、そのあとということになる」
しかし、午後になって、陽が傾いても、一向に、狂四郎は、腰をあげる気配をしめそうとはしなかった。
七之助は、ひそかに、警衛の士の目をかすめて、山内に忍び込み、八十の坊舎の露地をくぐって、慈眼堂をまわって、御霊屋をのぞむ杉木立の中にひそみ、贋特使が、たしかに、そこへ詣でるのを見とどけた。

息せき切って、戻ってみると、狂四郎は、依然として、そこに、のうのうと寝そべっていた。
もう、日は昏れかかっていた。
「旦那っ！　いってえ、どうするんです？　贋もの野郎、御霊屋から、退っちまったじゃありませんか！」
「そうか。よかろう。御霊屋に入ってから、時間をかけたろう」
「半刻も出て来やがらねえ。あっしは、てっきり、旦那が、さきまわりして、忍び込んで、待ち伏せているものと思っていたんですぜ」
「おれは、忍びの術は知らぬ。たとえ、知っていても、面倒だから、そんなまねはせぬ」
「じゃ、どうしようってんです？」
「棚からぼた餅、という方法もある。……静かなること林のごとく、迅きこと風のごとき兵法でやろう」

四

夜が明けたが、しばらくは、世界は、濃霧につつまれていた。
その白い闇の中で、慈悲心鳥が、啼いた。
やがて――、嶮崖の一端が、浮きあがったとみるうちに、そこから、白い幕があげられるように、するどい絶壁のふたつの山容が現われた。
男体・女貌――前二荒と呼ばれる山であった。
足尾峠二里の嶮路を踰え、馬返村という小名から、漸々登って来た河原路である。

もうよほど深山に入ったところで、地形せまくふさがって、畑打ちの地も見当らない。
山路は、急流に架けた危橋を巡ったり、桟道を辿ることになる。
すでに、殺生禁断、女人牛馬結界の境である。
霧を追いはらって行く風は、秋のものであった。
旗すすきが、その風に、美しい穂波をそよがせる。
およそ十数個とかぞえられる人影が、一列になって、霧の中から、歩み出て来た。里山伏の装であった。
兜巾、篠掛、白ふさ袈裟、たっつけ装束であった。
黙々として……、土俗が深沢の女人堂と呼ぶ地蔵堂の前を過ぎようとした。
瞬間――。
片側の杉木立の蔭から、黒い珠様のものが、投じられた。
行列の中程の路上で、ぱっと火を噴いて、白煙を濛と舞わせた。
山伏たちが、そこを空けて、前後に、さっと退きざま、一斉に、杖に仕込んだ白刃を抜きはなった光景は、美しいばかり鮮やかな動きであった。
渠らの不覚は、そのことごとくの眼眸を、杉木立にそそいだことであった。
地蔵堂の屋根に伏せていたひとつの影が、その隙をとらえて、風のように、山伏の一人めがけて、跳躍したのである。
狂四郎に、まぎれもない。
猛禽が襲うようにして、捕えたのは、最年少の山伏であった。

すでに、読者も、この少年とは知己である。
風魔三郎秀忠——一族の頭領の地位に即いている少年であった。
少年乍ら、頭領たる資格は充分に、残忍酷薄な気性においても、飛翔(ひしょう)の業前(わざまえ)をはじめあらゆる武技においても、抜群であったが、狂四郎の奇襲に対しては、なすすべもなかった。
狂四郎は、少年の頸根へ、無想正宗を、ぴたりと当て乍ら、
「老人！」
と、呼んだ。
しんがりにいる山伏が、ゆっくりと近づいた。一昨夜、高家品川主水に化けていた夢買いの老人は、またしても、眠狂四郎の出現に、いまは、無表情を保つ余裕もうせていた。
わるあがきしないだけの度量はあるが、あまりにも、この異相の浪人者には、してやられすぎていた。
老人は、憤怒をかくそうとせずに、睨(にら)みつけた。
狂四郎は、冷やかに薄ら笑って、
「こちらの所望する品は、申上げるまでもないだろう。昨日、贋特使が、二代将軍家の御霊屋から盗みとったしろものだ。たぶん、秀忠公の正体をあきらかにしている、台徳院様御事蹟(じせき)、とでもいった秘帖(ひちょう)だろう。秀忠公が、実はまことの嫡流にあらず、その母西郷局(さいごうのつぼね)が前夫の子であり、二代を継ぐべき真の秀忠公こそ、風魔三郎殿であった、と記した秘帖を、日光東照宮をつくった大僧正天海が、ひそかに、御霊屋にかくした、という事実は、白河楽翁公によって、あきらかにされている。お手前がたを敵にまわしたこの眠狂四郎が、それぐらいのことを知らないでは、喧

嘩にならぬ」
「それを横取りして、なんとする？」
「横取りはせぬ」
「…………」
「老人――。お手前がたにとっては、なくてならぬ大事の品かも知れぬが、どちらの側にも立っていない世間の人間から見れば、有害無益の、人さわがせな毒紙だ。……この場で、焼きすててもらうのを、世間の人々を代表して、素浪人が、のぞむのだ」
「…………」
「この若い頭領の生命と、色あせた反古と、どちらを大切に思うか――これは六十歳の年輪をもってすれば、思案の余地もない筈。いかがだ。老人？」
「眠狂四郎！」
老人は、満腔の憎悪をこめて、応答した。
「これをもって、風魔一族の死命を制したと、うぬぼれるな！」
「あいにくだが、老人――、この無頼者は、十年来の宿敵とたたかって、これを斬っても、勝利のよろこびを知らぬ。それが、唯一の取柄なのだ」
――水際立ってらあ、おれの、御主人は！
胸のうちで叫んだのは、火玉を投じた杉木立の中の七之助であった。
夢買いの老人は、少年に、懐中から、ひと綴りの古帖をとり出させて、少年自身の手で焼きすてるように、促した。

その時すでに、狂四郎は、白刃を、腰に納めていたが、面々のうち、一人として、これを狙う気配をしめさなかった。ただの野盗の群ではなかったのである。

凄絶（せいぜつ）の決闘は、後日のことであった。

鶴と少年

一

三尺さきも見えぬくらい、視界は、全くとざされていた。
といって、夜は明けていたのである。濃霧が天地をつつんで、暗黒の闇（やみ）は、そのまま、純白の闇にひき継がれていた。
眠狂四郎は、その中で、白樺（しらかば）の木に凭（もた）れて、動かずにいた。
肩に、胸に、四肢に、受けた刀傷が、疼（うず）いていた。深手ではなかったが、流した血潮が、からだを疲れさせていた。
敵は、あやめもわかたぬ暗闇で跳躍して来たので、頭数はさだかでなかったが、およそ、四、五十名はいたと思う。
しかも、一人一人が、異常の修練を積んだ強者（つわもの）であった。
これだけの強敵の群を対手（あいて）にしたのは、狂四郎と雖（いえど）も、はじめてであった。
――ここが、おれの終焉（しゅうえん）の場所か。
そう覚悟して、闘った。

あと半刻も、闘っていたならば、たしかに、致命傷を蒙って、仆れたに相違ない。

こちらが、なお闘う力をのこしているにも拘わらず、刀を引いて、去ったのは、敵の武士道によるものであった。

闇の中から、

「引け！」

鋭い下知の一声があった。

それから、

「眠狂四郎、よく、たたかった。われら一族の手練者を、十二名も殪して、なお、たじろがぬ。あっぱれと申すべきである。その手負うた身が、それなり、そこで果てるまでに力尽きているか、あるいは、歩いて、下界へ去る余力をのこしているか、孰れかは知らぬ……。このたびの戦いは、これまでとする」

その言葉が、のこされたのであった。

狂四郎は、それに対して一語の返辞もしなかった。

音もなく、渠らがひきあげるのを待って、襤褸のような痩軀を、この白樺の木に凭れかからせて、指一本も動かすのが億劫なままに、茫然と、自失していたのである。

襲撃を覚悟の上で、のぼって来た日光山中であった。

標茅原、という。あるいは、戦場原、赤沼原とも唱う。

中禅寺別所の辺を去って、湯元入口まで、およそ三里の行程の、渺茫たる平原である。

永徳元年、小山右馬頭義政、その子若犬丸が、南朝へ心を通じて鎌倉の下知に叛いたので、常

陸の小田讃岐守入道父子が、先手をうけたまわって、小山の城々を攻め落した。

しかるに、嘉慶二年にいたって、古河の住人野田右馬助が、囚人一人を搦めて、鎌倉へつれて来た。囚人が白状するところによれば、小田讃岐守入道は、いかなる所存か、小山若犬丸を討たずにかくまっている、という。

鎌倉方では、管領上杉中務大輔朝宗を大将として、小田讃岐守入道の城を攻めた。入道は、城を退いて、野州男体山へ楯籠った。なにぶんにも、そこは、高山で、力攻めにも落し難かったので、鎌倉方では、謀を以って、海老名備中守を使者として、免許の旨を伝え、出城して来るように促した。

入道は、はじめは、疑ったが、備中守の再三にわたる説得に、ついに折れて、山砦を出た。

そこを鎌倉勢は、包囲して、襲撃した。入道は、家臣ら百余名とともに、標茅原を血に染めて闘い、悉く討死した。

いまもなお——。

討死の日にいたれば、何処からともなく、血みどろの甲冑武者の列が、出現して、粛々として、平原を横切って、男体山の方へ消え去る、と噂されている。

——おれが、骨を埋めるにふさわしい場所なのだが……。

霧がうごき、霽れるけはいをしめしはじめたので、狂四郎は、よろよろと立ち上がった。

とたんに、眩暈がして、ぐらっと、よろめいて、白樺の枝を摑んだ。

——麓まで戻り着くことは、叶わぬかも知れぬ。

それならば、いっそ、奥へ入って、人知れぬ場所で、果てた方が、おのれらしい、と思える。

男体山の後方、太郎岳のふもとには、狩籠湖というのがあるそうな。上世、山中に人を害する毒竜が住んでいたので、霊神が、この湖底へ、狩り籠められたのだ、という。

奥白根と前白根のあいだには、魔湖、というのがある。四辺が水際より、深きことは数尋あるので、誰も近づく者はない、という。

いずれも、この眠狂四郎が、屍を投ずるにふさわしい湖ではないか。

狂四郎は、濁りまなこをひらいて、うすれて行く霧の彼方を、透かし見やった。

と——。

旗すすきを割って、すすす……と、目ざめた一匹のけものが、こちらへ向って、奔って来るのが、眺められた。

おそろしい迅さであった。

たちまち、狂四郎から三間とへだたっていない地点へ迫って、ひょいと、首をもちあげた。

人間であった。しかも、まだ、ほんの十か十一の——。

けものと見えるほど、頭髪は、蓬のようにみだれていたし、皮膚はまっ黒で、目ばかりが、きらきら輝いていた。

しかし、その眸子の光は、ふしぎな美しさに澄んでいた。

じっと、狂四郎を瞶めていたが、すっと、首をひっ込めた。

それからまた、ひょいと、のぞいた。その動作が、いかにも、愛敬があった。

狂四郎は、微笑した。

すると、少年は、ひと跳びして、草地へあらわれた。よごれた。つんつるてんの布子をまとっ

ていたが、腰には、身なりにふさわしくない飾りのある小刀を帯びていた。
この時、空に大きくはばたく音がして、二羽の大鳥が、すうっと、少年のかたわらへ、舞い降りた。
丹頂の鶴であった。
にわかに、狂四郎の目には、おんぼろ姿の少年が、神秘(くしび)なものに映った。

二

少年が、近づいて来ると、ひと番(つが)いの鶴もまた、ゆっくりと、あとに従った。
少年は、一間あまりの地点で立ちどまると、顔をしかめた。
「くさい！」
「………」
「血が匂うている」
狂四郎は、頷(うなず)いてから、
「傷に利く薬草を知らぬか？」
と、訊(たず)ねた。
少年は、すたすたと歩み寄って、狂四郎の左手くびが、ぱくっと肉をひらいているのをみとめると、ごくっと生唾(なまつば)をのみこんで、仰いだ。
「風魔の兵(つわもの)らと、斬り合ったのじゃな？」
「よく判るな」

「去年も、十人ばかり、さむらいが、この原までのぼって来て、みんな斬り殺された。……あそこに、わしが、墓をたててやった」
少年が、指さしたところに、同じ大きさの石が、整然と並んでいた。
「そのさむらいたちは、みんな、右手の小指の爪を、黒く染めていたろう？」
「うん——。小父さんも、あのさむらいたちの仲間か？」
「いや。わたしは、ちがう。それが証拠に、斬り殺されずに、こうして、生きのこって居る」
「手当をして進ぜる、ござれ！」
少年は、大人びた口のききかたをして、歩き出した。
狂四郎は、無想正宗を鞘ごと抜いて、杖にした。
一歩毎に、凄まじい疼痛が、全身を呻かせた。
狂四郎は、去る年、土方縫殿助一党と凄惨きわまりない血闘を演じ、文字通り満身創痍となり乍ら、妻美保代をせおうて、渋谷の丘陵をのぼった日のことを、思い泛べた。
死を迎えた美保代から、
「貴方の母さまのお墓へ、おつれ下さいませ」
と、願われて、そうしたのである。美保代は、狂四郎が、重傷を受けた身であることを見てとる感覚を、うしなっていたのである。
背負うて行ってやろう、と言うと、美保代は、「……うれしゅうございます」と、紙のように白い顔を、微笑ませたものであった。
——そうだ！　おれは、あの時、美保代を背負うて、一歩一歩、大地をふみしめて行った。堀

川に沿うた道を辿り、青い麦畠の中を過ぎて、丘の斜面をのぼって行った。おれは、ただの一度すらも、足を停めはしなかった。なんの苦しさもおぼえなかった。……頂上の、母の墓のかたわらの、櫨の根かたへ、そっと、美保代をおろしてやった時、おれは、はじめて、呼吸というものをしたものだった。……美保代は、すでに、死んでいた。

人間が、体力を超えたふしぎな働きをなし得る、とさとったのは、あのおりであった。

あのおりにくらべれば、これしきの疼痛など、ものの数ではない。

狂四郎は、おのれをはげまして、少年のあとを、跟いて行った。

霧の散った原野には、初秋の朝陽がさしそめて、大小ふたつの影法師を、地に長く匍わせた。

山鳩が、高く啼いた。

むささびらしいけものの速影が、前方を掠めた。

「あそこじゃ。わしの小屋は――」

少年は、立ちどまって、彼方の森を指さした。

「父は、木樵か？」

「うんにゃ。わし一人で、住んでいるのじゃ」

「一人で――？」

「うん」

「いつから？」

「三年前から――」

「父御や母御はどうした？」

「父者は知らん。母者は、わしを置いて、風魔の館へ行ってしもうた」

これは、仔細がある模様であった。

……それは、意外にも、ちゃんとした建物であった。玄関もついていたし、部屋には畳も敷かれ、床の間もついていた。茶亭といってもいいたたずまいであった。

狂四郎を、部屋に横たわらせておいて、少年は、きびきびとした動作で、立ち働いた。

湯をわかしたり、薬草をすりつぶしたり、白い布を裂いたり……。

狂四郎は、庭で、餌をついばんでいるめおと鶴を眺め乍ら、

――平和というのは、こういうものか。

と、思っていた。

手当がおわると、少年は、

「何か喰べるか？」

と、訊ねた。

「ご馳走になろうか」

「江戸から来た人なら、おいしゅうないぞ」

しかし、少年一人でととのえた食膳にしては、これは、おどろく品数があった。

鳥の醢、栗子、漬とうがらし、湯葉、そして焼いた岩魚。

狂四郎が、食事を摂っているあいだに、数羽の駒鳥が、飛び入って来て、少年の肩や膝にとまった。

少年は、自分の喰べている平索麪を、こまかく噛んで、駒鳥たちに、与えた。

いかにも美しい、なごやかな眺めであった。
「そなたの母者のことだが……」
狂四郎は、問うた。
「なぜ、そなたをすてて、風魔の館へ行ったのだ？」
少年は、駒鳥のあたまを、指さきで突いて、お辞儀を教え乍ら、
「敵を討ちたかったのであろ」
「敵を――？　そなたの父御は、風魔一族に殺されたのか！」
「わしの父者は、ご公儀の、ほら、あの――空のことを調べる役人だったのじゃ」
「ほう――天文方であったのか」
狂四郎も、高輪台地にある天文観測所をおとずれたことがある。
天文学は、八代将軍吉宗の時世から、盛んになり、享保三年には、渾天儀が作られ、また測天儀も、吹上御苑中に置かれた。
日出の時限や最高度を測ったり、群星の運行を調べたりする天文学開発のために、洋書輸入の禁をゆるめられていた。将軍家治の頃には、麻田剛立によって、地動説も、その理を明らかにされていたし、帆足万里は、銀河の存在を示し、恒星を説き、太陽が恒星の一にすぎないことを明らかにし、太陽系、黒点、日食、月食の理を述べている。
科学は、遅々とではあるが、封建の世にも、進歩していた。
「天文方であったそなたの父御が、どうして、風魔に殺された？」
「父者は、この家に、一人で住んで、空を眺めていたのじゃ。……そうしたら、風魔が来て――」

少年は、説明しかけて、去って行くと、板戸を開いた。
そこは板敷きの観測室になっていた。
毀(こわ)れた望遠鏡があった。狂四郎も、高輪の観測所で見たことのあるグレゴリー式反射望遠鏡であった。
「これを、こわして、父者を殺したのじゃ」
風魔一族としては、この日光山中にやって来て、何やら、怪しげな観測をはじめた公儀役人を、黙過しておくわけにいかなかったのであろう。
「……それで、母御は、そなたを連れて、ここへやって来て、敵討ちを決意した、というわけか?」
「うん――」
「しかし、幼いそなたを、どうして、ここへ置きすてて行ったのか?」
「母者は、言うた。……もし、母がもどらなんだら、男の子じゃから、ひとりで、生きて行け、と言うた」
狂四郎は、とたんに、はっとさとった。
思い出したのである。

三

七八年前のことである。
京都の祇園(ぎおん)祭、大阪の天満祭とともに日本三大祭のひとつである山王祭に、神輿(みこし)行列が、半蔵

門より内廓に入って、将軍家上覧を仰ごうとした際、突如、異様な乗物が、麹町通りから疾駆して来て、行列の先頭を奪った。

それは、駕籠の形をしていたが、三倍以上の大きさで、輿のように、双轅を腰から出し、四つの車をつけて、六頭の馬にひかせている馬車であった。

あっという間に、上覧所の前に達するや、駕籠の天蓋をはねて、一人の士が、顔をのぞけ、

「天文方、田鶴誠十郎、つつしんで言上つかまつります。そのむかし、牛車があって、天子、公卿、僧侶が常用でありしも、後に、輿に押されて絶え、方今、乗物と申さば、人足が舁ぐ駕籠のみ。なんぞ、その知恵の稚きことか。牛車を作らば、やがて、これを、駿馬につけて、疾駆することを発明してしかるべきに、輿に代え、駕籠に化すとは、西洋文明におくれること二百年、と申してもはばからず。……このたび、田鶴誠十郎が試作せるこの馬車こそ、新しき時代の乗物と申すべきでございますれば、上様におかせられましては、御試乗あそばされまするよう、願いあげたてまつる」

だがしかし、田鶴誠十郎の画期的な発明も、閣老のとりあげるところとはならず、かえって、不届の振舞いとして咎められ、百カ日の閉門という結果をみた。

田鶴誠十郎は、憤激して、致仕を乞うたが許されず、閉門が解けても、天文観測所へ出仕しようとしなかった。

若年の頃から、奇矯の言行が多く、人々を絶えず驚かせていたが、稀代の頭脳の持主であることは、公儀もみとめるところであったので、評定所でも、たいがいのことは見て見ぬふりをして来たのである。

その妻もまた、似た者夫婦で、一風変っていて、良人の言行に合せて、常に恬淡として、極度の貧乏ぐらしにあまんじていた、という。
――この子の父母は、田鶴誠十郎夫婦であったのだ。
狂四郎は、合点した。
風魔一族は、田鶴誠十郎の頭脳を欲して、味方にひき入れようと、くどいたに相違ない。誠十郎は、断乎として、その誘いをしりぞけたために、一命を落した。
――誠十郎は、この家で殺されず、風魔一族の館まで、拉致されたに相違ない。そこで、その妻は、もしや良人が生きているのではあるまいか、と一縷の希望を抱いて、館へ行った。……しかし、それきり、戻らなかったのは？
狂四郎は、少年に、
「そなたは、母御が、もどって来る、と信じているのか？」
と、訊ねた。
少年は、かぶりをふった。
「死んだのじゃ、きっと――」
父母が奇矯の血を継いで、この凄蕭たる荒原の果てに、鳥やけものを友として、たった一人でくらしているこの少年を、狂四郎は、あらためて、深い感動をもって、見戍ったことだった。

四

狂四郎は、十日ばかり、その家ですごした。

ある朝、少年に、

「風魔の館が、どのあたりにあるか、知っているか？」

と、訊ねた。

「知っている」

「案内をしてくれぬか？」

「小父さんは、風魔と斬り合うためであろう。近づいたら、こんどこそ、殺されてしまうよ」

「いや、心配はいらぬ」

「でも、また斬り合うのであろう？」

「いや、こんどは、闘いはせぬ。平和の使いだ」

狂四郎は、笑った。

午まえに、狂四郎と少年は、家を出た。

中禅寺温泉は、八湯ある。標茅原を過ぎ、湯元まで三里。湯室は四月に開かれ、九月にとじる。これは、日光町方の支配である。

ここを過ぎ、湯平より西北の間に、金精沢と唱える渓間に、小径がある。

その険隘の路を伝って、一里半ばかり行くと、峠に至る。金精峠、という。

往古何ものが納めたか、銅にめっきした男根をもって神体としている小祠が建っている。男女交合のかたちをした古木の根株も、納めてあるという。

この峠は、上野・下野の国境に接して、西の方へ下るまで、四里の嶮路で、上州沼田に近い里に出る、といわれているが、いまだ旅人は、踰えていない。

狂四郎と少年が、小祠の前に立った時、不意に、一人の男が、影のように、行手をさえぎった。
一瞥したただけで、風魔一族と判った。
狂四郎は、鋭い睥睨を、冷やかな眼眸で受けて、
「軍師白頭巾殿にお伝え頂こう。眠狂四郎は、幸か不幸か一命をとりとめて、田鶴誠十郎の一子誠太郎をともなって、参上いたしした、と」
「何の用か？」
「誠十郎夫妻の墓へ、その子を詣でさせてやりたく存じたまでのこと。他意はない」
「ここで、お待ち願おう」
男は、風のように立ち去った。
丹頂の鶴たちが、あとを慕うて飛んで来たのは、その時であった。
四半刻あまりして、ふたたび、忽然として姿を現わした男は、少年のかたわらに立つ優雅な番い鳥を見て、大きく目を瞠ったが、
「案内つかまつる」
と、先に立った。
雪をいただいた峰巒を、前面にのぞみ乍ら、険しい山道を、およそ半刻あまりも辿ってから、狂四郎と少年が、みちびかれたのは、尖岩にかこまれたひとにぎりほどの平たい場所であった。
そこに、二基の墓碑が、建ててあった。一基は完全なる円形をして居り、もう一基は三日月のかたちをしていた。これは、逝った夫婦の、それぞれの希望であったに相違ない。

「誠太郎、父御と母御が、ここにねむっている」
狂四郎が、告げると、少年は、さして感動もなさそうに、「うん」と頷いて、墓前にすすんで、両手をあわせた。
あっけないくらい、かんたんに祈りおわると、少年は、
「赤たちよ」
と、鶴を呼んだ。
「ほら、あそこにも、ここにも、お前らの好きな苦桃(にがもも)があるぞ」
岩間のところどころに、豆よりも小さな赤い実が、丈のひくい木に、いちめんに群がっているのであった。
めおと鶴は、少年に言われてはじめて、ゆっくりと近づいて、実を喰べはじめた。
黄昏(たそがれ)がふかまった頃あい、狂四郎と少年は、金精峠へ戻った。
黙々として、送って来た男は、そこで立ちどまると、
「軍師よりのお言伝でござる。それなるわっぱを、われら一族が見すてておくのは、その丹頂の鶴とともに在(あ)るからでござる。われら一族の守護神たる日光権現の神鳥を、ひとり、手なずけたのは、そのわっぱのみでござれば、遠くより眺めているよりほかはござらぬ」
と、言った。
男は、去った。
狂四郎は、ついに、風魔一族の館を見とどけることなく、ひきかえしつつ、中空を舞って行くめおと鶴を仰ぎながら、誠十郎夫婦がそのすがたになって、わが子を守っているような気がした。

浮世問答

一

「旦那様！」

てまえが、めぐり会うたよろこびに、声をはずませて、お呼びかけしたのは、左様、喜連川宿はずれで、水際立ったお腕前をお示しになるのを拝見してから、もう早いもので、二十日あまりが過ぎて居りました。

鹿島から舟路三里をこえて、息栖に出て、ここから香取に渡ろうと、舟が出るまでの一刻を憩むために、舟宿に上ったところが、広間の片隅の衝立の蔭に、仰臥なされたお姿があったのでございます。

薄目をひらいて、てまえをごらんになりましたが、何も仰言らないのは、いつもの通りでございました。

「大層お顔色が、おわるいようにお見受けいたしますが、お加減でもいけませぬか？」

蒼白いお貌は、見なれて居りますが、こんなにやつれたご様子は、はじめてのことでございました。

やおら起き上がるのも、いかにも億劫(おっくう)げで、たしかに、ただでさえの痩身(そうしん)が、さらに痩(や)せて、肩のあたりは、いたいたしいくらいでございます。

「また死にぞこなったよ、薬屋」

ご自身をあざけるようにおわらいになって、

「死にぞこなうたびに、なにもかもが面倒になる」

呟(つぶや)くように仰言(おっしゃ)いました。

「江戸へおかえりなさいましては？」

そう申上げると、

「江戸には、おれを斬りたい若者たちが待っている。斬られたくはないから、また、斬ることになる。……同じことのくりかえしだ。あの世へ、いったい、どれだけの頭数を、送り込めば、こっちの番がまわって来るか、だ」

「旦那様ほど、たくさんの敵をお持ちになり乍ら、平然と、日をすごしておいでのおかたは、ほかにありませぬ。これは、旦那様が、不死身の証拠ではございませぬか」

「おれをつくった神の迂闊(うかつ)さは、手頃の死に時を与えなかったことだろう。陽(ひ)の光は、曲った孔(あな)を照らさぬ、という古い諺(ことわざ)があるが、幾十人もの生命を奪った男が、白昼公然と大道を大手を振って歩いているのだ。嗤(わら)わせるではないか。……それとも、最も悲惨な往生際を呉れるために、神は、どこかで、薄笑っているのかも知れぬ」

「…………」

「薬屋——」

「はい」
「おれには、人生が永すぎるが、お前は、どうだ？」
「螢二十日に、蟬三日、と申すではございませぬか。こうやって、旅ぐらしをして居りますと、あっけないくらい、一年が、羽根がはえて、飛んで行ってしまいます」
「あとに、何がのこる？」
「なにも、残りはいたしませぬが……、まあ、せっかく生れて来たのでございますから、育ちついでに生きて行こうと思っております」
「いい料簡だ。こっちも、そうさとりたいところだ。独立して懼れず、世を遯れて悶ゆるなし、か」

立ち上がられたご浪人さんは、
「江戸へもどろうか」
遠くを見る眼眸をなさいました。
息栖から香取へ、舟で二里。香取から神崎まで、さらに四里の舟路でございます。

利根川も、ここらあたりは、大層広い川幅で、七八町もあるように見えて、ところどころに、洲崎島嶼も点在いたして居ります。葦、真菰がおいしげって、水鳥を飛び立たせ、まことに渺茫とした眺めになります。

舟は、月の出に誘われて満ちて来る潮水に乗って、走ります。

ご浪人さんは、終始黙然と、冴えた秋の月かげの下に浮いた景色へ、目をやっておいででした。更けるにつれて、客たちは、つぎつぎに、横になってしまい、てまえも失礼して、やすませて

頂きましたが、ご浪人さんだけは、その姿勢をついにかえようとはなさいませんでした。

てまえが、ふっと目をさました時は、もう夜がしらじらと明けていて、神崎明神の森が、霧間に、ほのかに浮びあがって居りました。両堤の草むらからの虫の声が、澄みわたっているほど、静かな、美しいあけぼのでございました。

てまえは、首をまわしてみて、そこに――依然として、ご浪人さんが、同じ姿勢でお坐りになっているのを見出(みいだ)して、胸がひきしまるような思いがいたしました。

うとうとともなさらなかったお顔でございました。

まばたきもせずに、じっと、夜明けの世界にひらいておいでの眼眸は、むしろ、愁いをおびて、美しいものでございました。

――一夜中、何を考えておいでになったのか？

てまえのような薬屋風情(ふぜい)には、読みとるべくもありませぬが、陰惨な不幸をせおうたお人の、孤思なされるお姿には、いたましい暗さよりも、いっそ、すがすがしいまでの静かさが湛(たた)えられていて、これは、なぜともなしに、頷(うなず)けることでございました。

てまえが、そっと起き上がりますと、ご浪人さんは、淡々(あわあわ)とした空を渡って行く雁を見送り乍ら、

「薬屋、夜というものは、ふしぎな作用をする」

「と申しますと？」

「さからって、目をさまして、眺めている者に、忘れていたことばかりを記憶の中へ甦(よみがえ)らせてくれる」

「左様でございますか」

「そうして、それらは、ひとつも、不快な思い出ではない。みんな、なつかしい。その時には、悲しかったり、苦しかったことがだ。母親が亡くなって、わたし一人が、歯をくいしばり乍ら、一人で、埋葬したことさえも、まるで幸せな思い出のように、甦った」

「…………」

　てまえは、ご浪人さんの横顔を、この時ほど、ほれぼれと見入ったことございませぬ。まことに、いかなる不運にも堪えぬいて来た、自身に対しても厳しい心意気が、冴え冴えと滲み出て、男らしい表情だったのでございます。

二

　神崎から、木颪、大森、白井を経て、釜ヶ原という淋しい原野に入ります。見わたすかぎり、薄が、秋風になびき、野飼いの馬が数十頭も、悠々とあそんで居り、西の彼方に、空や水、水や空ともさだめなき果てに、富士の峯が、すっきりと、そびえているのも、曠々として、心をうばいます。

　この道は、東海道、中仙道とちがって、行徳までの十里あまり、旅人の影も稀で、草に覆われて居ります。人家の煙もはるか遠く、林に入れば、郭公が啼き、小川のほとりを行けば、鷺の白毛がうちなびいて、景色はあくまで、明るく静かなのでございました。

　こうした淋しい野道をひろって行くのに、いかにも、ご浪人さんの黒の着流し姿は、風物のひとつに溶けて、鮮やかでございました。てまえに絵心があれば、写しておきたい印象をのこしま

す。

しかし、同時にまた――。

前にも申上げたごとく、いつどこから、どのようにおそろしい危険がとび出して来ないとも知れぬ、という不安は、払いきれませぬ。このお人の宿運のようなもので、こういう人影稀な場所で、不意に、襲いかかられるのを待っておいでなのだ、と思いたいほど、これは、きまって、てまえが、目撃させられる光景なのでございます。

「薬屋――」

前方へ目をお置きになり乍ら、

「そう心配するものでもないぞ」

と、仰言いました。

こちらの肚（はら）の中を、透視したように、言いあてられるのには、馴れているてまえも、少々あわてて、

「なにがでございます？」

空とぼけてみせますと、

「そこいらあたりから、槍（やり）か鉄砲でも、狙（ねら）っているのではないか、と思っているのであろう」

「そりゃア、まあ……旦那様というおかたは、そういう危ない道を、いつも歩いていらっしゃいますので……」

「この野は、ひろびろとして、明るい。このわたしのような無頼者までが、歌のひとつでもつくろうか、という気になる。……人間の闘争心は、こういう場所では起るまい」

「そういうものでございましょうか」
「どういうものか、暗いところや、怪しげな地点で、人間は、闘争心をそそられるようだな。闇とか、山中とか、あるいは、最も人間くさいにおいのこもっている屋内とか——」
その通りでございました。
野を通り過ぎるあいだ、行手をふさいだのは、いっぴきの小兎だけでございました。
行徳へ着いたのは、黄昏(たそがれ)もふかまってからでございました。
ご存じのように、行徳は、下総(しもうさ)方面から江戸入りする番船の河岸場(かしば)で、大層にぎわって居ります。浜一円は塩田でございますし、鵆(ちどり)の名所でもあって、その見物人も集まって参ります。
河岸場には、海手から来る船と江戸から出る船をとり調べる番所が設けられてあります。
俗に、出女に入鉄砲、と申しますね。この警戒は、山越えでは、箱根の関所。海越えでは、ここでございます。
小名木(おなぎ)川に沿うて、右に大名屋敷、左に商家がならんで、道は、海に通じて居ります。
その途中で、ご浪人さんは、ふと、一軒の小さな店に、目をとめて、立ちどまられました。
それは、
「とぎ師」
という看板をかかげている研屋(とぎや)でございました。おそろしく薄穢(うすぎた)ないむさくるしい店で、とても、秘蔵の差料など、預ける気など起させませぬ。
しかし、なぜか、ご浪人さんは、ちょっと考えていらっしゃいましたが、すぐに、店へ入ってお行きになりました。

あとで、その店のあるじからきいたのでございますが、あるじもまた、ご浪人さんとめぐり会うのをねがって、もし店の前を通りかかられたら、足をとどめて頂く品を、軒下に示していたのでございます。

それは、太い孟宗竹の、花筒でございました。

秋の花が、投げ入れてありましたが、これは、あるじの風流を見せるためではなく、実は、ひそかに、おのが研ぎの腕前を誇るためであったのでございます。

研長、といえば、曾ては、江戸随一を称われた名人でございました。それが、生来の偏窟な気性が、年齢とともに烈しくなったのと、一人の悪性の女に溺れたのが禍いして、日本橋の店をたたんで、夜逃げをしたのは、二年前でございました。

研長がみがきあげた刀は、その時の光沢がすこし鈍そうにみえるのが特長でございましたが、実は、それがすばらしい斬れ味を意味する凄みの色だったのでございます。

三年あまり前、ご浪人さんが、深夜の大通りで、さる一刀流の達人と立ち合って、一瞬の間に、その双腕を刎ねたことがございますが、それを物蔭から目撃していた研長は、歩き出されたご浪人さんを呼びとめて、

「稀代の業物とお見受けしましたが、たびたび衂らせたために、いささか、なまっているように見受けられます」

と、言いかけたものでございました。

「どうして、判る？」

ご浪人さんが、訊きかえされますと、研長は、

「お構えになった時、刀身が月の光を吸いませなんだ」
と、こたえたと申します。
そこで、ご浪人さんは、研長に、無想正宗をお渡しになったのでございました。
一月あまり置いて、おたずねになると、研ぎあげられて居りました。
観れば、佩びておいでになった時よりも、かえって、地鉄の澄んだ色が、沈んでいるように思われました。
無想正宗の特質は、地鉄の洗練された華麗な色、雪を欺く焼刃の光にございます。錵や匂いの、飾らずして言語に絶せる、敢えて技巧を衒わずして自ずから絶妙なる——いわば、自然に生れた典雅さが、無類の魅力となって居るのも、その色と光が、皎々たる秋月の冴えを示しているためでございました。
研長は、ご浪人さんの微かな不審の面持を見てとるや、いかにも無愛想な調子で、
「裏に竹藪がござる。孟宗の筍を切ってごらんなされ。二つになれば、研ぎ直して進ぜましょう」
と、妙なことを申しました。
ご浪人さんは、藪に入って、二尺ばかりの太いのをえらんで、一閃なさいました。
両断された筍は、もとのままに、そこに生えて居りました。
そればかりか、半年後に、ご浪人さんが、おとずれてごらんになると、そのまま生長して、みごとな太竹になっていたのでございます。
すなわち、軒下にかけてある花筒が、それでございました。てまえは、去りがてに、能く眺め

ましたが、筒の中ほどに、まさしく一本の横筋がついて居りました。正宗無双の傑作を、名人が研ぎあげて、稀世の使い手が斬った——その跡なのでございました。

三

こんな長い顔が、どうして生れたか、と唖然とするくらいの馬面が、研長のものでございました。しかも、醜男の上に加えて、酒のせいか、双眼はどんよりと濁り、肌膚はひからび、無精髭はのび放題で、なんともむさくるしい風体でございました。

「どうした、研長。元気か」

ご浪人さんが、笑いかけても、無愛想にむっつりして、頭を下げただけでございました。

ご浪人さんは、お腰から、無想正宗を鞘ごと抜いて、お渡しになりました。

研長は、それを抜きはなつや、遽かに別人のように、鋭い眼光を注いで居りましたが、

「五十人も斬られたか」

と、呟くように、言いました。

「研いでもらおうか」

ご浪人さんが、仰言いますと、研長は、頷きましたが、

「気分が乗らぬと、仕事をしたくないので、日を頂かねばなりませんが……」

「いいだろう。……ところで、なぜ、こんな行徳などで、店を出している？」

その返辞は、まことに奇妙なものでございました。

店までつぶさせるほどの悪性の女が、いつまでも研長の女房になっている筈もなく、この行徳

から、水路を、江戸へ脱出しようと企てたのでございます。手形も持っていなかった女は、すぐ捕えられて、番所へ曳かれて行きました。しかし、そこは、悪性女の狡猾さで、舟役人を色仕掛けでたらしこみ、まんまと、その囲いものになったのでございました。

女は、この店から、つい、目と鼻のさきのところに、妾宅を持って、のうのうとくらしているのでございます。

いや、女を忘れられぬ研長の方が、妾宅にちかいこの通りに、店を出した、と言った方が正しいのでございました。なんとも、ふしぎな偏窟者の執念と申すべきでございました。

「女をとりもどしたいか、研長？」

ご浪人さんが、お訊きになりました。

「とりもどしてもらうために、お手前様があらわれるのを待っていたのです」

苦笑されたご浪人さんは、

「よかろう」

と、承知なされて、無想正宗を把ろうとなさいました。

すると、研長は、かぶりをふって、

「これは、置いて行かれませい」

と、押えました。

「なぜだ？」

「この刀は、斬り癖がついて居ります。あいつ、悪女じゃで、お手前様に、つい、斬られるかも知れぬ。険呑じゃ」

「では、かわりの差料を——と言いたいところだが、あいにく、ほかの刀は、帯びる気がせぬ」
そう仰言って、ご浪人さんは、店をお出になりました。
「旦那様、大丈夫でございますか？　もう、ここは、江戸でございますよ」
てまえが、不安にかられて、申しますと、薄ら笑いを浮べられて、
「まきぞえをくわぬように、はなれていることだ、薬屋」
と、おこたえでした。
そうなると、意地でも、おそばに添うていなければなりませぬ。
おさい、という悪性女の妾宅は、意外に、地所をひろくとった、門構えの、庭もひろい屋敷でございました。
「旦那の役人は、抜荷の片棒でもかついで、ふところをこやしているようだな」
そう仰言り乍ら、ご浪人さんは、無断で、木戸を通って、庭にお入りになりました。てまえも、怕ごわ、あとにしたがいました。
「ほう——これは、都合がいい。旦那もお見えになっている」
ご浪人さんは、お笑いになり乍ら、座敷へむかって、足をはこばれました。
恰幅のいい、五十前後の武士が、仇っぽい女の酌で、酒をのんで居ります。ただの舟役人とばかり思っていたのに、これは、あきらかに、中川御番衆でございました。すなわち、番所担当の、旗本大身だったのでございます。江戸の海手の監視でございますから、目付として、三千石以上の旗本が、交替で、任務についているのでございます。
これでは、研長も、手も足も出ないわけでございました。

「何奴だ、おのれは？」

当然、無断の侵入者に対して、御番衆は、目をいからせて、咎めました。

「亭主研長にかわって、その女房をつれもどしに参った者」

「たわけ！　素浪人づれが、直参三千石大槻新兵衛に刃向うか！」

「いや、刃向う所存はない証拠に、こうして無腰で参上した。但し、お手前をあしらう腕前ぐらいは備えていると承知されたい」

「なにっ！」

旗本は、佩刀をひっ摑むと、庭へとび出して参りました。

すると、ご浪人さんは、なぜか、

「お手前の業物の長さはどれくらいか、うかがっておこう」

と、お訊きになりました。

「菊一文字備前則宗二尺一寸――みごと、受けてみるか！」

抜きはなちざま、旗本は、大上段に、ふりかぶりました。

この時、ご浪人さんは、袖垣にたてかけてあった庭箒を手にされていました。

「お手前をあしらう腕前のほどをごらんに入れる趣向だが、もし首尾よく、お手前に舌を巻かせたならば、その女を、黙ってお渡し頂こう」

「小ざかしい！　その箒で、それがしの顔を掃くとでも申すのかっ！」

「左様な無礼は、はたらき申さぬ。まず撃ってかかられたい」

「おうっ　痩せ胴をまっ二つにしてつかわすぞ！」

おめきざま、旗本は猛然と、斬りかかりました。
ご浪人さんは、一歩退りつつ、竹箒をひょいとさし出されました。
旗本は、斬れ味あざやかに、その先を、すぱっと、両断いたしました。ご浪人さんの手には、竹の柄だけのこりました。
「いかに！」
旗本は、誇らかに、叫びました。
「お手数だが、もう一度、斬りかかって頂こう」
ご浪人さんは、にやりとなさいました。
「うぬがっ！」
催促されて、かっとなった旗本は、こんどは、胴をねらって、すりあげのひと薙ぎを唸らせました。
瞬間、ご浪人さんの竹柄は、目にもとまらぬ迅さで、対手の小手を、丁と撃ち据えたのでございます。
ごろん、と地べたへころがった菊一文字を、ご浪人さんは、竹柄のさきで、引寄せると、ひろいあげ、すばやく、目釘を抜いて、柄をはずしました。
そして、刀身と竹柄を、ならべてみせたのでございます。
「いかがだ、御番衆。この趣向は——？」
まことに、おどろくべきことには、刀身と竹柄は、一分もちがわぬ同じ長さだったのでございます。

ご浪人さんの予告通り、旗本は、あっと舌を巻いて、言葉もありませぬ。
「では、女を頂戴して参る」
ご浪人さんの声音は、明るいものでございました。
それから、半刻ばかりのち、てまえは、お伴をして、小名木川に沿うて、江戸の中心地へむかって居りました。
「旦那様、あんな悪性女を、とりもどしてやったところで、また、研長は、逃げられるのではありませぬか」
「逃げ出させた方がよいのだ」
「どうしてでございます？」
「女がそばにいる限り、うつつを抜かして、仕事をせぬであろう。逃げ出されたら、また、わたしにとりもどしてもらいたいために、刀を研いでくれる筈だ」
そう仰言って、ひくく、声をたてておわらいでございました。
そのお腰には、竹光を入れた大刀が、おとし差されていたのでございます。

髑髏盃

一

江戸の町人たちの社交場である湯屋の二階は、今日も、にぎわっていた。
殊(こと)に、ここは、日本橋の魚河岸(うおがし)が近い。場所柄、客の大半は、威勢のいい魚河岸の兄哥(あにい)たちである。
朝市夕河岸の、目のまわる殺気立った忙しさのほかは、昼間は、問屋と小揚(こあ)げの若い者たちには、なんの仕事もなかった。懐中があたたかければ、吉原か、岡場所へふっとんで行ってしまうが、前借のかさんだ手輩は、やむなく、湯屋の二階か髪床で、ひまつぶしをする。
恵比寿講の来たこの季節、河岸は、一年中で一番活況(かっきょう)を呈している。大小の鯛に羽が生えて飛んでいたし、秋刀魚(さんま)、鰯(いわし)も、続々と入荷していた。秋刀魚は、初鰹(はつがつお)とともに、最高の人気魚であった。秋刀魚は、鰶とも書く。魚河岸をお祭さわぎにするので、祭魚といったのである。
ひと風呂あび乍(なが)らも、なお秋刀魚の臭いをつけた兄哥たちは、江戸っ子を代表する気象の持主たちである。
ただの荒くれではない。

粋な連環をやっている者たちもいる。
「うしろ影、とはどうだ。いのちをかけた男が、後朝の別れの袖をふりきって、すっとおもてへ出たのを、じっと見送る女心だあ。淋しい秋の雨が降ってらあ。さあ、どうだ、あとをつけな」
「ふうん、うしろ影、か。……よおし」
坐りなおして、腕を組んでいたが、ぽんと膝をたたいて、
「できた！」
「できたか」
「目をとじて、耳かっぽじって、きけぞかしだ。いいか。……うしろ影、をば見送る目から、道のぬからぬ雨が降る。とはどうだ。雨が降る、だぞ。さあ、つづけな」
「雨が降る、か。雨が降る夜の首尾するまでは、幾夜ひでりの草の様――」
「草のよう、か。こいつは、厄介だな」
あまり頭の切れ味のよくなさそうな若い衆が、しきりに、苦しがっていると、むこう向きに寝そべっている黒の着流しの浪人者が、
「草のよう、なる根を掘り葉掘り、鎌をかけてはきいてみる」
と、言った。
「うめえ！」
一人が、さけんで、のぞき込み、
「なんだ、眠狂四郎の旦那じゃありやせんか。いつ、江戸へおもどりなすったので――？」
「昨日だ」

むっくり起き上がった狂四郎は、物倦(ものう)げな眼眸(まなざし)を、脇でさしている将棋へ、投げた。

「えっへん、おっほん、王手飛車取り、桂馬が勇む、たづな把(と)るのは色若衆、そこのけそこのけ、はいのはい、だ」

「畜生、二股膏薬(こうやく)をはりやがるとは、風上に置けねえ野郎だ」

「へへん、王手をついて、飛車びさのお目通り、ささ、もそっと近こう近こう、だ」

「けっ、くそ。こっちへ、ひとまず、下ってやらあ。金が、うしろについているぞ」

「それが、越後縮みの金かくし、ってやつだ。ちか頃、褌(ふんどし)も高くなったのう」

「野郎、褌をかきやがったか。ここは、長考一番——」

「やいやい、こんなところで、思案しやがると、湯ざめがすらあ」

「うるせえ。兵は国の大事、存亡の道なり、あに、思案なげ首たらざるべけんや、って六韜(りくとう)三略にあらあ。よし、どうだ、こう歩を上がって、雑魚(ざこ)で鯛を釣るか」

「おっと、どっこい。角道この道、通しゃせぬ。先の出ようで、直(すぐ)にもなれば、曲る気になる雁の群れ、ってんだ。ざまあみろ。……一難去ってまた一難だろう。泣っ面(つら)に蜂(はち)が螫(さ)す、痛む目に突き目、転べば糞の上、ってこのことだあ」

狂四郎が微笑し乍ら、

「その金のあたまへ、香車(やり)を打つのだな」

と、教えた。

「おっ、なある——ありがてえ。やっぱりおさむれえだ。槍(やり)くりがうめえや。……やい、どうだ、松公、ぐうとでもほざいてみろ、形勢、掌(てのひら)を反(かえ)すがごとし、ってな——軍師がついている

ぞ、軍師が」

この時、階段をどたどたと鳴らして、一人の若い衆が、かけ上がって来た。

「松、政、仙っ！　大変だ！」

血相変えて、喚(わめ)いた。

「親分の家が、灰になるぞッ！」

「なにっ？　なるぞとはなんだ？　唐変木め、半鐘が鳴ってりゃ、こんなところで、将棋なんぞ、さしているけえ。何を寝ぼけていやがる」

「そ、そうじゃねえ！　高札場に、ど、どこの、どいつが立てやがったか、親分の家を、灰にするって、書いた札を、さらしやがったんだ！」

「なんだと！」

若い衆は、一斉に、つッ立ち上がった。

二

高札とは——。

控、条目、禁令を公布の目的を以(も)って、板及び紙に記したるものをいう。衆庶を制する札の義、市場、要路の最も人目を惹(ひ)きやすきところに高く掲示す。タカフダ、コウサツと訓(よ)む。

官報、公報、新聞などのなかった時代の、唯一の公儀掲示であった。

江戸府内では、常盤橋(ときわばし)門外、筋違橋門内、浅草橋門内、麴町半蔵門外、芝車町（札の辻）及び日本橋の六箇所が、大高札場であった。

例えば、それには——。

石垣を築き、柵をめぐらし、屋根を設け、檜の組格子に、高札は掲げられていた。

橋の南詰の西側、罪人の晒し場とは、大通りを隔てて相対した。

就中、日本橋は江戸の中心であり、一番重要な高札場であった。

定

きりしたん宗門は累年御制禁たり、自然不審成者これあらば申出べし、御ほうびとして

ばてれんの訴人　銀五百枚

いるまんの訴人　銀三百枚

立かえり者の訴人　同

同宿 幷 宗門の人　銀百枚

右之通下さるべし、たとい同宿宗門之内たりとも、申出る品により銀五百枚下さるべし、かくし置き他所よりあらわるるに於いては、その所の名主五人組迄一類共に可被行罪科者也

奉行

といった禁令とか、毒薬や贋薬種の売買を禁ずるとか、鉄砲所持の者を知っていれば密告せよとか、あるいはまた、地方の新田開墾にあたって江戸の大町人たちは出資せよとか、役人に私曲非行があれば、遠慮せずに訴訟せよとか、等々。

この高札場に、いつの間にか、夜のうちに、奇怪な張札が打ちつけられていたのである。

告示

奸商　松前屋儀兵衛

此者儀、公儀御禁制外国交易を為し、抜荷買いを以って魚腹をこやしたる奸物にて、一時は小伝馬町牢屋敷に入牢致せしも、牢屋役人に賄賂して、病気といつわり、品川の溜預けとなるや、非人頭車善七を懐柔して、死去せしものの如く装いたる奸物にほかならず。あるいは、公儀において、この罪状、知りつつも、知らぬふりをしている疑いあり。すなわち、紀綱荒廃、賄賂公行のあさましさ極まれりと言うべし。依って、吾人は、天に代りて、この奸商を誅戮するものなり。来る満月の宵その家屋を焼きはらい、その首を刎ねることを、ここに公に表して、約束するもの也。

髑髏盃

松前屋といえば、日本橋随一の魚問屋であった。

当時、魚問屋は、本小田原町・本船町・同横店・安針町に新場・本芝・芝金杉を加えて、七組合があり、そのうち六十八店が印鑑問屋と称して、浦賀番所通航魚船の取調べを司っていたが、松前屋が、その実権を摑んでいたので、勢いは凄まじいものであった。

松前屋が、前科者であることは、誰も知らなかった。十年前、長崎奉行の推挙によって、江戸へあらわれて、魚問屋をひらき、たちまち、幕府膳所へ日々の用魚を納入する仕事を一手に引受けたのであった。

それまでは、魚上納は輪番であった。

松前屋は、魚納屋役所を支配する賄頭にとり入り、俗に謂う活鯛屋敷の生洲も蒲鉾台も焼台も、おのが掌中に摑んでしまったのである。

それだけの、大規模な魚揚げを、やってのけたのである。

したがって、松前屋をひそかに憎む魚問屋が尠なくなかった。その一人が、このような悪戯をしたのかも知れない、と考えられる。
狂四郎が、蝟集した人々のうしろに立った時、役人が、その張札を剝がしていた。
――髑髏盃か。松前屋は、むかし、海賊船に乗っていたのか。と、狂四郎は、想像した。海賊たちが、船出する際、髑髏盃で、くみかわして、義盟を誓う、ときいたことがある。
髑髏盃と称するところをみれば、むかしの海賊仲間かも知れない。
「おっ、旦那は、ここだ」
若い衆のはずんだ声がして、歩きかけた狂四郎がふりかえると、湯屋の二階にいた連中をひきつれた、恰幅のいい町人が、ゆっくりと近づいて来た。
陽焼けした逞しい皮膚と、自分は松前屋であると名のる声音が、潮風にさらされたものであるのをさとった狂四郎は、
――やはり、海賊だったか。
と、頷いた。
「ご高名は、かねてより、おうかがい申して居りました。つきましては、是非一献さしあげて、お願い申上げたいことがございます。ご足労下さいますまいか」
言葉遣いは鄭重だが、大きくひらいた双眸で見据える表情は、傲っていた。
「わたしは、酒は、一人で飲むことにしている。用件なら、ここで、言ってもらおう」
「往来の立話では、乾分どもの手前もあり、松前屋の沽券に、かかわりますゆえ――」
「ごらんの通りの素浪人だ。礼儀をわきまえて、おのが行動をしばっては居らぬ。そちらさんの

沽券にかかわるなら、はじめから、声をかけてもらうまい」

言いすてて、狂四郎は、歩き出そうとした。

「眠狂四郎様。お礼は、百両さしあげようと存じて居りますのですよ」

松前屋は、どうだ、おどろくがいいと言わぬばかりに、肩をそびやかした。

狂四郎は、しかし、ふり向きもせず、

「百両か。……百両あれば、そこいらの破落戸を、四五十人あつめられよう。お前さんの用心棒には、その方が、ふさわしいのではないか」

と、こたえていた。

両国まで歩いて、並び茶屋のひとつ「東屋」に入り、衝立の蔭に、仰臥した狂四郎は、天井を仰ぎ乍ら、さりげない口調で、

「わたしに、何か用か？」

衝立のむこうへ、声をかけた。

松前屋と別れて、歩き出して、しばらくしてから、尾けて来る者があるのを、さとっていたのである。

衝立をまわって姿をみせたのは、もう七十あまりかとも受けとれる、しなびた老爺であった。

「わしが、髑髏盃だ」

そう名のった。

坐る動作ものろのろしたもので、病み上がりのように、いたいたしくも見えた。

狂四郎は、眉宇をひそめて、

「お前さんが一人で、松前屋に、讐を復そうというのか？」
「そうじゃ。わし一人でやる！」
「………………」
啞然としたことであった。わざわざ日時まで明示しておいて、この老爺が、誰人の援けもなしに、火を放ち、首を刎ねるというはなれ業を、はたして、なし得るものであろうか。
老爺は、暗い眸子を据えて、
「お前様は、松前屋にたのまれなすったようじゃが、もし引受けなさるなら、わしの復讐は、水の泡となろう」
「松前屋には、ことわった」
「それは……わしにとって、有難いことだ。しかし、お前様のことだ。いつ、どう気が変って、松前屋に味方せぬものでもない。……もし、わしの復讐をさまたげない、と約束して下さるなら、お礼はたんまりさせてもらう」
「真珠や珊瑚の、つまった葛籠でも呉れる、というのか――」
「おのぞみなら――」
「裏切られた恨みを、その年齢まで持ちつづけるとは、相当な執念のようだな」
「お前様は、わしを何歳だとお思いだ。わしは、まだ五十に足らぬのだ。このように老いさらばえたのも、彼奴――松前屋のおかげだ。彼奴は、わしを裏切ったばかりか、訴人をして、小伝馬町の牢屋敷へ抛り込み、牢名主に責め殺させようとしやがったのだ」
牢内の制裁というものは、想像を絶するものがあった。

茶樽、と称して、牢内の水桶を二人して持上げて、囚人の背中に落す刑。きめ板、と称して、長さ二尺幅五寸ばかりの板で、背中を乱打する刑。詰蓋、という、便器の蓋で、二の腕を打ち折る刑。汁留、と称して、数日間、汁そのほかの塩気のものを一切給与しない刑。落間というところへ昼夜立たせ、寒中は四斗樽にたたえた冷水の中へ頭を漬けたり、裸にして、からだ中へぬか味噌を塗りつけたり、大小便を食わせたりする刑。その他、およそ人間の考え得るあらゆる残忍行為が、ことごとく、牢名主の行う制裁に網羅されていたのである。

　牢内における囚人の戒護、規律は、牢名主及び牢名主の指名する十一人の牢役によって行われる。したがって、牢名主は、牢内規則違反の名目の下に、愛憎に任せて、どんなむごたらしい制裁でもできたのである。

　この男は、それをやられた、という。

「あいにくだが、わたしは、他人から無理強いに、約束させられることは、何事も好まぬ。つむじが曲っている。……復讐は、結構だ。しかし、世間に、これ見よがしに公示して、さわぎを起させて得意がるやりかたは、いかがなものか。あまり、ほめた性根ではないようだ」

「それほど、わしの恨みは、深いのだ！」

「勝手にやることだ」

「見て居るがいい」

　老爺は、去った。

　——あの老いぼれ一人に、どうして、超人業が演じられるというのか？

狂四郎には、判らなかった。

三

その宵が来た。
狂四郎は、松前屋の店を見下ろす火見櫓上にいた。
剛腹をもって鳴る松前屋であった。店は平常通りひらいて、しっとりとただよう夕靄の中に、自由に人を出入りさせた。
しかし、よく視れば、店さきはもとより、往還の彼処此処、そして屋根の上にも、警備の人影が、油断なく目をくばっている。屋内には、勿論、手ぐすねひいた連中が詰めているに相違なかった。
彼方の木戸、此方の木戸にも、町方見廻りの同心の姿が見える。どうやら、松前屋の店を中心にして、町奉行所の、大がかりな捕物出役がなされた様子であった。
町奉行所としても、あれだけ、人を食った、憎々しい張札をされては、もし万一のことがあれば、面目失墜するので、念のために捕物陣をはったのであろう。
「旦那――」
撞木を握っている火消し人足が、かたわらから、声をかけた。
「こりゃ、茶番になるんじゃござんせんかねえ」
とたんに、その言葉をあざ嗤うように、人足の頭上にさがった半鐘が、じゃん、と鳴った。
自分が撞木を当てもしないのに、突如として鳴ったので、人足は、あっとなって、首をまわした。

松前屋周辺をかためていた人々も、一斉に、はっとなって、この火見櫓をふり仰いだ。

狂四郎だけが、なぜ、半鐘が鳴ったかを、さとった。夕靄を截って、黒い鳥影のようなものが、飛んで来て、半鐘に当るや、生きもの宛然に、もとの方角へ、翔け去ったのである。

それが、予告であった。

同じ黒い鳥影が、一直線に、吸い込まれるように、松前屋の店内へ、とび込んで行くや、また、ひゅっ、と宙をもどって行った。

それは、鮮やかに、店内の大黒柱を、まわったのである。まわりつつ、八方へ、目晦ますほどの煌めきをもった小さな火玉を、散らしたのであった。

火玉はたたき伏せるには、あまりにも、数が多く、しかも、落ちたところへ燃えつく勢いは、おどろくほどの迅さと烈しさをもっていた。そればかりか、蝗のように、跳びはねたのである。

ほどこすすべはなかった。

すでに、一月あまり雨をみない。空気の乾燥しきった季節であった。

はじけ跳んだ火玉は、まず、障子と襖を、紅蓮と化した。

「いけねえっ！　三十六計だあっ！」

「天井と壁を、ぶっ毀して、くいとめろっ！」

「荷をかつぎ出すなら、河岸道だぞっ！」

喚きつつ、奔りまわる人々は、予告通りの襲来に、すっかり怯気づいていた。

奥から駆け出て来た松前屋が、

「莫迦野郎っ！　まごまごするなっ！」

と、呶鳴りつけたが、その声に耳をかす者はいなかった。完全に浮足立っていた。

松前屋自身も、逆上して、どうしていいかわからなかった。

濛っ、濛っ、と噴き巻いていた煙が、突如、巨大な怪物のように、たつまき状になって、ぐわっと、外へ躍り出た時には、殆どの人々は、逃げ出してしまい、松前屋だけが、火焔をくぐって、奥へ奔っていた。

町内の半鐘が、摺り半で打鳴らされていた。

刺子をひっかかえて、頭の家へすっとんで来た町鳶が、たちまち、手に手に、梯子、刺股、大溜籠、釣瓶をひっ摑んで、

ありゃ、りゃ、りゃあっ

と呶号をあげ乍ら、地を蹴って来た。

火消屋敷からは、銀塗太鼓型の纏を先頭に、鼠色の頭巾に同色の革羽織をまとったがえんが、隊列を組んで、くり出して来た。

しかし、もはや、松前屋の店を救う手段はなかった。

火消人足たちが、おのが組の纏を、その屋根に立てることは、不可能であった。

凄まじい音たてて、真紅の火柱が裂き立つ屋根に、纏のかわりに、一個の人影が出現した。

それは、なかば狂気した松前屋であった。

「髑髏野郎っ！　おれの首を刎ねてみろっ！　やいっ！　刎ねられるか！……ここまで来てみやがれっ！」

絶叫は、燃える轟音にさえぎられ、きれぎれになって、宙へ撒かれた。

それに応えて、三度び、黒い鳥影が、火焔に照らされた宵空を翔けたのは、次の瞬間であった。
それは、あやまたずに、松前屋へ、飛びついた。
刹那——松前屋の首は、その胴をはなれて、宙へ刎ねあがった。
黒い鳥影は、歓喜ではばたくかのように、飛びもどって行った。

四

紅蓮舌が、松前屋の店とそのまわりの十軒ばかりの大店をなめつくして、灰燼に帰せしめて、闇の中に消えてから、およそ一刻あまりが過ぎた。
もう人影も絶えた河岸道を、とぼとぼと辿って来た一人の老爺が、とある舟着場の石段を降りて、小舟へ乗ろうとすると、
「おい、髑髏盃」
と、声がかかった。
老爺は、きっとなって、常夜燈の蔭から出現した浪人姿を、透かし見た。
「あざやかであった、復讐ぶりは——」
「…………」
「あの手練には、こちらも、腕を拱て、見物しているよりほかなかった」
「…………」
老爺は、艫綱を解くと、棹で石垣をひと突きした。
狂四郎は、ふところ手で、眺めやり乍ら、

「こちらが、お前さんの復讐をさまたげなかったのは、お前さんが使った武器を、ひとつ、こちらにも、見舞ってもらいたいためであった。どうだ、髑髏盃?」

老爺は、こたえなかった。

しかし、舟が、岸から三間あまりはなれた瞬間、老爺とは思われぬ敏捷(びんしょう)な動作で、それを投げとばして来た。

狂四郎は、同時に、小柄を放っておいて、飛来したそれを、抜きつけの峰撃ちにした。老爺のからだがのけぞって、高い水音をたてるのを見とどけておいて、狂四郎は、地べたに落ちたそれをひろいあげてみた。

それは、楕円形の一種の利鎌(とがま)であった。海のむこうの熱帯の島で、土人が使う凶器で、ぶうめらんという。空へ投げ、飛鳥を断ると、また確実に手もとへ舞い戻って来るのであった。

この凶器を使う手練を備えていたからこそ、老爺は、堂々と、高札場に宣告しておいて、復讐をなしとげたのである。

狂四郎は、それを、川面の上へ投げてみた。しかし、手もとには還らず、老爺に殉ずるように、小舟のそばへ、ひらひらと落下して行った。

女心記

一

　秋の陽ざしは、空気が澄んでいて、からだに透るほどあかるいにも拘わらず、どうして、さびしく感じられるのであろう。
　わたくしは、ひとり、座敷に坐って、縫物の手をうごかし乍ら、小さな庭の樹や石を、ときおり見やって、四季に映ったじぶんの心を思う。
　わたくしのいまの気持は、ちょうど、このあかるくさびしい秋の陽ざしに似ている。この小さな家に起き臥しするようになってから、いろいろの出来事があった。わたくしにとっては、生きていられないほどの悲しい惨めな出来事も、いまは、遠いものになった。わたくしの心にもからだにも、もう、殆どその傷痕はとどまっていない。ひとり寝の臥牀の中にも、悪夢となって、あらわれることもない。
　思えば、この半歳のあいだに、わたくしの心もからだも、季節とともに、すっかり変ってしまったような気がする。
　あの方にはじめてお会いしたのは、春もまだ浅い頃であった。

武部仙十郎殿のお宅の書院で、お会いした時、わたくしは、ただ、父の身を護衛してくれる強いお人を、という気持でいっぱいであり、あの方が姿をお見せになると、その必死な目でしか、眺めなかった。

わたくしの心の中に、いつの間にか、あの方が入って来たことに気がついたのは、皮肉にも、あの方が、あやまって、わたくしの父を斬った、と報らせにおいでになった日であった。

わたくしは、父を殺した人を、すこしも、いかりも憎みもしていないじぶんに、とまどった。

居間で、ひとりで、茫然としているわたくしの脳裡には、あの方の冷たい眼眸や、彫のふかい昏い横顔や、抑揚を現わさぬ声音や、もの静かな、しかし鋭さを含んだ挙措が、きれぎれに、消えたり泛んだりしたものであった。

その夜、わたくしは、死ぬよりもつらい、言おうようもなくあさましく、むごたらしい光景を、父になりすました伯父と母とによって、目撃させられた。いつの間にか、あの方が、わたくしの背後に在った。

その瞬間、わたくしは、じぶんをすくって下さるのは、このお方を措いて、ほかにはいない、と直感したことであった。

わたくしは、母が自害するであろう、と予感したが、敢えて、止めようとしなかった。わたくしは、母のなきがらから、ひとにぎりの黒髪を切りとって、家を出て、この家へ来たのであった。

花曇りの、しっとりと、空気がおもい日であったのを、はっきりとおぼえている。

あの方は、わたくしのやつれはてた顔をごらんになると、暗い面持におなりになった。

あの方は、また一人、不幸な女をつくるのか、とお思いになったのだ。

あの方は、冷たく仰言った。

「貴女をひき受けなければならぬ気持も責任も、わたしにはない」

わたくしには、そう仰言らねばならないあの方のお気持が、よくわかった。

わたくしは、もうその前に、武部仙十郎殿から、きいていたのだ。

「そなたは、狂四郎の亡き妻と、生き写しと申してよいほど酷似している」と。

美保代さま、と申されるそのおひとの、不幸な短い生涯のことは、そのおり、うかがったし、また、あとで、立川談亭殿からも、くわしく、語って頂いた。

……わたくしは、この家へ来てから、幾日か過ぎた宵、われからはげしい意志をあらわして、あの方の胸の中をもとめて、いざり寄った。

わたくしは、さけぶように言ったことだった。

「ちさは、明日のことなど、考えてはおりませぬ！」

でも——。

あの方は、わたくしを、お抱きにはならなかった。

顔をそ向けて、すっと立つと、出て行っておしまいになった。

わたくしに少女の頃からの、ふしぎな霊感がなかったならば、この悲しみには堪えられなかったであろう。

わたくしは、十二三の頃から、じぶんの未来を、はっきりと観るようになっていた。

——じぶんは、一人の男子を恋い慕うために、あらゆる苦しみに堪えるように生れついているのではなかろうか？

とはできなくなっていた。

ある日、ふっと、そう思った。そして、その日から、わたくしは、その想いから、のがれることはできなくなっていた。

十七八になると、わたくしは、その男子のすがたを、思い泛べようと、どんなに一心になったことだろう。父母をはじめ、家の人々は、わたくしが、しばしば、半刻も一刻も、黙って、遠くを観る様子をつづけているのを、いぶかったものであった。わたくしは、わたくしを恋させ、苦しめるであろう、男子を必死になって、宙に描こうとしていたのだ。

わたくしは、決して、それがむだな努力とは考えなかった。思い泛べることができないのは、じぶんの霊感が足りないのだ、と思っていた。

もし、そのひとに出会うまで、思い泛べることはできないとしても、出会ったならば、ひと目で、はっと判るに相違ない、と考えたし、たとえ、そのひとがどんなおそろしい素姓や性格の持主であろうとも、じぶんはいのちを捧げるだろう、と誓っていた。

あの方に、はじめてお会いした時、わたくしの霊感は、はたらきはしなかった。父をすくいたい必死な願いのかげに、霊感はひそんでしまっていたのだ。

そうであった。印象としては、あの方の暗い風貌（ふうぼう）や態度は、とても怕（こわ）いものであった。

ただ、その容子や声音が、もはや、じぶんの心の中で消すことはできない、とさとってから、わたくしの霊感は、ようやく、はたらいたのだ。

どんなにすげなく、しりぞけられても、わたくしの霊感が、ゆらぐ筈（はず）がなかった。

一夜、伯父が押し入って来て、わたくしに、白刃をあびせて行った。

わたくしが、からだが地の底へひき込まれるように、遠のいて行く意識で、思ったのは、

――あの方が、きっと、戻って下さる！
それであった。
あの方は、その通り、お戻りになった。

二

わたくしは、傷の痛みとともに、意識を甦らせつつ、枕もとにお坐りになっているあの方を、はっきりと感じたものだった。
あのよろこびは、生涯忘れられない。
わたくしは、じぶんの霊感の正しさを、その瞬間に、確認したのであったから――。
わたくしは、おのが予感通りに不運に遭うたではないか、と仰言るあの方に、申上げた。
「女の心は、女であるわたくしには、よくわかります。……不運に遭えば遭うほど、女にとって、貴方様は、かけがえのないお方になります。貴方様は、そういうお方なのです」
このことばは、やがて、あの方の口から、わたくしに、返された。
やがて、わたくしは、風魔一族の若者に、秘薬を嚥まされ、その息吹きやささやきや唇や腕や胸を、あの方と信じこまされ乍ら、犯された。
われにかえって――仰臥させられたわが身の、むざんなすがたを知った刹那、わたくしは、絶望の悲鳴を迸らせた。
迸らせつつも、わたくしの脳裡の片すみでは、この不運がかえって、じぶんをあの方に永遠にむすびつけてくれるのではあるまいか、と直感していた。

もとより、それは一瞬に掠めすぎただけで、あの方が出現なさって、わたくしを犯した敵を、はげしい憤怒をもって、斬り仆されるのを眺め乍ら、わたくしは、死ぬことを考えていた。死ぬよりほかに、わたくしのとるべき手段はなかった。

じぶんの操が、霊感によってえらんだ人以外の男子によって、奪われようなどと、夢にも想像しなかったわたくしとして、死んで詫びるよりほかに、すべがあったろうか。

あの方は、ぬけがらのようなそのわたくしを、つれてお戻りになると、仰言ったのだ。

「そなたののぞみ通り、わたくしは、そなたを抱く。——そうするよりほかに、そなたに、いやな記憶を忘れさせるすべがあるか。……但し、そのあとで死にたければ、勝手に死ぬがよい。……今夜、そなたを抱くのは、そなたを生涯の妻にするためではないし、責任を持たぬ。……ただ、わたしに身を添えて来る女たちが、例外なく、不運に遭うことを、そなたもまた、証してくれた。そなたは、あの時、こうこたえたな。不運に遭えば遭うほど、女にとって、貴方様は、かけがえのないお方になる、と。……不運に遭うたそなたにとって、わたしは、かけがえのない男とならねばならぬ。そのために抱くのだ」

うれしかった。ほんとうに、うれしかった。

わたくしは、深夜の井戸端で、一糸もまとわぬ素裸に、幾杯も、釣瓶の水をかけ乍ら、泪を流しつづけた。

どんなに洗いきよめても、女の箇処になお異物を塡められている不快な感覚がのこっているのを、どうすべくもないことが、悲しかった。わが身がのろわしかった。井戸の底へ、このけがれた裸身を投じたかった。

あの方は、いつの間にか、わたくしの背後に立っておいでになった。
濡れた裸身を、無造作に、かるがると、かかえあげて、
「月の光で、かわかそうか」
と、お笑いになった。
褥の上へ、そっと、わたくしをお置きになると、
「よいか。目をひらいて、わたしの顔を瞶めているのだ。つむってはならぬぞ」
きびしい語気でお呟いつけになった。
わたくしにとって、目をひらいていることは、この上もなく苦しいことであった。でも、これは、堪えねばならなかった。
……愛撫はなかった。
あの方もまた、わたくしの上で、じっと瞶めておいでになった。
それが、静かに、徐々に、押し入って来て、わたくしの中で、きっちりと、盈ちた時、わたくしの双眸から、どっと泪があふれた。でも、わたくしは、目蓋をふさぎはしなかった。
あの方は、大きく拡げて立てられていたわたくしの膝を、そっと伸ばさせておいて、はじめて、自然な抱きかたをなさった。
わたくしは、あの方の頬へ、顔をおしつけて、はじめて、目蓋をふさいだ。
そうしたままで……、動かずに、ずいぶん長い時刻が移った。
あの方の仰言る通りであった。わたくしの心からも、からだからも、無慚な傷痕は、ぬぐうように消え去っていた。甘美な、恍惚とした陶酔が、わたくしを、漂わせ乍ら、安らかなねむりの

中へ、ひき入れて行った。

あの方が、旅にお出になったのは、次の日であった。

お見送りするわたくしの顔は、希望をとりもどして、明るいものであった。

目くるめくばかり眩しい初夏の陽ざしが、あの方の後ろ姿にそそいでいたのを、わたくしは、じぶんの目の中にやきつけて、いまも、昨日のことのように、まざまざと甦らせることができる。

三

隣の家に、ご年配の浪人ご夫婦が、移って参られてから、わたくしも、ご内儀と顔を合せるたびに、少時、話を交わすようになり、さびしさがまぎれるようになった。

昨夕も、ご内儀が、黄名粉のお団子を持参して下さった。

「今宵は、十三夜でありますゆえ――」

と、仰言ったが、わたくしは、「後の月」のことを知らなかったので、赤面した。

お内儀は、やさしくお笑いになり乍ら、

「八月十五夜の月見だけして、九月の後の月見をいたしませぬと、片月見と申して、女の幸せが得られませぬ」

と、ご説明下さった。十五夜には、団子の数も十五個を供え、これは、餡を用いることは、わたくしも知っていたが、十三夜には、十三個を供えて、これには黄名粉を用いる、というならわしは、知らなかった。

市井では、後の月見をおわって、華やかに、神田明神の祭礼をはじめ、町々に、幟や軒提灯を

かかげる賑わいを迎えることになる由であった。

陽脚のつまって来る庭に、黄菊白菊が咲くのを待っている侘しいくらしには、そうした賑わいは遠いものであったが、ひとり静かに、後の月見をするならわしは、わたくしの心を、ほのぼのとした想いにひたらせた。

——あの方は、近いうちに、かならず、おもどりになる！

その霊感も、わいた。

次の朝、美しく咲いた菊花を剪って、わたくしは、家を出た。

渋谷の丘陵の上にある、あの方のお母上と美保代さまのお墓に詣でよう、というねがいは、ずっと前から抱いていた。

わたくしが、あの方のおそばにくらすためには、お母上と美保代さまの墓前で、それをお願いし、ゆるして頂かなければならない、と考えていたのである。

ひさしぶり、というよりも、はじめて、ひとりで、外出したわたくしの目には、行きすぎる風景が、それぞれ、めずらしく、なごやかなものに映った。

通りには、のびやかな声をあげて、虫売が歩いていたし、河岸には、たくさんの人々が釣糸を垂れていたし、遠く近く、幟が秋空にはためいているところからは、稽古笛や太鼓の音がひびいていた。

野道に出ると、子供たちが、蜻蛉を追って、走っていた。

丘陵の斜面には、いちめんに、薄が、まっ白な穂を秋風になびかせていて、のぼって行くわたくしのからだを、だんだん埋めて行くようであった。

澄みきった明るい静寂は、わたくしの墓詣でのために、あるかのようであった。

やがて、大きな櫨（はじ）の樹が三本ならんでいる頂上を眺める地点までのぼって来て、わたくしは、

——おや？

と、見なおした。

櫨の樹の根かたには、三基の墓が、ならんでいる、ときいていたわたくしは、そこに、四基の石が立っているのを見出したのである。

お母上と美保代さまと、そして静香と仰言るかたのと——。

そのほかに、どなたが、加わったのであろう？

わたくしは、近づいた。

ひっそりと、秋陽をうけて、並ぶ四基の墓石には、「霊」の一文字が刻まれてあった。

ただ、右端の墓だけが、自然石の肌色（はだいろ）もあたらしく、「霊」という書体がちがっていた。これは、あの方がお立てになったものではない、と判った。

お母上

静香さま

美保代さま

と並んだ墓は、いずれも、あの方が、どなたの力もお借りにならずに、一人で、埋葬なさり、鑿（のみ）と槌（つち）をふるって刻み、そしてお立てになった、ときいた。

……なにはともあれ、わたくしは、まずお母上の墓前から、携えて来た菊花を供えて、お祈りしはじめた。

美保代さまの墓前に、ぬかずくと、わたくしの胸は、急に、疼きすらともなう辛い思いにおそわれた。

武部仙十郎殿からきかせていただいたあの方と美保代さまの暗い宿縁が、ひしひしと感じられた。

お二人は、異常な状態によってむすばれ、安息の家庭をつくるいとまもなく、絶えざる暗い兆によって、未来をうち消されつつ、数年をすごされた、という。

美保代さまが、ひたすら身うちに燃えつづけさせた純粋な思慕の炎も、そして、それに応える、あの方の熾火のような愛情の火も、宿命という無慚な審判者の、冷酷な予言にはばまれて、ついに、全き情熱の昇華を生むことなく、熄った、ときく。

——けれども……。

わたくしは、そっと、つぶやいた。

——狂四郎様のお心には、貴女さまの俤のほかは、わたくしなどの入る余地はありませぬ。貴女さまだけが、狂四郎様の中で、永遠に生きておいでになります。

わたくしは、そっと立ち上がって、右端の墓石の前に、移った。

——どなたが、ねむっておいでなのであろう？

当然ここには、あの方の墓が立つべきなのに——と考えつつ、わたくしは、ただ無心に祈っておくことにした。

ふと、背後に人の気配をおぼえて、わたくしは、頭をまわした。

立派な風貌の、白髪の老人が、杖を持って立っていた。

「どなたかな？」
問われて、わたくしは、ただ「ちさ、と申します」と、こたえた。
「そなたも、狂四郎のために、不幸な道をえらんだ女性であろうか？」
「…………」
わたくしは、はっとして、老人のお貌を見なおした。
――このおひとが、あの方の祖父にあたる大目付の松平主水正様なのか?!
「そなたは、狂四郎にすてられ乍らも、なお、のぞみをつないでいる――そうではないのか？」
「い、いえ！」
わたくしは、あわてて、かぶりをふった。
「狂四郎様は、旅に出ておいでになります。わたくしは、留守居し乍ら、おもどりを待って居ります」
そうこたえると、ご老人は、しばし、黙って、わたくしを、瞶めておいでになったが、杖で、墓石をお示しになると、
「そなたは、それを、誰の墓と思うて、祈った？」
と、お訊ねになった。
「存じませぬ」
「裏面を視るがよい」
促されるままに、うしろへまわったわたくしは、どきっとなった。
俗名　眠狂四郎

と、刻まれてあるではないか。
――ちがう！　あの方は、生きておいでになる！　ちがう！　ちがう！
胸の裡で絶叫するわたくしに、ご老人は、冷然として、仰言った。
「狂四郎は、死んだ！」
「い、いえ！」
わたくしは、烈しく、かぶりをふった。
「そなたが、いかに否定しようとも、狂四郎は、まちがいなく、死んで、ここにねむっている！」
ご老人の声音は、氷のように冷たく、きびしいものであった。

四

たましいが抜けたような足どりで、わたくしは、もどって来た。
庭の木戸から入ったわたくしは、ふと顔を擡げたとたん、叫びをあげた。
そして、夢中で、走り寄るや、意味をなさぬ言葉を口走り乍ら、その胸へ、身を投げた。
黙って受けとめて、しばらく、そうして、じっと抱いていて下さったが、いつまでも嗚咽するわたくしの様子に、不審をおぼえられたらしく、どうしたのだ、とお訊ねになった。
「貴方様のお墓が……美保代さまのお墓にならんで、立って、居りました。……お立てになったお年寄り様とも、お会いして、貴方様は、もうお亡くなりになった、とうかがったので――うそだ、と思いつつも、悲しくて……」
わたくしが、かきくどくように申上げると、しずかに、わたくしをおはなしになって、

「それは、わたしのじじいのしわざだ」

と、仰言った。

「なぜ、あんなことをなされたのでございましょう？」

その返辞には、間があった。

「たぶん、じじいは、わたしが、どこかで、なますのように斬られて殪(たお)れるか、それとも血反吐(ちへど)を吐いて野たれ死するか――そんな光景を想像しているのであろう」

「………」

わたくしは、声こそ出さなかったが、強くかぶりをふった。

黄昏(たそがれ)の来た庭へ、視線を投げた横顔を、わたくしは、食い入るように瞶(みつ)めた。

「ふん――」

ふっと、自嘲(じちょう)なさった。

「わたくしの墓をつくってくれる人物が、この世に、まだ一人、生きていたのだな」

「………」

「ちさ」

「はい――」

わたくしを見返された眼眸は、暗い乍らも穏やかであった。

「おのれの墓が、立っている、と思うと、なんとなく、気分がおちついて来る。妙なものだ」

そのお言葉をきき乍ら、わたくしは、あらためて、さとらなければならなかった。

――この方がいまのぞんでいらっしゃるのは、美保代さまのかたわらで、やすらかに、おねむ

りになることなのだ。

わたくしの眸子から、別の意味の泪があふれた。

わたくしは、その泪をぬぐいもせずに、また昏れゆく庭を眺めつづけようとなさるお姿を、必死に、見戍らずにいられなかった。

ちょっとでも、目をはなせば、たちまち消え去っておしまいになるような不安にかられていたのである。

赤い蛇

一

十月初亥の日。

この夜、朝廷幕府をはじめ、大名士民の間にも、玄猪を祝う行事があった。いのこ、亥子または玄猪。この日、亥の刻、上下ともに餅を喰べれば、万病を除く、と言う。猪は多子であるので、子孫繁昌を祝う意味からであったろう。町家で、囲炉裏を開き、鯣を焼くのも、この日であった。米客に対して、前日までは、煙草盆で火を出していたが、今日からは、はじめて、火を火鉢に盛って出す。こういうしきたりは、この時代は、まことに、整然としていたのである。

まして、柳営行事となると、いささかの疎漏もなく、催される。

陽が落ちる頃、下乗所および本丸西丸両大手、ならびに内桜田門内外に、篝火が焚かれる。これは、今宵登城の諸侯がたへの御馳走で、大松薪を幾百本となく積みかさねて、燃えあがらせる。真夜中まで、火煙が空を焦し、城門の白壁が紅に映じ、青松の間より、堤下の溝水をあかあかと照らすありさまは、けだし、往昔の軍中の夜篝を偲ぶためのものであった。

御城揃いは、七つ半時であった。出仕者は、熨斗目長裃。

出仕のめんめんは、御三家、松江、前橋、高須、西条、守山、府中、彦根、会津、高松、松山、桑名の各藩主。そのほか、譜代大名と、従五位、布衣、御目見以上の役人、当番の御番衆。外様大名で、特にゆるされて出仕するのは、津、有馬、立花、丹羽、富山、大聖寺など、頭数はすくなかった。

登城するや、玄関からまっすぐに、帝鑑の間に通る。御目付が入って来て、御餅頂戴の順書を見せる。

下知があって、一同は、柳の間を通り、松の廊下へまわり、障子を後にして、着座。

将軍家は、熨斗目長裃姿で、白書院に出座する。

五名の小姓が、それぞれ台をささげて、あとにつづく。祝い餅は、鳥の子餅で、白、赤、黄、胡麻、萌黄の五色であった。

老中の指図によって、一人一人が、上段際二畳目から、摺り膝で罷り出て、右手をさし出す。

将軍家は、祝い餅の、どれかひと色だけを御手自ら把って、渡した。たいてい、将軍家の思召しによって、誰には何色、と年々同じ色のものを下されていたようである。

但し布衣までは、そのように、御手自ら下されていたが、布衣より以下御目見以上の人々には、将軍家は、どの色かの餅を指さすだけであった。そこで、めいめい、進んで、餅を摑めるだけ摑んで、ひき下って来るのをならわしとしていた。

ところで、今宵は、出路から退路までの廊下には、ことごとく緋毛氈が敷きつめられ、まことに華やかであった。

尾張、水戸、紀伊の御三家の頂戴がおわり、出雲藩主松平出羽守が、御前に罷り出て、右手をさし出したおりであった。

突如、緋毛氈の上を、矢のように滑って来た生きものがあった。

いっぴきの小さな蛇であったが、奇怪にも、紅色であったので、帝鑑の間の前にならんでいた奏者番衆も、白書院下段脇に坐っている老中たちも、全然、気がつかなかった。

また——。小さな、赤い蛇の動きは、おそろしい迅さだったのである。

最初に発見したのは、将軍家の背後に在った佩刀持ちの小姓であったが、あっと、目を瞠って、息をのんだ瞬間には、もう、出雲守の傍を走りぬけて、餅台へ迫っていた。

恰度、将軍家は、

——出雲には、去年は、何色の餅を与えたか？

と、ちょっとまよい乍ら、赤い餅へ、片手をさしのばそうとしていた。

その赤い餅の上へ、小さな、赤い蛇は、ひょーっと跳んで、くるくると、とぐろを巻くや、ひょいと、鎌首を立てたのである。

仰天した将軍家は、思わず、のばした片手が、じいんとしびれて、夢中で、つッ立ち上がると、

「く、くせものっ！」

と、絶叫した。

「おっ！」

若い出雲守は、咄嗟に躍り立って、蛇を鷲摑みにした。

老中はじめ、一同がかけつけた時、出雲守は、蛇に、手くびを嚙まれつつも、その胴を摑み締

めて、畳へ押しつけていた。

二

この珍事は、西丸老中水野越前守忠邦によって、厳重に他言を禁ずる提議がされて、容れられた。

小さな、赤い蛇は、偶然にも、迷い込んで来たのではなかったからである。

蛇は、凶悪な挑戦の使者であった。

そのくびに、赤い封じ紙をむすびつけられていたのである。

眠狂四郎が、武部仙十郎に呼ばれて、その封じ紙を手渡されたのは、三日ばかり過ぎた夕刻であった。

『つつしんで申す。木を伐るに、その本よりせざれば、必ず復生ず。水を塞ぐに、その源よりせざれば、必ず復流る。禍を滅するに、その基よりせざれば、必ず復乱る。方今、紀綱弛み、風俗衰え、弊害百出して、施政の道を喪い、荒廃目を掩わしむるも、これひとえに、徳川公方が暗愚、いたずらに奸臣どもの阿諛に目くらみたる故也。寵を啓きて侮りを納るる勿れ、という古き言葉を忘れしむくい也。されば、われら、義盟の士ら集いて、徳川公方ならびにその権勢の施設をことごとく滅ぼし、破壊し尽して、正しく、天工を代って為す人物を、天下人の地位に即かしめんとす。

先ず、公方が上野御霊屋参詣の日、天誅を下さん。業火は、天より降りて、東叡山伽藍をことごとく焼きつくすべし。ゆめ、疑う勿れ。

天誅党有志』

仙十郎は、狂四郎が、一読するのを待って、
「どうじゃな、お主、このコケおどかしを、どの程度に、受けとるかな？」
と、訊ねた。
風魔一族の、凶暴な若者たちの挑戦に相違ない、とみてとって、仙十郎は、狂四郎を呼んだのである。
「寛永寺を焼きはらうぐらいのしわざは、やすやすとやってのける連中です」
狂四郎は、こたえ乍ら、
――風魔一郎太、次郎太、そして四郎太と、七人組のうち、まだ三名が生きのこっている。
と、胸中で、かぞえた。
ちさが、その三人の若者たちに犯されようとして、軍師の白頭巾に、はばまれたことは、ちさ自身の口からきいていた。
ちさは、渠らの魔手からのがれるために、名人彫宇之にたのんで、内腿の雪肌に、一刀を抱いて横臥した狂四郎の後ろ姿を彫ってもらっていたのである。
白頭巾が、ちさを救ってくれたことから、推量すれば、この挑戦状をしたためたのは軍師の企てではないと判断し得る。白頭巾は、暴挙をさけようとしているに相違ない。
「未然にふせいでくれるのは、お主の役目じゃ」
仙十郎は、言った。
「こういう場合にそなえてやしなわれた黒指党が、その役目であろうと存ずるが……」

「いやいや――」
　仙十郎は、かぶりをふった。
「当日になれば、勿論、黒指党も要処に配備されよう。夜番も奉行所の捕吏たちも、ものものしく警衛を命じられよう。しかし、じゃ。一兎が走る。百人がこれを逐う。一兎をして、百人の分と為すに足るに非ざるなりだ。捕える人の定まらざるに由るだ。……ははは、きまって居るのじゃよ。一兎を捕えるのは、お主を措いてほかには居らぬ、とな」
「買いかぶられたものだ」
　仙十郎は、頭を下げた。
「敵がたは、もしかすれば、お主一人をおそれて居るのかも知れぬぞ。……なにぶん、たのむ!」
　狂四郎は、しばらく、思案していたが、あらためて、玄猪の儀式の模様を、訊ねた。
　仙十郎は、見取図を描いて、説明した。
　出路の松の廊下には、高家衆、諸番頭、諸役人が並んで坐っている。その次の桜の間に、溜詰衆、そして、白書院の下段の間には、老中が坐っている。退路の方の帝鑑の間の前には、若年寄がずらりと坐し、北の廊下へ出るところには、御目付が詰めている。
　すなわち、出路、退路とも、緋毛氈の敷きつめた廊下には、蛇はおろか、虫いっぴき上がって来ることは不可能である。
　当然、蛇は、白書院が面する庭から、はね上がって来たものに相違ない。しかし、篝火が、白昼のように明るくされた庭には、百名をこえる庭番が、警備に当っていた。何者かが、庭に忍び入って来て、蛇を放ったという想像は、ゆるされない。

では、庭番の一人に、風魔一族の者が、化けていたというのか？

仙十郎は、かぶりをふって、

「庭番は、一人のこらず、取調べを受けて、怪しい者は居らなんだ」

と、言った。

狂四郎は、腕をこまねいた。

――赤い餅の上にとぐろを巻く習性をつけてやる訓練は可能としても、庭さきに置いてやらぬ限り、白書院まで走り入ることは、不可能であろう。どうやって、蛇を、庭に置いたかだ。これが判らぬかぎり、東叡山が烏有に帰するのをふせぐ手段はあるまい。

かりに、江戸城内に、忍び入ることに成功して、本丸のどこかに、蛇を放ったとしても、蛇いっぴきの知恵で、白書院をさがしあてて、その庭へ滑り込むことなど、考えられなかった。

――はたして、庭番のうちに、風魔一族に荷担した者がいなかったか、どうかだ。

狂四郎は、疑わざるを得なかった。

直感力の働かぬままに、狂四郎は、水野忠邦の上屋敷を出た。

三

往還に出ると、空に月があって、明るかった。

まだ宵のうちであったが、大名小路は、もう深夜の静寂をたもっている。

風も落ちて、樹木もひそとしていて、辻番から、流れ出ている台提灯のあかりだけが、時おり、ゆらめいているばかりであった。

その前を行き過ぎがてに、一瞥して、狂四郎は、眉宇をひそめた。菖蒲革の袴をはいた年寄りの番人が、六尺棒をかかえ込んだまま、夜舟をこいでいるのを、見かけるのが常だが、どうしたのか、その番所には、人影がなかった。

大名の一手持ちの辻番には、その家臣が、番にあたる。

泰平の治世では、大名小路で、殺人が行われるなどということは、稀というより、まず絶無であったので、辻番は、むだな役目であった。「辻番は生きた親仁のすてどころ」という川柳もある。老人ばかりであった。

といっても、老人は、律儀であり、番に就けば、交替時刻が来るまでは、居睡りはしても、その席を動くことはない。

狂四郎が不審を起したのは、それだけではなかった。

生血の匂いをかいだのである。無数の修羅場をくぐって来たこの男は、その匂いに敏感であった。

つと——入って、突棒や差股や袖搦みの置いてある土間に立って、衝立でかくれた三畳の畳敷きを、覗いてみた。

はたして、そこに、人が俯伏していた。老いた番人ではなかった。華やかな衣裳をまとった武家娘であった。お高祖頭巾をかぶっている。

上がって、かかえ起してみたとたん、狂四郎は、はっとなった。

——般若姫！

風魔一族のうちで、驕慢をゆるされている唯一の娘であった。頭領の地位に即いた少年の実姉

であるこの般若姫は、狂四郎と契ることを一途に望みつづけて、そのためには、いかなる非常の手段でも辞さなかった。

風魔七郎太を、狂四郎と闘わせて、その右腕を断とうと企てたのも、その目的をとげるためであった。狂四郎の股間へ、朱の葵の刺青をほどこして、契ろうとしたのである。

逆に、狂四郎に七郎太を討たれても、般若姫の野望は、決してついえはしなかった筈である。

狂四郎は、すばやく、からだをしらべてこの深傷ではたすかるまい、とさとりつつ、活を入れた。

目蓋を、微かに痙攣させつつ、うすくひらいた般若姫は、狂四郎の貌をみとめると、

「ああ――会えた！」

と、小さく叫んで、よろこびの色を、死の迫った蒼白の顔に刷いた。

「わたしを、さがしていた、というのか？」

「今宵、薮小路の屋敷でひらいた一族の会合を、黒指党が探索するところとなって、突如の襲撃がありました……」

一郎太、次郎太、四郎太などは、のがれ去ったが、般若姫だけは、手負うた。

風魔一族の女性である。深傷に屈せず、いったん、安全な場所に身をひそめたが、所詮たすからぬいのちとさとるや、ひと目、眠狂四郎に会おう、と決意したのであった。

おとずれたその家には、般若姫もすでに素姓を知っているちさが、妻として、在った。

般若姫は、何事もかくさなかった。ちさの方も、包まずに打明けられると、狂四郎の行先を、教えたのである。

般若姫は、この上屋敷前へ辿(たど)りつくと、老いた番人に、高価な簪(かんざし)を与えて、借り受け、狂四郎が出て来るのを待ちうけるうちに、気力つきて、意識を喪っていたのである。

——おれに惚(ほ)れた女で、生きのびたためしがない。

狂四郎は、暗然として、死相濃い顔を見まもった。

般若姫は、まぶたをとじて、呟(つぶや)くように、言った。

「眠どの、おん身は、非情の男ときいていましたが……わたくしの、さいごの願いも、しりぞけられるであろうか？」

「…………」

「……わたくしの使命は、この世で、いちばん、強い男子の、子どもを、生むことであった。……眠どの、おん身こそ、わたくしの、理想に叶(かな)った……。おん身の子どもを、生みたかった。……夢で、おわってしもうたなれど——せめて、一度だけ、わたくしを、抱いて欲し……」

とじたまぶたの蔭から、睫毛(まつげ)を押しあげるように、泪(なみだ)の玉が盛りあがって来た。

「……も、もし、あの世で、おん身の子が、生めるものなら——生みたいと、思いまする」

この言葉が、狂四郎の胸を打った。

「叶えよう」

ひくく、短く、こたえてやった。

「……う、うれしい！」

般若姫は、双手をさしのべて、狂四郎にすがると、

「わたくしの乗って来た馬が、むこうの、林の中へ、つないで、あります」

と、告げた。

四

狂四郎が、馬をとばして行き着いたのは、本所の法恩寺門前にある、夢買いの老人の仮宅であった。
馬から、そっとおろされた般若姫は、死んだようにぐったりとなっていた。
格子戸は開けられるようになっていたが、入ると、人の気配はなかった。
奥の一間に、般若姫を、はこんだ狂四郎は、燧石を打って、行燈にあかりをつけ、牀をのべ、その上へ、華やかな垂死の姿を仰臥させてやった。
執念は、般若姫の目蓋をひらかせた。
狂四郎は、じっと、見戍り乍ら、
「そなたののぞみを叶えるまえに、ひとつ、きいて置きたいことがある」
と、言った。
「わかって居ります。……一郎太が、将軍家へ送りつけた、斬奸状のことでありましょう」
「さよう――。朱に塗った蛇を、いかなる方法で、白書院の祝い餅まで、走らせたか？　それを、そなたは、ご存じか？」
般若姫は、かぶりをふった。
「知りませぬ」
「…………」

狂四郎は、般若姫の表情が、かくしていないと見た。
般若姫は、目蓋をとじると、そろそろと、膝を立てた。
狂四郎の心は、重かった。
曾て、夢買いの老人のたのみによって、お洒落狂女と、偽りの祝言をとりかわし、その三三九度の盃に盛った毒で、永遠の睡りについた白無垢姿を、新牀で抱いてやった狂四郎である。
その時は、ただ、かたちだけであった。お洒落狂女は、処女のままに、みまかった。
いまは——。
死に臨んだ処女と、契りをむすんでやらねばならぬのであった。
生涯、二度とないであろう行為であった。なろうことならば、お洒落狂女の場合と同じく、かたちだけの抱擁ですませたかった。しかし、この異常に勝気な娘は、おのが体内に、それを容れぬかぎり、息をひきとるまい。
「……たのみまする」
般若姫は、か細いが、しっかりした声音で、促した。
狂四郎は、やむなく、その脇に、身を横たえると、片手をさしのべて、前をはぐった。燃えたつような緋の二布の下の下肢は、蠟のように白く、滑石のように、冷たかった。
狂四郎の指頭が、そこへふれるや、般若姫は、自ら、膝を拡げた。
狂四郎は、苦痛に堪えつつ、待っている貌を、美しいものに眺め下ろした。
……般若姫は、押し入って来る強い力に、小さな叫びをもらすと、狂四郎の肩に置いた十指を曲げた。

幽明相隔てる瞬間は、その直後に来た。

狂四郎は、般若姫の両手が、肩から落ちるや、ゆっくり身を起した。

指を、胸で組ませてやり、枕布を、顔へかけておいて、すっと廊下へ出た。

とたんに――。

狂四郎は、そこへ足を釘づけた。

むかいの部屋に、人がいた！

灯が、襖の合せ目から洩れ出ていたし、はっきりと気配もあった。

狂四郎が、再び一歩ふみ出そうとすると、内から、声がかかった。

「一服、進ぜよう。入られい」

白頭巾の声音であった。

狂四郎は、ためらわず、襖をひらいた。

茶室のしつらいになって居り、あるじの座についている白装束の姿は、むしろそのたたずまいにふさわしかった。

狂四郎は、黙って、客の座に就いた。

あるじもまた、無言のうちに、茶をたてた。

盲目であり乍ら、その点前ぶりに、微塵の隙もなかった。しかも、風韻雅致を旨とする所作は、いかにも気品があり、斯道の奥義をきわめたものと見えた。

由緒ありげな黒茶碗を、膝前へすすめられて、狂四郎は、一瞬、忸怩たるものをおぼえた。

むかし、祖父たる楽水楼老人に、点前された時もそうであった。

こちらは、茶道の作法を知らぬのである。

おのが姿勢を隙のないものにすれば、すなわち、おのずから、血の匂う剣気がみなぎる。

対手（あいて）は、これを感じて、さげすむであろう。

対手の点前ぶりは、隙のない厳しさを保っているが、剣の道の隙のなさとは、およそ遠い静けさを湛（たた）えているのであった。

「頂戴いたす」

狂四郎は、心気をすてるために目蓋をとじて、黒茶碗を把りあげた。

白頭巾は、黒茶碗が、手もとへかえされると、沈んだ声音で、

「お主には、二度までも、好まぬ役目をつとめて頂いた。忝（かたじけ）ない」

と、礼をのべた。

「そのかわり、こちらは、二度までも、御一党の企てを妨碍（ぼうがい）いたした」

闕所物（けっしょぶつ）の戎器（じゅうき）を悉（ことごと）く破壊したことと、日光東照宮にかくされていた秘帖を焼きすてたことで、貸借はない、という狂四郎の気持であった。

「次いで――三度び、お主は、武部仙十郎の依頼によって、われら一族の企てを妨碍いたす肚（はら）とみた」

「お手前の指令による企てではない筈。むしろ、お手前がとどめるのも肯（き）かずに、血気の若者が、行わんとしている暴挙と存ずる。東叡山を焼きはらうのが、どれだけの意義があろうか」

「…………」

白頭巾は、なんともこたえなかった。

「ご造作に相成った」

狂四郎は、一礼して、立ち上がった。

すると、白頭巾は、ふいに、瓢（ひしゃく）を、風炉（ふろ）の上から摑むと、発止と、宙を搏（う）った。

いっぴきの蠅が、ころりと、緋毛氈の上へ、落ちた。

それを見た狂四郎は、咄嗟に、

――そうか！

と、合点した。白頭巾は、その一動作によって、いっぴきの蛇が、白書院へ走り入った謎（なぞ）を解いてみせたのである。

風魔一郎太が東叡山襲撃に対する狂四郎の、備えは、きまった。

狂四郎は、感謝の意を眼眸（まなざし）にこめて、白頭巾に送って、その家を去った。

黒い鳥

一

三十畳もあろう広間に、濛々たる赤・黄・紫の煙が、渦まいていた。
床の間の前に、一丈幅の、三角形の護摩壇が設けられてあり、その壇下に、八葉の蓮華を摸した黄白の泥塗りの火炉が据えられ、三色の煙は、そこから、舞い上がっていた。
三角形の護摩壇は、呪詛を罩めた調伏のためのものであった。延命平和を祈る護摩壇は円形である。
床の間には、青地に四印曼荼羅を描いたのと、蓮華広大曼荼羅を描いた旛をかかげてあった。
呪詛調伏の場合は、金剛忿怒尊が祭られる。その凄まじい像が、床の間にかかげてあった。
壇上の十数個の三方に供えてあるのは、髑髏、人血、牛血、猪の糞、蛇皮、毒薬、鼠と鼬の死骸、狗の肝、鶏の嘴など。
これらは、火炉へ投じられる。鈎召金剛炉という。
火炉の前の緞子の座蒲団には、真紅の衣裳をまとい、頭髪を長く背中に垂らした女が、裾をうしろにはねて、大あぐらをかいていた。これは、蹲踞座という坐りかたで、左足の親指を右足の

親指に重ねる形であった。
両足を矩形として、陰部を開いて、これを金剛忿怒尊に示す不遜の形である。
女は、三十前後であろう。呪詛の巫女にふさわしい、細おもての、細目のつりあがった、能面貌であった。肌は、白瓷のように純白で、冷たかった。
左手に、金剛杵を摑み、右手に、巨きな筆を握っていた。その筆は、獄門になった凶悪な囚徒の髪毛と狂犬と奔馬と病牛の尾とを合せて、造ったものであった。
巫女は、その筆で、おのが陰部をひと撫でしてから、脇に置いた黒い茶碗に盛った、どろどろの赤黒い液体にひたした。これは、女の経血と牛馬狐狸の血を混じたものであった。
「かしこまって申す！」
呻くような声音で、呪しはじめた。
「大忿怒魔王、穢跡忿怒明王、満天破法、十万の眷属、八万の悪童子、ねがわくば、虚空に結跏趺坐して、悪気を発し、毒光を放って、わが呪詛に、加護あらしめたまえ！」
呪しおわるや、その筆をひと振りして、悪血を、火炉へふりかけた。
次に、すっと立ち上がって、
「天眼通、天耳通、知他心通、宿命通、身如意通、然して、三界の見思の惑を断じ尽し、三界の生死を受けずして、神道を得る漏尽通――能く六道の衆生の上に飛行して、山海無礙、慧性を発して、変現自在不可思議の幻を欲す……」
などと、ぶつぶつと呟き乍ら、壇上に供えたいけにえを、矢つぎ早やに、焰の中へ拋り込んだ。

そして、火を消さぬように、油を浸した護摩木をくべた。
煙と焰は、ないまざって、噴きあがりつづけた。その炎のかたちによって、蛇頭形とか、鶏頭形とか、牙形とか、と判じて、成就如何を知る。
巫女は、金剛杵を、大きくうち振り乍ら、いちだんと声を高め、
「……菩薩摩訶薩、この念を作し已んで、心を身中の虚空に繫け、麁重の色相を滅し……地を水となし、水を地となし、風を火となし、火を風となし……勝処を背捨して、神通に入らん！」
と祈ってから、不意に、おそろしげな唸りを発するや、棒倒れに、のけぞった。
この凄まじい光景を、畳五畳をへだてて、終始じっと見戍っていた者が、やおら立ち上がった。風魔一郎太である証拠は、敦盛の面をかぶっていることで明らかであった。おそらく、面の下には、正視に堪えぬ、猛毒に焼けただれた醜怪な面貌がある筈であった。
一郎太は、巫女の両足くびを摑むや、樹枝を裂くように、股を押し拡げさせ、前を捲りあげた。その内腿には、朱の葵の紋の刺青がしてあった。
けだし――。
この巫女は、呪法の毎に、こうして、呪詛依頼の風魔一族の者に、つぎつぎと、おのが身をゆだねているのであろう。
一郎太が、その前にのしかかるや、巫女は、
「南無！　大忿怒魔王！」
と、叫んで四肢を巻きつけた。
……けものの組打ちに似た営みに、荒い淫靡な喘ぎを洩らしていた巫女は、やがて、その快楽

の頂点で、名状しがたい呻きを発するや、
「大願――成就っ！」
と、絶叫した。
一郎太は、襤褸（らんる）のようにぐったりとなった巫女の上から、起き上がるや、
「これでよし！　将軍家の生命はもろうたぞ」
と、うそぶいた。
「はたして、そうか？」
突如、その冷やかな言葉が、あびせられた。
一郎太は、振りかえって、いつの間にか気配もなく入って来ている白頭巾を、見出（いだ）した。

二

「軍師！　われらの壮挙を、嘲笑（ちょうしょう）されるのか？」
一郎太は、憤然となって、食ってかかった。
「嘲笑はせぬ。ただ、懸念しているまでのことだ」
「懸念？　……はっははは、軍師としての御忠告なら、措（お）かれい。この一郎太の企てることは、無謀とみえて実は、百発して百中する成算があってのことでござる。逸（いつ）を以（も）って労を待つのは、そのむかしの軍争、いまや、千里行を留（とど）めざる勇猛をもって、しかも、巧妙の謀（はかりごと）をめぐらして、驀進（ばくしん）するのみ！」
「疾行に善迹（ぜんせき）なし、と申すが……」

「なんの！　胸中成竹あり、謀定ってのちにたたかうのですぞ！」
「いかなる奇策に対しても、これをふせぐ手段はあるぞ」
白頭巾は、すでに、一郎太のなさんとしている手段を知っていた。
すなわち――。
江戸城本丸の白書院に、いっぴきの赤い蛇が躍り入って、祝い餅の上に乗ったふしぎは、種を明かせば、さしたるトリックではなかった。
一郎太には、十年間飼い馴らした一羽の鴉がいた。
一郎太は、同じくよく訓練した蛇を、その鴉にくわえさせて、江戸城の上空へ、とばしたのである。
この策があるからこそ、一郎太は、その日を明言して、東叡山寛永寺を焼きはらってみせる、と挑戦したのである。
鴉に、凄まじい威力のある火薬をくわえさせて、上空から、落させればいいわけであった。
「一郎太！　忘れるな、お主の敵は、黒指党ではなく、眠狂四郎だ」
白頭巾は、ひややかに、言った。
「眠狂四郎に、それがしの焼打ちをふせぐ手段があると言われるのか？」
「ないとは申せまい」
「軍師！」
一郎太は、目孔のない白頭巾を、睨みつけた。
「お手前様は、何故、そのように、眠狂四郎を、慴怖されるのか！　お手前様ともあろう御仁

が、腑甲斐ないとも思われる態度を示されるのは、納得がゆき申さぬ！　風魔一族が、天下におそれる者は、一人も居らぬ筈ですぞ！」
「怖れることと、対手の力を正しく知って要心することとは、おのずから、ちがう」
「狂四郎を、天下無敵と思われたのであれば、それは、怖れたのと同じではないのか！」
一郎太は、食いつきそうな形相で、呶鳴った。
「一郎太――」
白頭巾の声音は、むしろ、穏やかであった。
「お主ら七人組のうち、すでに四名が、狂四郎の剣の下に仆れて居る。お主自身も、狂四郎に、一度は、敗北を喫して居る」
「敗れたのではないっ！」
一郎太は、呶号した。
「それがしは、まだ、狂四郎と、勝負をつけては居らぬっ！」
一郎太は、狂四郎から、敦盛の面を奪われたことがある。しかし、その時は、狂四郎の方が、不意に出現して、一瞬裡に、面を掴んで、風のように消え去ったのである。
狂四郎が、その日のうちに、面を、夢買いの老人に、五千両で売りつけた、と知った一郎太は、はらわたがにえくりかえる憤怒にかられたことだった。
その屈辱を返すべく、飛鳥明神社で待ち伏せていた一郎太は、幸か不幸か、黒指党の殺到を受けて、狂四郎と雌雄を決することがかなわなかったのである。
一郎太は、狂四郎の円月殺法を破り得るのは、おのれ以外にはない、とひそかに、満々たる自

信を抱いていた。

「お主が、あくまで、寛永寺を焼きはらって、将軍家の首級を狙(ねら)う、というのであれば、止めだてはせぬ。ただ、思いかえす余地はないか、ききたかったまでだ」

「断じて、やりとげ申す！」

「それならば、邪神の援けを乞うような振舞いはせぬがよい」

「呪法をさげすまれるのか！」

「お主の胸の底に、怯懦(きょうだ)がひそんでいる証左とみる」

白頭巾は、きっぱりと、言いはなった。

「なにっ！　軍師と雖(いえど)も、その雑言はゆるせぬ！」

一郎太は、総身に、殺気をみなぎらせた。

すると——。

白頭巾は、そろりと、一歩、横へ身を移した。

次の瞬間、一郎太のわきにうずくまっていた巫女が、ひいーっ、と悲鳴をあげて、双手で虚空を摑んだ。

一郎太は、はねかかる血飛沫(ちしぶき)をよけて、一間ばかり跳び退いた。それから、目を瞠(みは)って、白頭巾を視た。

「一郎太！　修業が足らぬぞ！」

白頭巾は衂(ちぬ)られた抜討ちの白刃を、しずかに、鞘(さや)へすべり込ませると、厳然として、きめつけた。

「わしが、女を斬った刹那、お主は、隙だらけになったぞ。わしは、つづいて、お主を真二つにすることができた。……その未熟さで、狂四郎に勝てるか！」

一郎太は、一語も返せなかった。

白頭巾の言う通りであった。

軍師がよもや、巫女を斬ろうとは、夢にも思っていなかった。その不意の一撃に、思わず、あっとなったために、当然心身は、おのれを失ったのである。

影のように去る白頭巾を見送り乍ら、一郎太は、肚裡で、うめいた。

——勝つぞ！　眠狂四郎に断じて勝ってみせるぞ！

三

その日、上野御霊屋参詣の行列が、江戸城を出たのは、辰上刻（七時）であった。

えたいの知れぬ曲者から、斬奸状がつきつけられたからといって、東照権現（家康）の命日に、参詣を中止するわけにはいかなかった。

しかし、御成道すじおよび上野山内の固めは、常とは比較にならぬ物々しさであった。

およそ、将軍家通過の時は、一の先、二の先のふれがあって、行列が見えるところは一切人払いであった。故に、制止声をかける必要はなかった。御成道に面した町家では、主人が、溝板の上に罷り出て、御駕籠が行き過ぎる時だけ平伏する。しかし、その家の女房や召使たちは、店に坐っていて、べつに頭も下げずに、通行を眺めていてよかった。つまり、町家に対しては、あまり構わなかったのである。ただ、武家に対しては、取締り厳重であった。武家は、長屋には窓蓋

をして、全く内側から覗けないようにした。主人は、門内に在って、御供の御徒目付御小人から「只今通御つかまつる」と声がかけられると、平伏して、不動のまま、行列が行き過ぎてしまうまで、待たなければならなかった。

この日は、それだけのみならず、武家という武家の屋敷の門前は、徒士三名ずつが固めたし、町家の店内も、甲賀衆伊賀衆が、見まわった。

筋違御門および黒門には、庭番衆が詰めていた。

さいわい、将軍家が、御霊屋脇にある装束所に入るまでは、何事もなかった。

将軍家は、そこで、熨斗目麻裃を、衣冠に改めて、御霊屋に入るならわしであった。

装束所における休憩の時間は、半刻とさだめてあった。

しかし、この朝は、水野越前守によって、さらに、四半刻ばかりのばされていた。

老中、若年寄はじめ、徒士、足軽まで、それぞれの位置に在って、無言をまもり、二千余の人を容れ乍ら、上野山内は、晴れた晩秋の空の下で、静かであった。

と——。

その明るい空をかすめて、一羽の鴉が、根岸の方角から、かなり迅い勢いで、飛来して来た。

ただの鴉ではなく、何やら赤い球様のものを、紐をくわえて、つりさげ乍ら、まっしぐらに、上野山内をめざして来たのだが、これに気がついた者は、一人もいなかった。

将軍家御行列の人々が、頭を擡げて空を仰ぐような不作法なまねはしなかったからである。

ただ——。

この時、どこからか、馬蹄のひびきがつたわって来たので、人々は、不審そうに、視線をまわ

した。
上野山内は、下馬の掟だったからである。
騎馬は、御霊屋裏手の屏風坂を一気に駆けあがって来た。
黒の着流しの浪人者をのせた白馬は、木立をくぐって、御霊屋をかこう塀沿いに、まっしぐらに、裏門へ奔りぬけて来たが、もの蔭に伏せていた黒指党はじめ、隠密たちが、これを阻止しようとしなかったのは、あらかじめ下知があったからである。
御霊屋正門から、常行堂と法華堂の間にいたる数間の甃石には、緋毛氈が敷いてあった。
眠狂四郎は、一気に、そこへ、馬を躍り出させると、捕物用の鉤縄を投げて、その緋毛氈をひっかけざま、馬腹を蹴って、猛烈な勢いで、吉祥閣の方角めざして、疾駆させた。
緋毛氈は、一条の縄に曳かれて、地面を波うち乍ら、滑走した。
狂四郎は、吉祥閣の横を掠めるや、時鐘楼をまわって、忍岡稲荷の前まで、馳せ下った。
そこで、ちらと、空を仰いだ狂四郎は、にやりとした。赤い球を携げくわえた鴉は、予測にたがわず、追いかけて来ていたのである。すなわち、この鴉は、赤い敷物の上へ、物を落す習性をつけられていたのである。
「えい——おうっ！」
駿馬に、叱咤をくれた狂四郎は、急傾斜の石段を、まっしぐらに、降りた。
緋毛氈は、それにしたがって、生きもののように、うねり乍ら、石段を下った。
さらに、狂四郎が、めざしたのは不忍池畔であった。
御成り日のおかげで、往還に人影が絶えていたのは、さいわいであった。ただ、各戸につなが

れている犬が、狂おしく吠えたてた。

矢の迅さで、仲町から茅町に沿うて築かれた堤まで、奔馳して来た狂四郎は、縄をたぐりざま、満身からの気合を発して、緋毛氈を、頭上へ、投げた。

秋の陽ざしの盈ちた宙に、鮮やかな虹を描いた敷物は、不忍池の水面へ、落ちた。

空から追跡して来た鴉は、池中に拡がった緋毛氈の上で、いささかとまどったように、ばたばたとはばたいていたが、くわえていた紐を、くちばしから離した。

まっすぐに落下した赤い球は、緋毛氈に当るや、一瞬、轟然と炸裂した。

緋毛氈が、水柱とともに、宙にはねあがって、飛散する光景は、巨大な花火のように鮮烈な眺めであった。

しかも、無数の小布になって散るそれらは、火薬に燃えて、白煙をあげ、水面に落ちてもなお、物狂おしく、のたうちつつ、走りまわった。

――あの赤球が、地上へ落ちていたならば、流れ星のように飛び散った火は、御霊屋を灰にしていたろう。

火粉と水飛沫をあびた馬上の狂四郎は、無数に踊り狂う小さな炎の、妖しい美しさを眺め乍ら、思った。

四

馬首を向けかえようとして、狂四郎は、

――来たな。

と、直感した。

次の瞬間、狂四郎は、馬上から、大きく躍って、一間むこうの堤上へ、跳んでいた。

一条の白い閃光をひいて、手裏剣が間髪の差で馬上を飛び去った。

狂四郎は、池を背にして立つと、三間のむこうの往還上に立つ敦盛の面の若者へ、冷たく冴えた眸子をあてた。

「………」

「………」

無言の対峙が、ものの数秒もつづいたろうか。

風魔一郎太は、二刀を同時に抜きはなちざま、ひと跳びに、堤上へ、立った。

「風魔一郎太！　言わでもの忠告をして置く。事破れて、逆上の心気をもってしては、この眠狂四郎の円月殺法は、破れぬぞ」

「黙れっ！　憤怒の剣が、どのようなものか、目にもの見せてくれる！」

一郎太は、ぱっと、双腕を、左右に拡げた。

二本の白刃は、摑んだ手から、直角に狂四郎めがけて、切先を突き出した。いわば、これは、二人の敵から、狙われたと同じことのようであった。

一郎太には、その双の手をそれぞれ、別に働かせる術が備わっているに相違なかった。

二刀の切先からひいた線が、ちょうど合する一点に狂四郎の胸があった。

しかも、じりじりと肉薄し乍ら、一郎太は、目に見えぬほどに、切先と切先をひらいて、狂四郎の胸で合する一点を狂わせず、固定させていた。

これは円月殺法を封じる構えにほかならなかった。
地摺り下段に、無想正宗を落した狂四郎は、それなり、刀身をまわすことが不可能であった。
ついに、孰れかが、搏って出なければならぬ間合いに来た。
狂四郎は、敦盛の面が、にたりとわらったように思った。
刹那――。
面の裏から、凄まじい猛気の懸声を迸らせて、一郎太は、撃って来た。
右剣が、狂四郎の咽喉を突き、左剣が、胴を薙ぐ技は、一動作をもってなされた。
あたかも、それを予期していたように、狂四郎が、首を傾けて右剣を紙一重に躱し、胴を薙いで来た左剣を、その手くびもろとも、刎ねあげに、斬り飛ばしたのは、おのれ自身も思わざる咄嗟の働きであった。
なお――一郎太の右剣は、狂四郎の頸根すれすれに、突き出されたままであった。
――どうする？
狂四郎は、対手にそう問うがごとく、蝕られた一刀を下げて、敦盛の面を瞶めていた。
一郎太は、五指を喪った手くびから、血潮をしたたらせつつ、それからさらに、数秒の固着状態を保っていたが、
「……むっ！」
咽喉奥をしぼるような声を洩らすや、すっと右剣を、直立させた。
狂四郎は、動かず、眸子を据えて、待った。
天を刺した右剣の切先が、微かに痙攣した。それは、しかし、狂四郎への第二撃とはならなか

った。

「ま、まけた！」

悲痛な呻きを発した一郎太は、大きく両足をかまえたまま、右剣を、おのが頸の後ろへ横たえるや、切先の峰へ、手のない左腕をかけた。

「眠狂四郎！　風魔一族の、敗れた者の、いさぎよい最期を見せてやる！」

自らの力で、おのが首をかき落そうとするのであった。

一瞬——狂四郎は、おもてをそむけた。そして、そのまま、歩き出していた。

かあ！

かあ！

不吉な啼き声をきいて、狂四郎は、はじめて、ふりかえった。

堤に俯伏した屍骸の上に、黒い鳥がのっていた。

主人を喪った悲しみで啼くのであったろうが、悲しみを告げるには、およそふさわしくない、まぬけたイヤな声であった。

狂四郎には、しかし、それが、かえって、あわれに思えたことであった。

凶運行

一

「ご浪士――」

ふいに、呼びかけられて、眠狂四郎が、足をとめたのは、御厩河岸の渡し場に上って、御蔵前を鳥越の方へ、ひろいはじめた時であった。

上ノ御門、中ノ御門、下ノ御門と、掘割をへだてた浅草御蔵の門があるが、ちょうど、上ノ御門と中ノ御門との中間に、掘割を背にして、大道易者が、店を張っていたのである。

「ちと、申上げたき儀がある。お立寄りあれ。見料は不要」

売卜の看板である山羊髭が、いかにも似つかわしい飄乎たる風貌が、狂四郎の気に入った。

わざわざ、盛場を避けて、人影のすくないこんな往還に店を張っているのも、変った人柄の故であろうか。

見台には、筮竹と天眼鏡と三世相大鑑一冊を置いていたが、狂四郎が前に立っても、べつに、筮竹を把りあげようともしなかった。

ただ、柔和な眼眸で、狂四郎の蒼白い、頬の殺げた異相を見あげていたが、

「凶相であることは、ご自身で承知して居られる」
と、言った。
「明日のために、今日を生きて居らぬゆえ、運を受ける必要はない」
狂四郎は、こたえた。
すると、易者は、微笑して、
「さ、その今日のことでござる。失礼乍ら、お手前様は、今日が誕生日ではありませぬかな？」
そう言われて、狂四郎は、気がついた。
易者は、微かに動いた狂四郎の表情を見のがさず、
「たぶん、お手前様は、本日、恰度いま時刻——酉の刻に、お生れなされたと存ずる。本日は、十二——酉の日にて、最上吉日。但し、生誕の儀においては、この日、酉の刻に生れると、逆に、最凶と相成る。されば、この日の酉の刻に、心して、謹慎なさらねばなりませぬ。知死期でござる」
「ふむ——」
狂四郎は、冷たく薄ら笑った。
「本命的殺の早繰りをもってすれば、今日、酉の刻、西の方角へ進めば、必ず、暗殺されるということになる」
「さ、左様でござる。お手前様が、西へむかって歩まれるのを視て、急いでお止めした次第でござる」
「もし、敢えて進んで、これを突破し得るすべがあれば、お教え頂こうか」

いやらを、むしろすすんでせおっている男と思って頂こう。曲った枝には曲った影がさす。当然の話だ。……なんとなく、西へむかって歩いていたのも、因果のせいであるとすれば、これが判ったからには、意地でも、本命的殺にさからってみようではないか。殃害覿面というのであれば、こちらは、面白いと言おう。……ただ、わざわざ、呼びとめて頂いたのだ。敢えて犯すわたしを、止めだてできぬと知って、なにか、忠告があれば、きかせて頂こう」

「わたしは、君子ではない。前世の因果やら、親がもたらした余殃やら、おのが悪業の報いの禍

「君子、危うきに近よらずでござる」

易者は、しばらく、目蓋を閉じていたが、

「使うべき時に、剣を使わず、抜くべからざる時に、剣を抜く――。暗殺をまぬがれる唯一のすべは、これでござろうか」

と、呟くように告げた。

「耳にのこして置こう」

狂四郎は、つとはなれて、歩き出した。

易者は、その後ろ姿へ、別人のように鋭い視線を送った。

狂四郎は、その視線を背中に感じ乍ら、

――あの易者が、風魔の軍師の指令を受けた者なら、よけいなお節介というものだが……。

と思っていた。

二

御書院番組や大御番組など、旗本大身の組屋敷のならんだ元鳥越町をまっすぐに抜けると、三味線堀に至る。

そこに架った転軫橋を渡って、左折すると、佐竹右京大夫、松平下総守、宗対馬守、堀石見守などの上屋敷の長い高塀がつづく。

つるべ落しの秋の夕陽が、狂四郎の影法師を、広い往還に匍わせただけでは足らずに、その高塀にまで、折りまげて、映した。

この一円を向柳原といい、神田川に架った新し橋に通じるのだが、左右が武家屋敷ばかりなので、町家通りとは反対に、この時刻は、かえって、ひっそりとして、狂四郎の前後に、人影もなかった。

堀石見守の上屋敷の前を過ぎ乍ら、高塀の上に拡がり出た巨樹の枝葉に、残照があかあかと溜っているのを、美しいものに眺めた狂四郎は、

——どうやら、易者にだまされたようだ。

と、苦笑していた。

敵が襲って来るとすれば、三味線堀がいちばん格好だったのである。

ここを過ぎると、医学館の練塀になり、そのむこうは神田佐久間町四丁目残地、裏町、本地とつづく町家通りになる。宵のあわただしい人の動きが、もうここまでつたわって来ているのである。

医学館の門前に、患者を送って来たらしい駕籠が一挺据えてあるが、それがいかにも、しんとして、静かなものに眺められるのも、彼方の町家通りのにぎわっている気配と比べられるせいであろう。

狂四郎は、ふところ手で、ゆっくりと、その駕籠の横を行き過ぎようとした。

とたんに——。

駕籠のたれが、さっと、はねあげられて、白いものが、躍り出て、狂四郎の行手をふさいだ。

束の間の明るい光の中に、それは、滑石のように冷たく艶やかな光沢を映えさせた若い女の全裸像であった。

羞らいの色もみせず、怖れ気もなく、四肢を大きく拡げてみせたのであった。

切れ長な眸子の異様に熱っぽく耀く光と、肩までみだれかかった豊かな黒髪と、ふっくらと胸に盛りあがった隆起と、そして、大の字にひらいた四肢の、のびのびと発達したみごとな直線が、狂四郎の眼裏に納められた——一瞬。

唸りを発して、一本の矢が、飛んで来た。

裸女に目を奪われた狂四郎に対する狙撃は、医学館の向い側にある旗本屋敷の屋根から、なされた。

矢は、狂四郎の胸もとを——着物一枚を、ぐさと縫った。

と同時に、医学館の門の屋根に、二個の黒影が、出現して、白刃を閃かせて、翔け降りて来た。

狂四郎は、奔って、旗本屋敷の前を流れる一間幅の溝渠の縁に立った。

狂四郎としたことが、満々と水をたたえた溝渠の底に、伏敵がいるのを直感しなかったのは、不覚であった。

敵は、空にもいれば、水の中にもいると、さとるべきであった。

宙を躍って来た敵二名を前方に置き、充分の余裕をもって、第二矢、第三矢の飛来に、身を備えた狂四郎は、背後の流水の中に対してのみは、神経を配るのを怠った。

「ええいっ！」

正面からの猛撃が来た。

狂四郎は、当然、抜きつけの迅業を使うべきであった。それをなさず、身をねじって、敵をよろけ込ませるや、手刀で、地べたへ悶絶させたのは、咄嗟に、易者の忠告を脳裡によみがえらせていたからであったろうか。

「使うべき時に、剣を使わず、抜くべからざる時に、剣を抜く——。暗殺をまぬがれる唯一のすべは、これでござろうか」

易者は、そう言ったのである。

第二の敵が、正面の地歩を占めて、じりじりと間合いを詰めて来た。

狂四郎は、両手を、空けたまま、待った。

敵は、大上段に、ふりかぶりざま、

「抜けっ！」

と、叫んだ。

応ぜず、狂四郎は、目を細めた。

「とおっ！」
気息充ちた懸声もろとも、きえーっと、宙を斜線に截って来た。
間髪の差で、狂四郎は、体をひらくや、第一の敵に呉れた手刀を、その敵の頸根にも搏った。
その刹那であった。
背後の水中から、一槍が、飛魚のようにはねあがって来たのは——。
「うっ！」
したたかな衝撃を、左肩に受けて、狂四郎は、一瞬、棒のように五体を固着させた。
水上に、胸まで浮き上がった伏敵は、第二撃を加えるべく、さっと、槍を抜きとった。
瞬間、狂四郎は、身をひるがえしざま、引かれようとする槍の螻蛄首を摑むや、凄まじい気合を迸らせて、奪いとった。
伏敵は、槍が大きく回転して、穂先がおのれを狙って来るのをみとめつつも、水中に在るかなしさで、防禦の体勢をととのえるいとまもなかった。
胸いたをふかぶかと刺しつらぬかれた伏敵が、水底へ沈み、みるみる、赤い藻のように、血潮を湧き上がらせて来た時、狂四郎は、深傷を負うた者とも思われぬ静かな足どりで、医学館にむかっていた。
そこに、旧知の蘭医曽田良介がいるのを、思い出したからである。
裸女をとび出させた駕籠は、なお、そこに、ひっそりと据えられていた。
そのわきを通って、門へ入ろうとした狂四郎は、駕籠の中から、
「もし——」

と、呼ばれて、頭をまわした。

いつの間にか、きものをつけた女であった。洗い髪に横櫛をさし、媚茶の縮緬を、肩から滑り落ちそうに、仇っぽくまとうて、白繻子の半襟にもまけぬ白い肌を浮きあげ乍ら、にっこりした立姿は、昏れなずむ薄明りの空を背景にして、みごとな一枚の浮世絵であった。

かかげた江戸褄のかげから、一刷毛なでたようにこぼれた加茂川染の長襦袢の緋色が、なまめかしく美しかった。

「おけがをなさいました。お送り申しましょうか」

平然として、そう言った。

「どういうのだ？　まだ、何か、こんたんがあるのか？」

「いえ——。あたしは、ただ、何がなにやらわからずに、たのまれて、はだかになっただけの莫連ものでござんす。……女は、強い男に惚れるもの。それだけの話でござんす」

「待つ気があれば、待っていてもらおうか。手当をしてもらったら、出て来る」

狂四郎は、門をくぐった。

曽田良介は、さいわい、在室していた。

案内してもらって、その部屋に入ると、まず目につくのは、壁いちめんに貼りつけてある毒々しい赤と青で彩られた人体解剖図と、その前に立てられた等身大の人体模型である。

肺、心臓、胃、脾、神経……。

人間を生きさせ、活動させているこれらの臓腑を観せられる毎に、狂四郎は、一種のばからし

さをおぼえるのを常とした。

いつか、几上にのせてある奇妙な白い、ぶよぶよとした塊を、何かと問うと、獄門にした囚徒の頭蓋を割ってとり出した脳髄という返辞に、あやうく嘔吐を催しそうになったことがある。

「この塊が、怒らせたり、笑わせたり、哭かせたりするのですよ。陰謀をたくらんだり、異性を恋したり、殺意を起したり、金儲けの手段を思いついたりするのが、このしろものですからね。ふしぎだとは思いませんか」

良介から、そう言われて、狂四郎は、おのれの頭蓋の中に、これと同じものが在って、蠢いているのを感じると、堪え難い嫌悪にかられずにはいられなかったものである。

こういう腑分に熱中している良介という人物にも、不可解をおぼえずにはいられなかった。

狂四郎が座に就くと、良介は、蘭書の山の中から、ふりかえって、眉宇をひそめた。

「どうなされたのです？　加減がおわるいようですね」

「いま、おもてで、槍で、刺された」

狂四郎は、片肌を脱いでみた。

「あるいは、穂先に毒が塗ってあったかも知れぬ。要心のために、お手前の手当をたのみたい」

「承知しました」

すぐに、傷口を調べた良介は、黙って次の間に入って行った。そこには、和蘭製の顕微鏡やら薬剤を計る桝やら、手術用器具やら各種の舶来貴重薬品が、ところせましと置いてあった。ずらりと並んだ小瓶には、薬品名が記してあった。醋酸モルヒネ、硝酸ストリキニン、シンコニン、草寧、安息香酸、亜砒酸、第一沃汞……。

良介は、それらのうちの一瓶と、手術用器具を携げて、とってかえすと、手ばやく手当をはじめた。
狂四郎は、端坐したまま、おそろしい苦痛に堪えて、一言の呻きも洩らさなかった。
良介は、狂四郎が、肌を着物に入れるのを眺め乍ら、
「今夜は、高い熱が出るかも知れません。毒は消しましたから、安心ですが、要心のために、ここに泊られたらいかがでしょう」
と、すすめた。
狂四郎は、笑って、
「おもてに、看護してくれる女が待っている。但し、敵のまわし者だから、寝首をかかれる懸念があるが……」
と言った。
「不死身だ、貴方は――」
「わたしが、どこかで殪れた、ときいたら、かけつけて頂こう。どんなつくりかたになっているか、屍骸の腑分をおねがいしよう」
狂四郎は、おもてへ出た。
女は、約束通り、待っていた。
「お前さんの巣へ、つれて行ってもらおうか。接待に文句はつけぬ。どのように扱ってくれても、結構だ」
そう言って、駕籠に乗った。

おのが誕生日に、大凶と出ている本命的殺の方位へ進むことで、狂四郎は、運命を試す肚（はら）であった。

……駕籠にゆられているうちに、熱が出ていた。

三

――仙台堀を下っている。

狂四郎は、そう思っただけで、あとは、気にとめぬことにした。

やがて、駕籠がとめられて、出ると、潮の香がした。

入船町の横丁の新道と知れた。

同じような構えの家が軒を並べている。上位の妾宅（しょうたく）があつまった一郭なのだ。

舟板塀の上の見越しの松に、月がかかっていた。狂四郎の眸子（ひとみ）に、月かげが二重に映った。

みちびかれたのは、方丈の茶室であった。鑪（いろり）に蘭麝（らんじゃ）がたかれ、古銅の釜（かま）には、湯が沸（たぎ）って、笙（しょう）の音をひびかせていた。秋の花が活けられた花瓶（かびん）を一瞥（べつ）しただけでも、ただの妾宅ではない、と判った。その鉄の色は古奇をきわめ、碧（みどり）が寂（さ）びて、ゆたかな風韻をふくんでいる。

狂四郎は、無想正宗を腰からすてると、仰臥した。

錦で括（くく）った枕が、そっと頭にあてがわれるまでは、意識があった。

女は、枕もとに坐って、その寝顔を、じっと瞶（みつ）めていた。

――眠狂四郎ともあろう使い手が、こんなに、他愛なく、ねむってしまっている！

女には、それが、信じられないようであった。

しかし、このねむりは、うそではないのだ。毒が全身にまわった証拠であり、このまま、ねむりつづけさせれば、明日の夕刻あたりには、息をひきとることを、女は知っていた。

しかも、死に追いやるだけの、ただの毒ではないのだ。ねむらせ乍らも、女が欲するままに、男のつとめをはたさせる作用をし、それを異常に強く永く保たせる効能を有っているのであった。

般若姫は、今際の際に、この強い男から、なさけをもろうた、という。こんどは、この男の最期に、わたしが、なさけをくれてやるのだ。

女は、風魔一族のひとりであった。その執念と欲情は、やはり尋常ではなかったのである。

女は、両手をさしのべて、狂四郎の殺げた頬を包むと、ゆさぶってみた。

なんの反応もなかった。掌は、火にあたったように熱かった。

「熱を出すとは、きかなんだけど……」

ちょっと不審の呟きをもらした女は、しかし、そのことにさほど気をとめず、立ち上がって、鼠の厚板の帯を解き、蛇のように足もとにクネらせてから、媚茶縮緬を、するりと、肩からすべり落した。

燃えたつような長襦袢が、爛熟した堅肥りの肢体の豊かな曲線をあらわに描いた。

なんとなく、ふっと、妖しい微笑を、目もとに刷いた女は、やおら、狂四郎に添うて横臥すると、片腕で、頸を巻き、片手を、ためらわずに、前へすべり入らせた。

この営みの場合、殆ど常に男の側の振舞いである淫靡な戯れを、女は、行いはじめたのである。

ただ、女らしく、目蓋だけは、閉ざしたが……。

およそ、四半刻も、戯れは、つづけられた。

やがて、女は、その五指の蠢きの効果を得て、自ら長襦袢と水色の二布を撥ると、むっちりと宍の盈ちた太股をあらわに剝いて、跨った。

その時、はじめて、それまで死んだように、指一本動かさなかった狂四郎が、昏冥の底で悪夢にうなされるように、苦しげに眉根を寄せると、右腕を、わが胸の上に置いた。

女は、無意識の動きをみせたそれを、べつに疑わず、豊腰を一捻りした。

そして、女が、それを遂げた瞬間、狂四郎は、微かに呻きつつ、右肩をよじった。

女は、平蜘蛛のような姿勢で、狂四郎に掩いかぶさって、頬へ頬をつけ、恍惚に堪えぬ甘い息を、吐いた。

したがって、狂四郎の左手が、肩の疼痛を怺えつつ、無想正宗の下緒を摑んで、すこしずつ、すこしずつ、畳の上を滑り寄せていることに、全く気がつかなかった。

胸の上に置いた右腕は、その柄を摑むべく、待ちうけていたのである。そのために、右肩も、よじった。

ついに——。

左手は、無想正宗を、曳き寄せた。

右手は、その柄を、しっかと摑んだ。

瞬間——狂四郎は、まなこをひらいた。高熱に潤んだ眸子の光は、名状し難い業念を滲ませて、宙に放たれた。

女は、あたかも、この瞬間を待っていたように、烈しい振動を起した。悦楽の息づかいもせわしく……。

狂四郎は、気息を詰めるや、おのが胸と女の胸に、ぴったりと押し挟まれていた右腕を、おそろしい迅さで、引いた。

白刃は、胸の双つの柔らかな隆起を、まっ二つに割って、走り抜けた。

女は、凄まじい絶鳴を迸らせて、弓なりにのけぞると、にぶい響きを、畳の上にたてた。

やおら、身を起した狂四郎は、眼前が紫色に烟る眩暈におそわれて、片手で、額を押え、ほんのしばし、そうやって、じっとしていなければならなかった。

ようやく、狂四郎が顔を擡げて、視線を落すと、女は、意外にも、静かなまなざしを仰がせていた。

死に臨んで、苦痛はないようであった。

「…………」

「…………」

数秒のあいだ、視線と視線は、宙で合っていた。

女が、求めて、わななく双手をさしのべた。

狂四郎は、抱き起し、胸へ凭りかけてやった。

まぶたを閉じた女の顔には、安らかな微笑が泛んだ。そして、それは、胸の鼓動が消えはてても、なお、しばらく、のこっていた。

次の日の午(ひる)すぎ、眠狂四郎は、浅草御蔵前の通りへあらわれた。
そこに——。
売卜の店は、出されていた。
しかし、近づいてみると、見台にむかって腰かけているのは、昨日の易者とは似ても似つかぬ、貧乏くさい、俗臭ふんぷんたる男であった。
「昨日は、別の御仁がいたが……」
と、問うと、易者は、訝(いぶか)しげに、
「昨日は、所用があって、休んで居りましたがな」
と、こたえた。
はなれて歩き出した狂四郎は、口のうちで、呟いていた。
「使うべき時に、剣を使わず、抜くべからざる時に、剣を抜く——か」
あの易者が、何者であったかは知らぬ。わかっているのは、その言葉の正しさだけであった。

侍の子

一

江戸の朝は、早い。
朝陽がさしそめた頃には、武家屋敷の門も、町家の大戸もひらかれて、往還は、きれいに掃きよめられ、水が打ってある。
殊(こと)に、武家屋敷門前は、主人の好みによって、箒目(ほうきめ)を、波型に、あるいは渦巻型に、なかには凝って、亀甲模様につけていたりした。
したがって、下級の者は、たとえ外からの使いの者でも、よほどの急用がないかぎり、最初に踏んで乱すことは遠慮した。遠まわりして、門番所に近づき、案内を乞うと、潜(くぐ)り門をくぐった。
早朝に、堂々と、箒目を踏んで、表門を入って来るのは、公儀および同じ格式以上の家からの使者にかぎられていた。
西丸老中水野越前守忠邦の上屋敷ともなれば、まず、このような使者の訪問も、一年に二度か三度であり、主人の登城までは、そのまま、美しく、朝陽に、箒目を浮きあげている。
門番所は、その時刻までのひととき、見張りの必要もないくらいであった。

ところが、今朝、生あくびをかみころし乍ら、何気なく、曰く窓から、外を見やった門番は、あっとなって、あわてて、とび出した。

あきれたことに、乞食としか見えぬ小さな少年が、のこのこと、表門を入ろうとしていたのである。

「こらあっ！　小僧、気でも狂れ居ったか！」

血相かえて呶号する門番を、少年は、平然として、見かえした。

頭髪は、蓬のように、ぼうぼうとみだれ、皮膚は日焼けてまっ黒になり、つんつるてんの穢ない布子からつき出した手足は、埃にまみれていた。

しかし、乞食でない証拠に、腰には、飾りのある小刀を帯びていた。まっ黒な顔の中で、きらきらと光る眸子は、澄んで美しかった。

「作法をわきまえぬ下賤の小僧ゆえ、このたびは、見のがしてくれる。早々に立ち去れ！」

門番がきめつけると、少年は、かぶりをふって、

「わしは、さむらいの子じゃ」

と、言った。

「たわけ！　いかに素浪人の小伜にしても、その風体は、むさくるしすぎる。それでは、不浄門も、くぐらせることは、叶わぬぞ。ぐずぐずいたすな。目ざわりだ！」

「わしは、御当家側頭役　武部仙十郎殿に会いに参った」

少年は、言いはなっておいて、すたすたと入って行こうとした。

「こやつ！」

門番は、六尺棒をふりかぶった。
すると、急に、空に、烈しいはばたきの音がして、さっと白い影が舞い降りて来た。
大きな二羽の丹頂鶴に、眼前に立たれた門番は、あっけにとられて、二三歩あと退った。
鶴は、禁鳥であり、将軍家以外には、これを獲ることは許されない。傷をつけても、死罪である。
少年は、にこっとすると、
「ご免――」
と、ことわって、さっさと通って行った。
門番の目には、夫婦鶴を左右にしたがえた少年が、なにかの化身のように映った。
屋敷内をさわがせておいて、やがて、少年は、武部仙十郎の長屋の玄関に立った。
用人の報らせで、自ら足をはこんで、現われた仙十郎は、
「ほう、そちが、田鶴誠十郎の子息か」
と、言いあてた。
日光山中で、風魔一族と闘って深傷を負うた狂四郎が、一人の少年から救われたことは、狂四郎の口からきかされていた。
老人は、その父の公儀天文方田鶴誠十郎とも、面識があった。天才であるが故に、致仕して、日光山中にこもった挙句、横死した噂も、耳にしていた。
「鶴太郎と申します」
少年は、名のって、ぺこりと頭を下げた。

「上がるがよい」
促すと、少年は、かぶりをふって、
「眠狂四郎殿のところを、教えて下され」
と、言った。
「狂四郎に会いとうて、出て参ったか？」
「うん――」
「では、駕籠で参るがよい。用意してつかわそう」
「うんにゃ。わしは、歩いて行く」
少年は、肯かなかった。
――父親に似て、この幼さで、もう、鋭角をのぞかせた面魂を示すとは、たのもしい。
仙十郎は、図面を描いて、渡してやった。
ふところにしまって、歩き出した少年は、
「あ――忘れていた」
と、呟いて、ひきかえして来ると、
「風魔の兵らが、一人のこらず、砦を出て、山を降りて来申した。きっと、騒動を起すつもりである。ご公儀では、かまえて、油断めさるな」
と、告げた。
居間にもどった仙十郎は、二三度、おのが膝を打って、
「出来て居る！　老蚌珠を生ず、じゃ。親は亡くとも子は育つ。この父にして、この子あり。…

……うむ！　出来て居る！」

と、三嘆した。

この皮肉な老人を、文句なく、感服させたのは、けだし、少年がはじめてであった。

さて、この日の朝は、門番にとって、まことに、厄難であった。

少年が、立ち去って、半刻ばかり経った頃あいであった。

一挺のかなり立派な網代駕籠が、さしかかって来たかとみるや、なぜか、門前で、ぴたりと、停められた。

――何様が、出て来るのであろう？

興味をもって、眺めていた門番は、一瞬、どきっとなった。

駕籠の引戸が、ほそ目に開けられるや、するすると、匐い出して来たのは、数尺ともみえる蛇であった。

砂が描いた波の上を、泳ぐように、鎌首をにょっきりと立てて、非常な迅さで進んで来はじめたが、奇怪なことに、下緒をくわえて、一振の刀を曳きずっていたのである。

「く、くせもの」

生来、蛇の嫌いな門番は、蒼白になって、その場に立ち竦んでしまった。

その隙に、駕籠は、消え去り、蛇は、門を突破して来た。

門番が、絶叫した時には、すでに、蛇は、門径を二間も進み入っていた。

大勢の家臣が殺到して来るや、蛇は、あたかも、それを待っていたように、刀の下緒を口からはなすや、宙を二間も跳躍して、冷たいうろこを、朝陽に煌めかせておいて、矢にも似た迅さ

で、門外へ、遁(のが)れ去ってしまった。

二

今朝も――。

小さな庭に、美しく咲いた白菊を、ちさは、座敷から、縫物の手をうごかし乍ら、眺めていた。

心あてに折らばや折らん初霜の
　おきまどはせる白菊の花

躬恒(みつね)の歌を思い浮べたりしているちさの心は明るく、はなやいでさえいた。

狂四郎が、旅から戻って来て、この家に寝たのは、一夜だけで、また、行先も告げずに、ぶらりと出て行ったきり、もう十日あまり過ぎている。

しかし、狂四郎が、遠く旅路を歩いているのと、この江戸のどこかにいるのとでは、ちさの気持は、まるでちがったものなのである。

こうして坐っているあいだにも、玄関の格子が、いや、そこの木戸が開いて、その姿が現われるという期待があるのである。

出て行く朝、狂四郎は、障子が明るく陽ざしを映した中で、ちさを抱いて、緋縮緬(ひぢりめん)をひろげさせた時、

「……白菊に似た」

と、ひくい声音で肌(はだ)の美しさを、ほめたものであった。

その一言が、いま、ちさの耳に、甦(よみがえ)っていた。

その人にさせられた恣なわが姿態が眼裏に泛かんで来て、羞恥が、乳首に、微かな疼痛を生んでいる。

ぴったりと合せた太腿の谷間を、むずがゆい戦慄がつたって、下腹部へ、忍びあがって来る。

生きの血潮は、はなやぐのであった。

にわかな、大きな物音が、ちさを、われにかえらせた。

「まあ！　鶴が！」

ちさは、目を瞠って、腰を浮かせた。

白菊の咲きみだれる中へ、ゆるやかに、大きな番い鳥は舞い降りて来た。

「どうしたというのであろ？」

ちさもとまどったが、鶴たちもまた、降り立ち乍ら、どうしてこんなところへ降りたのだろう、といぶかるように、長い首を、きょときょとと、まわした。

木戸が開いて、うす汚れたみなりの少年がすたすたと入って来るや、鶴たちは、はじめて、安堵したように、霜土の中の虫をあさりはじめた。

「そなたの飼っている鶴なのですか？」

思いがけぬ吉鳥の到来に、ちさは、胸をはずませ乍ら、訊ねた。

「うん――」

少年は、頷いて、

「眠狂四郎殿に会いに来た」

「どこから、来ました？」

「日光の山の奥の、奥から……」
「まあ、そうですか」
狂四郎から、何もきかされていないちさは、このような少年に、はるばる慕うて来られる狂四郎の優しい一面に、微笑して、いそいそと立ち上がると、
「主人は、ただいま、留守して居りますけど、上がって、お待ちなさい。幾晩でも泊ってもろうてかまいませぬ」
と、言った。
少年は、にこりともせず、くるっと、踵をまわして、井戸端へ歩いて行った。
ちさが、あわてて、濯ぎならじぶんが持って来てあげよう、と言うと、少年は、かぶりをふって、小刀だけをちさに渡しておいて、くるくると帯を解き、布子を脱ぎすてた。
微笑ましい光景は、鶴たちが、あるじのすることを見てとって、そばへ寄ると、帯や布子を、その長いくちばしで、受けとったことであった。
少年は、頭から、釣瓶の水を、ひっかぶった。
ちさは、いそいで、食事のしたくにかかった。
食膳にむかった少年の食欲は、旺盛であった。
ちさは、それを眺め乍ら、愉しかった。たのもしい弟ができたような気がした。
「そなた、日光の山の奥の、奥に住んでいると言いましたが、一人きりで——？」
「うん、一人きりじゃ」
「淋しゅうありませぬかえ？」

「淋しゅうない」
少年は、柿にかじりつき乍ら、かぶりをふった。
「えらいこと！」
「えらくはない。あたりまえのことじゃ」
「まあ！」
ちさは、笑い出した。
少年は、ちさを見かえすと、
「女子は駄目じゃ。女子は、ひとりぼっちでは、くらせぬものじゃ」
と、大人びた口のききかたをした。
「そうですね。ほんとに、そうですね。女は、だれかにすがっていなければ……」
ちさは、俯向(うつむ)いて、
——わたくしは、しあわせ者。眠狂四郎という強いお人に、すがっている。
と、胸のうちで、呟いた。
そのおり、玄関の格子が開いて、案内を乞う声がした。
ちさが、立って行くと、それは、武部仙十郎の用人であった。細長い包みものを、かかえていた。
「鶴太郎と申すこどもが、参って居りませぬか？」
「はい——」
「主人から、これを渡して参れと、申しつけられました」

「ご足労でございました」
ちさは、居間にもどると、少年に、手渡した。
「わしに何をくれるつもりであろ？」
少年は、包みを開いた。
あらわれた一振の刀を、一瞥した刹那、ちさは、
「あ――こ、これは、無想正宗！」
と叫んだ。
書状が添えてあった。
鶴太郎は、それを披いた。論語の素読も、すでに、独りで学び終えている少年であった。
「風魔一族が、眠狂四郎を生捕ったる証拠に、渠が愛刀を送り届けて来たれり。この差料なき渠は、汝が双鶴をしたがえざるに等し。汝に、能く渠が手に、この差料を渡す知恵とすべありや否や。力なき老翁は、紅顔に、ただ依頼するのみ」
鶴太郎は、くりかえして読み了えるや、すっと、立ちあがっていた。無想正宗を、その手に携げて――。

三

風魔一族の隠れ屋敷にあっては――。
七人若者組のうち、生きのこった次郎太と四郎太が、出府して来た夢買いの老人に、憤怒の形相凄まじく、左右からつめ寄っていた。

夢買いの老人が、両名に無断で、捕虜にした狂四郎の愛刀無想正宗を、武部仙十郎の許に送り届けたばかりか、この隠れ屋敷の在処まで教えたことを、難詰していたのである。

狡猾な策略をもって、ついに、狂四郎を生捕ったのは、次郎太と四郎太であった。夢買いの老人の、勝手な、さし出がましい振舞いは、断じてゆるせなかった。

　老人の申し条は、

「眠狂四郎は、これまで、ただの一度も、卑劣の奸計を弄したことはない。敵として、常に、堂堂と、われら一族とたたかって来た。しかも、いつの場合も、独力をもってし、他人の援けを求めては居らぬ。……敵乍らあっぱれな兵法者を、卑怯な術策をもって、虜囚としたことは、風魔の名に慙じなければならぬ。さりとて、虜囚とした者を、いまさら、むざと解き放つわけにも参らぬ故、その後見たる武部仙十郎に、救い出すてだてがあらばや、と問うたまでのこと。いわば、これは、風魔の面目を保持せんがための処置にほかならず。たとえ、武部仙十郎が、十万の軍勢をもって襲い来ろうとも、みじんもたじろがず、迎撃してこそ、始祖秀忠公の遺訓を奉ずる者の誇りを抱く証左と申すべき――」

　それであった。

　しかし、次郎太、四郎太には、こうした武士道の吟味は、馬の耳に念仏のたとえ通り、全く通じなかった。

　風魔一族第一の手練者ともいうべき一郎太をはじめ、三郎太、五郎太、六郎太、七郎太をつぎつぎと、斬った眠狂四郎である。一族が、十年の年月を費やして、必死に捜しもとめていた闕所物戎器を、烏有に帰せしめ、さらに、苦心の末、日光東照宮から盗みとった秘帖をも、灰にする

ことを余儀なくせしめた眠狂四郎であった。

一寸刻み、五分試しにしても、あきたらない憎むべき敵であった。

両名は、毒吐(どくづ)くだけ毒吐くと、目くばせしあって、座を立った。

老人は、はっとなって、

「待て！　自儘(じまま)の所業は許さぬ！」

と、叫んだ。

両名は、冷笑した。

「止めだてするなら、老人、お手前様から、血祭にあげるぞ！」

「この儀ばかりは、さかしらな説法は無用だ！」

老人は、もはや、こうなっては、この若者たちは、狂った野獣と化して居り、手がつけられぬことを知っていたので、憮然(ぶぜん)として、見送るよりほかなかった。

四

狂四郎は、この屋敷の一隅に建つ蔵の中に、全身をぎりぎりにしばりあげられて、芋虫のようにころがされていた。

左肩に蒙(こうむ)った槍傷の毒が、意外に執拗(しつよう)に体内にのこり、曽田良介の手当を受けても、高熱がひかず、そのまま、良介の私宅に臥せていたところ、次郎太、四郎太の連署で、良介の身柄を拉致(らち)した旨の書状が届けられ、やむなく、狂四郎は、起き上がって、指定の場所におもむいたのであった。

そこに——良介が、十指を十本の蠟燭(ろうそく)で焼かれて、呻(うめ)きたてている光景があり、狂四郎は、無

想正宗をすてなければならなかったのである。

とらわれの身になっても、死ぬことは、一向におそれぬ男であった。

いつ、どこで、果てても後悔せぬように、その日その日を、生きたいように生きて来たのである。

重い鉄の扉が、にぶい軋りをひびかせて開かれ、次郎太、四郎太が入って来るのを眺めた狂四郎は、

——いよいよ、おれの息の根を止めに来たようだ。

と、直感した。

しかし、死ぬことはおそれなくとも、むざむざ、このまま、木偶のように、なぶり殺されるのは、まっぴらであった。

危機をのがれる機会をとらえようとこころみるのは、人情であろう。

「お主ら、わたしを、縛ったまま、斬りきざむ所存らしいな。鼻を殺ぎ、目玉を抉り、舌を断つか？」

いきなり、先手を打って、ずばりと言い当てた。

「お主ら、わたしの四肢を自由にするのが、おそろしいか？　小児が、野犬の口をしばって、なぶるように、だ」

「黙れっ！　貴様ごとき痩犬いっぴき、何条もって、おそるるに足ろうか！」

「こちらは、手負うた上に、疫病のように熱にあえいで居る。それをなお、このように縛りつけているではないか。怯懦でなくて、なんであろう」

「よしっ！　うぬが、のぞみにまかせて、縄を解いてやろう」
「乞うて、解いてはもらうまい。ただ、十六夜(いざよい)の月を仰いで、死にたい風流をのぞんでいるまでだ。どうやら、庭には、木犀(もくせい)も咲いているようだ。月の光が、匂いを、ここまで運んで来た。人並みに、辞世もつくりたいものだ。刃(やいば)をあびる前に、きかせよう」
次郎太と四郎太の、意識の底には、やはり、夢買いの老人の申し条が、のこっていたものとみえた。
狂四郎は、全身のいましめを解かれ、ただ後ろ手だけに縛られて、庭へ曳き出され、木犀の喬木の前に、坐らされた。
そして、辞世の一首をつくる時間を与えられた。
次郎太と四郎太は、狂四郎にいかなる秘術が用意されているかも知れぬ、とみじんの油断もなく、ともに、抜きつけの気合をひそめて、凝視した。
狂四郎は、ただ、薄雲を縫って、走るように移行する月かげを仰いで、微動もせぬ。
そのあまりの永さに、苛立(いらだ)った次郎太が、吶号をあびせようとした瞬間、狂四郎は、
「できた」
と、口走って、視線を地上へもどした。
この短い一言が、両名に、ほんのわずかな隙(すき)を生ぜしめた。
次の刹那、狂四郎の五体は、たわめられていた鋼(はがね)が、はねかえるように、ひと跳ねして、喬木のむこう側へ、遁(のが)れた。
「おのれっ！」

「うぬがっ！」

次郎太は右側から、四郎太は左側から、悪鬼の勢いで、挾撃しようとした。

だが――。

奔足を、あっと、釘づけさせたのは、意外にも、狂四郎が、奇蹟のごとく、いましめの縄を払ったのみならず、その右手に、白刃を摑んでいたからであった。

喬木を背にして、ぴたっと地摺り下段にとりつつ、狂四郎が放った声音は、冴えていた。

「風流を解さぬお主がたに、辞世をきかせるのは、止めておこう。そのかわり、円月殺法をごらんに入れる」

そうあびせられて、両名は、思わず、浮足立った。狂四郎が、幻術を使う仙人とも見えたのである。

かれらは、知らなかった、二羽の丹頂鶴が、月空の下を音もなく翔けて、無想正宗をかかえた少年を、運んで来るや、木犀の喬木の上に置いたことを――。

鶴太郎は、狂四郎が、跳び遁れて、真下に来るや、無想正宗を、一直線に投下したのである。

狂四郎は、流星のように落ちて来る白刃に、両手を縛った縄をあてて、切り断たせて、これが柄を摑む迅業をやってのけたのである。

この手筈は、かしこくも、鶴太郎自身がたてて、その旨記した紙片を、鶴の一羽にくわえさせ、蔵の高窓から、落させていたのである。

狂四郎がなすべきことは、いかにして、喬木の下にわが身を置くか、ということだけだったのである。

不義妻

一

なんとなく、ふらりと江戸を出て、鎌倉街道をひろい、足のおもむくままに、金沢の勝地をもとめて、巨勢金岡（こせのかなおか）が、摸（も）し画かんとして及ばずして筆を投じた丘陵へのぼった。

能見堂という禅宗の草庵があり、堂前に、巨松が天を摩していた。

巨勢金岡が、この樹下で筆を投じたので、筆すての松と謂（い）う。

眠狂四郎は、その樹下に彳（たたず）んで、肌寒（はだざむ）い風に吹かれた。あたりに、人影はなく、頭上に、松風が鳴っているばかりであったが、かえって、当人の好みに適（かな）っていた。

南から西北にめぐって、みな山である。

東は、滄溟（そうめい）につらなって、沖を行く真帆片帆が、美しい。

瀬戸の神祠は、水に臨み、称名の仏閣は、山に傍（そ）う。漁家は樹間に見えかくれ、島嶼（とうしょ）は波間にあらわれる。

初冬の冷たい陽（ひ）ざしの中で、これは、孤独で展望するにふさわしい勝景であった。

うしろに、人の気配がしたので、狂四郎は、感興を殺（そ）がれて、歩き出そうとした。

「遠眼鏡を所持して居ります。おつかいなさらぬか？」

穏やかな声音に、ふりかえると、総髪を観世縒でむすんだ、儒家風の人物であった。こちらより五つ六つも年下であろうが、学者らしい叡知をしめす澄んだ眸子を当てられると、無頼無為の浪人者は、ふっと、忸怩たる意識をおぼえた。

鄭重に、厚意を謝辞して、歩き出した。

しかし、狂四郎は、ものの十歩も行かぬうちに、足を停めなければならなかった。

啜号が噴いて、その人物に、殺気が迫ったからである。

視線を移してみると――。

それは、同年配ではあるが、対蹠的に、武辺という言葉のぴったりする巨漢であった。熨斗目をつけているところをみれば、身分は高いに相違ない。髷は、旗本のものであった。

「左門、二十日も、貴様を捜しもとめたぞ！」

巨漢は、すでに、抜き撃たんずの構えを示しつつ、

「理由は、口にするのもけがらわしい。おのが胸に問え！　早苗は白状し居ったぞ！　……左門、抜け！　勝負せいっ！」

と、吼えるように、あびせた。

左門と呼ばれた若い儒者は、しかし、黙然として、静かに立っているばかりであった。

「左門！　腕におぼえがないとは言わせぬぞ！　儒家に無用の剣道場がよいをいたして居ったことを知って居るぞ！　脇差でたたかうことに不安ならば、そこにいる浪人者から、太刀を借りて、むかって参れ！」

「………」

左門は、なおも、沈黙をまもっている。

巨漢は、ついに、ぎらっと、抜きはなって、高め中段に位つけた。

「立ち合わぬと申すならば、成敗してくれる！」

そう、うそぶいた。

狂四郎は、それを視て、近づいた。

「おのぞみならば、わたしの差料をお貸しいたそう」

左門は、対手に、冷たく冴えた眼眸を据えたなり、かぶりをふった。

「お貸し下さるかわりに、この立合いを、ご検分下され」

狂四郎は、自信があるものと思って、しりぞいた。

左門は、おのが五体が、敵の刃圏内に容れられた瞬間、抜く手も見せぬ迅さで、脇差を鞘走らせて、ぴたっと、青眼に構えた。

——できる！

狂四郎は、合点した。

むしろ小柄な、痩身で、六尺ゆたかな巨漢の太刀に肉薄された姿は、風前の灯とも見え乍ら、狂四郎の目には、心気一如の無念無想ぶりと映り、これは、たたかわずして、勝敗は明白と見えた。

対手の技倆を知らぬは、当の討手だけであった。

「行くぞ、姦夫！」

おめきざま、大上段にふりかぶって、大きく踏み込みざま、きえーっ、と刃風を唸（うな）らせた。

ぱあん、と刃金の焼ける匂いとともに、どどっとよろめいたのは、巨漢の方であった。

「貢（みつぐ）！　……どうしても、わしが、ゆるせぬのか？」

撃ちかえした左門の方が、悲痛な声をもらした。

憤怒に屈辱を加えた巨漢は、

「貴、貴様が、生きている限り、おれは、早苗をゆるせぬっ！」

と、喚（わめ）きざま、もはや剣の法形も何もない、激情におのが巨軀を乗せた、横なぐりの一撃をくれた。

修業を積んだ正しい使い手にとっては、これは、笑止な攻撃であった。

狂四郎は、当然、左門の小刀が、ぞんぶんの深傷（ふかで）を、対手に呉（く）れるもの、と思った。

ところが、その刹那（せつな）、左門は、つと小刀を下げるや、われから望んで、閃（ひらめ）いて来た太刀へ、おのが半身をさらしたのである。

巨漢は、充分の手ごたえに傲（おご）るや、とどめを刺すべく、よろめく左門へむかって、太刀を突き出そうとした。

一瞬、狂四郎が、ひと跳びして、その巨軀を蹴倒（けたお）して、地ひびきをたたせた。

二

能見堂わきの、雲水が泊る小さな草庵の一室を借りて、深傷（ふかで）を負うた儒者を横たえた狂四郎は、しばらく、そこから、瀬戸の八勝を、望んでいた。

かなり長い沈黙を置いてから、仰臥した儒者が、口をひらいた。
「検分をねがったが、救ってくれとはおたのみせなんだ。むだなことをされた」
狂四郎は、視線をまわした。血の気の失せた儒者の面貌は、もの静かであった。
「お手前が、敵の刃にからだをすてられたのは、咄嗟の絶望感がなさしめた振舞いと見えた。覚悟をさだめたものではなかった。いっそ、気まぐれとも思えた。なぜ、その気まぐれを起されたか——その興味が、わたしにさしでがましいことをさせたと申せる」
儒者は、それに対して、しばらく、こたえなかった。
やがて、ぽつりと、呟くように言った。
「お嗤いになるとよい。それがしは、女というものの魔性を知って、浮世がいやになったのです」
「……？」
「……それがしを成敗しようとした加納貢も、あわれな男だ、と言えます。立場こそちがえ、やはり、女というものの魔性に躍らされて、狂気のごとく、それがしを斬ろうとしたのです。しかし、いま、なお、それがしは、信じられぬ。あの早苗が、どうして、良人にむかって、それがしとの秘事を告白してしまったのか。それがしと早苗と——二人だけが、胸に秘めて、これは、墓の中へ持って行く秘密であったのに……。そうしなければならなかったのです。良人に告白したことは、それがしを裏切ったことになった。あの聡明な早苗が、どうして、そのことに思いいたらなかったのか。わからぬことだ。……信じられぬ！　自らをも破滅させる告白を、なぜ、口にしなければならなかったのか？」

若い儒者は、目蓋をひらいた。その眼眸は、暗い困惑の色に沈んでいた。

築戸左門は、古筆見の家に生れた。古筆見というのは、筆跡の鑑定を司る。その祖は、頼政流多田源氏から出ていると称せられ、名家にかぞえられていたが、築戸家は、京都古筆家の別家であり、二代前に定府となって、夏期に一度、恒例として、同朋、数寄屋坊主とともに、柳営御物（江戸城の宝庫にある筆跡の類）の曝涼をする役を与えられているだけである。鑑定の仕事などはなにもなかった。したがって、徒士町の家は、貧しく、三十俵三人扶持程度の御家人と変りはなかった。

左門は、稀にみる秀才に生れ、わずか十一歳で、湯島聖廟の元服試験にも及第し、二十歳の時には、林家の塾頭佐藤一斎をして舌を巻かしめるほどの俊髦ぶりを示した。

当時、篤学博識を称せられた儒者に、柴野栗山、古賀精里、尾藤二洲がいたが、左門はやがて、その上に行くのではないか、と噂されたくらいであった。

左門が、突如として、儒員の席を去って、ひとり、はなれて、講究に専念しはじめたのは、朱程子の所説ばかりが、学問ではない、とさとったからに相違なかったが、同時に、幕府に仕えた儒者たちの、あまりの偽善ぶりに愛想をつかしたからであった。

さいわいに、蔵前の札差に、学問好きの町人がいて、これが、左門の学識と人柄を高く買って、新しい「金沢文庫」をつくるようにすすめてくれた故もあった。

左門が、江戸を去って、金沢に移ったもうひとつの理由は——。

二十歳の頃から愛して来た早苗が、新御番衆加納貢に嫁いだ打撃による。

早苗は、公儀将棋所伊藤宗観のむすめであった。二十石十人扶持の棋職で、格式もひくい家柄

だったので、左門の家とは親しく交際していた。
加納貢もまた、御咎小普請の下級旗本の三男で、気軽につきあえる仲間であった。
左門と貢は、ちょうど将棋の実力も伯仲していて、性格も相反しているのが、かえってウマが合って、つきあいはかなり深かった。ただ、孰れも、早苗を、ひそかに愛していることを、お互いに、口にこそ出さなかったが、さとっていた。
早苗は、美しい娘であった。もともと気質も明るく生れついているようであったが、冷たい継母にことごとくむごく扱われているせいか、どことなく寂しげな翳をひく様子をみせていた。尤も、かえって、それが、男たちの、心を惹く効果はあったようである。
貢が、急に、新御番衆千二百石取りの家へ養子に行ったのは、恰度一年前であった。これは、貧乏旗本の次三男にとって、夢のような幸運であった。
左門は、当然、貢がその家にふさわしい格式の家から嫁を取るものと思い、早苗を妻に迎える希望を抱いた。左門は、貢と、早苗をあらそうのは、いやだったのである。
左門が、古筆見を致仕して、金沢に寓居をかまえたのは、その直後であった。早苗を、迎えて、つつましく愉しい暮しをいとなむのを、心に描き乍ら――。
左門には、早苗の気持が、判っていたのである。
早苗からの手紙が、寓居に届いたのは、それから、一月ばかり過ぎていた。
それは、左門を愕然とさせる内容であった。
継母の意志によって、さる旗本との縁談がととのったこと。じぶんにとって、死ぬよりもつらい命令であるけれど、拒むわけにも参らず、せめては、ひと目だけお会いして、お別れしたいと

ねがっていること。
その巻紙には、点々と、泪の痕もついていた。
左門は、しかし、長い時間、沈思してから、返辞の手紙を、書かぬ決意をした。
早苗から、第二便が届いたのは、十日も経っていなかった。
走り書きで、
「ただいま程ヶ谷の帷子里に在る乳母の家に参って居ります。ひと時だけお目もじいたしたく、お待ち申して居ります。人目もあれば、三更すぎて、おたずね下さいますよう」
とあり、芝生の追分から、下帷子の裏通りを、程ヶ谷の元町へ抜ける古町街道の一箇処を示す地図が、書き添えてあった。
——行くまい！　行ってはならぬ！
即座には、左門は、おのれを、かたくいましめた。
しかし、日が昏れてから、左門は、ついに、腰を上げてしまったのである。

三

真夜中——亥の刻すぎてから、左門は、その家の表戸を、そっと、叩いた。
現われたのは、六十過ぎた女で、黙って、左門をみちびいて、奥の一室に来たが、灯を消した中へ招じ乍ら、
「あかりは、おゆるしを——」
と、ささやいた。

左門が、闇をさぐって、褥に行きあたり、そこへ坐ると、掛具をはねて起き上がった者が、待ちのぞんでいたよろこびを、小さな叫びにして、すがりついて来た。

左門が、夜道を辿り乍ら、想い描いた光景とは、全くちがった、狂おしい抱擁が生れた。

ひそやかな、静かな別離のひとときをすごすことを考えて来た左門は、しかし、一瞬のとまどいの後には、やはり、男性であった。

目で見ることの叶わぬことが、かえって、全身の血潮を、欲情にかりたてた。

おのが身を生きた屍にして、婚家へはこぼうとする娘が、生涯ただ一度の恋に燃え狂った思い出を持とうとする必死さで、闇の中で、処女の羞恥をかなぐりすてたのである。男として、応えないわけにはいかなかった。

いまもなお、左門は、昨夜のことのように、その匂いや、息づかいや、寝衣の絹の感触や、肌のあたたかさや重みを、甦らせることができる。そして、完全に、その柔らかな濡れた体内に、おのれを容れた瞬間、いかなるおそろしい罰をくわえられても、寸毫も悔いまい、とおのれに言いきかせたことも――。

営みがおわったあと、左門は、半刻あまり、すすり哭く身を抱きかかえて、じっとしていた。

老婆の忍び声が、廊下からかからなければ、左門は、夜明けまでそうしていたに相違ない。

それから、十日あまり、左門は、寓居で、痴呆のように、茫然と、自失のていで、すごしたことだった。

早苗の嫁ぎさきが、加納貢であったのを、左門が知ったのは、婚礼から一月も後のことであった。

おどろきはなく、ただ、
──そうだったのか。
と、ひとり、ふかく、頷いただけであった。
……秘密は、永久に、まもられる筈であった。早苗自身の口から、良人の貢に、語られようなどと、夢にも、考えられはしなかったのである。
江戸に在る親しい儒者が、理由は不明だが、貢が激怒して、貴殿を討つと血相変えている故、しばらく、姿をかくすように、と急報して来た時、左門は、愕然となったものの、まだ早苗が告白したとは、信じられなかった。
──あの老婆の口から洩れたのであろうか？
それ以外に、考えようがなかった。
めぐり会った貢から、早苗が白状した、ときかされて、左門は、絶望したのである。
──なるほど、この誠実そうな人物なら、いまもなお愛情を抱いているこの世で唯一の女性から、裏切られたと知れば、生きる気もなくなろう。
狂四郎は、心身ともに深傷を負うた左門の蒼褪め果てた寝顔を見戍り乍ら、あわれんだ。
「……信じられぬ。どうしても、信じられぬ」
左門は、同じ言葉を、くりかえした。
それをきいているうちに、急に、狂四郎は、ひとつの疑惑をおぼえた。
「お手前が信じられぬならば、他人のわたしが、お節介ついでに、調べてみようではないか。こ

れは、無頼の浪人者にとっても、すべての婦人に魔性がひそんでいると断定するには、不快な話だ。ひとつ、おまかせ願おう」

四

加納貢の妻早苗は、丑の刻も過ぎようというのに、まだ、きちんとしたみなりで、居間に坐っていた。

良人は、もう三日間も戻って来ない。辰巳あたりの遊里に流連ているに相違なかった。

この一月あまりは、文字通り地獄であった。猜疑に荒れ狂った良人は、鬼であった。早苗にとって、全く身におぼえのないことであったので、唐突に、白状せよと迫られた時には、ただ、唖然としたばかりであった。その態度が、かえって、良人の猜疑を深めたようであった。

弁解しようにも、あまりにばからしい嫌疑なので、言葉がなかったし、良人が、あたまから事実だときめてしまっているのも、なさけなくて、早苗は、無根のことはやがてはれるであろうと、堪えるよりほかはなかった。

貢が、左門とは比べもならぬ粗暴な男であることは、以前から知っていたが、これほどまでに、狂気じみた性格であろうとは、思わなかった早苗である。同じことを、ねちねちと、しつっこく、くりかえして、一刻も二刻も責められているうちに、早苗は、あたまが霞がかかったように、ぼうっとして来て、あやうく、この責苦からまぬがれたいために、肯定してしまいそうになった。

皮肉にも、おそろしい嫌疑をかけられて、責めたてられているうちに、早苗はじぶんの心の奥

底には、なお、左門を恋うる情がひそんでいることに、気がついたのであった。
いまは、早苗は、この屋敷から、追い出されることを、ひそかに、のぞんでいた。
襖が、開いた。
早苗は、良人がいつの間にか帰宅したのだと思い、あわてて立とうとして、愕っとなった。
見知らぬ浪人者が、入って来たのである。
「築戸左門の代理の者だと思って頂こう」
狂四郎は、そう告げて、端坐すると、
「うかがいたいことが、ふたつある。貴女は、昨秋、程ヶ谷の帷子里にある乳母の家へ行かれたかどうか、これがひとつ。いまひとつは、貴女の実家の内情について、だ。これは、正直にこたえて頂かねばならぬ」
と、きり出した。
鋭い異相の持主だが、態度に凜乎としたものがあったし、左門の代理ときいて、早苗は、これはじぶんを救ってくれるために来た人物と直感した。
「帷子里へなど、参ったおぼえはございませぬ」
はっきりと否定する早苗を、じっと見据えて、
――やはりそうか。
と、狂四郎は、合点した。
「貴女には、妹御がおありだろう」
「はい」

「腹ちがいですな？」
「義母者は、おのが腹をいためた妹の方をいつくしむあまり、貴女を邪険に扱った。そうですな？」
「はい」
「…………」
「妹御は、貴女と、声やからだつきが、似ている。これは、今日、わたしが、見とどけて来た」
「……？」
早苗は、なんのために、対手が、そんなことを言い出すのか判らなかった。
「貴女が簗戸左門に操を呉れた、と貴女の良人に告げたのは、義母者であった、と断定できる」
「えっ？」
「義母者は、貴女を憎んだ。この千二百石取りの屋敷の奥方になったことが、我慢ならなかった。貴女を自害にまで追いやるたくらみを、貴女が嫁ぐ前に、すでに、考えた。貴女の良人は、その奸計に、うまうまと乗せられた。貴女が、処女であったかどうかさえも、判らぬほどの粗暴な男だ。貴女の良人は、血眼で、簗戸左門をさがして、斬ろうとした。……あいにく、貴女の方にはおぼえがなくても、左門の方には、おぼえがあったので、あまんじて、斬られようとした」
「そ、それは……、なぜ、左門殿に、おぼえが――？」
「貴女の義母者がしくんだ芝居と知らずに、左門は、妹御を、貴女と思い込んで、暗闇の中で、抱いたからだ」
「…………」

早苗は、息をのんだ。
「左門は、いまもなお、貴女に、愛情を抱いている。貴女も、左門を慕うているじぶんをさとったのではないか？」
狂四郎は、立ち上がると、
「参ろう」
と、促した。ためらう早苗に、狂四郎は、微笑して、
「貴女はもう、この屋敷では、無用のひとだ。大身の奥方になりたいと切望している者に、その座をゆずればよい」
と、言った。

加納貢は、それから二日後、夜更けて、したたか酔って、帰宅した。
まっすぐに、妻の居間に、ふみ込んだ——とたん、眉宇をひそめた。
そこに坐っているのは、妻ではなくて、早苗の妹のつやであった。
「どうしたのだ、これは？」
呶鳴り声に、応えたのは、つやの代りに、男の声であった。
廊下から、すっと入って来た狂四郎は、
「老中水野越前守忠邦の代理眠狂四郎」
そう名のってから、
「新御番加納貢が、妻の操を疑い、狂乱の行状ありとききき、これをおさめるために、老中におい

ては、正真正銘の処女を与えるに如かず、と思いいたたれて、この娘を遣わされた次第。つつしんで、受けとられたい」

　と、申渡した。

「さ、早苗は、ど、どうしたのだ？」

「お手前のように、他の男が抱いた傷ものはごめんだ、などと言わない人物が、引受けることになる」

「左門かっ！」

　形相を一変させた貢を、狂四郎は、

「たわけ！」と、一喝して、怯えあがらせておいてから、にやりとした。

「お手前には、今夜、正真正銘の処女を抱く愉しみがあるのだぞ。逆上いたして居ると、また、処女であったかどうか、判らなくなるのではないか。おちつくことだ」

　言いすてて、皮肉な一瞥を、うなだれたつややへくれておいて、狂四郎は、廊下へ出た。早苗は、いまごろ、京へ上る旅の宿で、左門に抱かれている筈であった。

乱れ半鐘

一

男女三歳は髪置き、男子五歳は袴着(はかまぎ)、女子七歳は帯解き——七五三の祝いが、にぎやかにおわると、江戸には、急に、冬が来る。

冬が来ると、江戸名物の火事が、一日のうち市中どこかで、火の手をあげる。

「絵本風俗往来」に、そのさまがよくあらわされている。

寒気しだいに募り、雪を催し、まず霰(あられ)の降りだすや、悲風凛烈(りんれつ)、雪花をとばして、銀世界となるや、隅田川に軽舟を棹(さお)さす者あり、また羽織かくして袖ひきとめられる果報者あり、師走(しわす)の間近かさに寸隙(すんげき)なく、脛(はぎ)をあらわし奔走するあり、炬燵(こたつ)火桶(ひおけ)を擁する老人あれば、犬と共に雪中を飛びあるき、雪打ち雪だるまをつくる少年あり、また晴れたる時は、昼夜の火災天を焦し、紅い色を呈し、夜間も心静かにねむる閑隙なきも、すなわち冬分の定まれることと火災になれたる江戸のちまた平気で送りしは、むかしの江戸のこの節なりける。

湯屋の二階、髪床、横丁新道の小唄踊の師匠の稽古所などに、野次馬たちが集まって、じゃんと半鐘が鳴るのを待ち乍ら、中村座、市村座、守田座の三芝居の顔見世狂言について、ひいき役者のことで、喧嘩をしたり、吉原の女郎の品さだめしたりして、ひまつぶしをする風景も、冬のもの、といえる。

ここ——浅草広小路から、東仲町へちょっと入った新道に、「常磐津文字花」という看板をかかげた家にも、格子窓から通りのみえる表の部屋では、若い衆が、数人ごろごろしていた。

小料理屋にでも上がった気分で、一人が手をたたいて、やといの老婢を呼ぶと、

「へへへ……、師匠に、内緒で、ひとつ、たのまあ」

と、盃を口にする真似をしてみせた。

「いけ図々しいよ。番茶で我慢しな。ついでに、あみだをやって、大福買って来て、こっちへ分けな」

「あれだ。股ぐらの奥が渇くと、食意地ばかりきたなくなりやがる。つらつらおもん見るに、婆さん、若い頃は、男ばかり食ってやがったろう。小指を出してみせな」

「なんだい？」

「男をだますのに、小指を切ったかどうか、見てやらあ」

「冗談じゃないよ。あたしゃ惚れっぽかったのでね、惚れるたんびに、小指を切っていたら、手が何本あったって足りるものかい」

「よしこのにうめえ文句があらあ。

小指切ろとは、当座のことよ

金が無くなりゃ、手まで切る婆さんのことだ」

「そうさ。千部万部の経文よりも、わたしゃ、一分の金がよい、ってね」

「きたえていらあ。吉原で三年、深川の岡場所で五年、ござをかかえて、夜鷹が七年」

「ばかにしているよ」

「知っているぜ。このあいだ、茶屋町の質屋の隠居が立小便しているわきを通りかかって、おめえ、ひょいと覗き込んで、おや、おなつかしい、三十年ぶりでお会いした、とぬかしやがったろ」

「としよりをからかって！」

ばあやは、ぷんぷんして、行ってしまった。

奥から、女師匠の高い声が、

「お前さんたち、ちょいと、うるさいねえ」

と、きめつけて来た。

「へっ、本日は、ご機嫌ななめにあらせられらあ」

「男欲しやの気ぶっせい——なんとかしてやらねえと、血の道があがって、目がつりあがるぜ」

この時、格子戸が開いて、案内を乞う声がした。

一人が、首をのばして、覗いてみて、

「おっ、おあつらえ向きだ。間夫に格好のご仁体だ」

「小旗本か？」

「なんの、尾羽うち枯らした素浪人」

と、小声で言った。

文字花が出て来て、緋縮緬の長襦袢を、ちらりとこぼす崩し膝で、

「おさむらいさまのお稽古は、おことわりして居りますが……」

と、言った。

「わたしが弟子入りに来たのではない」

微笑し乍ら、

「わたしは、眠狂四郎という者だが、いま上方へ行っているお前さんの姉分の文字若とは親しかった」

「あ――文字若姐さんが、ぞっこん、首ったけだった……」

と言いかけて、あわてて、

「いえ、貴方様のことなら、お噂はかねがねうかがって居りました。さ、お上がり下さいまし」

「いや、たのみがあって参ったので……、上って腰を据えたら、そちらも断わりにくかろう。実は、わたしの家に、武家の娘がいる。わたしの女房になったつもりでいるが、わたしは、明日の生命が知れぬ男なので、こちらに内弟子にしてもらって、ゆくゆくは看板を出せるようにしてやってもらえまいか、と思いついて、たずねて来てみた。才能はあるとみた」

狂四郎は、ちさが隣の浪人の内儀から、三味線を借りて来て、ひいているのをきいて、感心したのである。もとより、旗本の娘であるから、正式に習ったのではなく、好きで、こっそり、下婢から手ほどきしてもらっただけだ、ということであったが、みごとな音色を出したのである。

文字花は、ちょっと、小首をかしげた。

「無理であろうか？」
「そりゃア、無理だあ」
若い衆の一人が、大声で言った。
「無理が通れば、道理がひっ込む。ここは一番——ことわっちまえ、師匠」
しかし、文字花は、
「どうぞ、お上がり下さいまし」
と、招じた。
「女房をすてるのに、常磐津師匠に押しつけるとは、うめえことをやりやがったの、素浪人」
きこえよがしに言うのへ、狂四郎は笑って、
「色男にはなりたいものだのう、皆の衆。金と力はないが、知恵があるぞ」
「それだ、旦那。あっしの嬶の始末も、ひとつ、おねげえいたしやすか」
「旦那、この野郎の嬶は、そんじょそこいらにころがっている代物じゃありやせんや。面は、人三化七で、出臍で、出っ尻で——」
「その臍で、茶を沸かす芸があらあ」
「もうひとつ、芸があるぞ。爪に火をともす芸が——」

二

茶の間に入った狂四郎は、むこうの稽古場を、何気なく見やって、
——おそろしく色っぽい女もいるものだ。

と、思った。

文字花のむこうに坐って、爪弾きを稽古している洗い髪の女の、容子ぜんたいからこぼれる色気は、思わず男の息をのませる——。

いまならっている文句の「かくせど色香、梅川が……」という、それが、そっくり、あてはまるような女であった。

眉を落し、おはぐろをつけているが、もとより、かたぎの女房ではない。囲いものに相違なかった。

「じゃ、今日はここまで——」

と、文字花に言われて、

「ありがとうござんした」

立って茶の間を通りすぎがてらに、こちらへ、会釈したすがたは、まさしく、一枚絵であった。

若い衆にからかわれ乍ら、出て行って、なお、その仇な容子は、狂四郎の眼裏に漂うていた。

長火鉢の前に坐った文字花へ、

「佳い女もいるものだ」

と、言うと、頷いて、

「ご存じじゃござんせんでしたか。不忍の新土手の桜餅屋の養女で、新潟からつれて来て、店へ出したら、たちまち、次の年には、桜の葉の漬込樽の仕入れが倍になったと申します。そりゃ、大層な評判でござんした。だれが射落すか、いろいろ取沙汰がござんしたが、一年間、雨が降っても風が吹いても、かよいつめた猿若町の丸菱という芝居茶屋の若旦那のものになりました。去

年の中村座の顔見世で、桜時廓白浪という新狂言が出て、あの桜餅屋を舞台にそっくり写してみせましたけど、丸菱の若旦那が、座元にたのんだといいます。いまじゃ、隅田堤の長命寺の桜餅よりも、名物になって、わざわざ、不忍の新土手まで喰べに出かける人があるくらいでござんすよ」

「芝居茶屋の長提灯の下に立たせれば、もっと評判をとって、芝居見物よりも、あの女を観に来る者が多くなるのではないか」

「よほど、お気に召したようでござんすね」

文字花が、笑うと、狂四郎は、暗い眼眸を宙に据え乍ら、

「ただの色香には、迷わぬが……あの女のひいている影は薄くて儚げであった。そう永い生命ではあるまい。それが、気にかかった」

と、言った。

「ほんとですか、先生？」

文字花も、真顔になった。

「うむ、嘘をいってもはじまるまい。めでたいことに対する予感はいまだ一度もおぼえたことはないが、不吉なものは、すぐピンとひびくように、いつの間にやら、自身の六感をつくって居る」

もの心ついて以来、死の影と同行して、生きて来た男であった。不幸な兆をみせた容子は、一瞥して判るのも、この男の場合、これは、自然な本能の働きといえる。

文字花は、その虚無の翳濃い異相を、じっと瞶めて、

――文字若姐さんが、惚れたのはわかるねえ。

と、合点した。

婆やがはこんで来た酒を、手酌でよいとことわって、しずかに盃を重ねる姿に、文字花のような浮川竹の世界で、男を見る目をやしなった女を、ふっと戸惑わせる何かがあった。

「眠様は、女に惚れたことがおありなさいますか？」

思わず、訊ねてみた。

「ある。……しかし、惚れている、と気がついた時は、手おくれであった」

「と仰言いますと？」

「死んだ」

ひと言、言いすてる横顔の、冷たく沈んだ表情が、文字花の胸を、微かに疼かせた。

「そいで……あのお妻さんのような、影のうすいひとに、惹かれなさいます？」

「美人という点では、お前さんの方が、あの女よりも上だろうが、ひとりで生きて行ける勝気が、色香をころしているようだ」

「はっきり仰言います。盃をいただいても、よござんすか」

献酬がかさねられているうちに、いつか日が昏れて、さらに一刻も移っていた。

突然、近くで、半鐘が乱打されはじめて、文字花は、はっと腰を浮かせた。

老婢も、あわてて、台所から、かけ出て来て、

「ど、どうしたんでござんしょう？　滅多打ちでござんすよ」

と、顔色を変えた。

火の見櫓の半鐘は、方角遠近、火災の大小に応じて、打ちかたがちがう。これをききわけて、

各戸は、逃げ仕度をするし、いろは四十八組の鳶がとび出し、旗本の十人火消や大名火消が、それぞれの守護の位置につくのであった。

いま、きこえる半鐘は、ばあやの言う通り、ただ、滅茶滅茶に乱打しているだけであった。

しかし、それは、長くは、つづかなかった。

狂四郎は、遽かな町内の騒擾をきき乍ら、なお、しずかに、盃を口にはこんでいた。

格子戸が、がらっとひき開けられて、

「大変だ、師匠！」

と、若い衆の呶鳴り声がした。

「なんだい？」

「大べらぼうの、こんこんちきだあ！　……お妻さんがよっ、殺られたあ！」

「なんだって！」

文字花は、顔色を変えた。

狂四郎から、そう永い生命ではあるまい、と言われたばかりの女であった。まるで、狂四郎が、この異変を看透していたように、予言は、今宵のうちに、当ったのである。

血相変えて入って来た若い衆は、長火鉢の猫板の上の、文字花の茶碗をつかんで、銚子から、どくどくっと注ぐと、一息に呑みほした。

「ま、おちつきなね、源さん。まるで、自分の情婦が殺されたみたいじゃないか」

「情婦なら、とっ換えがきかあ。あの女だけは、かけがえがねえや。おちついていられるけえ。他人のものでも、あの女だけは、別だあ。ここへ稽古に来るのを、眺めるだけで、生き甲斐だっ

んだぞ、こん畜生っ！」
「強盗に斬られたのかい？」
「斬られたのなら、さまがいいや。えぐられたのよ、ぞっくりと——」
「胸をかい？」
「下だあ、ずうっと、臍の下！」
「おお、いやだ！」
文字花は、顔をしかめて、肩をすぼめた。

火の見櫓で、半鐘を乱打したのは、その妾宅でつかわれている十六ばかりの小娘であった。
突如、おそろしい強盗がふみ込んで来たので、救いをもとめるために、裏口から走り出て、無我夢中で、火の見櫓に、かけのぼったのであった。賊が入ったら、「泥棒！」と叫ぶと、近所の人々は、おそれて、出て来ない。「火事だ！」とよばれれば、みんな、あわをくって、とび出して来る、と言われている。小娘も、それを教えられていたのである。
あまりのおそろしさに、声が出ないままに、咄嗟の機転で、半鐘を打鳴らすことを思いついた、という。
すぐに、岡っ引が、妾宅へ、ふみ込んだ。
しかし、時すでにおそく、賊の姿のかわりに、無慚な光景を発見した。
帝釈様の軸のかかった六畳間に、敷きのべられた牀の上で、お妻は、すこし蒲団からのり出すようにして、仰臥していた。

ただの仰臥ではなく、掛具は裾の方へはぐられ、お妻は、緋の湯文字を蹴あけて、下肢をいっぱいに、拡げていたが、その陰所は、鋭利な刃物で、えぐり盗られて、熟した無花果を割ったようなあんばいになっていた。

恐怖の苦悶のあとを、ひき歪めた眉や、白けた舌を吐いている唇に刻んだ死顔は、平常色香をこぼしていただけに、見るもいたましかった。

頸には、おそろしく太い縄が、巻きつけられてあり、ころがった枕のそばに、凶器の大庖丁が、つき立ててあり、その柄には、巨きな手型が、血潮で捺されてあるのも、すさまじい限りであった。

猫の額ほどの庭は、昨日降ったみぞれで土がまだしめっていたので、にげて行った賊の足跡がのこっていた。これもまた、巨きな足であった。

板塀の忍び返しを越えて出入した証拠を、見越の松の枝にかけた太い縄にのこしていた。

小娘は、三畳の小部屋で、うたた寝していたが、けものの唸るような声で、目をさまし、そっと、廊下に出て、六畳間を、覗き見したところ、黒頭巾の大男が、女あるじの上に、馬乗りになっているのに、きもをつぶして、仰天したそうである。

どうやって、裏口からぬけ出したか、無我夢中で、おぼえていない。

ただもう、雲を突くような大男であったことだけが、なお、恐怖感の中に、記憶されている、ということであった。

三

「へっ、どんな野郎が覗いたって、あの有様を見りゃ、びっくり——どころか、ひっくりだあ。あとへ、けえる、がくっついて、ぎゃっ、と言わあな。お妻のやつに、力士（すもう）が懸想していやがったにちげえねえ。折から、回向院（えこういん）じゃ、櫓太鼓が鳴ってらあ、お妻の顔が、目さきにちらついて、黒星かさねているうちに、自棄（やけ）くそになった、と思いねえ。ふんどしどしと、ふみ込んで、張り手の、あびせ倒しの——そこまではよかったが、なにしろ、万端ばかでかく生れそこなった片端（かたわ）だ、すぎたるは及ばざるがごとしで、こればかりは大は小を兼ねねえと来てやがる。水が入って、とりなおしのきく勝負じゃねえや。塩をまいたって、なめくじみてえに、縮まるというしろものじゃねえや。そこで、ええい、面倒くせえとばかり、脅しのために携げて来た大庖丁で——」

ベラベラとまくしたてる若い衆を、

「もう、いい加減におしよ」

と、文字花が、とどめた。

「だってよう、岡っ引の野郎、お玉ヶ池の佐兵衛の一の乾分（こぶん）だった、なんぞと大きな面をしていやがったくせに、思案投げ首の、からだらしのねえったら、話にならねえから、この桶屋の源さんだって、これぐれえのあなぐりはやってみせる、というところを——」

これをきいた狂四郎が、寝そべっていたからだを起した。

「その新米の岡っ引は、政太郎、というのか」

「へい、さようで――旦那、ご存じですかい？」
「うむ――」
お玉ヶ池の佐兵衛とは、懇意の間柄で、その手先であった政太郎とも、顔見知りであった。
黙って、無想正宗を携げて、出て行こうとする狂四郎を、送って出た文字花は、
「下手人をつかまえて、政さんの手柄にしておやりなさるおつもりですか？」
と、微笑を投げた。
「たまには、捕える側にまわってみよう。若い衆の目の保養をうばった憎い奴だ。他人の花でも散らせかたがあろうというものだ。野暮な残忍さが、ゆるせぬ」
狂四郎は、その家の前に蝟集している野次馬をかきわけて、木戸から、庭に入った。濡縁に立っている政太郎に、声をかけると、
「あ――旦那」
と、おどろいて、降りて来た。
「提灯を貸してくれぬか」
狂四郎は、それを受けとると、庭の土にのこされている巨きな足跡を、調べた。
それから、六畳間に上がったが、べつに、死体は見ようとせず、大庖丁だけを、あらためた。
枕元に、痴呆のような表情で、坐っている旦那の丸菱の若主人へ、冷やかな一瞥をくれてから、
狂四郎は、政太郎に、言った。
「頸を締めた縄は太い。えぐった庖丁も大きい。手も大きい。足も大きい。なにもかも、大きすぎる。これは、どういうのであろうな、政太郎？」

「へ、へい――」
若い岡っ引は、当惑の面持で、首をひねるばかりである。
「巨漢だから、庖丁も大きいのを使い、縄も太いのを用う――というのは、おかしいではないか。知恵が稚いと思わぬか？」
「そう仰言られると、そうでござんすね」
狂四郎は、廊下へ出ると、三畳の小部屋の障子をひき開けた。くらがりの中に、しょんぼりと、小娘は、坐っていた。
「おい――」
狂四郎は、いきなり、ずばりと問うた。
「えぐりとったしろものは、どこへすてた？」

狂四郎は、間もなく、文字花の家に、ひきかえして来た。
若い衆が、さきに、とんで来て、すでに、狂四郎のあざやかな解決ぶりを報らせていたので、文字花は、いそいそと迎えた。
「あの娘が、下手人とは、あきれました。あいた口がふさがらない、ってこのことでござんす」
「十六歳であろうが、お前さんのような年増であろうが、嫉妬心には、かわりがあるまい」
丸菱の若主人は、一月あまり前、お妻の留守に来たおり、ふと、気まぐれから、小娘に手をつけてしまったのである。
小娘は、男をうらむよりも、男に大切にされている女あるじを、憎んだ、その恣な秘戯ぶり

を、こっそり、ぬすみぎき、ぬすみ視ているうちに、しだいに、嫉妬が昂じたものに相違ない。

「おお、いやだ！」

文字花は、はげしくかぶりをふると、

「眠様、藪蛇になりました」

「なんだ？」

「ちさ様とやらいうお娘御を、お引受けするのは、おことわりいたします。男ぎらいで通して来たこの文字花にも、嫉妬心があるのを教えて下さいましたからにはね」

そう言って、文字花は、ふっと、かたい顔つきになると、狂四郎の盃へ、酒をついだことだった。

仇討異変

一

「眠狂四郎様と、お見受けつかまつります」
不意に呼びかけられて、ふりかえったのは、両国橋を本所側へ渡って、夜鷹番屋の前を過ぎようとしたおりであった。
まだ宵のうちで、垢離場の引っ張りの見世物小屋からの騒音も、さかんであった。
狂四郎は、夜鷹から、このような鄭重な呼びかけをされるのを訝って、頭をまわした。
夜鷹番屋の異名をとっているように、そこの空地に、辻君連が一時集まって、それから、てんでに、化粧して、思い思いの場所へ稼ぎに出かけるならわしが、いつころからともなく、できていたのである。
吹き流しの手拭をかぶっているすがたは、夜鷹にまぎれもなかったが、もの腰に崩れたにおいがなかった。
手拭の蔭の貌を、番屋から流れ出る明りに、もう四十を過ぎている、と見て、狂四郎は、
——零落した武家の妻女だな。

と、さとった。
「眠狂四郎様とお見受けして、お願いいたしとう存じます」
「あいにくだが……」
狂四郎は、歩き出し乍ら、
「そこいらの遊冶郎と、こちらは同じ料簡だ。抱くなら、若い方がいい。武家出を売物にするなら、礼儀作法を有難がる客をひろうがいい」
「いえ、お願いと申すのは、鬻ぎではございませぬ」
「………」
「仇討のお助太刀を――」
「……？」
狂四郎は、唐突な依頼に、微かに心が動いたが、黙って、歩きつづけた。
「わたくしの主人の敵に、めぐり会うたのでございます。十四年ぶりでございます。国許を出てから、十四年ぶりに、とうとう、敵に、めぐり会うたのでございます」
必死な語気に、嘘はないようであった。
「どうぞ、わたくしの話を、おきき下さるだけでも……、その上で、おことわり下さいましても、おうらみには存じませぬ。……どうぞ、おききとり下さいまし。お願いでございます」
もし、この時、狂四郎の目に「麦屋」という小さな掛け行燈が入らなければ、そのまま、女の願いをきこえぬふりをして、去ったであろう。
しばらく前、むかし馴染みの渡り板前の伊太吉という男に、街なかで出会ったところ、

「向う両国で、とろろ飯屋を出して居ります。ぜひ、一度、お立ち寄り下さいまし」
と言われたのを、思い出したのである。
つと、姫暖簾(のれん)をはねて、一歩入ると、
「あ——旦那！」
伊太吉の明るい声が、迎えた。
狂四郎は、座敷とも言えない、うす穢(ぎた)ない一間きりの二階に上がった。女は、おくれて、そっと、階段を軋(きし)ませて跟(つ)いて来た。
伊太吉が、麦とろの代りに、酒と三つ物を運んで来るまで、時間があったが、狂四郎は、黙然として、床柱に凭(よ)りかかっていたし、女も、端近に坐って、俯向(うつむ)いていた。
狂四郎が、飲みはじめても、女は、酌をしに寄ろうとはしなかった。
「お前さん、たった一人で、良人(おっと)の仇討をしようというのか？」
狂四郎の方から、訊(たず)ねた。
「い、いえ。せがれが、居ります」
「………」
女は、不安の眼眸(まなざし)を、狂四郎に当てて、
「十八歳になりますが、最近、労咳(ろうがい)で、牀(とこ)に臥(ふ)しがちのくらしをいたして居るのでございます」
「十四年前に、四歳の子をつれて、国許を出て、艱難(かんなん)辛苦した、というわけか」
「はい——」
女は、語った。

女は、すみといい、肥前佐嘉郡蓮池・五万二千石・鍋島摂津守直与の上御台所賄(まかない)役成富頼母(たのも)の妻であった。

上御台所賄役は、藩主の食膳調理のことを掌(つかさど)る。下僚には、塩梅(あんばい)役、料理方、膳番、買物役、薪味噌奉行などが居り、賄役は、藩中でも、かなり上級の役であった。

成富頼母は、旗本八万騎のうちで、中位の家の次男であった。実父は、将軍家の食事を掌る御膳所詰めの、御手長(おてなが)と唱うる小納戸であった。すなわち、膳奉行の立会いのもとに、将軍家に供う調理品の毒味をして、あらためて献立するのに勤める役であった。これは、大層重要な役柄で、したがって、大奥御用達(ごようたし)商人たちに対して、非常な権力を有(も)っていた。

その家に生れた頼母は、思うままに、市中で振舞って、成年に達した。江戸中の料亭が、頼母を、下にも置かぬもてなしをしたからである。尤(もっと)も、そのおかげで、頼母は、料理に関する限り、大変な通になったのであり、鍋島家から懇望されて、賄役になったのである。

頼母が、どのように直参風を吹かしても、鍋島家の御膳所では、それをゆるさなければならなかった。頼母がつくる献立は、みごとであり、藩主は、大いに満足したからである。

ところが――。

それまでもかなり苦しかった鍋島家の内証が、公儀よりの御用金申渡しの苛酷(かこく)を理由に、大阪商人が金融ひき締めをはじめたのに遭(あ)い、たちまち、極度の窮乏に陥った。

いったい、大名の財政調理は、大阪の中ノ島、土佐堀川、江戸堀川など、船着きの便利な場所に、蔵屋敷(くらやしき)と称する、藩の蔵物(くらもの)、主として米穀売却のために設けた屋敷があり、そこで、大阪商人によって、収入を金銀に換えていたのである。

しかし、蔵物を売っただけで、藩の経済を支えることは不可能であった。大名の領地には、表高と内高があった。表高は、幕府から、何万石として与えられた所領で、内高は、実際の高である。内高は、表高よりも多いところもあれば、尠ないところもある。
鍋島藩は、表高は五万二千石であったが、実際の内高は、四万石に満たなかった。貧乏となるのは、やむを得なかった。
財政の不足を補うためには、借金のほかに、倹約しかなかった。
藩主は、窮乏をきりぬけるために、率先して、範を示さなければならなかった。
まず、家中の奢侈に流れ贅沢に陥っているのをいましめるために、藩主みずから、召物は木綿にかえて、日々新しいのを取換えていたのを三日に一度とし、食事は、大典及び朔日、十五日、二十八日のほかは一汁二菜として、二の膳つきを廃し、食器もまた坊間にひさげるものと同じ品にした。
この倹約は、おごった料理をつくるために賄役となった頼母にとっては、大変な苦痛であった。
市井で放埒なくらしを送っているだけに、自棄になると、態度振舞いも、目に見えて、無頼になる。
御膳所に大胡座をかいて、重役ばかりか、藩主自身の小心さまで、あしざまに口にするようになった。
目にあまって、注意する者もいないわけではなかったが、頼母は、肯かなかった。
やがて、頼母は、自らの傲慢な行為によって、身をほろぼすことになった。

当時の習俗として、朔日と十五日と二十八日は、早起きして産土神に詣で、家庭では、小豆飯をたき、めいめいの膳部に尾頭付きを供えた。

その日——土用の朔日、頼母は、何を考えたか、料理所から、下僚を追い出して、一人で、調理した。

食膳にのせられたのは、一瞥して、鰻の素焼きであった。しかし、摂津守は、一口喰べて、これを吐き出してしまった。鰻とみせて、実は、青大将であったのである。

摂津守は、出来た人物であったので、黙って、膳を下げさせただけであったが、主君に、蛇を喰べさせたという噂は、家中殆どの人々を、憤激させた。

他藩へのきこえもはばかるし、これが歪められ誇張されてつたわれば、いかに鍋島家が困窮しているか、という好材料として、世間のもの嗤いを招く故、決して、他言せず、頼母を咎めてはならぬ、という藩主の主旨が通達されなければ、頼母は、その日のうちに、血気の士たちにとりかこまれて、詰腹を切らされたに相違ない。

祐筆の一人三枝宗吾という若ざむらいが、致仕を願い出て、浪人の身となり、頼母を、城下はずれの森へ呼び出して、一刀のもとに斬り仆したのは、それから、一月あまり後のことであった。

二

「……討たれた良人の方に非があり、討った三枝宗吾殿に、名分があったことは、重々判って居りましたが、三河譜代の旗本成富家に生れた者が、討たれたままに、すて置かれることは、武士道の吟味に叶わず、是非にも、その妻その子の力をもって、敵を討て、という江戸の本家よりの

厳しい達しがありましては、仇討願いを出さないわけに参らなかったのでございます。藩の重役がたも、旗本御一統へはばかる意嚮をもって、首尾よく本懐をとげたあかつきは、せがれに元通りの知行を下される旨、議決して下され、わたくしども母子は、国許を立ち出たのでございました」

すみは、語りおわって、懐中から、油紙に包んだ品をとり出した。

藩主の仇討免許状に相違なかったろうが、狂四郎は、べつに、手に把る興味もなかった。

それよりも、この江戸には、御膳所詰めの小納戸を勤める成富の本家が在り乍ら、何故、この女が夜鷹にまで零落しているのを見すてているのか、不審であったので、そのことを口にした。

すみは、こたえて、本家の方にも、将軍家に供う調理品の毒味に、落度があり、当主たる頼母の実兄は、お咎め小普請に入れられ甲府勤番となっている、と説明した。

「鍋島藩からの援助は――？」

「三年のあいだは、ございましたが……」

これは慣例で、復讐願いは、三年の期限をもって、お暇が出る。尤も、幾年経っても、再度の願いは不要であり、素志を達するまでは、ずっと、藩からの仕送りがあるのが、普通であった。本懐を遂げない限り、帰参がゆるされぬのであるから、当然であろう。

しかし、鍋島藩としては、敵の三枝宗吾を忠臣と観るゆえに、三年の期限が切れたのを機会に、援助を断ったに相違ない。

援助を断てば、当然、貧窮に陥り、敵を探索する余裕を喪う。藩としては、成富母子に、三枝宗吾を討たせたくはなかったのである。

尤も、三枝宗吾は、一刀流の免許を受けた腕前であり、成富母子が、さがしあてたとしても、容易に討てる対手ではなかった。

いったいに、敵を討ちに出て、仕遂げずに訖った数は、諸藩の記録を見れば、無数といっていいのである。首尾よく、討ち取ることができたのは、百人に一人の率にもならぬであろう。

狂四郎は、すみのやつれはてた貌を、見戍るうちに、いつの間にか、助太刀を引受けているおのれに気がついて、苦笑した。

引受けたとは、口にこそ出さなかったが、おもてへ出て、わが家へ案内するすみのあとを歩き乍ら、

――やむを得まい、伊太吉の店が、あそこにあったのが、この女にはさいわいした。

と、自身に言いきかせていた。

すみの家は、小名木川をずっと下って、もう田畑ばかりの猿江村はずれに、吹き溜りのように屯した貧しい長屋の奥にあった。

狂四郎をおもてでしばらく待たせてから、すみは、招じた。

五つ半（九時）になるかならぬかであったが、灯をともしている家は殆どなく、妙にひっそりしていた。

二間きりの家で、仕切の襖に大きな孔があいていて、次の間に、牀がのべてあって、人の寝ているのが見えた。

狂四郎がすみと対坐すると、すぐに、病人は、起きて、着物をまとうと、襖を開いた。

「成富一馬にございます」

畳に両手をつかえて、挨拶するのへ、一瞥をくれた瞬間、狂四郎は、なぜか、その姿に、患っている惨めさもあわれさもないのを感じた。

二十歳前の若者が、敵を発見し乍らも、わが身がままならぬ無念さにさいなまれているとすれば、おのずから、その気色が滲み出ている筈である。それが、なかった。

ふてくされて寝ていたのが、しぶしぶ起きて来て、面倒くさそうに挨拶している——そんな印象であった。

この不快感は、この家を出ても、狂四郎に、のこることになった。

終始、顔を伏せて、こちらを見ようとしなかったのも、卑屈なものに感じられた。狂四郎としては、最も好まぬたぐいの若者であった。

母のすみが、気をつかって、はらはらしたのは、息子の気象を誰よりも承知しているからに相違なかった。

すみが一人で語り、息子はついに、一語も喋らなかった。

敵三枝宗吾は、浅草駒形河岸に、牛王堂なる奇妙な小店をひらいている、という。

当時、神仏の冥罰にかけてとりかわす誓約は、熊野権現から出す牛王の誓紙に書いた。誓紙七枚をつないで書く、七枚起請誓紙は、相愛の男女が、対手に、おのが誠心を示すものとして、流行っていた。

吉原の遊女たちのみならず、かたきの家の娘たちも、浅草寺三社権現が、正月に売り出す牛王加持の牛王宝印のある誓紙に、起請すれば、必ず、その男は生涯わがものになると信じていた。

あきめくらが殆ど大半であった時代なので、その起請を代筆する商売もあった。

すなわち、三枝宗吾は、牛王誓紙を用意していて、代って起請してやる小店をいとなんでいたのである。それればかりか、ふつうの手紙の代筆も引受けていたし、盗難よけの五大力菩薩の護符なども、書いている、という。

祐筆をつとめていた人物が、思いついた職業であった。

――起請の代筆屋になるとは、にげかくれをせぬ男であろうか。

狂四郎は、そう思った。敵討をしようとする者たちならば、必ず、行くさきざきの神仏の加護をたのむ。それに関連した仕事をするのは、討たれる側としては危険な筈であった。

今日まで、すみ母子に、発見されなかったのが、ふしぎなくらいである。

――にげかくれをせぬ男ならば、堂々と、竹矢来の仇討場をつくって、果し合うのを承知するであろう。

狂四郎は、一馬を、見据えて、

「刀は使えるか？」

と、訊ねた。

すみが代って、

「病弱に育ちましたゆえ、道場へは、ほんのわずかしか、かよって居りませせぬ」

と、こたえた。

狂四郎は、立ち上がると、

「明日中に、藩邸と町奉行所へ、訴え出て、下知をもらうがよい。……三枝宗吾には、わたしが代って、口上する」

と、言いのこした。

三

次の日の昼、狂四郎は、駒形河岸の牛王堂なる小店の店さきに立った。

几前に端坐していたのは、四十年配の、いやしくない人品の人物であった。狂四郎へ擡げた顔は、温容といえた。

「お手前は、元鍋島摂津守祐筆・三枝宗吾殿ですな？」

ずばりと、問うた。

対手は、一瞬、返辞をためらったが、

「御用件は？」

と、問いかえした。

「十四年前に、お手前が斬った成富頼母の妻すみと一子一馬が、お手前を討ちとるべく、本日、藩邸ならびに公儀へ訴え出た。……覚悟をきめて頂きたい」

その口上に対して、かなり永い沈黙を置いてから、

「ご貴殿が助太刀をなさるのだな」

と、見据えた。

「行きがかりの縁で、ひき受け申した」

「よしなに――」

三枝宗吾は、まるで自分が助太刀を乞うたように鄭重に、頭を下げた。すでに、この秋の来る

微かな自嘲をおぼえずにはいられなかった。

狂四郎は、成富一馬から与えられた不快感を甦らせると、この敵の態度の立派さとくらべて、のを、心にきめていた様子とみえた。

成富母子の仇討は、それから三日後、亀戸村にある羅漢寺の境内において、方十五間の矢来を組んで、行われた。

公儀からは、町奉行所吟味方与力二名、非常取締掛同心五名、鍋島藩からは、目付三名、侍頭、徒目付、小人目付、それから足軽五十名が、出張した。

口から口へつたえられて、矢来の外には、およそ千人の見物人が蝟集した。

太鼓を合図に、母子と三枝宗吾は間合いを詰めて、対峙したが、はなばなしい斬りあいは、演じられなかった。

二間をへだてて、母子の後方に立つ狂四郎も、その位置を動く必要はなかった。

三枝宗吾が、一太刀さえも、斬りかえさなかったからである。

一馬が、いくたびとなく、呶号を噴かせて、斬りつけようと、太刀を振りかぶったが、宗吾は、微動だにもしなかったばかりか、すみが、横あいから突きかけるや、自ら、その脾腹を空けたのであった。

一馬は、宗吾が、懐剣を刺されてよろめくや、

「こなくそっ！」

と、喚いて、はじめて、上段の白刃を、なぐるように、斬り下ろした。

それを肩に受けて、がくっと土べたへ膝をつく姿を、狂四郎は、名状しがたい感慨で、眺めたことだった。

討たれる宗吾に、清雅ともいうべき武士の面目が湛えられ、討つ一馬は、まるで、無頼の徒が喧嘩をして逆上したような、粗暴で下種な態度をみせたのである。

これは、検視の人々にも、見物人にも感じられ、異常な静寂が、仇討場を占めた。

狂四郎は、しずかに踵をまわして、矢来の外へ出た。

「旦那！」

山門をくぐろうとした時、うしろへ急ぎ足に追いついて来た者に、呼びかけられた。

遊びにん体の、目つきの鋭い若い男であった。

「うかがいてえことがござんす」

「なんだ？」

「眠狂四郎ともあろう旦那が、なぜあんな塵芥屑みてえな野郎に、助太刀なすったかだ」

「わたしも、いま、それを悔やんでいる」

「あの野郎はね、旦那、御家人崩れというふれこみで、上総下総を、いかさま賽をつかって、賭場荒しをやってやがったちんぴらですぜ。成富一馬という、親の敵をさがしていやがったとは、今日まで知らなんだ。敵討があるというから、見物に来てみりゃ、仰天させやがる。いかさま博奕の直公じゃねえか。渡世人仲間じゃ、出会ったら、有無を言わせず、たたっ斬ってやろう、と話しあっていた野郎でさあ。……役人衆が出張した上での仇討だろうから、まちげえはあるめえが、あん畜生が、大威張りで国許へ帰りやがって、もとのさむれえになって、肩で風を切りやが

ると思うと、なんとも、むなくそがわるくっていけねえ。……眠狂四郎の旦那、ちと、見そこないましたぜ」

四

成富親子が、藩邸から、猿江村はずれの裏店へ戻ってきたのは、夜に入ってからであった。侍頭つき添いで、駕籠で送られて来て、一馬は、精根つきはてたように、母すみの肩を借りて、家へ入った。

ところが、侍頭が去ると、一馬の態度は一変して、大胡座をかくと、

「酒はねえか。……江戸家老の前で、一滴もやれねえ真似をするのは、死ぬよりも辛かったぜ」

と、言った。

すみは、台所から、酒を持ってくると、

「……くどく申しますように、国許へ帰れば、始終、人目がありますゆえ、どうぞ、振舞いに気をつけて下され。そなたは、成富一馬ですぞえ」

「わかっている。おらあ、成富一馬よ。天下に、成富一馬は、二人といねえやな。……国許へけえれば、おめえはお母上だ。ふん、貞女の鑑のお母上だ」

にやりとした一馬は、いきなり、すみを、猿臂をのばして、とらえると、抱き込みざま、むしりとるように、裳裾をはぐって、片手を、ずるずると、膝と膝の間へもぐらせた。

すみは、なんの抵抗もせず、目蓋を閉じて、一馬の弄ぶにまかせて、行燈のあかりに、しろじろと、内腿まであらわに拡げて、動かなかった。

「おい、おれが、国許へけえれば、花嫁をもらうぜ。毎夜、可愛がるようになったら、お母上は、どうするね？　我慢できるかね？　となりの部屋で悋気の夜叉になるんじゃねえのか？」

一馬が、ざんにんなささやきをくれたとたん、

「そこまでは、旨い汁は吸えまい」

襖ごしに、冷やかな声がかかった。

はじかれたように、一馬とすみは、とびはなれた。

「野郎っ！」

一刀を抜きはなって仁王立った一馬へ、襖を開けて、狂四郎は、言った。

「貴様が斬りあうに、ちょうどふさわしい対手が、外で待っているぜ、御家人崩れの直さん。……貴様をさがしていた馴染みのやくざだ。昼間のような調子で、勝つわけにはいくまい。せいぜい、肚をきめて、斬りあうことだ」

それから、うなだれたすみへ、視線を移すと、

「女！　幾年前に死んだのか知らぬが、本物のせがれが、あの世で、お前さんの行状をなげいているぞ。お前さん自身が、あの世へ行って、詫びるよりほかはあるまい」

と、言った。

外から、若いやくざが、威勢のいい声で、

「いかさまの直公、出て来いっ！」

と、叫んだ。

黒い剣士

一

霜枯れた庭に、朝の寒気が、張っていた。風もないのに、ひとひら、ふたひら、銀杏(いちょう)の枝から、はなれて、落ちるのが、いかにも、静かで、あわれに見える。

苔(こけ)をのせた大きな石を、五つ六つ配しただけの平庭で、広いのであった。樹木と石のほかには、縁さきに、古びた高麗鉢がひとつだけ据えてあり、薄氷が張っていて、金魚は、底で、ねむっている。

縁側に、ひとつの白い影が、あらわれて、ゆっくりと歩んで来て、庭へ降り立った。

目孔(めあな)のない頭巾(ずきん)で顔をつつんだ白装の姿は、蕭条(しょうじょう)たるたたずまいの中で、人間とは程遠い存在と化して、音もなく、匂いもなく、幽鬼に似た――。

しばらくの間、彫像のごとく、微動もせずにいた。

やがて、スラリと、腰の差料を、抜きはなつと、片手八相にとった。

とたんに、高い梢(こずえ)から、怯(おび)えたように、灰色の椋鳥(むくどり)が、尾筒と腹を白く閃(ひらめ)かせて、ぱっと、飛び立った。

と同時に、白頭巾の左手が躍った。
掌から放たれたのは、槍(やり)の穂形の手裏剣であった。
……羽根を縫われた椋鳥が、一直線に落下して来た。
白頭巾は、視力を持った者のごとく、ツツツ……と二間を、滑(すべ)って、左上段に構えた白刃を、水平に、薙(な)いだ。
ふしぎであったのは、次の瞬間、椋鳥が、バタバタと、はばたいて、樹枝へむかって、翔(か)けたことである。
地べたには、両断された手裏剣が、ころがっていた。
納刀しおわった白頭巾は、そのまま、そこに佇立(ちょりつ)して、何を想うのか、動こうとせぬ。
「お見事！」
縁側から、声が、かけられた。
いつの間にか、夢買いの老人が、出て来て、見物していたのである。
白頭巾は、座敷にもどると、
「さびしくなったな、老人」
と、言った。
「左様——」
老人は、うなずいて、
「一郎太も次郎太も、三郎太も四郎太も五郎太も、六郎太も七郎太も——みな、逝(ゆ)き申した」
と、言った。

それから、しばし、沈黙を置いてから、白頭巾は、
「所詮、われら一党は、ほろびる宿運であったな」
と、呟くように、もらした。声音は、沈んでいた。
老人は、凝っと、対手を瞶めていたが、
「もはや、ご存じか？」
「うむ――」
白頭巾は、こたえた。
「……呪われているのかも知れぬ」
「そんな筈は、ご座ない！」
老人は、はげしく、かぶりをふった。
「偶然が、重なったにすぎ申さぬ！」
「そう思いたいが、お許自身、そうは思うて居るまい。……若の病んだ身の崩れかたは、ひどすぎる、ときいた」
「…………」
一族の頭領三郎秀忠の地位に即かせた少年のことであった。
江戸から日光山中の館へ戻って数日経たぬうちに、全身に、突然、屍斑のような紫色の斑点が出て、高熱を発したのである。
少年が、はじめて患う奇怪な病いではなかった。すでに、幾代も前から、何人かが、この急患に遭うて、殪れていたのである。一族は、日光山中のあらゆる薬草をあさって居り、さまざまの

病いを癒すことに長けていたが、この奇怪な症状に対してだけは、ほどこすすべを知らなかった。

さらに、一族にとって、黯澹たることは――。

五代ばかり前から、頭領三郎秀忠を継いだ者が、ことごとく、二十歳に満たずして、生命を落しているのであった。しかも、いずれも、納得し難い死に様であった。

あるいは、前夜まで愉しげに談笑していたのが、朝になると、いつの間にか、林の中で、冷たい屍になっているとか。あるいは、狩猟に出て、断崖から転落するとか。あるいは、一族に狂気の者が出て、これをとりしずめんとして、あやまって、刺殺されるとか。

いわば、一族は、この百年あまりの間に、頭領の嗣子を、新頭領の地位に即けて、祝うことは絶えてなかったわけである。

その無慚な最期に遭うて、やむなく、一族は、次代の頭領たるべき候補を、幼い者の中から二人か三人、えらんで、これに峻烈な修業を課し、元服を待って、凄絶の試合を演じさせて、勝ちのこった者を、即けることにしていたのである。

いまの三郎秀忠は、双生児であった。

日丸・月丸と称ばれた双生児たちは、ともに頭領の候補として、育てられたのであった。

そして、元服の日、飛鳥山の麓近くの平塚城跡で、きょうだいは、異様な試合を行なったのである。

まず、一尺高さの一本歯の足駄をはいて、独楽をたたかわせた。卑劣と思われる手段で、勝ったのは、弟の月丸であった。

敗れた兄の日丸は、大凧（おおだこ）へ大の字にくくりつけられ、中空へあげられた。勝った月丸は、半弓と二本の矢を与えられ、これを射るように命じられた。

すると、月丸は、狡智（こうち）ともいうべき業をもちいて、兄を射殺したのであった。すなわち、第一の矢で、大凧を狙（ねら）わずして、それをつないでいる凧糸を切断しておき、第二の矢をもって、落下して来る大凧上の兄の額を射抜いたのである。

眠狂四郎は、これを目撃している。その残忍さに、名状し難い不快感をおぼえさせられたことだった。

一族にとっては、なんの凝議するにもおよばぬ神聖な行事だったのであるが……。

二

いま、ようやく、一族中に、おのれたちのあまりに人倫をふみはずした行動を反省する者があらわれたとしても、これは、ふしぎではない。ただ、その者が、一族の人望をあつめている軍師であったのは皮肉というべきであった。

「呪（のろ）われているのかも知れぬ」

軍師のこの言葉が、夢買いの老人を、慄然（りつぜん）とさせたのは当然であった。

まさしく、三郎秀忠は、高熱こそようやく引いたが、そのかわりに、四肢の関節に、堪え難い疼痛（とうつう）を訴えて、昼夜、呻（うめ）き、のたうちつづけて、いまは、骨と皮にやせおとろえはてているのである。

ふたたび、この江戸へともなって来たのも、一族の薬法をもってしては、恢復（かいふく）させることが絶

望とさとって、せめて、雪のない土地に移そうという夢買いの老人の配慮であった。

老人は、この重患を、看護に当っている者二三人を除いては、厳秘にふしていたのだが、すでに、軍師は、さとっていたのである。

「老人――」

「なんでござろう？」

「眠狂四郎の知人に、曽田なにがしという蘭医がいる、ときいたが、いちど、看せてはいかがであろう？」

「すでに、看せ申した」

「…………」

次郎太と四郎太が、狂四郎を生捕るために、曽田良介の身柄を拉致したことは、既述した。その際、老人は、若者たちの狡猾な策略を憤怒したものの、狂四郎を虜囚とする代りに、曽田良介を解き放つ際、良介にひそかに、乞うて、少年を診察してもらったのであった。

良介は、真剣にしらべおえてから、かぶりをふり、

「今日の医学をもってしては、不明の病いです。したがって、療法は判りません」

そうこたえて、去ったのである。

「……たすからぬ、とすれば、次代を育てねばならぬが――、老人、もはや、それは、無駄ではないか」

「無駄ではござるまい。次代を育て、さらに、あらたに、その旗本たる七人組をつくる。それが、われらの任務でござる。そのために、血すじ正しい美しい少女をえらんで、刺青をほどこし

ておき、娘となった時、強い子を生ませようと、深謀遠慮したのではござらぬか」
そう言う老人の声音は、しかし、力がなかった。
まことに、一族が、後代に、おのれらの血を継いだ逞しい子孫をのこし、さかえさせようと企て、敢行した行為は、常人の想像を越えていた。
大名や旗本の屋敷の奥をさぐって、これはと目をつけた十歳に満たぬ少女を、神かくしに遭うたとみせかけて、拉致し、その内股に、朱をもって葵の刺青をほどこして、屋敷へかえしておく。
どの屋敷でも、この不運が、世間にもれるのを憚じて、厳しく秘密をまもるのが、一族のねらいであった。
少女が、やがて、美しく生長するや、一族は、あらためて、堂々と、所望する。
もとより、すなおに渡す家はなかった。しかし、一族の手練者たちの力は、奪いとるにあまりあった。そうして獲た花嫁は、これまで、二十数人をかぞえる。
ただ、一族の期待にも拘わらず、彼女たちが、生んだ子は、奇妙にも、次つぎと、夭折したのであった。実は、日丸・月丸の双生児もまた、そうしてもうけた子たちであったが、かれらも、夭折からまぬがれ得ぬ運命であった。
一族としては、たとえ、片はしから、夭折しようとも――いや、夭折すればするほど、子孫をのこさんとする意欲を熾烈にしなければならなかった。
眠狂四郎という人物が出現して、前に立ちふさがるまでは、おのれらの単純で、素朴で、ひたむきな行動を、懐疑する者は一人もなかった。

徳川家正統を承けるのは、われらが頭領三郎秀忠であり、現将軍家は贋ものである、という信念は、巌のようにかたかったのである。

ひとたび、壮図を実践に移せば、たちどころに、江戸城をわがものにできる、という夢想は、殆どの胸中に在った、といえる。

日光山中の孤塞に拠って、二百余年間、父祖から、その信念のみを受継いで来た者たちであった。尋常人の頭脳ではなかったのである。

何処の馬の骨とも知れぬ素浪人ただ一人に、つぎつぎと、企図するところを撃ち砕かれて、渠らは、ようやく、戸惑わざるを得なかった。

——こんな筈ではなかった！

撃ち砕かれる毎に、そう思わざるを得なかった。

軍師たる白頭巾は、その動揺を観たのである。いわば、眠狂四郎によって、たかが百名にも足らぬ一族が、どのようにかたく団結しようとも、いざ事を起さんとすれば、いかにも微力な存在にすぎぬ、ということを教えられた——それに、気がついたのである。

眠狂四郎ただ一人すら殪し得ぬものが、どうして、幕府など倒し得ようか。

白頭巾の絶望は、それであった。

「老人——。お互いに、心をいつわるまい。……いま、わしに、のこされていることがあるとすれば、眠狂四郎と雌雄を決する——それだけだ」

「………」

「どうしたぞ？　なぜ、こたえぬ？」

「お手前様と雖も、狂四郎に勝つことは、おぼつかぬ、と存ずる。目があいて居られるならば、べつだが……」

「たたかってみなければ、わかるまい。……若を見舞おうか」

白頭巾は、しずかに、立ち上がった。

三

病める少年が、羸痩の身を横たえていたのは、中山道から一里ばかり北に入った志村原の茫々たる茅原の中に、ぽつんと建っているひとつ家であった。

この一円は、将軍家放鷹の地なので、鳥見屋敷のほかは、人家も殆ど見当らず、耕地もつくられず、茅原の中には、鶴や鷺や雉子や鶉のほかに、鹿までも、やって来て、棲みついていた。

街道を、夜のうちに通る人は、それらのけものや鳥の声を、ぶきみなものにきいて、足をはやめたものである。

陽が落ちかかってから、ひとつの人影が、街道から、茅原の中へ入った。

黒い頭巾に、黒羽二重をつけ、黒い袴をはき、黒い大小を帯びた——黒ずくめの人物であった。

六尺をこえた痩身は、唸りをたてて吹き渡るこがらしに追われて、なんの重量もないかのごとく、ふわっふわっと浮きぎみの、ふしぎな歩行ぶりをみせた。

細い道は、ゆるやかに一上一下して、やがて、やや高い台地に、至った。いにしえの城の址であって、台地の麓は、塹壕になり、てまえは、土塁らしく、盛りあがっていた。

黒い人物は、土塁上に立って、台地の疎林の中に在る古びた家を見やった。

「始祖の城が、ここに在った」

ひくく呟いた。

風魔三郎秀忠が、実父家康から、最初にもらったのが、この台地上にそびえていた古城であった。江戸城が、小田原北条氏に陥(おと)される以前から、赤塚城主千葉自胤(よりたね)の一族である千葉隠岐守が住んでいた、と伝えられる。

風魔三郎は、二代将軍となるや、自らの手で、その城をあとかたもなくつぶして、日光山中へ、身をしりぞかせたのであった。

この黒い人物は、風魔三郎を始祖と呼んだ。すなわち、一族の者に相違なかった。

曽(かつ)て、二十年前、風魔一族には、左門・右門という若き俊髦(しゅんぼう)が、双璧(そうへき)として期待をになっていた。胆力、業、知能において、優劣はなかったが、その気象は、対照的であった。

左門は、何人にも馴(な)れぬ猛々(たけだけ)しさがあり、古諺(こげん)に謂(い)うところの「狼子野心(ろうしやしん)」の気色を、つねにむき出していた。

これにひきかえて、右門は、元服の頃から、言動に咎(とが)め寡(すく)なく、悔いのない日々を送ろうとする賢者の風をそなえていた。

両者は、他目(はため)ほど、競争心が烈(はげ)しいわけではなかったが、事あるごとに、競わされているうちに、いつとなく、並び立たぬ事態に追い込まれていた。

そして、ついに、某日、左門が右門に、快戦を挑(いど)んだ。これは、一族の長老のみとめるところとはならず、両者は、ただ一人の立合いもなく、渺茫(びょうぼう)たる戦場原の一角で、死闘を竭(つく)したのであ

った。

館へもどって来たのは、右門だけであった。白い布で、双眼をしばり、刀を杖にしていた。文字通り、満身創痍であった。

長老から、「左門は如何した？」と問われて、ただ、

「去り申した」

と、こたえただけで、あとは頑なに口をつぐんだ。

それから……二十年を経て、右門は、軍師白頭巾となり、左門は、杳として行方知れずのままであったが……。

六尺余の長身を、黒一色につつんで、こがらしに追われるようにして古城址にやって来たこの人物が、風魔左門だったのである。

左門は、江戸に入るや、ただちに、一族の一人を尋ねて、目下の情勢をきき、新しく頭領に即いた少年に挨拶すべく、ここをおとずれたのであった。

二間幅の塹壕を、かるく、ひと跳びして、疎林に入った左門は、木樵ていをした若者二人に、左右から迫られると、

「風魔左門が帰還した」

と、告げた。

一族の若者たちにとって、この名は、伝説的なものとなっていた。

左門は、若者たちが信じないとみてとるや、やおら、左手をはだか木の一枝へ、のばした。

その梢には、一羽の椋鳥が、とまっていた。

左門は、椋鳥をとまらせたまま、音もなく、その枝をもぎ取ると、面前へ水平にさしのべた。椋鳥の方は、どうしてこういうことになったのか、さっぱり、わけがわからぬように、きょときょとと、首をまわしているのだが、足が、枝に、膠付けにでもされたように、飛び立てないのであった。

一瞬――左門は、枝を、さっと、下げた。椋鳥は、はじめて活きかえったようにはばたいて、飛び上がろうとした。だが、二尺と飛ぶいとまをあたえられず、旋回した枝で、ひと搏ちに、撃ち落されてしまった。

若者たちは、ただ、魔術に眩惑されたように、茫然となっていた。

それから、いくばくかの後、左門は、奥の一間へ、案内された。

その部屋からもれる悲痛な呻き声は、遠く玄関に立った時に、左門の耳にとどいていた。廊下を歩んで行くにつれて、呻き声も烈しくなるようであった。

「どのように、足を忍ばせても、若のからだにひびいて、痛みが増す模様でござる」

案内に立った者が、ひくくそう告げた。

障子をひらいたとたん、名状し難い臭気が、左門に、思わず、息を止めさせた。

――これが、十五歳の少年の貌か？

枕元に坐った左門は、胸のうちで、冷然と呟いた。

これまでに肉落ちしても生きられるものか、と唖然とするくらい骨と皮ばかりの貌は、無数に皺んで、皹割れて、まったくの土色であった。

「……痛い……いたい……いたい、いたい、いたい……ああ、ああ、いたい……」

なかばは、もう無意識であろう、枯木のような手で、宙をさぐり乍ら、たったひとつの悲鳴を、間断なく、くりかえしているのであった。
しばらく、その悲惨なすがたを、黙然と、見戍っていた左門は、すっと、耳もとへ口を寄せて、
「風魔の頭領たる者が、なんたる見苦しい醜態か！　舌を嚙む気力を喪うて居るのか！　たわけ！」
と、叱咤した。
少年は、瞬間、かっと、双眸を瞠いて、濁った光を、左門にあてた。
左門は、睨みかえし乍ら、
「病んで逝くのは、最大の恥辱であろう。おのが手で、おのが生命を断ていと、あびせた。
「……う！」
少年は、咽喉の奥を、ひくく鳴らした。それから、手真似で、起してくれ、とたのんだ。
「よし――」
左門は、床の間の刀架けから、脇差を取って来ると、少年のからだを起してやり、
「しっかと持て！」
と、双手へ、柄を摑ませた。
白頭巾と夢買いの老人が、この家へ到着したのは、左門が立ち去って、ほどなくであった。
臭気の盈ちたその部屋では、少年は、牀の上に、痩せおとろえたからだをふたつに折ってい

た。
　老人が抱き起してみると、脇差は、ふかぶかと、咽喉をつらぬいていた。
　老人は、白頭巾に、頭領らしいいさぎよい最期のさまを教えた。
「……自決する力をのこしていたのか」
　沈んだ声音をもらす白頭巾の背後で、この家の留守居が、
「おそらく、左門殿の手が扶けたであろうと存じます」
　と、告げた。
「左門?!……左門が、あらわれたのか？」
　めずらしく、感情をあらわにした語気で、白頭巾は、さけんだ。
　風のごとく来て、風のごとく去った左門であったが、人々には、なにか異様な衝撃に似た印象をのこしていた。
「そうか、左門が、あらわれたか」
「左門ならば、これが新しい頭領であることに、我慢がならなかったのは、無理からぬ」
　夢買いの老人は、かぶりをふってから、
「軍師――。眠狂四郎と雌雄を決するのは、お手前様ではなく、左門ときまり申したな」
　と、言った。
　すると、白頭巾は、
「いや――」
　と、かぶりをふった。

「左門が、還って参ったのは、偶然ではない。それがしとの約束をはたすためだ」

「約束？」

「二十年前、左門とそれがしは、戦場原で勝負がつかなかった。ともに、二刻をたたかって、体力気力とも尽きはてた。それがしは、左門に、何処（どこ）へなりと立ち去れ、とたのんだ。左門は、承知するかわりに、それがしに、盲目になれ、と申出た。……左門とそれがしは二十年後に、再び、勝負することを約束して、別れたのだ」

これをきいて、老人は、身うちが、ひきしまるのをおぼえた。

先刻、「所詮、われら一党は、ほろびる宿運であった」ともらした言葉が、納得できたからである。

虎狼は、再び闘って、ともだおれに殪（たお）れる予感が、老人をおそっていた。

追想記

一

人影の絶えた大通りのまん中に、いっぴきの犬がいて、冷たく冴えた寒月にむかって、なにやらもの悲しげに、吠えかけていた。

むこうの辻に、長身の黒い人影があらわれたので、犬は、吠えるのを止めて、じっと睨んでいたが、突如、何を思ったか、まっしぐらに跳んで、猛然と、躍りかかった。

狂犬だったのである。

人間の方は、叫びも、逃げもしなかった。

地を蹴って、襲って来たけものへ、無言で、抜きつけの一閃をくれた。

犬の首は、九尺も高く飛んで、とある店の招牌にぶっつかってから、ごろんと、地べたへ落ちた。

——二十年ぶりに江戸へもどって、まず、斬ったのが、犬か。

風魔左門は、白刃を腰に納めて、歩き出し乍ら、自嗤した。

左門が、飄然と、舞い戻って来たのは、宿敵右門と雌雄を決するほかに、もうひとつの用件が

あった。

亡き妻の遺髪を、その子に渡してやることであった。その子は、左門の子ではなかった。

亡き妻利江は、二十年前、中奥小姓、旗本寄合三千八百石庄司中務大輔康通の妻であった。中務大輔に嫁いでまだ二年に満たず、長女を生んだばかりであった。左門は、一夜、庄司邸へ侵入して、利江を掠奪したのである。

利江の内股には、朱の葵の刺青が、ほどこしてあったからである。

利江の実家三浦監物は、三河譜代の直参で、その始祖は、風魔三郎秀忠の傅者であった。当然、風魔一族は、三浦家の一女を、日光山中の館へ拉致して来る権利がある、と考えて、実行したのである。

利江は、八歳の折に、神かくしに遭い、三月ののちに、屋敷へ、もどされた。家人が、利江の内股に、刺青がほどこしてあるのを発見したのは、破瓜の時であった。利江は、気丈の少女で、それまで、ひたかくしにしていたのである。

父監物は、ただちに、利江の許婚者である庄司中務大輔康通をおとずれて、破談を申入れたが、康通はまだ二十歳になったばかり乍ら、肚ができていた。

「悪戯をされたのが、八歳であれば、身をけがされては居りますまい。いかがわしき入墨ならいざ知らず、葵の御紋とあれば、利江殿を、ますます大切に扱わねばなりませぬ」

そうこたえて、その年のうちに、吉日をえらんで、内祝言をしたい、と逆に申入れたのであった。

風魔一族が、利江の輿入れを知ったのは、一年ものちになってからであった。

一族の嫁にすると決定していた娘が、他家へ嫁いだと知れば、即座に、これを暗殺するのが掟であった。暗殺者は、その娘の良人となるべく予定されていた若者であった。

利江を妻にすることになっていたのは、現在軍師白頭巾となっている右門であった。

右門は、長老より命じられて、利江を暗殺すべく、庄司邸へ侵入して行ったが、むなしく、ひきかえして来た。

嬰児に添い臥している若い母のすがたを視せられて、右門は、斬るにしのびなかったのである。利江が、あまりに美しかったゆえでもあった。

一族に加えれば、けだし、随一の美しさであったろう。

掟を破った右門は、断崖を刳った洞窟牢に、百日間、結跏趺坐する刑罰にあまんじた。

牢を出た右門を待ちかまえていたのは、左門であった。

「利江は、おれに呉れ」

左門の要求は、それであった。

幸せな妻となり母となっている女性に、地獄の悲しみと苦しみを与えるのは忍びないからこそ、右門は、あえて掟を破ったのである。左門の要求を、承知する筈もなかった。しかし、左門は、あとへひかなかった。左門は、江戸に在って、娘の頃の利江を、かい間見て、忘れられなかったのである。その時すでに、拉致して妻にするのは右門と決定していたので、やむなく、あきらめていたのであったが、事態が変るや、左門の情念は、再び燃えたのである。

他家へ嫁いだ女を掠奪して来るのも、また、掟を破ることであった。

右門は、左門が利江をつれて、何処かへ姿をくらますのだ、とさとって、その所業を断じては

ばまねばならなかった。

左門と右門の、戦場原における決闘の、主因はそれであった。

利江は、掠奪妻となって、去年、西国の一隅で侘（わび）しい生涯を終えた。いつとなく憎悪（ぞうお）も消えて、日々のくらしを充（み）たそうとする良き妻になったかとみえたが、心の奥では、ついに左門を許さなかったことを、今際（いまわ）の際（きわ）にあきらかにしたのであった。

じぶんの遺髪を、庄司邸で生長しているわが娘（こ）にとどけて欲しい、とたのみ、もしそれをきいてもらえなければ、永劫（えいごう）うかばれぬままに、魂を中有（ちゅうう）にさまよわせなければならぬ、と遺言したのである。

左門は、凝（じ）っと、見上げる妻の氷のような冷たい眼眸（まなざし）に、はじめて慄然（りつぜん）となりつつも、承知してやらねばならなかった。

いま、左門の懐中には、利江の遺髪がある。

二

それから、小半刻（こはんとき）のち、左門は、下谷七軒町にある庄司中務大輔康通邸の、広い庭の一隅に、立っていた。

武家屋敷の宅地の制が定められたのは、寛永二年であり、爾来（じらい）これは、改められてはいない。万石より七千石までは、五十間四方。六千石より四千石までは、五十間乃至（ないし）四十間四方、三千石より二千石までは、四十間乃至三十間四方というあんばいにし、建物の規模構造も、おのずから、その宅地の広さにしたがって、分限を示して、きちんと定められていた。

三千八百石の庄司邸は、騎馬が三騎並んで出入できる長屋門をどっしりと構え、門番所、土蔵をひかえ、大玄関までの門径は長く、母屋は宏壮であった。

大名に準じて、表と奥を仕切って、境を厳重にする構造であった。奥方はじめ婦女子の出入する玄関、門も、別にもうけられていた。

しかし、この大規模な構造は、かえって、左門のような侵入者にとっては、好都合であった。

木立をくぐって、築山の頂上にのぼった左門は、二十年前に忍び入った時のままに、大きな池泉のかなたに、くろぐろと、宏壮な建物がわだかまっている光景を、感慨をもって、見やった。

二十年後に、掠奪した女の遺髪を届ける身になろうなどとは、想像もしなかったことである。

われにもあらず、うそ寒い寂寥感が背すじを匍うて降りた。

……感慨をふりはらって、左門は、建物へむかって、歩き出した。

妻を奪い去られた中務大輔が、その後、ついに妻帯せず、のこされた嬰児を美しい娘に育てあげ、去年、養子を迎えた、ということは、江戸へ舞い戻るとただちに、左門は、しらべあげていた。

使いに、遺髪を届けさせることも考えたが、里枝というその娘が、生母に生写しであるときいて、左門は、自ら侵入することにきめたのである。

奥と表との境になっている中廊下に忍び入った左門は、記憶を甦らせて、曾て利江がやすんでいた寝所へ、足を向けた。

灯かげが、障子にあった。

——二十年前と、すこしもかわって居らぬ！

時刻も、ちょうど、同じであった。
その障子に手をかけたとたんに、左門は、さらに、つよい衝撃を受けた。
甘い乳の匂いが鼻孔を衝いたのである。
二十年前も、これが、匂うた。
左門は、嬰児に添い伏している若い母を、悪魔のように、さらったのであった。
いま、また、その嬰児が、若い母になって、添い伏している。
ちがっているのは、おのれが、若さを喪っていることだけである。
ゆくりなくも、二十年前と全く同じ情況に置かれて、左門の身うちに、冷たくねむっていた血潮が、遽かに、若やいだ。
左門は、障子を開けた。
行燈の仄明りのなかに、乳の匂いとともに、化粧の匂いも、なまめいて、漂うている。
行燈には、薄桃色の打掛がかけてあり、寝室は、その色で、あえかに、彩られているのであった。
左門には、この雰囲気が、自分を待つためにととのえられたように思われた。
褥は、六双屏風でかこわれていた。その屏風もまた、左門の見おぼえのあるものであった。
屏風をまわって、覗き見た瞬間、左門は、大きく目を瞠った。
嬰児に添い伏している若い母の寝顔は、まさしく、二十年前の利江そのものであった。
奇蹟に見入るように、左門は、美しい寝顔へ、眼眸を食い入らせた。
廊下に、跫音が近づいて来た。

「里枝――」

障子越しに呼ばれて、若い母が、うたた寝から目をさまして、

「は、はい」

あわてて、起き上がった時、侵入者の姿は、すでに、屏風の蔭へ、消えていた。

入って来たのは、いかにも若々しい、男らしい風貌の青年であった。

「義父上は、お強いな。本因坊の舌を巻かせた、と自慢なさるだけある。井目を置いて、どうしても勝てぬ。碁所随一であろうな」

「碁だけが、父の唯一の愉しみでありますゆえ……」

妻は、良人を見上げて、幸せそうに微笑した。

良人は、妻の美しさに、ちょっと、とまどったように、そらした視線を、嬰児に落して、

「夢をみて居るのかな」

と、言った。

「ほほほ……、まだ半年にもならぬややが、夢などは、みませぬ」

「だが、なにやら、口をうごかしているではないか」

「乳をもとめているのでございましょう」

すると、良人は、妻をふりかえって、

「その乳を、父親の方が、暫時、ぬすむか」

と、笑った。

「まあ――」

笑いかえした妻は、いきなり抱きしめられて、
「ややが目をさまします」
と、ささやき乍らも、押し倒されるままに、良人の頸へ、両手をかけた。
長い口づけがすんでから、良人は、
「そなたが、好きだ」
と、言った。
「わたくしも、旦那さまが、好き！」
妻は、こたえた。
良人は、妻の頸をかかえた右腕を、胸にさし入れて、豊かな、柔らかな、あたたかい隆起を、さぐった。そして左手をのばして、寝召の前を左右に、かきわけた。
燃えるような緋色の二布が、寝召とともに、するりと滑って、肉盈ちた、軟らかな太腿をあらわにした。
屏風の蔭から、左門が、影のように音もなく、すっと、枕もとへ立ったのは、この時であった。
掩いかかった巨きな影法師に、はっと、顔をあげた若い良人は、一瞬、あまりの驚愕で、声も出なかったが、妻の悲鳴をあびて、はっとおのれにかえるや、
「推参！」
枕もとに置いた脇差を摑みとりざま、突きかけた。
左門は、わずかに身をひいただけで、無造作に、白刃を摑んだ右手を、ぐいと、畳へ、踏みつけた。

「お、おのれっ！」

もがいて、ようやく、自由をとりもどした若い良人は、はね起きて、長押にかけられた妻の薙刀を、把った。

「曲者！」

絶叫とともに、夢中で、びゅっと横薙いだが、むなしく、宙を截って、よろめいた。

左門は、そこを、一歩ふみ込むと、

「不運と知れ！」

その一語とともに、目にもとまらぬ迅さで鞘走らせた差料を、袈裟がけに、斬り下ろした。

妻の方は、悲鳴を迸らせ、そして、失神した。

次の瞬間、左門は、ぐったりとなったそのなまめかしい寝召姿を、横抱きに、かかえあげると、寝室をとび出し、廊下を風の速さで、奔った。

「おっ！　しゃっ！」

悲鳴をきいて、かけつけて来た宿直の侍が、喚きつつ、抜刀したが、ふりかぶるいとまも与えられずに、のけぞった。

三

通り魔のように、深夜の街なかを、馬をとばして、左門が、到着したのは、志村原の館であった。

「奥を借せ」

留守居の者に声をかけて、ずかずかと通った左門は、死んだようにぐったりとなっている里枝を、そっと、畳の上へ、横たえた。
その母利江を拉致して来て、横たえたのも、この部屋であった。
あの時は、意識を甦らせた利江を、左門は、即座に犯したものであった。
いまは、しかし――。
腕を組んで、じっと見下ろしているだけで、身のうちに狂暴な欲情はすこしも起っていなかった。
のみならず、息も絶えたような寝顔にあわれさを感じ乍ら、
――おれは、この女を、どうしようというのか？
と、おのれに呟いていた。
その良人が入って来なければ、左門は、黙って、枕もとへ、利江の遺髪を置いて来た筈であった。
睦み合う光景に、かっとなってから、左門は、おのれを制御するすべをうしなったのである。
残忍な血潮の噴くままに、その良人を斬りすてて、さらって来たのであったが、こうして、あわれなすがたを見戍るうちに、左門の胸中は、しだいに、空虚になっていた。
左門は、ただ、こうして、腕ぐみして、坐っているよりほかはなかった。
外が明けて来る気配を感じ乍らも、左門は、黙然と坐りつづけていた。
縁側に、誰かが立った。
左門は、なお、里枝の寝顔から、目をはなさなかった。

「左門──」
声が、かかった。
「城址の台地で、待っている」
左門は、その声が、宿敵右門のものであるのを、ききまちがえはしなかった。
左門は、それから、なおしばらく、坐りつづけていた。
里枝が、微かな呻きをもらして、身うごきするのを見てから、左門は、利江の遺髪をそのふところへ入れてやっておいて、立ち上がると、玄関へ出て、そこにいた者へ、
「わしがつれて来た女を、下谷七軒町の庄司中務大輔の屋敷へ、かえしてくれ」
と、たのんだ。
まだ陽のささぬ、淡々とした乳色の空の下の冬景色は、薄の穂さえも、そよともせぬ静寂をたもっていた。もし、小さな音が起っても、亀裂が入りそうなくらい、寒気の空寂は、ふかかった。
四方に樹木のない台地上に、白頭巾に白衣白袴、白柄白鞘の、総身白ずくめの姿を見出した左門は、思わず、微かな戦慄を背すじに匐わせた。
曽ては、血気の競争対手であった右門が、二十星霜を経て、いまは、尾羽打ち枯らした自分とは比べもならぬ、遥かな高処に、殆ど神仙に近い清雅な気色を湛えて、立っている、と感じられたのである。
──いや！　おくれはとらぬぞ！
左門は、昂然と、胸を張った。
──剣の技において、おれは、冴えさせて居りこそすれ、いささかもおとろえては居らぬ。

左門は、大股に、台地へのぼって、二間をへだてて対い立つと、
「右門、久潤――」
と、声を送った。
一拍子の間を置いて、白頭巾は、
「一族の滅びる秋には、遠くに、消息を絶っていた者までが、死にに戻って来るな、左門」
と、言った。
「風魔が滅びる？　……何を申す！」
「左門、いま、それがしは軍師だ、なまじの予感で、かるがるしく、運命を占いはせぬ。……お主もまた、げんに、滅亡に、一役をになって、稚い頭領を自決させた」
「あれは……たかの知れた痛みに、呻きたてる意気地なさが、頭領たるの資格なし、とみてとったからだ」
「さよう――そのように、ひとつひとつに、理由をつけて、われらは、滅亡の道を急ぐのだ。……お主とそれがしが、ここに、雌雄を決するのも、そのひとつ。二十年前に約束したという理由によって、これは、さけられぬ。そして、片方が、確実に、殪れる。勝った方もまた、明日は、なにかほかの理由によって、殪れることになろう」
「右門、さかしらめかしたくり言は、止めい！　それとも、決闘を怯じているなら、正直に、そう言え！　お主は、いまは、まことの盲目であろう。されば、わしに敵わぬぞ！」
それに対して、白頭巾は、言葉で応えるかわりに、しずかに、その頭巾を、脱いでみせた。
意外にも、癩によって崩れていると思われた顔は、端麗の相を湛えて居り、双眸は、澄んで、

光を冴えさせていた。
「……？」
左門は、息をのんだ。
「左門、それがしが、何故に二十年も、頭巾をかぶって、癩を発したふりをしていたか、判るか？」
「判らぬ！　何故だ？」
「それがしは、利江を愛した」
「なに？」
「愛したからこそ、人の妻となって、嬰児をかかえた姿に、一指もふれることは、叶わなかったのだ。利江を妻にできぬならば、生涯無妻ですごそうと、肚をきめたことだ」
癩を患った者は、妻を持たぬ、という不文律が、一族にあったのである。
「お主もまた、利江を愛したことは、すでに知っていた。お主の方は、愛したからには、たとえ人の妻であろうとも、奪って、わがものにする欲望に燃えた。それを許せぬそれがしは、お主に決闘を挑んで、斬ろうとした。無念にも、斬れなかった。斬れなかった以上、それがしは、お主ののぞむところを、もはや、はばみ得なかった」
「………」
「一人の女を愛したばかりに、一人の男は、二十年間、贋めくらを通し、もう一人の男は、いま舞い戻って来て、またその娘を奪って来た。ともに、ばかげた道化、と言える」
「止めいっ！」

左門は、狂気のように、ほえた。
「今更、くり言をほざいて、なんになる！　右門、勝負！」
左門は、さっと抜きはなった一刀を、上段に位づけた。
右門は、その構えを、数秒間、冷たい眼眸で凝視していてから、すらりと、鞘走らせて、ぴたっと、青眼にとった。
……それから、およそ半刻ちかくも、昇って来る陽が、微動もせぬ二人の足もとから延びた影法師を、徐々に縮めた。
やがて、勝負を決する一瞬が来た。
一方が、地を蹴って、跳躍し、一方は、身をひくく、沈めた。
それだけであった。
襲った方が、飛んだ地点で、にぶい音たてて、ころがり、受けた方は、ゆっくりと身を起した。
それを待っていたように、風が立ち、薄の穂が、ゆれなびきはじめた。
眠狂四郎が、白頭巾からの決闘状を受けとったのは、その日の午後のことであった。

死戦

一

風魔一族の志村原館に、公儀隠密団黒指党が、斬り込んだのは、正月元日の朝ぼらけであった。

元日の朝といえば——。

むかしも今日(いま)も、ひっそりとしている。当時は、吉凶を大切にして、すべての仕事を、大晦日(おおみそか)ですませようとしたので、その繁忙ぶりは大変であった。文字通り、東雲(しののめ)が棚曳(たなび)く頃まで、熱鬧(ねっとう)のちまたであった。しかし、夜がしらじらと明ける頃になると、江戸中、町家は両側とも板戸を閉じて、往来は、すべて一物もなくなり、しーんとなって、道路の幅が、急にひろくなる。

元日に、家業をなして銭儲(ぜにもう)けをするのは、ひとり、凧(たこ)を商う店だけであったが、これもまた、辻々に葭簀(よしず)をかこって、紙鳶(たこ)をねむらせている。子供たちが、屠蘇(とそ)を汲(く)み雑煮(ぞうに)を祝ってから、とび出して来るのは、陽が高く昇ってからであった。

初日影を拝そうと、出かける人影もまだ見当らぬ頃あい、おもてを黒い布で包んだ武士の一団が、粛々として、江戸を出て行く有様は、ただならぬ空気を流して、野良犬たちの尻尾(しっぽ)をも巻か

せた。
志村原に到着した時、淡々とした乳色の立春の空に、一陽の影がさして、その紅がひろがった。
その館は、ほかの屋敷とかわりなく、しずかに、ねむっていた。
門前の松の飾りは、江戸城内外三十六の見附御門と、全く同じであった。
葉をつみ落した竿同様の太竹に松を添え、松の根まわりへ四本の杭を打って、太縄でしばり、むしろ、荒々しい作りかたであった。町家の方が、かえって、装飾として、美しく作ってあるのであった。
門松という吉例は、そのむかし、徳川家康が武田信玄と戦った時に、おこっている。
武田方から、元旦の発句として、
　松かれて竹たぐいなきあした哉
と、したためて、送って来た。
松は、徳川家が松平姓であるのを意味していた。
家康が、不快な面持になるのを見て、酒井左衛門尉が、
「左様にお読みなされるのは、まちがいにご座候。松かれで、武田首なき旦かな、とお読みたまうべき——」
と言って、笑ってみせた。その時の戦いには大いに運を得たので、これが、元旦の吉例となったという。
したがって、松は根のあるいきいきしたのをえらび、竹は枯れて、葉の落ちたのをえらぶのが、正しいのであった。

黒指党四十余名は、その松飾りの門前に、整然と並ぶや、一斉に、羽織って来た合羽をすてた。

のこらず熨斗目小袖に、麻裃の礼服であった。

先頭を歩いて来た党首が、門扉へ進んで、声をはった。

「かしこまって、物申す。昨一年、われら公儀より放たれたる黒指党は、貴一族を殲滅せんと計って、ついに成らず。もとより、骨を瘞むるとともに名をも埋め果てる党なれば、幾度びの挫折を重ねるとも、その決意を放棄するものにあらず。しばらく、矛をおさめていたるは、わが結集せる力をもってしてなお、およばざる貴一族に対して、奇襲の策をとらんとしていたるものにあらず。この朝――めでたき元旦を期して、堂々の戦いをいどみ、玉砕の意志をかためる所以と知られたい。申さば、徳川家正統を継ぐと誇る貴一族に対するわが党が武士道の吟味と申すべし。……兵強ければ則ち滅び、木強ければ則ち折る、と申す。貴一族は、あまりに強き故に、この元旦とともに、滅び去る命運にあり。わが党もまた一人のこらず生きて還らざることを誓って居り申す。……若水を汲み、新年の祝賀がおわらば、すみやかに、戦いの陣を敷かれたい！」

これに対する返辞は、しずかに門扉を左右に押しひらくことであった。

同時に、門内の中央に設けられた篝火が、燃えあがった。

これは、意味があった。

武田の軍勢に追われて、浜松の城に遁げもどった家康は、何を考えたか、城門を開かせて、篝火をあかあかと焼かせ、城内を、ひそと、鳴りをしずめさせた。

武田の謀将馬場美濃守、山形三郎兵衛尉は追跡して来て、城の前面に駒をとめたが、この趣を

眺めて、

「海道第一の知将たる家康には、さだめて謀計があるに相違ない」

みだりに攻め入ることは難し、と揚げ貝を鳴らして、引取って行った、と伝えられている。

いわば、家康が、必死の苦肉の計が、みごとに成功したのである。

風魔一族は、この故事にならったのである。

尤も、敵勢をたたかわずして引きあげさせようというつもりでは、さらになかった。

黒指党は、なんのためらいもなく、門をくぐって、篝火の前に、一列の陣形をとった。

二

館の奥の広間では、黒指党の襲来を黙殺するかのように、凡そ四十名ばかり、礼服に威儀を正し、粛然として、しわぶきひとつたてずにいた。

二間床には、「尚武」の二字の掛物がかかげられていた。始祖風魔三郎秀忠の筆であった。

上座は、若い頭領を喪って、空席となり、それが、めでたかるべき元旦の儀式を、寂寥でつつんでいるかに見える。

上座に正対して、前列の座に、軍師風魔右門、夢買いの老人こと風魔源左衛門、ほか主だった年配者が並んでいた。

この一族の新年の祝いは、屠蘇を汲むかわりに、若水による水盃であった。

いま、それがおわった。

軍師風魔右門は、床の間へ膝行して、三方の上の古びた巻物を把ると、一同へ向って、端坐

し、それを披いた。

「夫日月を旗とし、雷竜を兵とすれば、賊師千軍、頭を延べて刃を待つ、と言えり。邪正死活を弁ぜざれば、神武の兵に達する事あるべからず。わが邦の兵、極陽を尊んで、陰微を禁ず、雑兵家の企て及ばざる所以なり、陽なるが故によく正し、正しくして能く動く、故に邪兵姦謀をなすものに逢うて勝負をかくる事、磐石の鶏卵を押すが如し、かれよりして摧け、かれよりして破る、千里縦横とどめらるる所なし、神軍の妙察せずんばあるべからず」

それから、いちだんと、声を冴えさせて、

「乱機！」

と、唱えた。

すると、一同が、それに応えて、

「機に急寛あり、東風起って雨降るは、機の急なるものなり、炎暑前年の冬至に萌す、機寛なるものなり、寛急ことなりと雖も、その機違う事なし。治中の乱あり、乱中の乱あり、その機に達せずんば、乱に応じて、社稷を全うする事あるべからず」

と、斉誦した。

つづいて、時世、物定、物候、行軍、陣営、備形、城塁、戦格、騎戦、歩戦、卒器、主客、攻摧、守禦、夜軍、死戦、兵粮、水手、虚実、潮合、神勢、略地、帰治、号令と、読み通された。

風魔三郎秀忠が、干戈の間において、精撰した兵書であり、これこそ、一族にとっての至宝であった。

右門は、巻物を三方にかえして、床の間へもどしてから、むしろ穏やかなひびきをもった声音

で、

「われら一族にも、死戦の秋が参った。始祖が申された通り、運に窮達あり、明将と雖も、命運が窮する時は、重囲を受けて、術計ことごとく尽きるに至る。命数あるや否やは、もはや、われらが観念の埒外のこと、一同一連死生ともに忘れて、ただ、たたかわんのみ。心にして、死所に就かれい」

と、申しわたした。

やがて――。

館の内から現われた一族は、のこらず、白装束をつけていた。

礼服をまとうた黒指党の横列陣に対し、十間の距離を置いて、白一色の姿を、同じく横列陣に並べた光景は、鮮烈ともいえる悲壮味を湛えて、これは、いかにも、一族の最期にふさわしかった。

今日の時間にして、わずか十秒あまりの、沈黙の対峙があったが、元旦の陽光がななめにそそぐ地上に、修羅の戦機が盈ちるのには、充分すぎる時間であった。

一瞬の遅速もなく、両陣は、一斉に、白刃を抜きはなった。

双方合せて八十余名の闘士らは、やがておのが屍を横たえるであろう霜土を蹴って、猛然と、奔った。

三

この年の元旦は、眠狂四郎にとっても、沈鬱な朝であった。

霜月なかばに、風邪をひいて、牀に就いたちさが、そのまま、起き上がらず、蘭医曽田良介の診断では、琴の緒の絶える日を今明日に迎えていたのである。
――この女も、おれにめぐり会ったために、夭ってゆく。
除夜の鐘をきき乍ら、狂四郎は、その枕元で、湿った感慨に耽らずにはいられなかった。
因果小僧の七之助が、真剣な面持で、やって来たのは、大晦日の朝であった。
狂四郎はちさの寝顔をのぞき込んで、ほっと溜息をつく七之助を視て、
「今夜か、それとも、元旦になるのか？」
と、訊ねた。
七之助が、ちさの逝く時を、夢にみたに相違ないのであった。
七之助は、いたましげに、眉宇をひそめて、返辞をためらった。
狂四郎は、促した。
「かくさんでもよい」
「へい――」
七之助は、俯向いて、
「汲んだ若水を、末期の水になさるのを、夢でみましたんで……」
と、こたえた。
「そうか。それは、せめてものことだ」
そして、その若水を汲む朝が、すでに来ていた。
狂四郎は、ちさの寝顔を見下ろした。

やつれはすくなく、熱のために、かえって肌は美しくさえ見えた。

しかし、もう死相が濃かった。

狂四郎は、枕元から、そっと立ち上がった。すると、夜具の裾にうずくまっていた七之助も、いそいで、立ち上がった。

狂四郎が、障子を開けて、縁側へ出ると、七之助は、真新しい手桶と柄杓を持って来た。

庭へ降り立った狂四郎は、雲ひとつなく晴れわたった空を仰いで、

「また、一年が、はじまるな、七之助」

と、言った。

「へ、へい」

七之助も、空を見あげた。

「どういうんでござんしょうね、人間が生きて行く、ってえことは……。わからねえ」

「かんたんなことだろう。生れたから、なんとなく、生きて行くのだ。今年死ぬか、十年さき死ぬか、当人にわからぬところがミソだ」

「……この元日に、はかなくおなんなさるおひとも、おいでなんですねえ」

「尤も、今年死ぬとも知らずに、笑い乍ら、屠蘇を祝って雑煮を喰べている奴も居る」

「元日や、冥土の旅の一里塚、ってうめえことを言やがる」

狂四郎は、七之助が汲みあげた釣瓶の若水を、桶に受けた時、急に、表情を鋭いものにして、

「おい――」

と、庭木戸の方を、目でしめした。

七之助は、油断のない足どりで、木戸に近づいて、さっと、戸を押し開けた。
そこに、一挺の駕籠が、据えられていた。
何者かが乗っている気配に、七之助は、
「だれだ？」
と、誰何した。
すると、駕籠の中から、
「眠狂四郎におことわりしておきたい」
と、声があった。
狂四郎は、無言で、眸子を注いでいる。
風魔一族の軍師白頭巾の声に、まぎれもなかった。
「お主との果し合いは、七草すぎにいたしたい、と当方から申出てあったが、それを、今日にして頂きたく参上した」
「おのぞみならば……」
狂四郎は、こたえた。
「実は、まことに、見苦しい風体をいたして居るために、あらかじめ、おことわりしておくのだ。衣服をあらためる時間がなかったことを、ゆるされい」
「ご懸念にはおよばぬ」
「いや、いやしくも、風魔が軍師役として、これは、慙じねばならぬ無礼と存ずる。……ゆるされい」

たれがはねられ、すっと立ち現われた姿を、一瞥して、狂四郎は、息をのみ、七之助の方は、叫びを発した。

白衣白袴は、蘇芳色に染まって、いたるところ截られていた。

狂四郎がはじめて接する面貌は、額と頬と頤を、斬られて、肉をむき出し、なお、じくじくと血潮を涌かせていた。

年始の陽光の下に、正視するすがたではなかった。

「ゆるされたい」

風魔右門は、刀を杖にして、三度び詫びた。

「黒指党の襲撃に遭われたか？」

「左様――。一族のこらず、死に絶え申した」

「あの老人も――？」

「あっぱれ、三人まで斬って、敵の頭領へ、自ら首をさしのべたのを、見とどけ申した」

「…………」

「気がついた折には、それがしただ一人が、生き残って居り申した」

右門は、敵を八名まで斬り仆したのをおぼえている。

気がついた時には、味方はおのれ一人、敵は三人残っていた。

その三人を、おのが白刃の下に、伏さしめた右門は、ふと、眠狂四郎との果し合いを、思い出したのであった。

ここまで駕籠をかついだのは、館の内で、息をひそめていた下僕四人であった。いずれも、古

稀の年齢であった。
「お主には、好まぬ役目であろうが、それがしの最期を、飾らせて頂きたい」
そう言って、右門は、ゆっくりと、木戸をくぐって、庭へ入って来た。
体力はすでに竭きていて、風魔一族最後の一人として、その死処を得んとする意志のみが、こうして、わが身を動かしている、とみえた。
狂四郎は、七之助に、目顔で、無想正宗を持って来るように、命じた。
それを受けとって、鞘をはらうと、地歩をえらんで、
「いざ――」
と、地摺り下段に、とった。
「応！」
と、青眼にぴたっと構えた右門が、血まみれの姿には、文字通り凄絶の鬼気が漲った。
狂四郎は、ゆっくりと、刀先を、まわしはじめた。
瀕死の敵にむかって、円月殺法を用うるのは、いまが、はじめてであった。
円月殺法は、敵をして、催眠の状態に陥らしめ、気魄を奪われた抜殻のような身を両断する剣である。
狂四郎は、いま、思いがけなくも、おのが編んだ殺法が、慈悲の剣となるのを、知った。
すなわち、
一颯して対手を殪す殺法ではなく、静かに、死出の旅へ送ってやるための剣であった。
……無想正宗は、ゆっくりと、明るい空間に、円を描いた。

かっと瞠(みひら)かれた右門の双眸は、まわる切先を追いつづけるうちに、徐々に、細められた。
白刃が、完全に、円を描き了(おわ)った時、右門の双眸もまた、完全にふさがれていた。
朽木が倒れるように、右門のからだは、霜が溶けはじめた土の上へ、仆れ伏した。
暗然として、その屍骸(しがい)を見下ろしていた狂四郎は、はっとわれにかえって、若水を汲んだ桶を把りあげて、部屋にもどった。
ちさは、ねむるように、死んでいた。

四

七草がおわった頃、狂四郎は、ふたたび、飄然(ひょうぜん)と、あてどのない旅に出た。
東海道を、西へ——。
神奈川宿の、漂渺(ひょうびょう)たる大海原を見わたす立場茶屋の床几(しょうぎ)に、腰を下ろした時、
「旦那様！」
はずんだ声をかけられた。
頭をまわすと、薬屋の松次郎であった。
「また、会うたな」
狂四郎が、微笑すると、松次郎は、眉宇をひそめて、
「いけませぬ、こりゃア——」
と、言った。
「なにが、いけないのだ？」

「お顔色でございます。それに、お痩せなさいました」
「死霊には、十年前から、とり憑かれて居る」
「冗談ではございませぬ。……これからは、ずうっと、てまえがお供をいたします」
「お前の薬餌で飼われ乍ら、道中をするのか。これは、迷惑な話だ」
狂四郎は、自嗤してから、
「わたしに、くっついて歩けば、わたしを生きのびさせるかわりに、お前にも、死霊がとり憑くことになるのだぞ、薬屋。生命の危険が絶え間なく起ることは、すでにもう、いくども経験ずみではないか」
「そのことでございますよ。人間の料簡というやつは、妙なもので、旦那様にお別れしてから、その生命の危険が、なくなると、なんとなく、さびしくなったじゃございませんか。平穏無事な旅をしているのが、ひどくつまらなくなった、とお思い下さいまし」
「勝手にすることだ」
狂四郎は、ふと、思いついて、懐中から、古びた巻物をとり出すと、
「これを、海へ投げてくれぬか」
と、松次郎へ渡した。
「なんでございます？」
「戦国の時代に書かれた兵書だ。当時は、貴重な教えであったに相違ない。それを、今日でも、なおまだ、貴重なものとして、大切にしていた者が、非業の最期をとげる時、懐中にしていた。……ただの反古ではないので、すて場所を考え乍ら、なんとなく、ここまで、持って来たのだ」

「お亡くなりになったお人の霊魂がこもっているお品なら、いっそ、どこかのお寺へでも、お納めなさいましては？」

「あいにく、ひろった者に、信仰心がない。ひろった物は、投げすてるのが、いちばん、おのれらしい振舞いだと思っている」

「左様でございますか。それならば……」

松次郎は、断崖のふちへ出て、ちょっと逡巡していたが、

「……南無、あみだぶ……」

と、となえて、ぱっと、拋った。

巻物は、十数丈の宙を、くるくると舞い落ちて行き、途中で、突き出した巨きな岩にぶっつかって、ひと跳ねすると、紐が解けたか、ぱあっと拡がって、白い長い帯となって、海面へ落ちた。

そして、それは、しばらく、ゆらゆらと波間に漂うていた。

「……不測にして、能く通る。是を神と言う。……鋒先、さえぎり止むべからざる。これを勢と、言う。……心敵の骨髄にとどき、……気は、三軍を呑む。すなわち、神勢、是なり……」

そんな壮烈な文句が、眩しいほどの陽光をあびて、ゆらゆらとゆれていたが、やがて、しずかに、沈んで行った。

解説

眠狂四郎はあきらかに戦後のマス状況がうんだ大衆のアイドルである。

その塑型は中里介山(なかざとかいざん)の机竜之助にはじまるニヒル剣士の系譜につながるといわれるが、机竜之助が日本社会の底部にひそむどろどろしたものに発しているのに反し、眠狂四郎は作者柴田錬三郎のもつ一種のモダニズムに培(つちか)われた人物像だ。ニヒル剣士といえば、竜之助から堀田隼人(ほったはやと)、丹下左膳(たんげさぜん)、新納鶴千代(にいのつるちよ)とつづく人物タイプだが、いずれも執筆された時代の状況にたいする抵抗感の産物である点は見おとせない。

眠狂四郎シリーズの最初は『眠狂四郎無頼控(ぶらいひかえ)』としてはじまり、『続三十話』『独歩行』『殺法帖』『孤剣五十三次』とつづく。その『眠狂四郎無頼控』が書かれた昭和三十一年から翌々年にかけての時期は、戦後の大衆社会状況が進んだ時期にあたる。政府の「経済白書」が〝もはや戦後ではない〟と宣言した年にこのニヒル剣士は創造されたのだ。

出版社による週刊誌発刊の先鞭(せんべん)をつけた『週刊新潮』の読切連載として『眠狂四郎無頼控』は何よりもふさわしい内容と形式をそなえていた。

柴田錬三郎は書いている。

「『週刊新潮』から、読切連載の時代小説を、という依頼があった時、実は私は、全く自信がなかった。これは、実作者でなければ、その苦痛はわからないが、一週間で一篇の読切を書きあげ

ることは、容易ではない。文字通りのたうちまわる苦痛に襲われ、何処かへの逃亡を真剣に考えざるを得ないところまで追いつめられる。これは、書きはじめる前からわかっていたことであった」

小説というものは人をおどろかすこと（エトンネ）の精神を基盤にしなければならないと考えていた作者は、素材を独特な視点からつかまえるために、まず眠狂四郎という奇異な名前をもった主人公の性格づけに苦慮する。「眠狂四郎の生誕」という随想によると、作者の頭のなかには机竜之助の名前が浮かんだようだ。この名前は時代をへても古びないしたしみやすいものだ。机は小学校へ行かなかった人をのぞいて、すべての人が使っている。とすれば、机をしのぐネーミングには何があるか、人間が毎日必要とするもの、それは眠ではないか。彼は眠狂四郎のネーミングの秘密をこのように絵ときする。

そしてこの名前にふさわしい性格として、これまでの剣豪ものにはみられない虚妄の剣を着想するのだ。時代小説の主人公は正義派的なスーパーマンか、さもなければピューリタンな求道主義者であった。柴田錬三郎は眠狂四郎をまず出生の悲惨さにおいて設定する。

黒羽二重の着流し、異人の血が混っていることを思わせる彫りのふかい、どことなく虚無の影をやどした風貌の持主——眠狂四郎は、呪われた出生のために多難な人生行路を歩まなければならない。母は大目付松平主水正の長女千津。父は転びばてれんジュアン・ヘルナンド、切支丹布教が目的で来朝したが、彼の医術を憎んだ漢方医たちに密告され、踏絵の結果、悪魔に魂を売りわたす。ヘルナンドはそのことをうらみ、取締の中心人物である主水正の娘をおかして狂四郎をはらませたのであった。狂四郎は成長した後、長崎へ行ってその出生の秘密を知ったが、死を求

めて死にきれず、かえってそこで一刀流の流れをくむ老剣客に極意をさずけられ、やがて自らの創意をくわえて円月殺法という独特な殺しのパターンをうみ出したのだった。

円月殺法とはつま先三尺をさす下段の剣尖（けんせん）が、左から円を描くにつれて暗い虚無の深淵（しんえん）に敵をさそいこむ一種の催眠剣法だ。

このような性格の設定は作者のいい意味でのジャーナリスティックなセンスの発現であろう。転びばてれんと大目付の娘の間に生れた狂四郎は、占領期日本の社会的課題である混血児問題に対応する存在だし、切支丹問題を介在させたことは天皇制のタブーからの解放を意味する。しかも一刀三拝式な剣の求道的色彩を排して、あらたに西部劇のガンにみまがうほどの凶器として剣を位置づけたことなど、『眠狂四郎無頼控』の創意性と現代性は、そのまま人気の秘密をとくカギともいえるのではないか。

「……ニヒリストならば、一刀三拝式のさむらいであるわけがない。刀は『武士の魂』ではなくあくまで凶器であり、凶器であれば、どう使おうと勝手である。女の衣裳（いしょう）を剝（は）ごうが、犬を斬ろうが、糞を突こうが、かまいはしない。

いわば、眠狂四郎が、剣を修業したのも、刀を抜くのも、従来の求道精神的図式の埒外（らちがい）において、なされる。すなわち、近代人が所有する自虐精神から生れたものであり、自虐が示す虚構のてずま、とでもいえるわけである」（「眠狂四郎の生誕」）

眠狂四郎の魅力をこれほど端的に表現した言葉はあるまい。自虐的な剣の構造は作者自身の快感につながり、同時に読者のストレス解消に役立っている。これは戦前の時代小説とは本質的にことなる重要な点であろう。

狂四郎は本来的には一匹狼の強みを持つが、老中水野越前守忠邦によってバックアップされ、側頭役武部仙十郎をとおしてこれにつながっている。狂四郎と奇縁を結ぶ美保代との交渉も、水野忠邦との関連を抜きにしては考えられない。狂四郎をめぐる女たちは、この美保代をはじめ、高姫や美千代などがいるが、『独歩行』のちさにいたるまでほとんど薄倖のなかにみまかるものが多い。このことは狂四郎の孤独をあかしだてるひとつの光源ともなっているようだ。

『眠狂四郎独歩行』は昭和三十六年一月九日号から十二月十八日号まで『無頼控』と同様に『週刊新潮』に連載された。読切形式だが小さなヤマ場の他に全体をとおして流れる主題があり、ここでは幕府の転覆をはかる風魔一族とそれを迎え撃つ幕府方の隠密黒指党の闘いを背景に、水野忠邦につながる狂四郎の縦横の活躍が展開される。そして円月殺法の剣の冴えも見事だが、第十二話「血汐月」では大小二刀を扇形にひらき、一瞬にして左手の短剣を右へ、右手の長剣を左へ飛電と化して交差させる。ユニークな殺しのパターンもあみ出している。

風魔一党は徳川家の嫡流を誇る一団であった。二代将軍秀忠は家康の実子ではなく、その母西郷局が家康の側室となった時すでに身分の低い前夫の胤をやどしていた。西郷局はその翌年まことの秀忠を産むが、その実子は元服の年にハンセン氏病をわずらい、まれにみる頭脳と武芸の素質をもちながら異父兄に席をゆずるハメとなる。まことの秀忠は以来風魔三郎と名のり、千人の草兵を組織して家康の天下取りの覇業をかげにあってたすけた。この一党と対決する黒指党は白河楽翁がひそかに旗本八万騎の子弟の間からえらび、二十余年の習練をかさねた末に組織した隠密集団である。これだけでも結構おもしろい上に、狂四郎の胸のすくような活躍がくわわるわけだから申し分はない。風魔一党が殲滅され、最後に残った軍師の風魔右門が狂四郎の無想正宗

に倒されるまでのいきさつについては、あらためてのべるまでもないと思うが、全体の構図とは別に、デテールの魅力も無視できない。股間に彫られた葵の刺青、日光流迅業を使う武芸猿、あるいは予見の能力をもつ因果小僧七之助、講釈師の立川談亭などの傍役たち、こういった小道具の設定やバイプレーヤーたちの動きには作者の洗練されたアイデアがひそんでおり、それが二十枚に満たない読切連載のひとつひとつをたのしい読物にしあげている。

なお虚無の影をやどす狂四郎には、意外な一面もそなわっている。それは不幸な子どもたちにたいする共感の情だ。たとえば、第九話「時雨女」のなかに、不幸な最後をとげた西国浪人五島久右衛門の遺児久太郎とめぐり合うくだりがある。作者はその時の狂四郎の心情を、「不幸な子供が、いじらしくもけなげに生きのびて行こうとするのを見せられる時だけ、この虚無の男の心に、熱い血潮が湧くのであった」と書いている。おそらくこの箇所は作者自身の告白とある部分でふれ合う言葉かもしれないが、狂四郎を混血児として設定したことといい、子どもに対するこの種の共感といい、けっして不用意にもらされたものではあるまい。

柴田錬三郎はかつて「小説というものは、元来、嘘をかくものである」と書いたことがあった。ウソという表現にひっかかる人がいるかもしれないが、これをフィクション（虚構）とおきかえればうなずけるにちがいない。小説はどんなに力みかえってみたところで虚構であることに変りはないのだ。むしろ虚構をもって、いかに物事の真実にせまるかにすべてがかかっている。柴田錬三郎は自虐を裏返しにすることによって、大衆文学に新風をもたらした。そこには彼一流のダンディズムがある。昭和三十年代の時代小説が視聴覚化する状況をふまえて、剣豪リバイバルとして開花するのも、柴田錬三郎の筆法をもってすれば認識されることだろう。『無頼控』から

『独歩行』をへて『殺法帖』、さらに『孤剣五十三次』とかわらない人気を持続させて今日にいたった理由のひとつには、虚と実とのこのようなふれ合いがよこたわる。円月殺法を「おのれの太刀をして、無想剣たらしめずに、敵をして、空白の眠りに陥らしめる殺法」だと説く作者の言葉は、どうやら読者と狂四郎を結ぶ回路でもあるようだ。

尾崎秀樹

眠狂四郎独歩行（下）

新潮文庫　し－5－13

昭和四十三年七月三十日　発行
平成九年一月三十日　三十五刷

著者　柴田錬三郎

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六―五四四〇
　　　読者係(〇三)三二六六―五一一一
振替　〇〇一四〇―五―八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所

ISBN4-10-115013-3 C0193

